

Iyai Rockshelter Site

II

Archaeological Research at the Initial Jomon Period

Iyai Rockshelter Site

Located in Mountainous Kanto Region

2020

Iyai Rockshelter Site Excavation Team

Department of Archaeology, Kokugakuin University

居家以岩陰遺跡 II

第二次・第三次発掘調査報告書

國學院大學文学部考古学研究室

居家以岩陰遺跡 II

第2次・第3次発掘調査報告書

2020

國學院大學文学部考古学研究室

居家以岩陰遺跡 II

第2次・第3次発掘調査報告書

2020

國學院大學文学部考古学研究室

序 文

縄文文化はいつ、なぜ、どのように始まったのか。そのテーマを探究して各地で発掘調査を続けてきた。居家以岩陰遺跡の学術調査もその一環として継続しているプロジェクトである。縄文文化の起源・成立については、1960年代の本ノ木論争以来の長い研究史があるが、年代や時代区分をめぐる見解の相違は今も大きい。居家以岩陰には縄文早期の人骨や動植物遺存体がきわめてよい保存状態で埋蔵されており、縄文人と縄文文化の起源の問題を解き明かせる可能性が秘められている。遺跡形成当時の人骨と生活遺物を徹底的に収集し、縄文時代の始まる頃の間人集団とその生態を解明していくことが、この調査の目的である。

居家以岩陰の発掘調査は今年度で6度目を重ねた。調査成果は当初の期待を上回り、早期の埋葬人骨などの重要な発見が続いている。土壌水洗選別法により微細遺物の回収も進めており、すでに膨大な資料が得られている。しかし、出土量が増えれば増えるほど整理作業に時間がかかり、研究課題も増えていく。このたびようやく第2次・第3次調査の研究成果を報告することとなったが、編集を終えて思うのは研究と教育の間のジレンマである。

1979年の開始以来、國學院の考古学実習は発掘調査の計画から報告書のまとめまでを学生が主体的におこなうことをポリシーとしてきた。しかし、研究水準と専門性が深まるなかで学生たちが正課の授業時間内にそれをやり遂げることはかなり難しい。夏におこなう2週間余りの発掘は無理なくできても、その後に続く整理作業と報告書作成を年度内に完遂することは現実には不可能である。実際、第2次・第3次調査に参加した学生はすでに卒業し、進学した少数の大学院生を中心に整理作業を続けるしかなく、終盤にはOBの協力も仰ぐこととなった。研究費や教育予算を管理する「年度」のしくみも、時間をかけなければ成果が見込めない専門教育と相容れず、現実的な壁となっている。

考古学の教育には発掘調査と研究を実践するフィールドが必要である。問題意識と研究目的を共有し、どのようなアプローチで課題に接近するのかを現場で考えることが何よりも大切であるとの信条に変わりはない。居家以はそれを実践できる理想的な現場である。研究と教育の両立は容易でないが、これからも多くの学生をこのプロジェクトに巻き込んでいきたい。実習から4年間、責任感と主体性をもって取り組んだ学生たちが、その思いと信頼を受け止め、二冊目の報告書をまとめ上げてくれたことを嬉しく思っている。

居家以岩陰の発掘調査は、郷土愛をもった長野原町の皆さんの惜しみないご協力があった続けられてきたことも忘れてはならない。全面的なご協力をいただいている長野原町教育委員会をはじめ、関係各位のご支援に心より感謝申し上げ、本書の序に代えたい。

令和2(2020)年1月

國學院大學考古学研究室
谷 口 康 浩

例 言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町居家以（いやい）岩陰遺跡において実施した学術発掘の調査研究報告書である。居家以岩陰遺跡における学術発掘調査は2014年に開始し、2019年までに6度の調査を継続して実施している。本書ではそのうち第2次調査（2015年度）・第3次調査（2016年度）の研究成果を報告する。
2. 本調査は、國學院大學文学部史学科考古学コースが開講する専門教育科目「考古学調査法」による考古学実習として実施し、第3次調査の後半におこなった1号人骨の発掘調査は平成28年度國學院大學特別推進研究として実施した。調査期間は次のとおりである。

第2次調査（2015年度）（調査記号：IY2） 平成27（2015）年8月13日～同年8月24日
第3次調査（2016年度）（調査記号：IY3） 平成28（2016）年8月2日～同年8月13日
平成28（2016）年9月5日～同年9月17日
3. 本調査は、國學院大學学長赤井益久（当時）が主体者となり、谷口康浩（國學院大學文学部教授）が担当した。現地調査は谷口および朝倉一貴（文学部助手・当時）が指導し、國學院大學の学部学生・大学院生が参加した。調査組織および参加者名簿は別に掲げる。
4. 本書の編集は谷口（責任編集）がおこない、茅原明日香・松本耕作（國學院大學大学院TA）、中島将太（本学OB、研究協力者）が編集作業に協力した。
5. 本書の執筆は調査団が分担し、担当項目の文末に執筆者名を記した。第7章「自然科学的分析」は分析を委託した研究機関から提出された報告書を編集して掲載し、各項の冒頭に執筆者（分析担当者）名を記載した。第8章「居家以1号人骨の発掘調査」は、平成28年度國學院大學特別推進研究の研究成果の一部である。
6. 出土遺物の整理作業、実測図化、図版作成、写真撮影は、実習生・大学院生が主体となっておこなった。石器・骨角器・貝製品の実測はNPO法人井草文化財研究所に委託した。
7. 出土人骨の人類学的同定は、近藤修氏（東京大学大学院理学系研究科准教授、共同研究者）が担当した。
8. 出土動物骨の分類・同定・記載について、山崎京美氏（いわき短期大学教授、共同研究者）・阿部常樹氏（國學院大學学術資料センター客員研究員）の指導・協力を得た。
9. 縄文晩期の土器および弥生土器の分類について設楽博己氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）のご教示を得た。
10. 第7章で報告する自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託し、同社から提出された分析報告書を編集して掲載した。署名原稿のため、元素記号の表記などは原文のままとした。
11. 発掘調査の実施、ならびに本報告書の作成にあたり、下記の関係機関・個人からご協力をいただいたことに謝意を表す。（敬称略）

協力機関：長野原町教育委員会 長野原町長野原区 群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 シン技術コンサル 株式会社パレオ・ラボ 株式会社歴史の杜 有限会社毛野考古学研究所 東京大学埋蔵文化財調査室 NPO法人井草文化財研究所

協力者：萩原睦男（長野原町町長） 市村 敏（長野原町副町長） 市村隆宏（長野原町教育長） 黒岩文夫（前長野原町教育長） 富田孝彦（長野原町教育委員会） 佐藤花吉・佐藤みどり（地権者） 本間 泉（株式会社測研） 巾 隆之（シン技術コンサル）

研究協力者（五十音順）：植田信太郎（東京大学大学院理学系研究科名誉教授） 内川隆志（國學院大學学術資料センター教授） 工藤雄一郎（学習院女子大学准教授） 佐々木由香（明治大学黒曜石研究センター客員研究員） 佐藤孝雄（慶応大学文学部教授） 佐藤雅一（津南町教育委員会） 大工原 豊（國學院大學兼任講師） 建石 徹（奈良県庁） 中島啓治（元・群馬県立自然史博物館） 那須浩郎（岡山理科大学准教授） 二宮修治（東京学芸大学教育学部名誉教授） 水野文月（東邦大学医学部助教） 百原 新（千葉大学大学院園芸学研究科教授） 山田康弘（国立歴史民俗博物館教授） 吉田邦夫（東京大学総合研究博物館特招研究員） 米田 穰（東京大学総合研究博物館教授）

凡 例

1. 本文および図表中の層位の記載にある3桁の数値(例:105~110)は、下記のアイレベル(EL)からの深度により便宜的に設定した人工層位(cm)を示す。基準としたELは岩陰部650.000m、前庭部緩斜面646.200mである。
2. 本書の図に使用した地形図は以下のとおりである。
国土地理院基盤地図情報 25000分の1地形図 長野原2016・大前2016・小雨2014・上野草津2007
国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター『20万分の1日本シームレス地質図』
3. 土層および土器の色調の記載は『新版標準土色帖2005年度版』JIS標準色標に従った。
4. 居家以岩陰遺跡第2次調査(2015年度)の略号として「IY2」、同じく第3次調査(2016年度)の略号として「IY3」を用いる。各調査の出土遺物に付したラベルおよび記録類にも同略号を用いた。
5. 本文および図表中において以下の略号を用いる。
「EL」アイレベル 「SP」セクションポイント 「SB」セクションベルト
6. 遺構・遺物実測図、遺物写真図版の縮尺は図中に示した。
7. 土層断面図のトーンは以下の内容を示す。
岩陰部：表層 第I層群 第II層群 第III層群 奥壁褐色土
落盤礫層 岩盤 人骨
前庭部：灰層(10層) 礫
8. 土器断面実測のトーンおよび記号は、胎土に含まれる混和材を示す。その内容は以下のとおりである。
繊維少量 繊維多量 黒雲母 黒曜石 結晶片岩
9. 石器実測図のトーンは使用痕の摩耗面を示す。
10. 表中において以下の石材の略号を用いた。
Ob 黒曜石 Rh 流紋岩 An(B) 黒色安山岩 An(C) 粗粒安山岩 Di 閃緑岩 Fgu 鉄石英 Ch チャート
Sh(S) 珪質頁岩 Sh(B) 黒色頁岩 Sa 砂岩 Tu(S) 珪質凝灰岩 Py(W) 溶結火砕岩 Ag メノウ

調査組織

調査主体者：赤井益久（國學院大學学長・当時）

調査団長：谷口康浩（國學院大學文学部教授）

調査指導：青木 敬（國學院大學文学部准教授） 朝倉一貴（國學院大學文学部助手・当時）

現地特別指導：小林達雄（國學院大學文学部名誉教授） 近藤 修（東京大学大学院理学系研究科准教授）

第2次調査 2015年度考古学実習

ティーチングアシスタント：佐藤拓也 馬場羽瑠桂（國學院大學大学院）

考古学実習生：赤坂優輝 秋山紘樹 天野 遼 飯野拓哉 伊藤友里恵 大塚快毅 金子わか奈 川勝雄太
小池 護 滋野哲矢 宍戸健太 高橋昇吾 茅原明日香 長島 瞳 野口奈津美 本間泰輔 松本耕作
松本隼也 山鹿葉月

特別参加：川島朱音 黒澤ひかり 藤原正大 猪熊花那子 大木美南 中村 萌 倉橋裕真 新川実里
田村雅史（以上、國學院大學）入江直毅 川島義一 小林美貴 佐賀桃子 藤好史都 尾上周平 鈴木志穂
中川幹啓 吉澤花織（以上、國學院大學大学院）藤本章吾（國學院大學北海道短期大学部）
高橋人夢（群馬大学）

第3次調査 2016年度考古学実習

ティーチングアシスタント：入江直毅 佐賀桃子（國學院大學大学院）

考古学実習生：伊沢加奈子 石澤茉衣子 稲葉大輝 渡辺明日奈 清水優樹 鈴木明香 田村京平
濱田虎太郎 本美里紗子 南館 禪

特別参加：大内利紗 杉山菜摘 鈴木佑矢 谷口広大 関根大貴 多賀谷 蓮 飯野拓哉 伊藤友里恵
大塚快毅 川勝雄太 茅原明日香 長島 瞳 本間泰輔 松本耕作 山鹿葉月 猪熊花那子 大木美南
松本隼也（以上、國學院大學）石川 蒼 倉橋裕真 松本知士 小林美貴 藤好史都（以上、國學院大學大学院）
川島義一（國學院大學大学院聴講生）長嶋幹也（國學院大學卒業生）高橋人夢（群馬大学）
井上早季（早稲田大学大学院）

平成28年度國學院大學特別推進研究（第79号）

研究課題名『縄文時代早期の埋葬人骨群と古食性の研究—群馬県居家以岩陰遺跡における先史人類学的調査—』

研究代表者：谷口康浩（國學院大學文学部教授）

研究分担者：朝倉一貴（國學院大學文学部助手・当時）

共同研究者：近藤 修（東京大学大学院理学系研究科准教授）

共同研究者：米田 穰（東京大学総合研究博物館教授）

共同研究者：植田信太郎（東京大学大学院理学系研究科教授・当時）

調査員：大日方一郎 佐賀桃子（國學院大學大学院）

猪熊花那子 茅原明日香 松本耕作 南館 禪（國學院大學）

特別参加：山口晴香（東京大学）

本文執筆

谷口康浩 伊沢加奈子 石澤菜衣子 猪熊花那子 鈴木明香 多賀谷 蓮 茅原明日香 本間泰輔 松本耕作
南館 禪（國學院大學・居家以岩陰遺跡調査団）
中島将太（NPO 法人井草文化財研究所、研究協力者）
伊藤 茂 安 昭炫 佐藤正教 廣田正史 山形秀樹 小林紘一 Zaur Lomtaticidze 黒沼保子 佐々木由香
バンドリ・スダルシャン 竹原弘展 森 将志 中村賢太郎 藤根 久 野口真利江（株式会社パレオ・ラボ）
笹 幸恵（校正協力、第5次調査特別参加）

図版作成

飯野拓哉 伊沢加奈子 石澤菜衣子 大塚快毅 川勝雄太 多賀谷 蓮 茅原明日香 本美里紗子
松本耕作 南館 禪 中島将太
吉澤 徹（第4次調査考古学実習生） 鈴木大賀 長崎芽衣（第5次調査考古学実習生）

見学者（五十音順・敬称略）

相澤正信 青木 学 秋本太郎 阿久澤智和 麻生敏隆 阿部昭典 飯島武次 伊藤博司 今井哲哉 植田 真
内田隆之 梅沢克典 大木紳一郎 大久保 聡 大竹弘高 大原正義 岡本東三 岡山亮子 小野和之 笠井
洋祐 加藤大二郎 加藤元康 金子直行 狩野剛一 河手美綾子 久我谷溪太 櫛原義郎 久保田健太郎 倉
石広太 栗田一生 後藤佳一 黒坂禎二 黒澤照弘 小池雅典 小菅昭夫 小林重義 小林青樹 小林理
恵 小松崎百恵 桜岡正信 酒匂喜洋 笹澤泰史 佐藤武彦 佐藤信之 島田孝紀 鈴木澄江 鈴木孝規 鈴
木徳雄 関 孝一 関根慎二 関根史比古 芹澤清八 曾我真実子 高木公輔 高梨友子 鷹野義郎 高橋
清文 館野 孝 田中和之 田中剛史 谷藤保彦 田村 博 塚本師也 堤 隆 角田真也 仲田大人 中村 大
中村賢太郎 中村信博 成田巖人 春成秀爾 広瀬昭弘 福田貫之 福田義治 藤波啓容 藤巻幸男 古谷
毅 前原 豊 南田法正 宮尾 亨 宮川博司 宮田圭祐 宮田 毅 向出博之 茂木師司 本橋恵美子 森 将
志 矢野今朝治 山口逸弘 山本光明 吉田智哉 和久拓照

目 次

序 文

例 言

凡 例

調査組織

目 次 本文目次／図版目次／表目次／写真図版目次

第 1 章 研究目的とリサーチデザイン

第 1 節 研究目的と学術的意義	1
1. 研究目的	
2. 研究の学術的背景	
3. 洞窟・岩陰遺跡調査の意義	
第 2 節 居家以岩陰遺跡の調査に至る経緯	3
1. 居家以岩陰遺跡の発見	
2. 発掘調査に至る経緯	

第 2 章 居家以岩陰遺跡の概要

第 1 節 居家以岩陰遺跡の立地と環境	5
第 2 節 縄文時代早期・前期の周辺遺跡	9
1. 長野原町内の遺跡の概要	
2. 遺跡各説	

第 3 章 調査の方法と経過

第 1 節 調査区の設定と発掘調査の方法	20			
1. 調査区の設定				
(1) 測量基準点の設定	(2) 調査区とグリッドの設定			
2. 発掘調査の方法				
(1) 層序・遺構の記録と遺物の取り上げ	(2) 岩陰部	(3) 前庭部緩斜面		
第 2 節 発掘調査の経過	22			
1. 岩陰部				
(1) 第 2 次調査 (2015 年度)	(2) 第 3 次調査 (2016 年度)			
2. 前庭部緩斜面				
(1) 第 2 次調査 (2015 年度)	(2) 第 3 次調査 (2016 年度)			
第 3 節 整理作業の方法	25			
1. 基本方針				
2. 層序と遺構の整理				
3. 遺物の整理				
(1) 土器	(2) 石器	(3) 骨角器・貝製品	(4) 動物遺存体	(5) 人骨

第4章 層序

第1節 岩陰部の層序	29
1. 土層の大別区分	
2. 土層各説	
3. 層序と人工層位の対応関係	
第2節 前庭部緩斜面の層序	33
1. 堆積土層の概要	
2. 土層各説	
3. 層序と人工層位の対応関係	

第5章 遺構

第1節 検出遺構の概要	37
第2節 遺構各説	37
1. 1号集石	
2. 1号列石	
3. 焼土ブロック	
4. 灰ブロック	

第6章 遺物

第1節 土器	41		
1. 縄文土器の分類と時期区分			
(1) 分類の方針	(2) 縄文土器の分類と時期区分	(3) 出土土器群の概況	
2. 土器の分類・集計			
(1) 岩陰部	(2) 前庭部緩斜面	(3) 表面採集	
3. 縄文土器の分布状況			
(1) 岩陰部	(2) 前庭部緩斜面		
第2節 石器	90		
1. 石器と石材の分類			
(1) 石器群の大別分類	(2) 石材の分類	(3) 器種分類	(4) 分類・集計結果
2. 石器の分類・集計と詳細			
(1) 岩陰部	(2) 前庭部緩斜面	(3) 表面採集	
第3節 骨角器・貝製品	108		
1. 分類・同定の基準			
2. 骨角器			
(1) 垂飾品	(2) 刺突具		
3. 貝製品			
第4節 動物遺存体	109		
1. 軟体動物・貝類			
(1) 同定の基準	(2) 同定・集計の結果		
2. 脊椎動物			
(1) 同定の基準	(2) 同定・集計の結果	(3) 被熱骨について	
3. 動物遺存体の出土傾向			

第7章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定・炭素窒素安定同位体比分析	123
1. 放射性炭素年代測定（第2次調査）	
2. 放射性炭素年代測定（第3次調査）	
3. 人骨および獣骨のコラーゲンの炭素・窒素安定同位体比分析	
第2節 植物遺体の分析	139
1. 炭化材の樹種同定（第2次調査）	
2. 炭化材の樹種同定（第3次調査）	
3. 炭化種実の同定（第2次調査）	
4. 炭化種実の同定（第3次調査）	
第3節 土壌の分析	153
1. 土壌の元素マッピング分析	
2. 灰状物質の蛍光X線分析	
3. 赤色顔料の蛍光X線分析	
第4節 ボーリング調査	160
1. 前庭部緩斜面におけるボーリング調査	
2. 堆積物中の珪藻化石群集	

第8章 居家以1号人骨の発掘調査

第1節 縄文時代早期埋葬人骨の発掘調査	170
1. 発掘調査の経過	
2. 調査・記録方法	
第2節 1号人骨の調査所見	171
1. 出土した人骨	
2. 埋葬状況	
3. 考古代と放射性炭素年代	
4. 人類学的研究の概要	
5. 1号人骨以外の埋葬人骨	
第3節 1号人骨発掘の学術的意義	179
1. 早期縄文人骨の重要標本	
2. 縄文早期の埋葬法に関する新知見と葬制史上の意義	

第9章 総括—第2次・第3次調査の研究成果と課題—

190

1. 縄文時代早期の埋葬人骨の発見
2. 縄文早期中葉の灰層の調査
3. 土層堆積状況の確認
4. 今後の重点課題と研究計画

引用・参考文献

写真図版

図版目次

第 1 図 居家以岩陰遺跡の位置 …………… 5	列・9 列) …………… 88
第 2 図 上信越地域の主要水系 …………… 6	第 48 図 前庭部緩斜面 縄文土器の平面・垂直分布図 (A1・A2) …………… 89
第 3 図 居家以岩陰遺跡の周辺地形図 …………… 7	第 49 図 岩陰部出土 石器実測図 (1) …………… 99
第 4 図 遺跡地形図 …………… 8	第 50 図 岩陰部出土 石器実測図 (2) …………… 100
第 5 図 長野原町内における縄文時代早期遺跡の分布 13	第 51 図 前庭部緩斜面出土 石器実測図 (1) …………… 104
第 6 図 長野原町内における縄文時代前期遺跡の分布 13	第 52 図 前庭部緩斜面出土 石器実測図 (2) …………… 105
第 7 図 楡木Ⅱ遺跡の出土遺物 …………… 14	第 53 図 前庭部緩斜面出土 石器実測図 (3) …………… 106
第 8 図 三平Ⅰ・Ⅱ遺跡の出土遺物 …………… 15	第 54 図 前庭部緩斜面出土 石器実測図 (4) …………… 107
第 9 図 立馬Ⅰ遺跡の出土遺物 …………… 16	第 55 図 表面採集 石器実測図 …………… 107
第 10 図 立馬Ⅲ遺跡・石畑岩陰遺跡の出土遺物 …………… 17	第 56 図 岩陰部・前庭部緩斜面出土 骨角器実測図 108
第 11 図 調査区設定図 …………… 20	第 57 図 岩陰部出土 貝製品実測図 …………… 109
第 12 図 グリッド設定図 (遺跡全体) …………… 21	第 58 図 調査区別 哺乳類同定対象資料の内訳 …………… 112
第 13 図 グリッド設定図 (岩陰部) …………… 21	第 59 図 第 2 次調査 放射性炭素年代測定試料 …………… 123
第 14 図 岩陰部の調査範囲と層序 …………… 30	第 60 図 第 2 次調査 放射性炭素年代測定 暦年較正結 果 (1) …………… 126
第 15 図 岩陰部における層序と人工層位の対応 …………… 33	第 61 図 第 2 次調査 放射性炭素年代測定 暦年較正結 果 (2) …………… 127
第 16 図 前庭部緩斜面の調査範囲と層序 …………… 34	第 62 図 第 3 次調査 放射性炭素年代測定試料 …………… 130
第 17 図 岩陰部遺構分布図 (第Ⅰ層群) …………… 38	第 63 図 第 3 次調査 放射性炭素年代測定 暦年較正結 果 (1) …………… 134
第 18 図 岩陰部遺構分布図 (第Ⅱ層群) …………… 38	第 64 図 第 3 次調査 放射性炭素年代測定 暦年較正結 果 (2) …………… 135
第 19 図 1 号集石実測図 …………… 39	第 65 図 第 2 次調査 人骨コラーゲンの C/N 比 …………… 138
第 20 図 1 号列石実測図 …………… 39	第 66 図 第 2 次調査 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 140
第 21 図 第 2 次・第 3 次調査 出土土器の分類集計 … 43	第 67 図 第 3 次調査 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (1) …………… 143
第 22 図 調査区別 縄文土器の時期別内訳 …………… 43	第 68 図 第 3 次調査 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (2) …………… 144
第 23 図 岩陰部出土 縄文土器実測図 (1) …………… 49	第 69 図 第 2 次調査 出土炭化種実 …………… 147
第 24 図 岩陰部出土 縄文土器実測図 (2) …………… 50	第 70 図 第 3 次調査 出土炭化種実 …………… 151
第 25 図 岩陰部出土 縄文土器実測図 (3) …………… 51	第 71 図 4 号～6 号焼土 土壌試料の元素マッピング図 155
第 26 図 岩陰部出土 縄文土器実測図 (4) …………… 52	第 72 図 2 号灰ブロック 灰状物質の実体顕微鏡写真 … 157
第 27 図 岩陰部出土 縄文土器実測図 (5) …………… 53	第 73 図 岩陰部 黒褐色土に含まれる赤色顔料の蛍光 X 線分析対象試料 …………… 158
第 28 図 岩陰部出土 縄文土器実測図 (6) …………… 54	第 74 図 岩陰部 黒褐色土に含まれる赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 …………… 159
第 29 図 岩陰部出土 縄文土器実測図 (7) …………… 55	第 75 図 前庭部緩斜面 ボーリング調査地点 …………… 161
第 30 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (1) …… 60	第 76 図 前庭部緩斜面 ボーリングコア …………… 162
第 31 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (2) …… 61	第 77 図 前庭部緩斜面 ボーリングコア 地質柱状図 … 163
第 32 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (3) …… 62	第 78 図 居家以岩陰遺跡周辺の地質図 …………… 164
第 33 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (4) …… 63	第 79 図 前庭部緩斜面 ボーリング土壌堆積物中の珪藻 化石 顕微鏡写真 …………… 168
第 34 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (5) …… 64	第 80 図 前庭部緩斜面 ボーリング土壌堆積物中の珪藻 化石分布図 …………… 169
第 35 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (6) …… 65	第 81 図 1 号人骨出土状況 実測図 …………… 172
第 36 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (7) …… 66	第 82 図 1 号人骨出土状況実測図 1 面 …………… 173
第 37 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (8) …… 67	第 83 図 1 号人骨出土状況実測図 2-a 面 …………… 173
第 38 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (9) …… 68	
第 39 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (10) …… 69	
第 40 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (11) …… 70	
第 41 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (12) …… 71	
第 42 図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図 (13) …… 72	
第 43 図 前庭部緩斜面出土 弥生土器実測図 …………… 83	
第 44 図 表面採集 縄文土器実測図 …………… 83	
第 45 図 岩陰部 縄文土器の平面・垂直分布図 (8 列) 86	
第 46 図 岩陰部 縄文早期～前期土器の平面・垂直分布 図 (8 列) …………… 87	
第 47 図 岩陰部 縄文土器の平面・垂直分布図 (5～7	

第 84 図	1 号人骨出土状況実測図 2-b 面	174
第 85 図	1 号人骨出土状況実測図 3-a 面	174
第 86 図	1 号人骨出土状況実測図 3-b 面	175
第 87 図	1 号人骨出土状況実測図 4 面	175
第 88 図	1 号人骨出土状況実測図 5 面	176
第 89 図	1 号人骨出土状況実測図 上半身と下半身の分離を示す腰椎の位置関係	176
第 90 図	1 号人骨出土部位残存状況	180
第 91 図	1 号人骨出土状況 1 面 (1)	181
第 92 図	1 号人骨出土状況 1 面 (2)	182
第 93 図	1 号人骨出土状況 2 面	183

第 94 図	1 号人骨出土状況 3 面 (1)	184
第 95 図	1 号人骨出土状況 3 面 (2)	185
第 96 図	1 号人骨出土状況 4 面	186
第 97 図	1 号人骨出土状況 5 面	187
第 98 図	1 号～4 号人骨の出土位置関係	188
第 99 図	2 号人骨出土状況 (西から)	189
第 100 図	3 号人骨出土状況 (北西から)	189
第 101 図	4 号人骨出土状況 (北西から)	189
第 102 図	5 号人骨出土状況 (南東から)	189
第 103 図	6 号人骨出土状況 (南東から)	189

表目次

第 1 表	長野原町内における縄文時代の遺跡	12
第 2 表	現場記録と整理後の土層の対応	26
第 3 表	第 2 次調査 注記番号と土層の対応	27
第 4 表	岩陰部における層序と人工層位の対応関係	33
第 5 表	前庭部緩斜面における層序と人工層位の対応関係	36
第 6 表	縄文土器の分類と時期区分	42
第 7 表	岩陰部 土器分類集計表 (表層～第 I 層群)	45
第 8 表	岩陰部 土器分類集計表 (第 II 層群・遺構)	46
第 9 表	前庭部緩斜面 土器分類集計表 (1 層～4 層)	47
第 10 表	前庭部緩斜面 土器分類集計表 (5 層～10 層・人工層位)	48
第 11 表	岩陰部出土 縄文土器観察表 (1)	55
第 12 表	岩陰部出土 縄文土器観察表 (2)	56
第 13 表	岩陰部出土 縄文土器観察表 (3)	57
第 14 表	岩陰部出土 縄文土器観察表 (4)	58
第 15 表	岩陰部出土 縄文土器観察表 (5)	59
第 16 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (1)	73
第 17 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (2)	74
第 18 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (3)	75
第 19 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (4)	76
第 20 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (5)	77
第 21 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (6)	78
第 22 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (7)	79
第 23 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (8)	80
第 24 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (9)	81
第 25 表	前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表 (10)	82
第 26 表	前庭部緩斜面出土 弥生土器観察表	84
第 27 表	表面採集 縄文土器観察表	84
第 28 表	岩陰部出土石器 器種分類集計表 (表層～第 I 層群・遺構)	92
第 29 表	岩陰部出土石器 器種分類集計表 (第 II 層群)	93
第 30 表	岩陰部出土石器 石材分類集計表	94
第 31 表	前庭部緩斜面出土石器 器種分類集計表 (1～	

6 層)		95
第 32 表	前庭部緩斜面出土石器 器種分類集計表 (7～10 層・人工層位)	96
第 33 表	前庭部緩斜面出土石器 石材分類集計表	97
第 34 表	岩陰部出土 石器計測表	98
第 35 表	前庭部緩斜面出土 石器計測表	103
第 36 表	表面採集 石器計測表	103
第 37 表	岩陰部・前庭部緩斜面出土 骨角器観察表	108
第 38 表	岩陰部出土 貝製品観察表	109
第 39 表	出土軟体動物の分類学的位置	110
第 40 表	出土脊椎動物の分類学的位置	111
第 41 表	岩陰部第 II 層群出土 イノシシ・ニホンジカの最小個体数	112
第 42 表	前庭部緩斜面 7～10 層出土 イノシシ・ニホンジカの最小個体数	112
第 43 表	岩陰部出土 動物遺存体観察表 (1)	114
第 44 表	岩陰部出土 動物遺存体観察表 (2)	115
第 45 表	岩陰部出土 動物遺存体観察表 (3)	116
第 46 表	岩陰部出土 動物遺存体観察表 (4)	117
第 47 表	岩陰部出土 動物遺存体観察表 (5)	118
第 48 表	岩陰部出土 動物遺存体観察表 (6)	119
第 49 表	前庭部緩斜面出土 動物遺存体観察表 (1)	119
第 50 表	前庭部緩斜面出土 動物遺存体観察表 (2)	120
第 51 表	前庭部緩斜面出土 動物遺存体観察表 (3)	121
第 52 表	前庭部緩斜面出土 動物遺存体観察表 (4)	122
第 53 表	第 2 次調査 放射性炭素年代測定試料および前処理	124
第 54 表	第 2 次調査 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	125
第 55 表	第 3 次調査 放射性炭素年代測定試料および前処理	131
第 56 表	第 3 次調査 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	133
第 57 表	第 3 次調査 人骨および獣骨コラーゲンの C/N	

比	136	第 69 表	蛍光 X 線分析装置の仕様	157
第 58 表	第 2 次調査 人骨および獣骨コラーゲンの C/N 比	第 70 表	2 号灰ブロック 灰状物質 面分析の半定量値 (mass%)	157
第 59 表	第 2 次調査 炭化材の樹種同定結果	第 71 表	2 号灰ブロック 白色小塊 ポイント分析の半定量値 (mass%)	157
第 60 表	第 3 次調査 炭化材の樹種同定結果	第 72 表	岩陰部 黒褐色土に含まれる赤色顔料の蛍光 X 線分析試料	158
第 61 表	第 2 次調査 炭化種実の同定結果	第 73 表	前庭部緩斜面 ボーリング採取試料の計測値	163
第 62 表	第 3 次調査 炭化種実の同定結果 (1)	第 74 表	前庭部緩斜面 ボーリングコア中の礫岩岩石種	163
第 63 表	第 3 次調査 炭化種実の同定結果 (2)	第 75 表	前庭部緩斜面 ボーリング土壌堆積物の珪藻化石分析 対象試料	165
第 64 表	4 号～6 号焼土 土壌の元素マッピング分析 対象試料	第 76 表	前庭部緩斜面 ボーリング土壌堆積物中の珪藻化石産出表	167
第 65 表	4 号～6 号焼土 土壌の各ポイント半定量分析結果 (mass%)	第 77 表	1 号人骨 出土部位同定表	177
第 66 表	4 号～6 号焼土 元素マッピング分析範囲全体の半定量分析結果 (mass%)	第 78 表	1 号人骨の放射性炭素年代測定値	178
第 67 表	植物灰の科学分析例			
第 68 表	2 号灰ブロック 灰状物質の蛍光 X 線分析 対象試料			

写真図版目次

図版 1	遺跡遠景 (第 2 次調査時撮影)、遺跡全景 (第 2 次調査時撮影)	器出土状況、岩陰部 ニ 8 奥壁褐色土 条痕文土器出土状況、岩陰部 ニ 8 奥壁褐色土 ニホンジカ下顎骨出土状況	
図版 2	遺跡全景 (第 2 次調査時撮影)	図版 9	前庭部緩斜面 調査前状況 (第 2 次調査)、前庭部緩斜面調査区全景 (第 2 次調査終了時)、前庭部緩斜面 A1 北東壁土層断面
図版 3	岩陰近景 (第 2 次調査時撮影)、岩陰部 調査区全景 (第 2 次調査終了時)	図版 10	前庭部緩斜面 A2 北東壁土層断面、前庭部緩斜面 A3 北東壁土層断面、前庭部緩斜面 A4 北東壁土層断面、前庭部緩斜面 A5 北東壁土層断面、前庭部緩斜面 A6 北東壁土層断面、前庭部緩斜面 A1 10 層ニホンジカ下顎骨出土状況、前庭部緩斜面 A1 8～9 層鹿角・押型文土器出土状況 (1)、前庭部緩斜面 A1 8～9 層鹿角・押型文土器出土状況 (2)
図版 4	岩陰部 5～7 列 第 II 層群検出面 (第 2 次調査終了時)、岩陰部ハ 5～6・ニ 5～7 第 II 層群検出面 (第 2 次調査終了時)	図版 11	岩陰部出土 縄文土器 (1)
図版 5	岩陰部 5～7 列 第 II 層群堆積状況 (第 3 次調査終了時)、岩陰部口 8 1 号人骨・2 号人骨検出面、岩陰部口 8 南東壁土層断面、岩陰部口 8 北東壁土層断面、岩陰部口 8 北西壁土層断面	図版 12	岩陰部出土 縄文土器 (2)
図版 6	岩陰部 8・9 列 調査前状況 (第 3 次調査)、岩陰部 8・9 列 第 I 層群堆積状況 (第 3 次調査 考古学実習終了時)	図版 13	岩陰部出土 縄文土器 (3)
図版 7	岩陰部 1 号集石検出状況 1 面、岩陰部 1 号集石検出状況 2 面、岩陰部 1 号集石検出状況 3 面、岩陰部 1 号集石検出状況 最下面、岩陰部 1 号列石検出状況	図版 14	岩陰部出土 縄文土器 (4)
図版 8	岩陰部 2 号灰ブロック検出状況、岩陰部 4 号灰ブロック検出状況、岩陰部 5 号灰ブロック検出状況、岩陰部 6 号灰ブロック検出状況、岩陰部 ハ 7 第 II 層群 羽状縄文土	図版 15	岩陰部出土 縄文土器 (5)
		図版 16	岩陰部出土 縄文土器 (6)
		図版 17	前庭部緩斜面出土 縄文土器 (1)

図版 18

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (2)

図版 19

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (3)

図版 20

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (4)

図版 21

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (5)

図版 22

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (6)

図版 23

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (7)

図版 24

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (8)

図版 25

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (9)

図版 26

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (10)

図版 27

前庭部緩斜面出土 縄文土器 (11)

図版 28

前庭部緩斜面出土 弥生土器、表面採集 縄文土器

図版 29

岩陰部出土 石器 (1)

図版 30

岩陰部出土 石器 (2)、前庭部緩斜面出土 石器 (1)

図版 31

前庭部緩斜面出土 石器 (2)

図版 32

前庭部緩斜面出土 石器 (3)、表面採集 石器

図版 33

岩陰部・前庭部緩斜面出土 骨角器・貝製品、岩陰部・前庭部緩斜面出土 魚類・貝類、岩陰部出土 動物遺存体

図版 34

前庭部緩斜面出土 動物遺存体 (1)

図版 35

前庭部緩斜面出土 動物遺存体 (2)

図版 36

調査前現場清掃 (第 2 次調査)、現場ミーティング (第 2 次調査)、岩陰部の調査 (第 3 次調査)、前庭部緩斜面の調査 (第 2 次調査)、前庭部緩斜面の調査 (第 3 次調査)、現地説明会 (第 3 次調査)、大学での整理作業 (第 2 次調査)

図版 37

岩陰部 1 号人骨の調査 (第 3 次調査 國學院大學特別推進研究)

図版 38

第 2 次調査 調査参加者、第 3 次調査 調査参加者

第1章 研究目的とリサーチデザイン

第1節 研究目的と学術的意義

1. 研究目的

居家以岩陰遺跡における学術発掘調査の研究目的は、更新世一完新世移行期の人類とその生態行動を究明し、縄文文化の起源と形成過程に関する問題を考察することである。縄文文化の起源あるいは縄文時代の始まりについては、現在もなお未解明な問題が多い。縄文人の起源・系統、土器文化の起源、初期の土器の機能・用途といった基本的な問題でさえ、真相は不明のままである。年代測定法の高精度化によって日本列島における土器出現の年代は絞られてきたが、縄文文化の起源や形成過程自体は、人類学的にも考古学的にも依然として不明確と言わざるを得ない。

更新世末から完新世への移行に伴う自然環境の大きな変化に対して、日本列島の人類はどのように適応したのか。更新世一完新世移行期の環境変化とそれに適応した人類の生態・行動の変化を具体的に知ることは、旧石器文化の終末から縄文文化の形成に至る先史文化の大転換を考える上で必須の検討課題となる。本研究プロジェクトでは、「生態行動系」という考え方を基礎に、こうした研究課題に取り組みたいと考えている。

「生態行動系」とは、自然環境と資源の利用、生業・食料獲得行動、居住パターンと行動領域、道具と生活装備の調達などから組織された生活体系を指す。「セトルメント・システム」「技術的組織」「生業カレンダー」など、関連した既成の分析概念はあるが、新たな術語を用意したのは、遺跡を形づくった人々の食性・技術・道具・組織・居住・経済を統合的な行動体系として捉える必要性を考慮してのことである。

本研究の中心的課題は、縄文文化の形成過程にあたる草創期・早期の生態行動系の研究である。草創期・早期の生態行動を具体的に明らかにし、縄文式的生活文化が形成されていく過程を解き明かすことが、本研究の中核に設定された大きな目標である。

こうした研究を推し進めるために、縄文草創期・早期の遺跡群が分布する上信越山地一帯を研究フィールドとし、群馬県吾妻郡長野原町に位置する居家以岩陰遺跡を調査対象に選定した。同遺跡には、縄文草創期・早期を含む土器・石器のほか、人骨、動物骨・植物種子などの食料残滓、土器付着物・植物種子圧痕などが良好な保存状態で残されている。本研究に必要な資料群が保存された理想的な調査対象である。居家以岩陰遺跡の発掘調査をおこない、考古学・人類学・動物学・植物学・分析科学などの分析手法を応用することにより、人とその行動に関わる資料と情報を計画的に集め、縄文文化形成期の生態的行動の特性とその推移を総合的に解明していく計画である。

居家以岩陰遺跡の発掘調査では、縄文文化の形成過程にあたる草創期および早期を最重要のターゲットとして、土器・石器・骨角器などの道具類はもとより、人骨、動物骨・炭化植物種子、土器付着物・残留脂質・植物種実圧痕などの資料を計画的に収集する。行動拠点である岩陰遺跡に残された考古遺物、食料残滓の動植物遺体、人骨の一体的・総合的な分析に基づいて、更新世末から完新世初頭の人類とその生態行動系を具体的に明らかにしたい。そのためには、人工遺物の編年や型式学的分類といった基礎的検討だけでなく、自然科学的な分析手法を積極的に導入・活用し、人間の生態・行動と遺跡形成に関するさまざまな情報を計画的に集めていきたい。

2. 研究の学術的背景

1998年に筆者らがおこなった青森県大平山元I遺跡の発掘調査で、長者久保・神子柴石器群とともに日本列島では最古例となる無文土器が出土し、土器片に付着した炭化物の放射性炭素年代測定結果からその較正年代が

約 16,000 年前、地質年代では更新世最終氷期にさかのぼる事実が明らかとなった（谷口編 1999）。この研究成果が契機となって、日本および周辺地域における土器の出現とその年代に関する研究が大きく進展し、日本列島を含む東アジアでは更新世にすでに土器の使用が開始していた考古学的事実が世界的にも周知されるようになった（Jordan and Zvelebil eds. 2009、Kaner and Taniguchi 2017）。

しかし、土器出現の年代が従前の年代観よりも大幅に古く更新世にさかのぼる事実が明らかとなった現在も、時代区分の枠組みの見直しは進まず、1960 年代に山内清男が提唱した「縄文時代草創期」という時代区分が広く通用している。土器の出現は、縄文時代の始まりを告げる画期的な技術革新と評価され時代区分の根拠とされてきた。しかし、大平山元以降に蓄積されてきた放射性炭素年代測定値の較正年代によれば、「草創期」は 4000 年以上の長さを持ち、そのほぼ全期間が更新世の最終氷期に属する。土器出現という一つの文化事象をもって縄文時代の始まりと見なすことがはたして妥当なのか、新たな年代的事実を踏まえて時代区分そのものの妥当性を再検討する必要性が生じてきた。「縄文草創期」というこれまでの時代区分の枠組みを一旦置いて、旧石器時代から縄文時代への長い移行過程という新たな視点から縄文時代の始まりを考え直す必要がある。「旧石器—縄文移行期」という概念を新たに提案したのも、そうした認識の転換によるものである（谷口 2011）。

縄文文化起源論の再検討を目指して、私たちの研究室では新たなリサーチ・デザインに基づく遺跡調査を実践してきた。縄文文化形成期の生業活動や資源利用技術を解明するためには、食料残渣その他の有機物資料が残る低湿地遺跡もしくは洞窟・岩陰遺跡を発掘調査する必要がある。その実践的研究として、平成 21 年度から 23 年度にかけて、新潟県中魚沼郡津南町にある卯ノ木泥炭層遺跡の発掘調査を実施するとともに、考古学・植物学・年代測定学・文化財科学・堆積学の専門研究者による学際的な共同研究をおこなった（研究課題名「新潟県卯ノ木泥炭層遺跡の発掘調査による縄文文化形成期の古環境と生業の研究」科学研究費補助金基盤研究（B）、研究代表者：谷口康浩、課題番号 21320148、研究期間平成 21 年度—23 年度）。この調査・研究を通じて、信濃川の低位段丘面や氾濫原における人類の諸活動や遺跡形成過程が明らかとなり、離水直後の河川低地に積極的に進出した、草創期に特徴的な遺跡立地や行動パターンを具体的に明らかにすることができた（谷口・吉田・ト部・能城・百原・吉川 2012、谷口・中村編 2013）。

居家以岩陰遺跡の発掘調査もまた、こうした研究目的を継承して計画・実施する学術調査であり、草創期および早期の遺跡が密集する上信越山地一帯を研究フィールドとして、更新世末から完新世初頭の人類と生態行動系の具体的解明を目指す。

3. 洞窟・岩陰遺跡調査の意義

居家以岩陰遺跡における私たちの調査研究は、縄文文化の形成過程にあたる草創期・早期を中心に、人類の生態行動系の実態を、行動拠点として利用された岩陰・洞窟遺跡に残る考古資料と人骨、動植物遺体などの分析に基づいて明らかにすることを目指している。

縄文人はさまざまな食料獲得・資源利用の技術を持ち、多様な環境への適応力を深め、海岸部から山地にわたる広い地域に遺跡を残した。そのうち海岸や平野部での生活の様子は、貝塚や集落跡の発掘調査によって詳しく研究されてきている。なかでも生業活動とその季節的スケジュール、生業組織と消費単位などの基本的問題については、貝塚遺跡に残る資料・データによって復原され裏付けられた部分が圧倒的に大きいのが現状である。

平野部や海岸部における地域生活史が詳しく研究される一方で、山地帯における生活の実態や岩陰・洞窟の利用目的は実はまだよく分かっていない。とくに、縄文文化の形成過程にあたる草創期から早期にかけての時期、地質年代では更新世終末から完新世初頭には、山地に点在する岩陰・洞窟が頻繁に利用されたのをはじめ、山間部や高原地帯に数多くの遺跡が残された。山地での行動や資源利用が積極的におこなわれていたことを証するものであるが、その実態解明があまり進んでいないのである。更新世から完新世への移行にともない環境が大きく変動するなかでの人類の適応と縄文文化の形成過程を具体的に解明するためには、そのような山地の考古学的データが不可欠である。洞窟・岩陰遺跡の調査研究は、そのような先史学的意義をもつ。

ことに居家以岩陰遺跡の場合は、利根川水系と信濃川水系という、日本列島の二大水系の分水嶺にあたる越後山脈（上信越山地）の懐深くに位置しており、そのロケーションからもこうした研究をおこなうには理想的な研究対象であると考えている。生態行動系と遺跡形成に関わる質の良い資料と情報を、考古学と関連諸学の調査技術を駆使して目的的に収集することができれば、所期の研究目的に接近することができよう。

上信越山地一帯には、岩陰・洞窟遺跡を含め、草創期・早期の遺跡が多数分布することが知られているが、群馬・新潟・長野の県境にまたがるため組織的な遺跡分布調査はこれまでおこなわれておらず、遺跡の情報が正確に把握されていない。吾妻川の本流域については、八ッ場ダム建設に関連した埋蔵文化財調査が進められた結果、情報量が増えたものの、上流域での遺跡の情報は未だに断片的なものに留まっている。本研究では、生活拠点である居家以岩陰遺跡の発掘調査を通して、岩陰・洞窟をベースとした山地帯での行動・居住パターンを明らかにしたい。また、当時の生態行動系を復元するには、周辺地域に広がる同時期の関連性の強い遺跡群や、地域の古環境についての情報も必要であり、上信越山地一帯における遺跡分布調査や古環境調査を計画的におこなっていく計画である。

第2節 居家以岩陰遺跡の調査に至る経緯

1. 居家以岩陰遺跡の発見

居家以岩陰遺跡の発見の経緯については第1次発掘調査報告書（谷口・朝倉編 2017）に詳述した。ここでは概要を述べる。

居家以岩陰遺跡が埋蔵文化財包蔵地として正式に登録され、遺跡名が付けられたのは、昭和62年度から平成元年度までの3か年にわたり長野原町教育委員会が実施した町内遺跡分布調査による。その調査成果は『長野原町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査報告書一』（長野原町教育委員会編 1990a）として公表されている。同書において、本遺跡は「居家以岩陰群」の名称でNo. 80遺跡として登録され、縄文時代前期および弥生時代の遺跡としてマークされた。備考欄には「8か所」と記載され、地図上には4か所の岩陰記号がマークされている。

縄文時代早期の土器などが地表面に散布する遺跡として注目されていたが、本格的な調査研究はこれまでおこなわれていなかった。平成7年7月、洞窟遺跡の研究者として著名な麻生優氏（当時・千葉大学教授）が、今回調査対象とした第1岩陰での学術発掘調査を検討するために現地を訪れている。同行した岡本東三氏（前・千葉大学教授）ならびに現地を案内した中東耕志氏（当時・群馬県埋蔵文化財調査事業団）によると、前原豊氏・小島淳一氏（前橋市教育委員会）とともに現地を訪れ、岩陰内で小規模な試掘をおこなったという。麻生教授は本調査を希望されたが、諸般の事情からその時の調査計画は実現しなかったようである（岡本東三氏、中東耕志氏のご教示による）。

なお、令和1年9月の第6次調査の期間中に中東氏が発掘現場に来られ、当時の試掘トレンチの略図と出土遺物を譲り受けた。略図によると、岩陰の開口部側から奥壁側に向けて2本のトレンチが平行して設定されたようである。トレンチの発掘深度は記録されていないが、私たちの発掘区ではそのトレンチが明確でないことから、深度は浅く第II層群の灰質土には達していなかったものと思われる。譲渡された出土遺物は、晩期後半の浮線網状文土器（女鳥羽川式・離山式・氷I式）を含む土器片10点、黒曜石の剥片1点、獣骨片13点である。

2. 発掘調査に至る経緯

國學院大學文学部考古学研究室ではこれまで、旧石器時代から縄文時代への移行期の様相解明を研究テーマとする学術発掘調査を継続しておこなってきた。前任の小林達雄教授がおこなった新潟県十日町市壬遺跡・長野県木曾郡開田村柳又遺跡A地点・北海道瀬棚郡今金町美利河遺跡K地点などの一連の調査がそれであり、1960年代の「本ノ木論争」以後の該期の研究に新たな問題を提起する重要な成果を挙げてきた。

こうした研究テーマを受け継ぎ、平成19年から平成23年には「本ノ木論争」の舞台となった新潟県津南町

本ノ木遺跡ならびに卯ノ木泥炭層遺跡、平成 25 年度には青森県東北町赤平（1）遺跡での発掘調査を実施した。赤平（1）遺跡では青森県埋蔵文化財センターが実施した既往の調査で、長者久保・神子柴文化期の石器群とともに数点の土器片が出土していた。青森県外ヶ浜町大平山元 I 遺跡と同時期の日本列島最古の土器文化が埋蔵されている可能性があったことから同遺跡に注目し、既往の調査区の隣接地点をはじめ広範囲に試掘を入れて探査したが、同時期の遺構・遺物の広がりを確認することはできなかつた（谷口・中村編 2016）。同遺跡での調査計画は断念し、次の調査対象遺跡を検討することとなった。

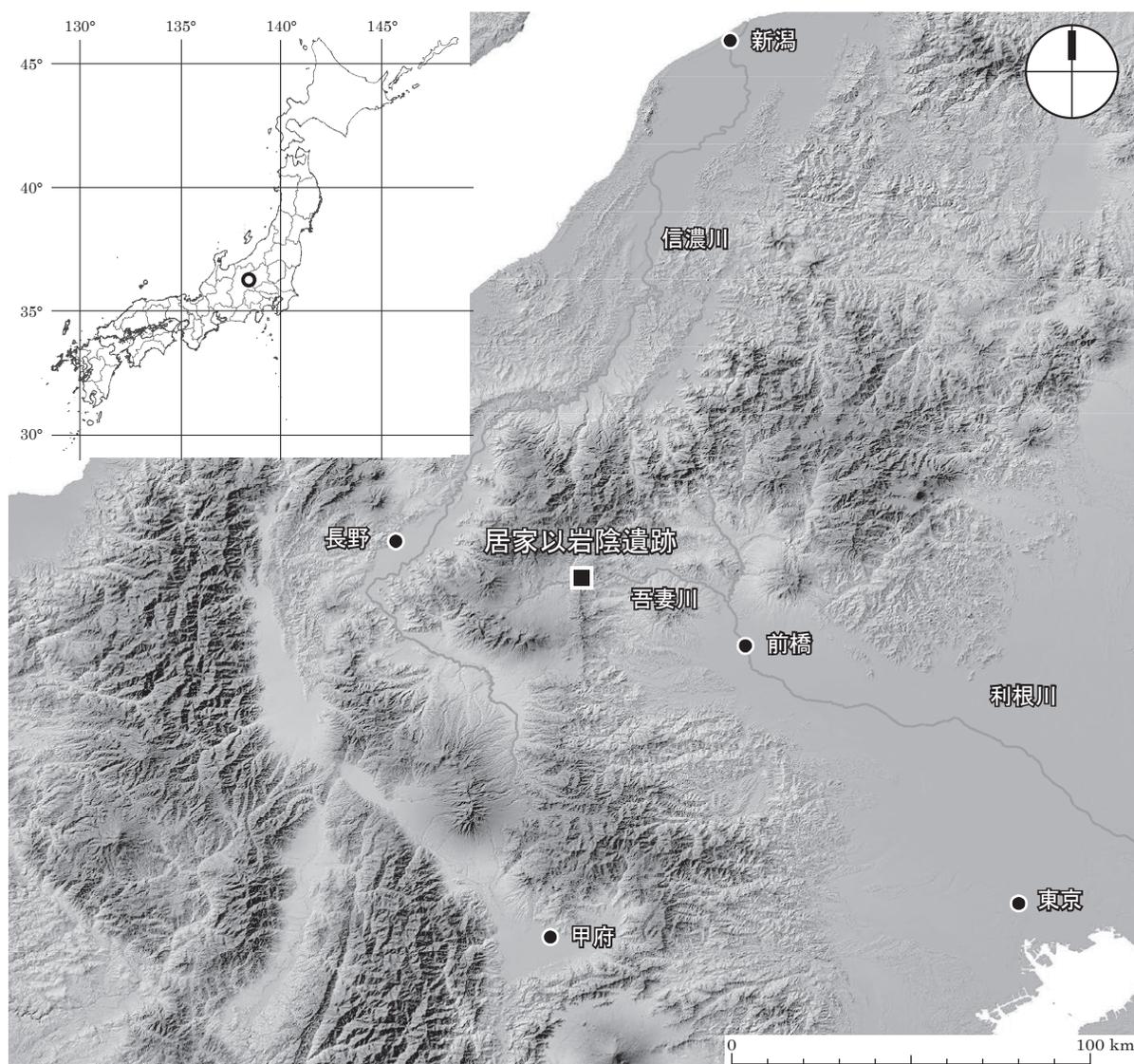
旧石器－縄文移行期の生態行動系を具体的に研究するためには、人骨・動植物遺体などの有機質遺物が保存されている場所として、泥炭層・低湿地遺跡もしくは洞窟・岩陰遺跡を調査対象とするのが最も有効である。そのような研究構想に基づいて、数多くの洞窟・岩陰遺跡が分布する群馬県で調査地の検討を始めた。大工原豊氏（本学文学部兼任講師）に相談したところ、前述の長野原町遺跡分布調査に調査員として関わった巾隆之氏（元・群馬県教育委員会）が居家以岩陰遺跡にかねてから注目しており有望であるとの情報を得た。私自身もこれまで新潟県十日町市壬遺跡や津南町本ノ木遺跡・卯ノ木遺跡、長野県湯倉洞窟遺跡など、上信越山地一帯をフィールドとして調査研究をおこなってきたので、マクロな地域研究という意味でも、調査対象として適していると考えられた。そこで平成 26 年 3 月に、巾氏・大工原氏の案内で現地を訪れ、遺跡の立地や出土遺物の時期などを確認した上で、ここを調査地に選定する方針を固めた。長野原町・前教育長の黒岩文夫氏が土地所有者をはじめ地元の関係者に丁寧な説明し理解と承諾を得てくださった斡旋のおかげで、調査を実現できる環境が整い、長野原町教育委員会埋蔵文化財担当の富田孝彦氏のご協力も得ることができた。平成 26 年 5 月には、群馬県教育委員会および長野原町教育委員会に研究計画を説明して発掘届を提出し、土地所有者からも正式に発掘調査の承諾を得ることができた。そして、最初の発掘調査として平成 26 年 8 月に第 1 次調査を実施することとなったのである。（谷口）

第2章 居家以岩陰遺跡の概要

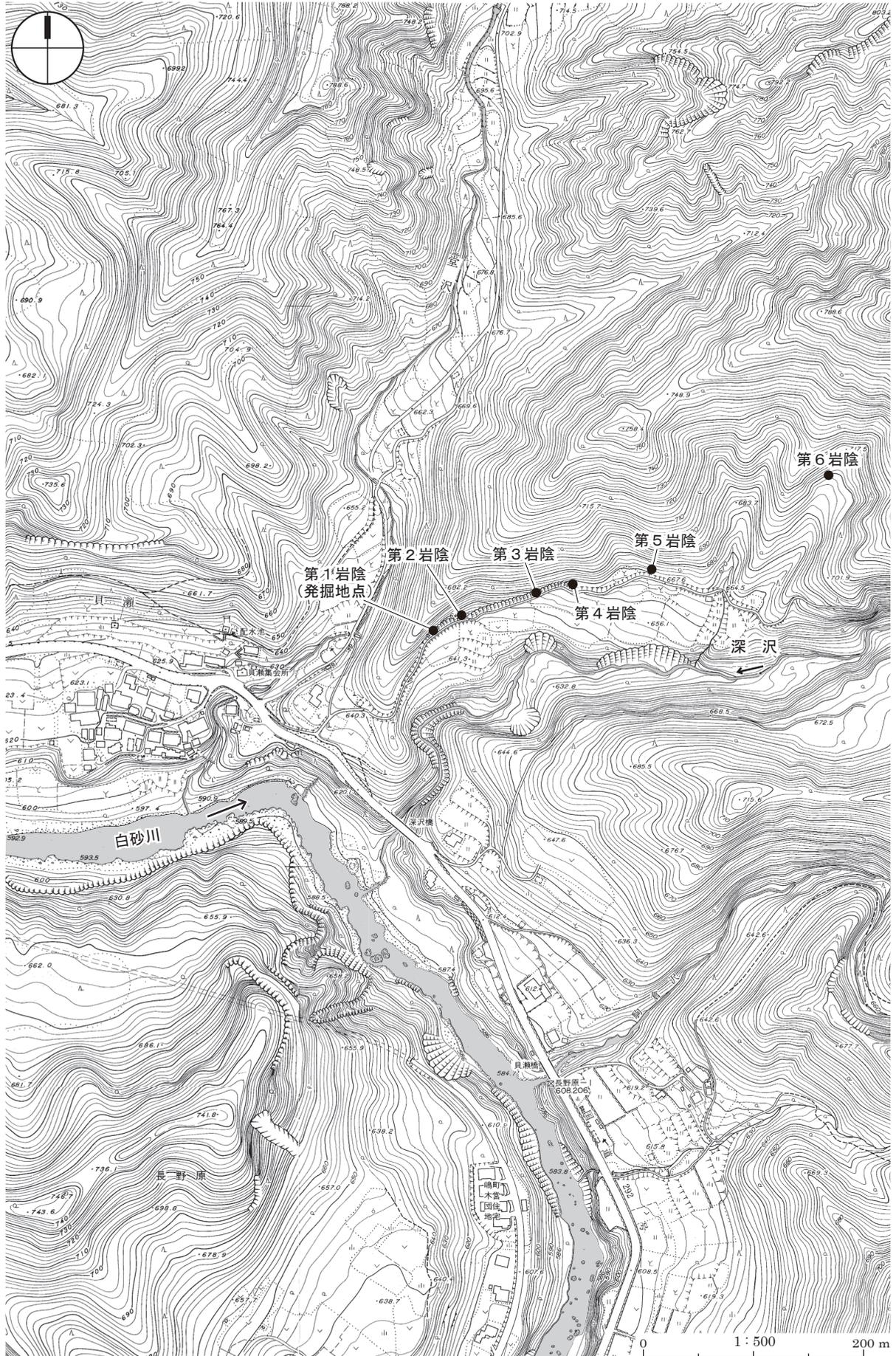
第1節 居家以岩陰遺跡の立地と環境

居家以岩陰遺跡は、利根川水系と信濃川水系の分水嶺である上信越山地内、北緯 $36^{\circ} 33' 28.29''$ ・ 東経 $138^{\circ} 38' 50.25''$ 、標高 649m の地点に位置する（第1図、第2図）。現在の行政区分の地籍で群馬県吾妻郡長野原町大字長野原 875 ほかに所在する。

遺跡が所在する長野原町は山地にあり、町の北西に草津白根山（2,171m）、南西に浅間山（2,569m）がそびえ、町内には王城山（1,123m）や高間山（1,341m）など標高 1000m を越える山々が点在している。長野原町の地形は、北部の吾妻川流域河岸段丘地帯と南部の浅間山山麓高原地帯に区別され、本遺跡は北部に立地する。北部には利根川の支流である吾妻川が東流し、その流域には最上位・上位・中位・下位の4面に区分される河岸段丘が形成されている。北部の大半が山地であり、平地は吾妻川に沿った段丘上に限られる。



第1図 居家以岩陰遺跡の位置



第3図 居家以岩陰遺跡の周辺地形図



第4図 遺跡地形図

本遺跡は吾妻川の支流である白砂川に注ぐ深沢の右岸に位置している（第3図）。深沢の右岸には溶結凝灰岩の露頭が続いており、露頭面には地表で確認できる岩陰が6か所ある。西側から順に「第1岩陰」、「第2岩陰」...と呼称し、本遺跡は西端に位置する第1岩陰である。第2岩陰以降の岩陰における利用痕跡の詳細は明らかではないが、もっとも規模が大きい第3岩陰で縄文時代および弥生時代の遺物を表面採集している。

調査をおこなっている第1岩陰は、幅約20m、高さ約6m、奥行き約3mの規模で南東方向に開口している（第4図）。岩陰の前面は南東方向に約15度傾斜する緩斜面（前庭部緩斜面）になっている。前庭部緩斜面は以前は桑畑として利用されていた。また、岩陰部と前庭部緩斜面の間には幅約2mの道路が横断しており、道路造成時に岩陰前に堆積していた土壌が削平されている。（松本）

第2節 縄文時代早期・前期の周辺遺跡

1. 長野原町内の遺跡の概要

遺跡の形成過程や利用方法は多様である。居家以岩陰遺跡の性格を理解するには、本遺跡と同時期に利用された周辺遺跡との対比を欠かすことはできない。そこで本遺跡が所在する長野原町内の遺跡を周辺遺跡とし、概観する。

発掘調査が実施された縄文時代の遺跡は46遺跡ある（2019年時点、第1表）。その多くは吾妻川左岸一帯に分布するが、これは発掘調査の多くが八ッ場ダム建設工事に伴う緊急発掘であること、加えて開発が段丘上に限定されることに起因すると考えられる。これらの調査傾向を鑑みれば、調査の及ばない山間に位置する未発見の遺跡の存在も想定される。時期別では早期15遺跡（第5図）、前期31遺跡（第6図）、中期36遺跡、後期33遺跡、晩期18遺跡を数える。町内には特に中期から後期にかけて、環状集落である長野原一本松遺跡や、230棟以上の堅穴住居が検出された横壁中村遺跡といった大規模集落が存在する。

居家以岩陰遺跡は縄文早期および前期に盛んに利用されたことが出土土器の傾向から明らかである。（第6章第1節参照）。本遺跡の位置づけを明らかにするために、利用期間が重なる、集落遺跡「楡木Ⅱ遺跡」・「三平Ⅰ・Ⅱ遺跡」・「立馬Ⅰ遺跡」・「立馬Ⅲ遺跡」、岩陰遺跡である「石畑岩陰遺跡」を取り上げ、概説する。立地、利用時期、早期・前期に帰属する遺構・遺物の情報を整理した。なお、遺跡の利用時期は縄文時代に限って記載し、旧石器時代および弥生時代以降は割愛した。また、資料は遺構出土遺物を中心に図示した。

2. 遺跡各説

（1）楡木Ⅱ遺跡（第7図、第1表・第5図・第6図15）

吾妻川左岸、扇状地状地形の先端部に位置する。最上位段丘面よりもさらに高位に位置する緩やかな傾斜地であり、標高630～660mにわたって遺跡が広がる。居家以岩陰遺跡からは直線距離で南東に約4km離れた場所に所在する。八ッ場ダム造成工事にとまない、2000・2001・2004・2005年度に群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査された（群馬県埋蔵文化財調査事業団編2009b）。

基本土層はⅠ～Ⅶ層に分かれる。Ⅴ層が早期、Ⅳ層が前期の包含層である。早期から中期の各時期で遺構が検出されたが、後・晩期は遺構外から土器が少量出土するのみである。

早期で特筆すべきは、早期前葉撚糸文土器期の堅穴住居が31棟検出されたことである。これらは重複して検出されるものが多く、最大で5棟が切り合う。31棟のうち9棟は石囲炉が、5棟は地床炉が伴う。また、早期の小河川跡と推定される溝が1本検出された。これらの遺構内からは2,693点の土器が出土した。撚糸文土器（第7図2～4）が974点と最も多く、早期前葉無文土器が585点・表裏縄文土器（第7図1）が455点と次ぐ。これに早期中葉押型文土器が（第7図5）が66点ともなう。遺構外も同様の出土傾向にある。石器は遺構内から313点出土した。なかでもスタンプ形石器（第7図10・11）は114点と総数のおよそ3分の1を占め、磨石類（第7図12・13）が64点、スクレイパー（第7図7）が46点と続く。他に、打製石斧（第7図8）、磨製石斧（第

7 図 9) が各 2 点出土している。

前期に帰属する竪穴住居は 13 棟検出された。うち 1 棟は土器埋設炉を、2 棟は石囲炉をともなう。覆土出土遺物は少量で、土器は前期前半花積下層式・黒浜式・有尾式、前期後半諸磯 b 式・諸磯 c 式が計 37 点、石器は石鏃 1 点、磨石 7 点、石皿 1 点の出土に限られる。遺構外からは、前期前半二ツ木式・関山式、前期後半諸磯 a 式・十三菩提式土器が出土している。

(2) 三平 I・II 遺跡 (第 8 図、第 1 表・第 5 図・第 6 図 42, 43)

吾妻川左岸、標高約 600m の河岸段丘最上位段に位置する。谷地を境に約 20m 離れ、西に三平 I 遺跡が、東に三平 II 遺跡が所在する。居家以岩陰遺跡からは直線距離で東に約 10km 離れた場所に所在する。八ッ場ダム造成工事に伴い、1998・2004・2005 年度に群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査された (群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2007b)。

基本土層は両遺跡で共通し、I から VIII 層に分けられている。V 層が縄文時代の遺物包含層であり、早期から中期の遺物が混在する。両遺跡とも草創期から前期の集落跡と推定され、報告ではひとつの遺跡としての考察もされている。

三平 I 遺跡では、竪穴住居が 2 棟検出された。1 号住居からは早期後葉条痕文土器 (第 8 図 5) 2 点、前期前半二ツ木式 3 点、関山式 (第 8 図 6・7) 44 点、有尾式 (第 8 図 9) 6 点、前期後半諸磯 a 式 (第 8 図 10) 21 点、諸磯 b 式 2 点が出土し、遺構は前期に帰属するとされる。石器は石鏃 4 点、スクレイパー、磨製石斧 (第 8 図 11)、凹石 (第 8 図 12) が各 1 点出土した。3 号住居からは諸磯 a 式 22 点、石鏃、磨製石斧が各 1 点出土した。この住居では 4 重に廻る周溝が検出され、各周溝の軸方位が住居の軸方位と一致することから、計画的な住居の拡張や修復があったと想定されている (群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2007b)。遺構外からは、早期 36 点・前期 889 点の土器が出土した。遺構内出土土器に加え、早期前葉表裏縄文土器 (第 8 図 1)・撚糸文土器 (第 8 図 13)、早期中葉押型文土器 (第 8 図 2)・田戸上層式 (第 8 図 3・4)・中部沈線文土器、前期前半花積下層式・黒浜式 (第 8 図 8)、前期後半十三菩提式が出土したが、数量は未記載である。帰属時期不明の石器は 44 点出土した。うち石鏃が 21 点と半数を占め、石匙・スクレイパー・磨石・スタンプ形石器などは少量の出土に留まる。

三平 II 遺跡では遺構は未検出だが、遺跡が斜面地に位置することから、地滑りによる遺構の消失が推定された。早期 408 点、前期 2,476 点の土器が出土した。出土土器は早期前葉表裏縄文土器・撚糸文土器 (第 8 図 13)、早期中葉押型文土器 (第 8 図 14～16)・三戸式 (第 8 図 17)・田戸下層式 (第 8 図 18)・田戸上層式・中部沈線文土器 (第 8 図 19・20)、早期後葉槻木式 (第 8 図 21)・野島式 (第 8 図 22)・鶺鴒ガ島台式 (第 8 図 23)、早期末葉絡条体圧痕文土器、前期前半中道式・花積下層式 (第 8 図 24)、前期後半諸磯 c 式である。石器は三平 I 遺跡の 10 倍に相当する 440 点が出土した。その内訳は三平 I 遺跡の器種構成と共通し、石鏃が過半数を占める。

(3) 立馬 I 遺跡 (第 9 図、第 1 表・第 5 図・第 6 図 37)

吾妻川北岸、王城山南麓標高 650m に位置する。居家以岩陰遺跡からは直線距離で南東に約 4km 離れた場所に所在する。八ッ場ダム建設工事にともない、2001・2002・2005 年度に群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査された (群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2006d)。

調査区は 7・17・26・27 区の 4 つに分けられる。うち 17 区からの出土遺物が大半であるため、以下では 17 区に限定して記載する。基本土層は I～VII 層に区分され、IV・V 層が縄文早期から晩期の遺物包含層である。

竪穴住居は 2 棟検出された。6 号住居からは早期中葉押型文土器 (第 9 図 4～6)・田戸下層式 (第 9 図 7)・中部沈線文土器 (第 9 図 8・9)、早期後葉条痕文土器が混在して出土し、遺構は早期に帰属するとされる。覆土から石鏃 (第 9 図 13・14) 3 点、石錐 (第 9 図 15) 1 点、打製石斧 (第 9 図 16) 1 点、磨石類 (第 9 図 17～19) 5 点、スタンプ形石器 2 点が出土した。7 号住居は早期前葉撚糸文土器期のものであるが、撚糸文土器 (第 9 図 3) 6 点以外の遺物は出土していない。また、集石遺構が 4 基検出された。集石はいずれも近接した位置関係にあり、出土土器から早期・前期の遺構であると考えられる。遺構外からは、住居覆土からの出土土器に加え早期前葉表裏縄文土器 (第 9 図 1・2)、早期後葉野島式・鶺鴒ガ島台式 (第 9 図 10～12)、前期前半関山式・黒浜式、

前期後半諸磯 a 式・諸磯 b 式・諸磯 c 式・十三菩提式が出土した。石器は帰属時期不明だが、遺構外から 185 点出土している。磨石類の出土数が半数を占め、次いで石鏃が 2 割を占める。

(4) 立馬Ⅲ遺跡 (第 10 図上、第 1 表・第 5 図・第 6 図 36)

吾妻川北岸、王城山の南麓標高 1,123m に位置する。居家以岩陰遺跡からは直線距離で南東に約 4km 離れた場所に所在し、北側には立馬Ⅰ遺跡が隣接する。八ッ場ダム建設工事にともない、2005 年度に群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査がおこなわれた (群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2009a)。

基本土層はⅠ～Ⅷ層に分かれる。うちⅤ層が縄文早期から弥生時代の遺物包含層である。その下層のⅥ層はローム漸移層であり、ここからも早期の遺物が出土した。

遺構は竪穴住居が 4 棟検出された。3 号住居からは早期前葉稻荷台式 (第 10 図 1・2) 2 点、スクレイパー・磨石が各 1 点出土した。1・2・4 号住居は、早期前葉稻荷台式、早期中葉中部沈線文土器 (第 10 図 3・4)、早期後葉子母口式 (第 10 図 5)・条痕文土器 (第 10 図 6) が混在して出土し、早期に帰属すると考えられる。石器は、覆土から石鏃 1 点、スクレイパー 2 点 (第 10 図 8)、磨石 3 点 (第 10 図 9) が出土した。遺構外出土土器は早期土器 2,066 点、前期土器 106 点を数える。住居覆土からの出土土器に加え、早期前葉井草式・稻荷原式、早期中葉押型文土器、前期前半羽状縄文土器・花積下層式・関山式 (第 10 図 7)・黒浜式、前期後半諸磯 b 式・諸磯 c 式が出土した。なかでも沈線文土器・条痕文土器が 1,923 点と大半を占める。遺構外出土石器は 83 点を数え、石鏃 28 点、石錐 2 点、スクレイパー 25 点、石匙 5 点、打製石斧 13 点、磨製石斧 1 点、磨石類 9 点が出土した。

(5) 石畑岩陰遺跡 (第 10 図下、第 1 表・第 5 図・第 6 図 46)

吾妻川左岸に位置し、幅約 40m の規模で南に開口する岩陰に形成される。遺跡の標高・岩陰の高さは不明である。居家以岩陰遺跡からは直線距離で東に 11km 離れた場所に所在する。JR 吾妻線の落石防護コンクリート壁工事にともない、1978 年度に発掘調査された。報告書は未刊行だが、群馬県史に概要が記されている (巾 1988)。

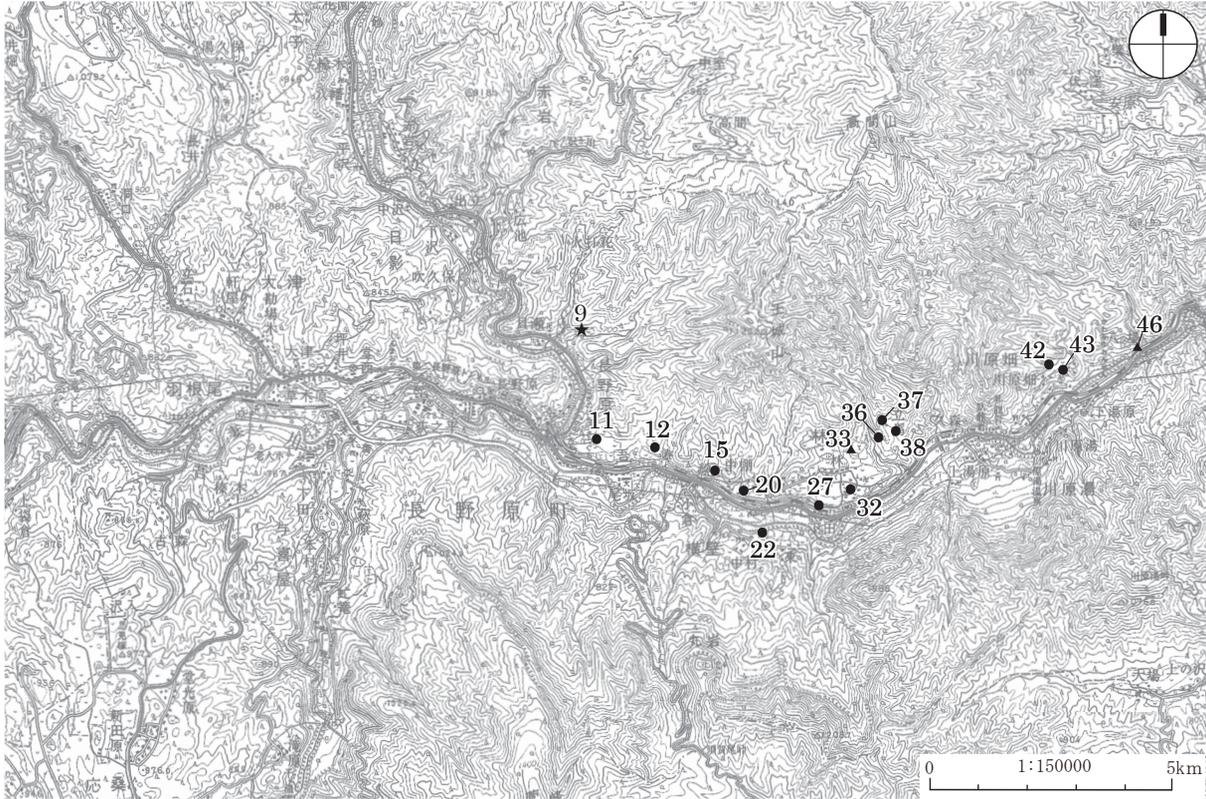
早期から晩期の土器が出土する。灰層や落石層が複雑に入り組んで堆積し、土層は 31 層に分けられている。うち 3・5～7・9・11・13 層は、深さ約 4m にわたって堆積する灰層である。7～28 層は早期の、5・6 層は前期の包含層である。調査は岩盤にまで達していない。

遺構は未検出である。調査区東側に早期の、西側に前期の遺物が集中する傾向にある。早期前葉表裏縄文土器 (第 10 図 10～12)・燃糸文土器 (第 10 図 13)、早期中葉押型文土器 (第 10 図 14・15)・沈線文土器 (第 10 図 16) が出土し、表裏縄文土器にともない磨石類 (第 10 図 17～20)・スタンプ形石器・石皿が 13 層から出土した。また、明確な帰属時期の記載はないが、イノシシ・ニホンジカ・ニホンザル・ツキノワグマ・キジなどの動物遺存体も出土した。なお、遺物出土数および前期遺物の詳細は報告されていない。 (多賀谷・伊沢)

第1表 長野原町内における縄文時代の遺跡

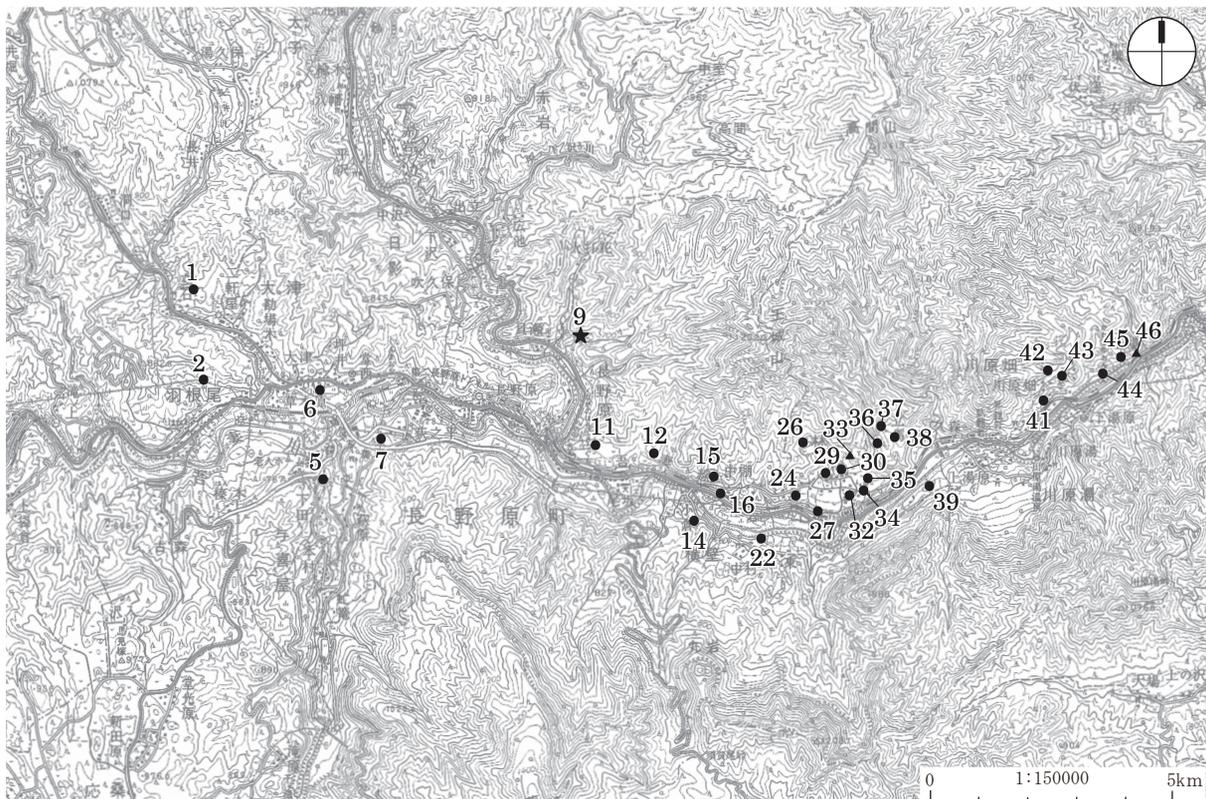
遺跡No.	遺跡名	種別	縄文時代					概要	市町村遺跡番号	文献No.		
			草創期	早期	前期	中期	後期					
1	櫛Ⅱ	集落			▲	●	◎	縄文土器(前期～後期)、注口土器・土製円板・スプーン形土製品、石棒、石皿、敷石住居(縄文後期初頭)、埋甕(縄文中期前半)	長野原-0097	44		
2	暮坪	集落			●			縄文土器(前期)、竪穴住居(前期)、土壇(前期前葉)	長野原-0117	47		
3	滝原Ⅳ	集落				●		縄文土器(中期)、竪穴住居(中期前葉)、土坑	長野原-0153	60		
4	山岸Ⅱ	集落					▲	縄文土器(後期)	長野原-0133	56		
5	外輪原Ⅰ(下田)	散布地			▲	▲	▲	縄文土器(早期)	長野原-0135	42・48		
6	坪井	集落			●	◎	●	縄文土器(前期～後期)、土偶、竪穴住居(前期・中期)、土坑(中期・後期)	長野原-0086	45・46・57		
7	長畝Ⅱ	集落			●	●		縄文土器(前期～中期)、竪穴住居(前期～中期)、土坑	長野原-0127	45		
8	長畝Ⅰ	散布地					▲		長野原-0126	48		
9	居家以岩陰	岩陰	▲	◎	◎	▲	▲	▲	本報告	長野原-0080	41	
10	久々戸	集落				●	▲	▲	縄文土器(前期～晩期)、柄鏡形敷石住居(中期)	長野原-0200	1・4・39	
11	長野原一本松	集落		▲	▲	◎	◎	▲	縄文土器(早期～晩期)、土製円板・土偶・石棒・玉・大珠・石冠、環状集落、竪穴住居・大型掘立柱建物跡・敷石住居・埋設土器・列石・弧状列石・配石・集石遺構	長野原-0063	2・14・16 20・23・32 34	
12	幸神	集落		▲	●	◎	●	●	縄文土器(早期～晩期)、竪穴住居(中期)	長野原-0062	15	
13	西久保Ⅳ	集落					●		縄文土器(後期)、掘立柱建物(後期)	長野原-0216	31	
14	西久保Ⅰ	集落			●	◎	▲	▲	縄文土器(前期～晩期)、竪穴住居(中期)、水場遺構、土坑(前期・中期)	長野原-0031	3	
15	楡木Ⅱ	集落		◎	●	●			縄文土器(早期～中期)、竪穴住居(早期初頭～中期前半)	長野原-0051	22	
16	楡木Ⅲ	散布地			▲	▲	▲		縄文土器(前期～後期、特に前期)	長野原-0202	3	
17	山根Ⅲ	集落				●			縄文土器(中期)、竪穴住居・土坑(中期)	長野原-0029	3・15・50	
18	楡木Ⅰ	集落					▲		縄文土器(中期)	長野原-0050	31	
19	山根Ⅳ	散布地				●			縄文土器(中期後半)	長野原-0030	52	
20	中棚Ⅰ	集落		●		▲		▲	縄文土器(早期・中期・晩期)、土坑(早期)	長野原-0049	51・57・60	
21	二反沢	集落						▲	▲	縄文土器(後期～晩期)	長野原-0052	9
22	横壁中村	集落		▲	▲	◎	◎	●	縄文土器(早期～晩期)、土偶・土製円板・土製腕輪・耳飾り・石棒・石剣・石冠・異形石器・岩板・垂飾・玉・環状石製品・球状耳飾、竪穴住居(中期中葉～後期前葉)、柄鏡形敷石住居(中期末葉～後期)、掘立柱建物(後期)、埋設土器、配石、集石、弧状列石(後期)	長野原-0024	4・5・7 13・17・18 24・25・26 29・33・36	
23	下原	集落					▲		縄文土器(中期)	長野原-0204	4・11	
24	林宮原	集落			▲	▲			縄文土器(中期～後期)	長野原-0048	37・48・58	
25	横壁勝沼	集落				●	●		縄文土器(中期～後期)、陥し穴	長野原-0023	3	
26	上原Ⅲ	集落			▲	▲	▲		縄文土器(前期～後期)	長野原-0043	39・50	
27	林中原Ⅰ	集落		▲	●	●	●		縄文土器(早期～後期)、竪穴住居(前期・中期)、特殊磨石、配石・石組(中期)、敷石住居、配石遺構(後期)	長野原-0045	35・53・60	
28	上原Ⅱ	集落				●	▲		縄文土器(中期～後期)、竪穴住居(中期初頭～前葉)、土坑(中期前半)	長野原-0042	51・57・60	
29	上原Ⅳ	集落			▲	▲	●	◎	縄文土器(前期～後期)、柄鏡形敷石住居(後期)、列石・配石(後期)	長野原-0044	15・48・60	
30	上原Ⅰ	散布地			◎	●		●	縄文土器(前期・中期・晩期)、竪穴住居(前期初頭～中期後半)、土坑	長野原-0041	3・37・60	
31	林中原Ⅱ	集落				●	●		縄文土器(中期～後期)、竪穴住居(中期中葉・後葉)、土坑(中期後葉)、立石、列石(中期後半～後期前葉)、集石(中期後半～後期前葉)	長野原-0046	51・52 54・55	
32	東原Ⅲ	集落		▲	●	▲	●		縄文土器(早期～後期)	長野原-0040	27	
33	花畑	集落 岩陰		▲	▲	▲	▲		縄文土器(早期～後期)、土坑(前期)	長野原-0205	3	
34	東原Ⅱ	散布地			●	●	●		縄文土器(前期～後期)、土坑	長野原-0039	27	
35	東原Ⅰ	散布地			●		▲		縄文土器(前期・後期)、土坑	長野原-0038	27	
36	立馬Ⅲ	集落		◎	●	●	●	●	縄文土器(早期～晩期)、鍬形鏃、竪穴住居(早期)	長野原-0215	21	
37	立馬Ⅰ	集落		◎	●	●	◎		縄文土器(早期～晩期)、特殊磨石、鍬形鏃	長野原-0037	10	
38	立馬Ⅱ	集落		●	●	◎	●	▲	縄文土器(早期～晩期)、鍬形鏃・特殊磨石・石棒、竪穴住居(中期初頭～後半)	長野原-0213	8	
39	川原湯勝沼	集落			▲	▲	▲	●	縄文土器(前期～晩期)、埋設土器(晩期)	長野原-0206	3・6	
40	上ノ平Ⅰ	集落				●	●	▲	縄文土器(中期～後期)、竪穴住居(中期中葉)、柄鏡形敷石住居(後期)	長野原-0005	19・38	
41	東宮	集落			▲	▲	▲	▲	縄文土器(前期～晩期)	長野原-0208	3・28・30・40	
42	三平Ⅱ	集落		●	◎	●			縄文土器(早期～中期)、鍬形鏃	長野原-0004	12	
43	三平Ⅰ	集落		▲	◎	●	●		縄文土器(早期後半～後期中葉)、竪穴住居(前期)、土坑(早期後半～後期中葉)、玉	長野原-0003	12	
44	二社平	散布地			▲		▲	▲	二社平岩陰の前庭部 縄文土器(前期・後期・晩期)	長野原-0209	3	
45	石畑	散布地			▲	▲	▲		縄文土器(前期・後期)	長野原-0210	3	
46	石畑岩陰	岩陰		▲	▲	▲	▲	▲	縄文土器(早期～晩期)、獣骨 ※前期～晩期の遺物の詳細無	長野原-0009	61	

◎：遺構有り遺物多 ●：遺構有り ▲：遺構無し ※文献は本節文末に掲載した。



★居家以岩陰遺跡 ▲岩陰遺跡 ●開地遺跡

第5図 長野原町内における縄文時代早期遺跡の分布



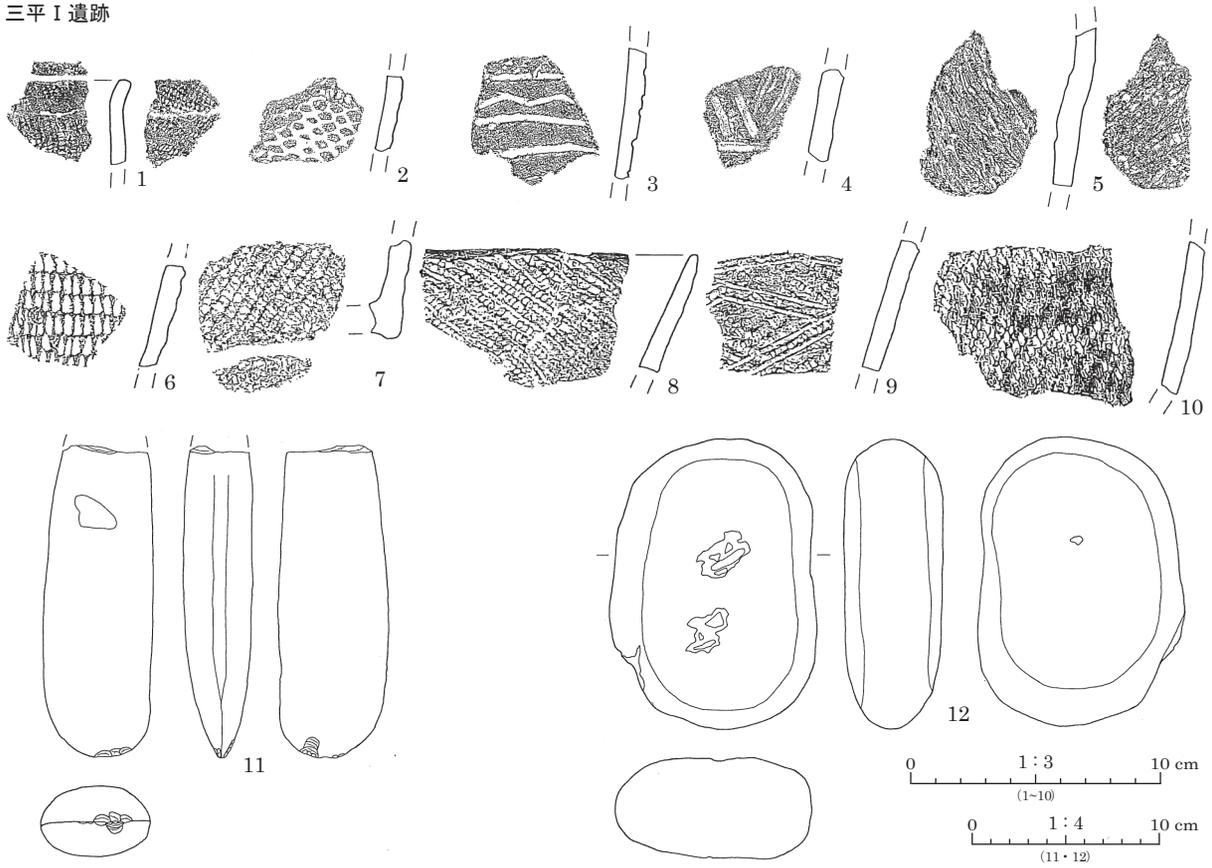
★居家以岩陰遺跡 ▲岩陰遺跡 ●開地遺跡

第6図 長野原町内における縄文時代前期遺跡の分布

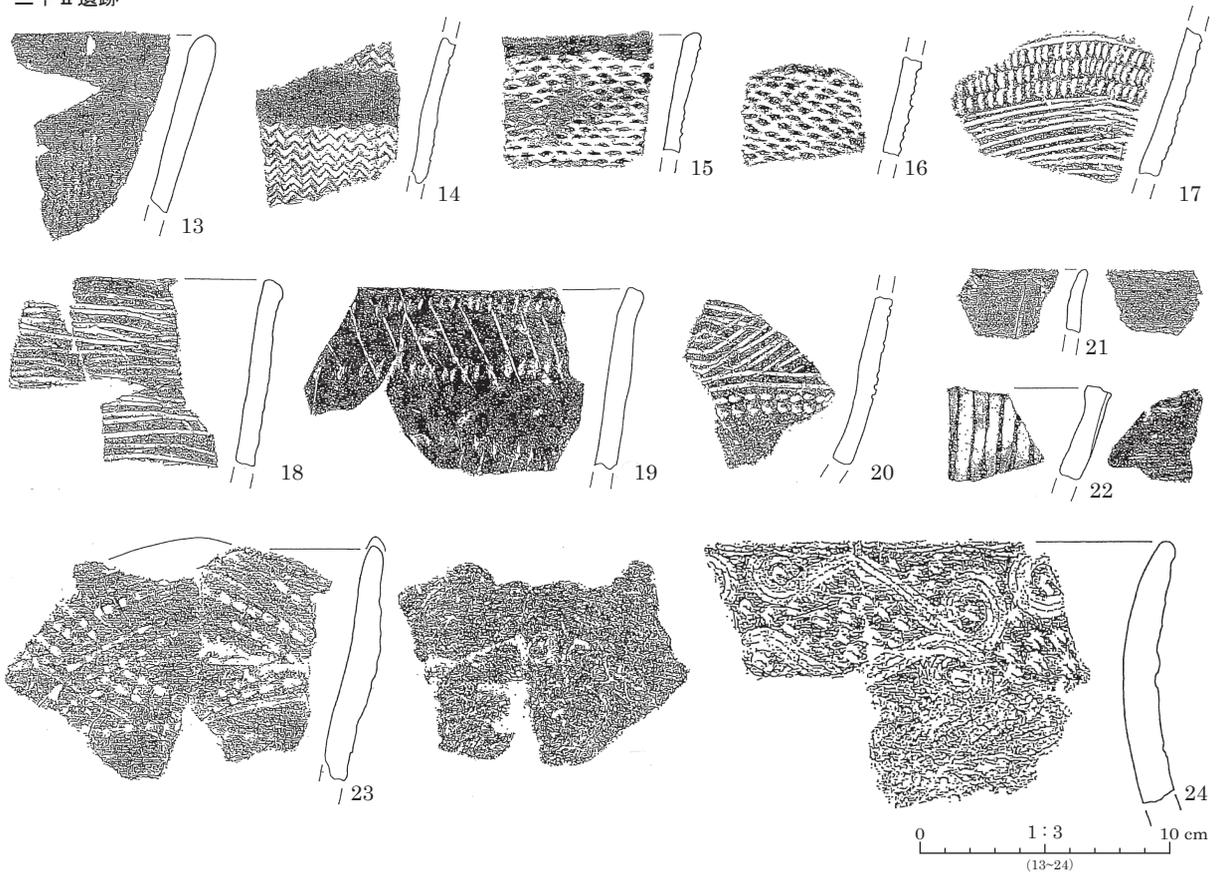


第7図 楡木Ⅱ遺跡の出土遺物
 (群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2009b より作成)

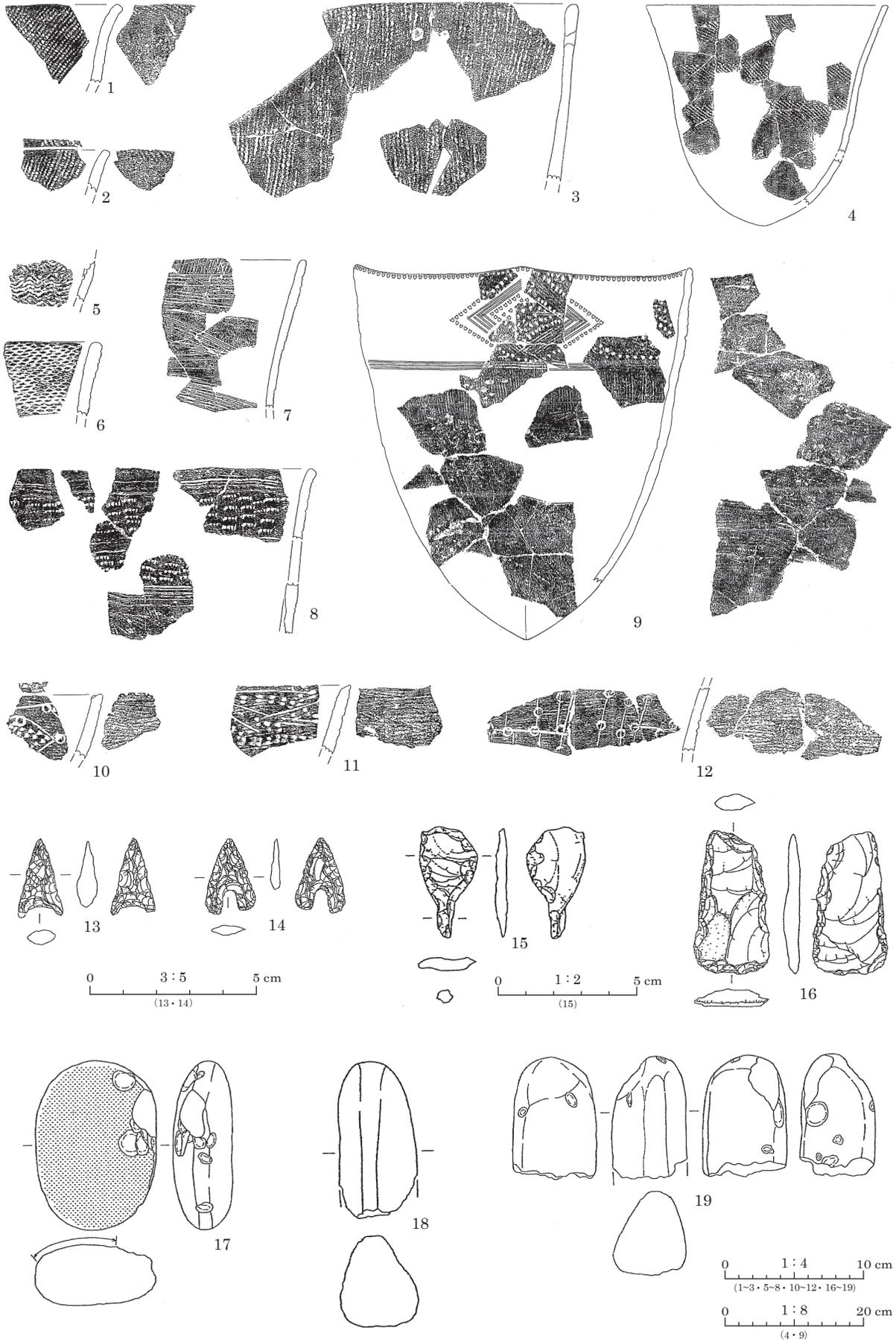
三平 I 遺跡



三平 II 遺跡

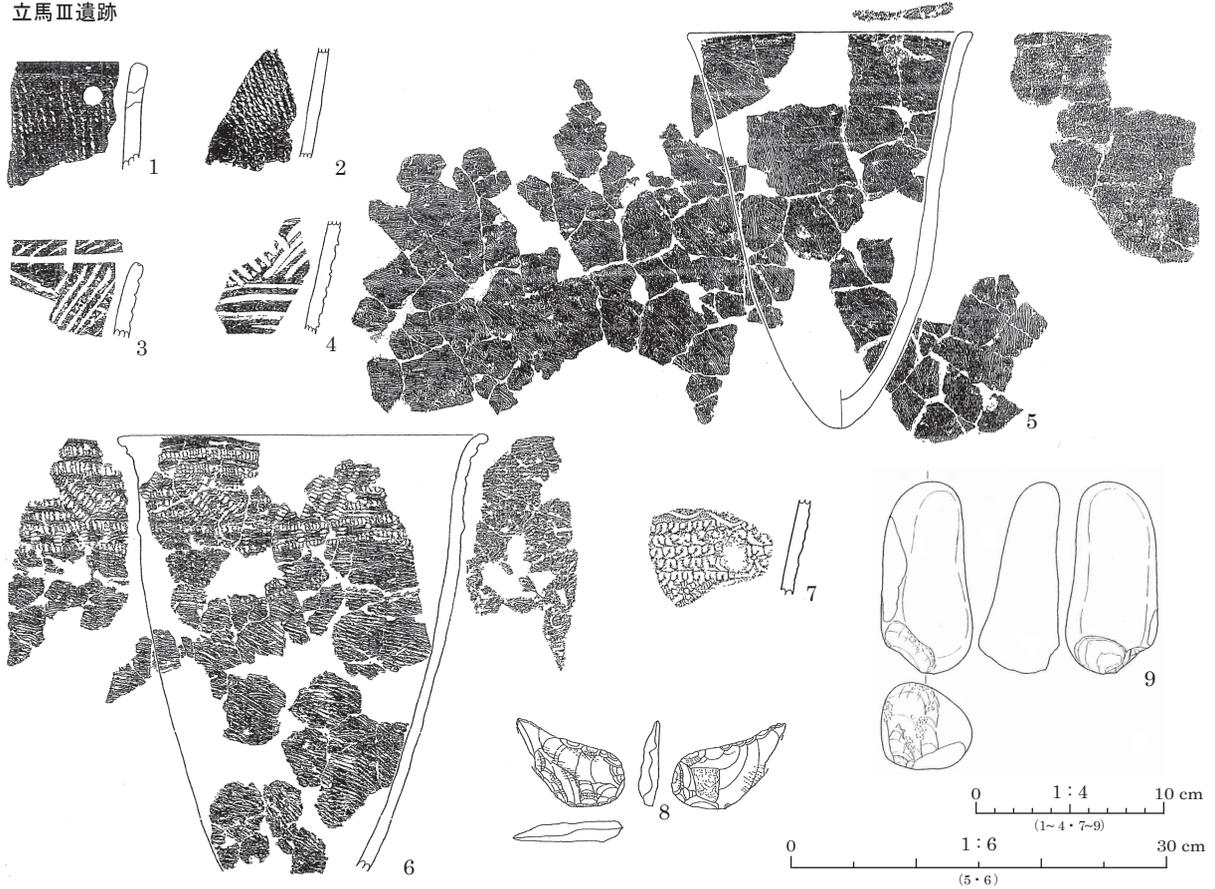


第8図 三平 I・II 遺跡の出土遺物
 (群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2007b より作成)

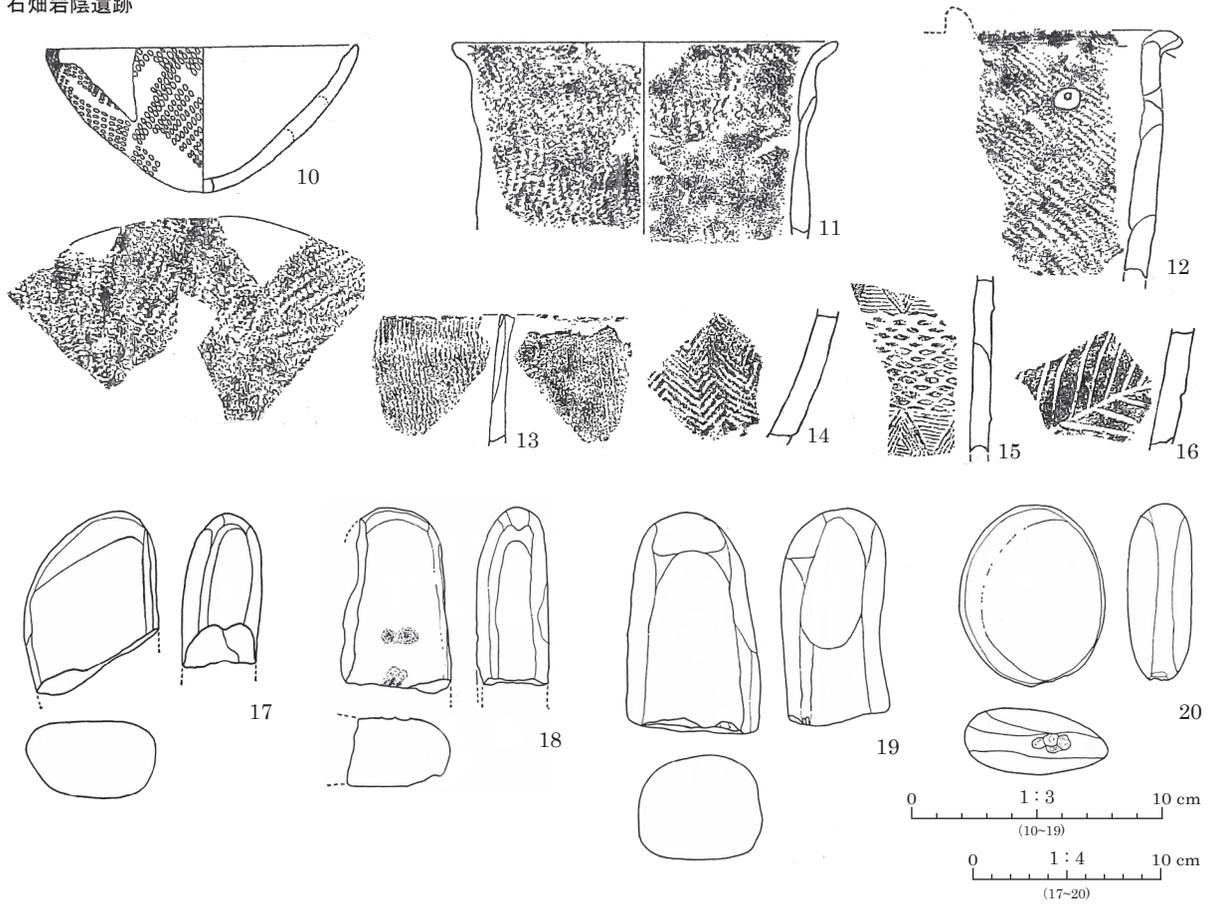


第9図 立馬I遺跡の出土遺物
 (群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2006d より作成)

立馬皿遺跡



石畑岩陰遺跡



第10図 立馬皿遺跡・石畑岩陰遺跡の出土遺物
(群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2006a、巾 1988 より作成)

長野原町内における縄文時代遺跡の発掘調査報告書（文献 No. は第 1 表と対応）

1. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1998『長野原久々戸遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告（以下、群馬県埋蔵文化財調査報告と略）240集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
2. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2002a『長野原一本松遺跡（1）』群馬県埋蔵文化財調査報告 287集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
3. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2002b『八ッ場ダム発掘調査集成（1）』群馬県埋蔵文化財調査報告 303集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
4. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』群馬県埋蔵文化財調査報告 319集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2005a『横壁中村遺跡（2）』群馬県埋蔵文化財調査報告 355集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2005b『川原湯勝沼遺跡（2）』群馬県埋蔵文化財調査報告 356集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
7. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2006a『横壁中村遺跡（3）』群馬県埋蔵文化財調査報告 368集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2006b『立馬Ⅱ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査報告 375集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
9. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2006c『上郷 B遺跡・廣石 A遺跡・二反沢遺跡』群馬県埋蔵文化財調査報告 379集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
10. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2006d『立馬遺跡Ⅰ』群馬県埋蔵文化財調査報告 388集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
11. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2007a『下原遺跡Ⅱ』群馬県埋蔵文化財調査報告 389集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
12. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2007b『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査報告 401集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
13. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2007c『横壁中村遺跡（5）』群馬県埋蔵文化財調査報告 406集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
14. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2007d『長野原一本松遺跡（2）』群馬県埋蔵文化財調査報告 408集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
15. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008a『山根Ⅲ遺跡（2）・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡』群馬県埋蔵文化財調査報告 429集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
16. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008b『長野原一本松遺跡（3）』群馬県埋蔵文化財調査報告 433集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
17. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008c『横壁中村遺跡（6）』群馬県埋蔵文化財調査報告 436集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
18. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008d『横壁中村遺跡（7）』群馬県埋蔵文化財調査報告 439集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
19. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008e『上ノ平Ⅰ遺跡（1）』群馬県埋蔵文化財調査報告 440集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
20. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2008f『長野原一本松遺跡（4）』群馬県埋蔵文化財調査報告 441集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
21. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2009a『立馬遺跡Ⅲ』群馬県埋蔵文化財調査報告 457集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
22. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2009b『榎木Ⅱ遺跡（2）縄文時代編』群馬県埋蔵文化財調査報告 458集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
23. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2009c『長野原一本松遺跡（5）』群馬県埋蔵文化財調査報告 461集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
24. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2009d『横壁中村遺跡（8）』群馬県埋蔵文化財調査報告 462集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
25. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2009e『横壁中村遺跡（9）』群馬県埋蔵文化財調査報告 466集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
26. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2010a『横壁中村遺跡（11）』群馬県埋蔵文化財調査報告 492集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
27. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2010b『東原Ⅰ遺跡・東原Ⅱ遺跡・東原Ⅲ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査報告 502集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
28. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2011『東宮遺跡（1）遺構・建築部材編』群馬県埋蔵文化財調査報告 514集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
29. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2012a『横壁中村遺跡（12）』群馬県埋蔵文化財調査報告 526集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
30. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2012b『東宮遺跡（2）遺物編』群馬県埋蔵文化財調査報告 536集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
31. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2012c『榎木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡（2）・西久保Ⅳ遺跡』群馬県埋蔵文化財調査報告 549集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
32. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2013a『長野原一本松遺跡（6）』群馬県埋蔵文化財調査報告 554集、群馬県埋蔵文化財調査事業団

33. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2013b『横壁中村遺跡(13)』群馬県埋文報告559集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
34. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2014a『長野原一本松遺跡(7)』群馬県埋文報告578集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
35. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2014b『長野原城跡・林中原I遺跡』群馬県埋文報告586集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
36. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2014c『横壁中村遺跡(14)』群馬県埋文報告587集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
37. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2015『上原I遺跡・上原III遺跡・林宮原遺跡』群馬県埋文報告604集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
38. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2017a『上ノ平I遺跡(2)』群馬県埋文報告623集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
39. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2017b『上原III遺跡(2)・久々戸遺跡(3)』群馬県埋文報告627集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
40. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2017c『東宮遺跡(3)』群馬県埋文報告628集、群馬県埋蔵文化財調査事業団
41. 谷口康浩・朝倉一貴編 2017『居家以岩陰遺跡 2014年度発掘調査報告書』國學院大學考古学研究室
42. 長野原町誌編纂委員会編 1976『長野原町誌』上巻、長野原町誌編纂委員会
43. 長野原町教育委員会編 1990a『長野原町の遺跡 町内遺跡詳細分布調査報告書』長野原町埋蔵文化財報告書(以下、長野原町埋文報告と略)1集、長野原町教育委員会
44. 長野原町教育委員会編 1990b『櫛II遺跡』長野原町埋文報告2集、長野原町教育委員会
45. 長野原町教育委員会編 1992『長畝II遺跡・坪井遺跡』長野原町埋文報告3集、長野原町教育委員会
46. 長野原町教育委員会編 2000『坪井遺跡II』長野原町埋文報告7集、長野原町教育委員会
47. 長野原町教育委員会編 2001『暮坪遺跡』長野原町埋文報告8集、長野原町教育委員会
48. 長野原町教育委員会編 2004a『町内遺跡IV』長野原町埋文報告13集、長野原町教育委員会
49. 長野原町教育委員会編 2004b『林宮原遺跡II』長野原町埋文報告14集、長野原町教育委員会
50. 長野原町教育委員会編 2006『町内遺跡VI』長野原町埋文報告16集、長野原町教育委員会
51. 長野原町教育委員会編 2008『町内遺跡VII』長野原町埋文報告17集、長野原町教育委員会
52. 長野原町教育委員会編 2009『町内遺跡VIII』長野原町埋文報告18集、長野原町教育委員会
53. 長野原町教育委員会編 2010『林中原I遺跡IV』長野原町埋文報告20集、長野原町教育委員会
54. 長野原町教育委員会編 2011『町内遺跡X』長野原町埋文報告21集、長野原町教育委員会
55. 長野原町教育委員会編 2012『町内遺跡XI』長野原町埋文報告22集、長野原町教育委員会
56. 長野原町教育委員会編 2013a『山岸II遺跡』長野原町埋文報告24集、長野原町教育委員会
57. 長野原町教育委員会編 2013b『町内遺跡XII』長野原町埋文報告25集、長野原町教育委員会
58. 長野原町教育委員会編 2013c『町内遺跡XIII』長野原町埋文報告27集、長野原町教育委員会
59. 長野原町教育委員会編 2014『滝原IV遺跡』長野原町埋文報告29集、長野原町教育委員会
60. 長野原町教育委員会編 2015『林地区遺跡群』長野原町埋文報告30集、長野原町教育委員会
61. 巾 隆之 1988「石畑岩陰遺跡」『群馬県史 資料編2』pp. 538-549、群馬県

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査区の設定と発掘調査の方法

1. 調査区の設定

(1) 測量基準点の設定

第1次調査時に測量基準点 IYK01・IYK02 の設定と、これをもとにした調査区設定・位置記録の基準点となる杭 IYK03～10 の設定をおこなった(第11図)。各々の座標値(世界測地系)は以下のとおりである。

【IYK01】 北緯：36° 33' 28.7650" 東経：138° 02' 51.7506" 標高：645.703m

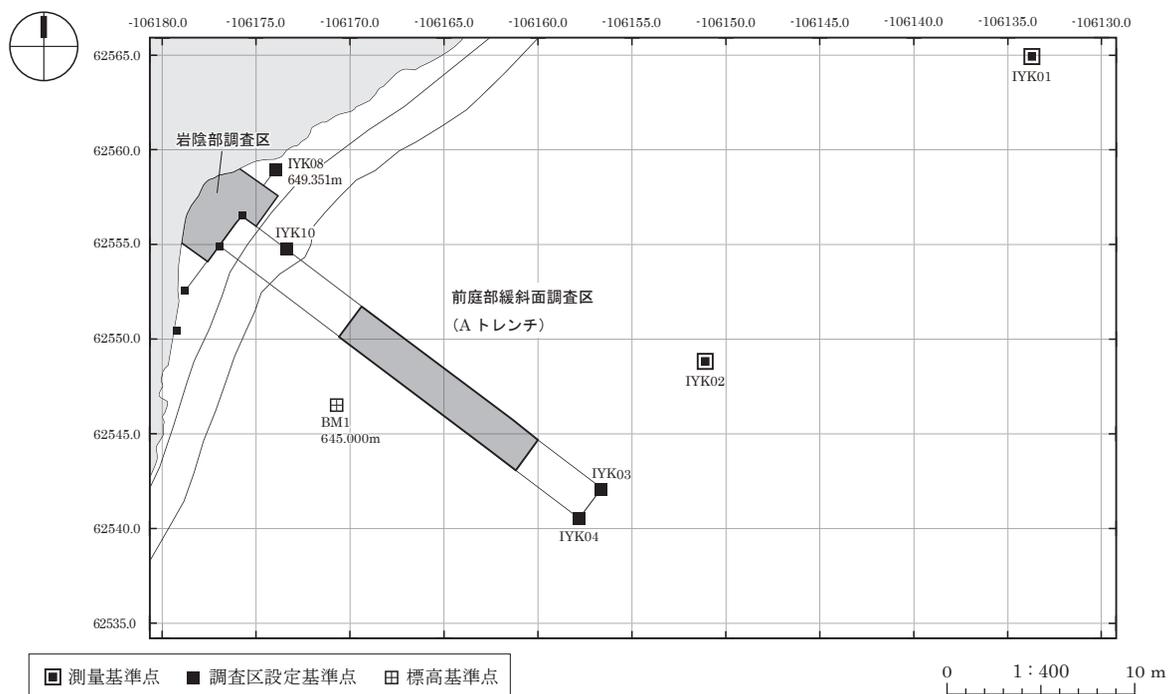
【IYK02】 北緯：36° 33' 28.2367" 東経：138° 38' 51.0633" 標高：643.109m

(2) 調査区とグリッドの設定

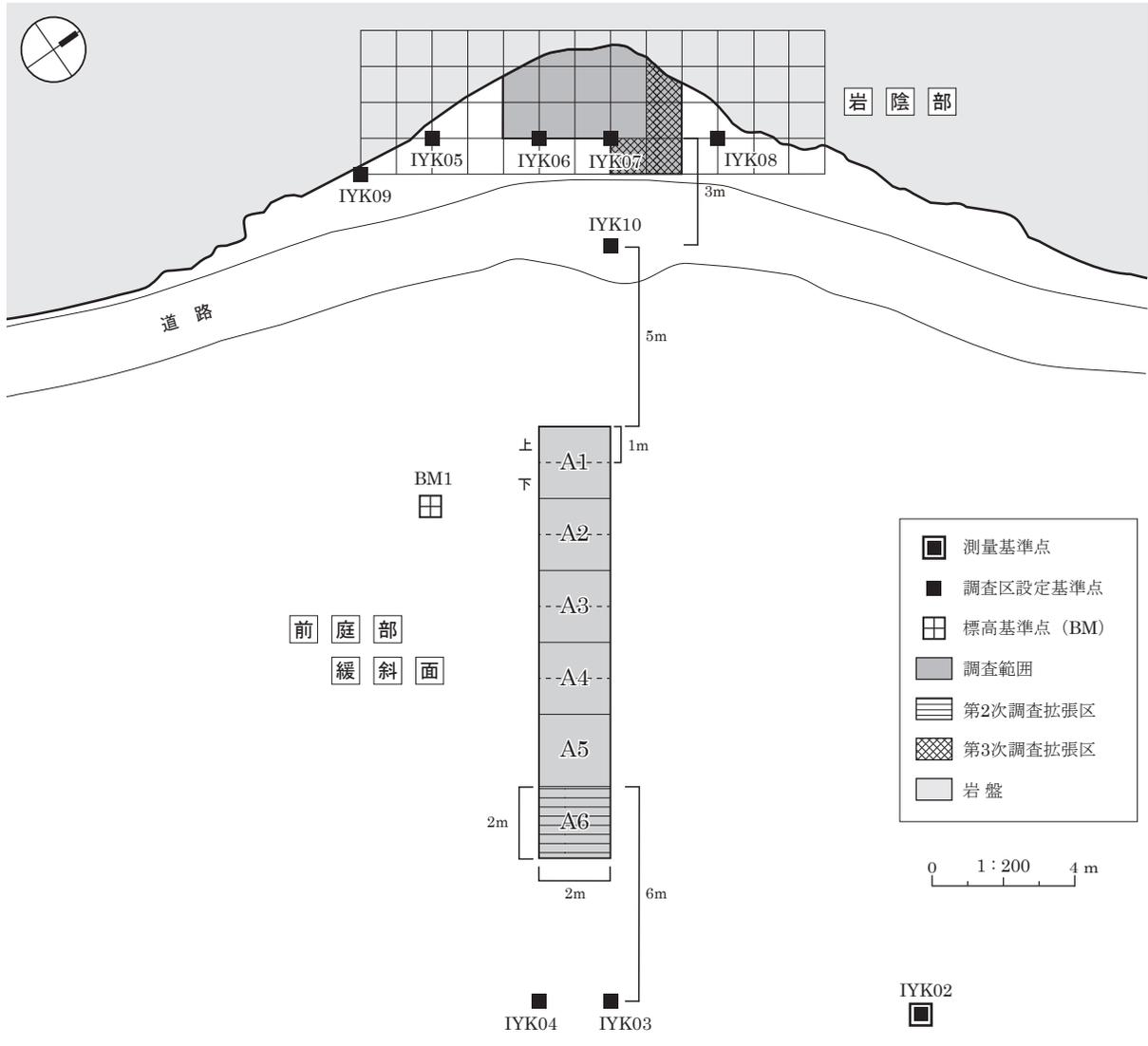
岩陰部とその前面に広がる前庭部緩斜面に調査区を設定した。調査区設定は IYK03 を基準としておこなった(第12図)。なお説明の便宜上、本項に限り岩陰に直行する軸(北西から南東)を南北、岩陰と並行する軸(北東から南西)を東西と表記する。

岩陰部では南北4m、東西10mの調査区を設定し、調査区内に1m×1m方眼のグリッドを組んだ(第13図)。南北列を開口部から岩陰に向かって片仮名(イ～ニ)、東西列を西側からアラビア数字(1～13)により表記した。第2次調査では第1次調査に引き続き、ロ・ハ・ニ列の5～8列を調査範囲とした。第3次調査では、第2次調査時に検出した1号人骨の取り上げをおこなうため、ロ8グリッド周囲のイ～ニ9グリッドとイ8グリッドを新たに設定した。

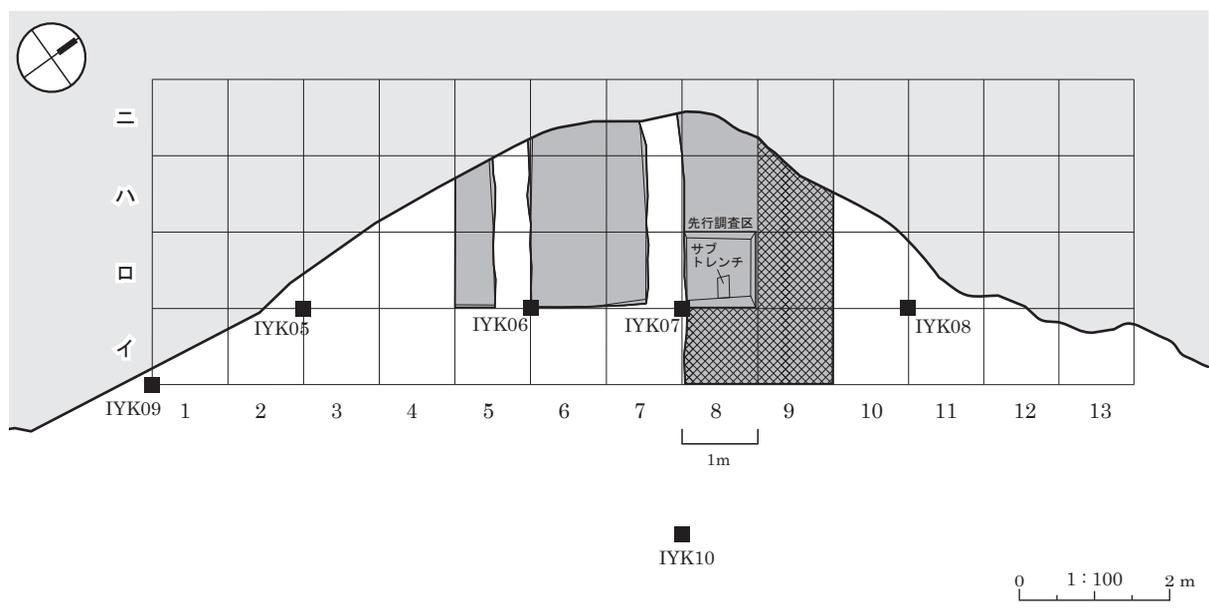
前庭部緩斜面では岩陰部6・7列の延長上に長軸10m×短軸2mの調査区(Aトレンチ)を設定し、2m×2m方眼のグリッドを組んだ(第12図)。グリッドの名称は、岩陰側から順にアラビア数字を付し、それぞれに



第11図 調査区設定図



第12図 グリッド設定図（遺跡全体）



第13図 グリッド設定図（岩陰部）

トレンチ名の A を冠して表記した (A1、A2…)。さらに、各グリッドを上方と下方で 1m に分けた。また、第 2 次調査での A5 グリッド深堀区での調査の安全面の考慮およびボーリング調査の作業スペース確保のため、トレンチを南側に 2m 拡張して新たに A6 グリッドを設定した。

なお、本文中で各グリッドを指した説明をおこなう場合、グリッド名の後に続く「グリッド」は省略し、「ロ 8」、「A1」のようにグリッド名のみで表記する。 (松本・猪熊)

2. 発掘調査の方法

(1) 層序・遺構の記録と遺物の取り上げ

調査区の範囲や遺構はトータルステーションを使用して記録した。埋葬人骨および集石など重要度の高い遺構や土層断面についてはトータルステーションによる記録に加えて、写真を用いた Structure from Motion/Multi-View Stereo (以下 SfM 法) による三次元記録をおこなった。

出土した遺物のうち遺存状態が良いものは、トータルステーションを用いて出土位置の三次元情報を記録した。細片はグリッドごとに層位一括として取り上げた。また、掘り上げた土壌はすべてふるい掛けし、掘削時に見落としした遺物を回収した。サンプリング方法の詳細は、以下で調査区ごとに示す。

(2) 岩陰部

第 1 次調査に引き続き分層発掘が困難であったため、EL (650.000m) を基準に 5cm 単位で便宜的に設定した人工層位を用いて掘削を進めた。EL から 105 ~ 110cm 低い深度に設定した単位が人工層位 105 ~ 110 となる。なお、第 3 次調査で拡張した 9 列とイ 8 については、層序把握のため先行して掘削していたロ 8 の土層断面をもとに、分層発掘をおこなった。

土壌のふるい掛けは乾式でおこなった。メッシュサイズは 5.0mm を基本とし、埋葬人骨の覆土については装飾品などの微細遺物が含まれる可能性を考慮し、より細かな 2.0mm ないし 3.0mm メッシュを使用した。

土層断面は、第 2 次・第 3 次調査段階で先行調査をおこなったロ 8 の壁面を記録した。しかし、これは仮の層序記録であったため、あらためて第 4 次 (2017 年度) 調査時に第 2 セクションベルト北西壁 (以下、第 2 SB) で正式な分層をおこなった。本報告での岩陰部の層序区分は、第 4 次調査時の記録を用いる。

(3) 前庭部緩斜面

第 1 次調査および第 2 次調査で確認した層序をもとに分層発掘をおこなった。ただし、A1・A2 の一部および先行して掘削を進めたサブトレンチでは分層発掘が困難であったため、人工層位を設けて掘削した。前庭部緩斜面の人工層位は、EL (646.200m) からの深度を 10.0cm 単位で区切って設定した。

土壌のふるい掛けは、乾式を基本として 10.0mm メッシュを用いておこなった。第 2 次調査では、動植物遺存体などの微細遺物を回収するため、10 層 (灰層) のみフローテーション法を含む水洗選別を実施した。水洗選別で使用したふるいのメッシュは、5.0・4.0・2.0・0.5mm である。なお、層序把握のため掘削を急いだ A3 ~ A6 では、ほとんどの遺物について出土位置の点情報を記録せず、グリッド・層位一括で遺物を取り上げた。

遺存状態が良い動植物遺存体を多量に包含する 8 層および 9 層、その下層である 10 層 (灰層) について定量サンプリングをおこなうため、A1 サブトレンチの幅約 50cm をベルト状に残して掘り進めた。

土層断面は、第 3 次調査時に A トレンチ北東壁 (メインセクション) を観察・記録した。 (松本・茅原)

第 2 節 発掘調査の経過

1. 岩陰部

(1) 第 2 次調査 (2015 年度)

第 2 次調査の岩陰部では、①先行調査区ロ 8 以外のグリッド (ロ 5 ~ 7、ハ・ニ列) での第 II 層群 (灰層) の全面検出、②先行調査区ロ 8 における第 II 層群の堆積状況および形成年代の確認を調査課題とした。

ロ5～7、ハ・ニ列は、第I層群EL-105～110cmのレベルから掘削を開始した。まず、第1次調査時に記録が未了であった4号～6号焼土について記録および土壌サンプルの採取をおこなった。その過程で、第1次調査報告において遺構として報告したハ8の7号焼土は、焼土の集中範囲ではなく第I層群②層の一部と認識を改めた。ロ・ハ列では、EL-110～115cmのレベルで第II層群の上面全体を検出した。一方で、奥壁に近いニ列では同レベルで灰質土層の堆積はみられず、第I層群の褐色土とは異なる黒褐色土(⑫層・⑬層)が堆積していた。この黒褐色土の詳細については第4章第1節に記載する。

先行して深掘りしていたロ8では、EL-140～150cmのレベルから調査をおこなった。掘削を進めた結果、風化礫を多く含む赤褐色土層(⑦層)の中から、北東壁付近で1号人骨の頭蓋骨の一部を、北西壁付近で2号人骨の脛骨と腓骨を検出した。1号人骨の頭蓋骨を検出した赤褐色土の範囲内に30cm×15cmのサブトレンチを設定して掘り下げると、赤褐色土の下の灰層(b層)から肋骨と椎骨が出土した。埋葬姿勢を確認するため、サブトレンチを拡張して埋葬姿勢を確認したところ、横臥屈葬と推測された。第2次調査においてはこの時点で掘削を止め、土中から浮いてしまった2号人骨の脛骨のみを取り上げた。

調査区の全景およびロ8の土層断面、掘削により奥行きが増した岩陰のラインを記録したのち、調査区内を養生して調査を終了した。

(2) 第3次調査(2016年度)

調査は8月と9月の2回に分けて実施した。國學院大學文学部史学科考古学コースの正課考古学調査法による考古学実習として8月2日～8月13日の12日間、平成28年度國學院大學特別推進研究として9月5日～9月17日の13日間である。

第3次調査の岩陰部では、①ロ・ハ列における第II層群(灰層)の調査、②ロ8で確認していた1号人骨の調査を課題とした。1号人骨の調査のため、ロ8周囲に拡張区(イ8・イ～ハ9)を新たに設定した。

a) 8月調査(考古学実習)

拡張区以外の調査区(5～7列、ハ・ニ8)はEL-110～115cmのレベルから掘り下げた。ハ5では第1次調査において検出した2号灰ブロックの下端を確認できたため、範囲の記録および土壌のサンプリングをおこなった。また、EL-115～120cmのレベルでヒトの散乱骨が出土した。後の検討で、この散乱骨が1個体であることを確認し、6号人骨と認定した。ハ7では第II層群中のEL-115～120cmのレベルから、羽状縄文系土器の大形の口縁部破片が2点重なった状態で出土した(第27図69、図版8)。この2点は接合資料で、内外面に炭化物が付着していた。ハ8では第I層群中に焼土を確認し、さらにその付近で礫群を検出した。この礫群を遺構としてとらえ、1号集石と呼称した。1号集石については、調査期間の都合により9月の調査で記録・取り上げをおこなうこととした。拡張区以外の調査区は、第II層群をEL-120～125cmのレベルまで掘り下げた時点で記録写真を撮影し、掘削を終了した。

拡張区は表層から第I層群の掘り下げを進めた。イ9の第I層群は調査区の約半分が根によって攪乱されていたため、攪乱部分を表層(②層)として掘り抜いた。イ8・9の道路側では、第II層群が落ち込んでおり、赤色粒子を部分的に含む黒褐色土が堆積していた。半円状に広がるため、当初はこれが墓壙である可能性を想定したが、第4次(2017年度)調査時に1号炉と認識するにいたった。この炉については第5次(2018年度)調査時において完掘しているため、本報告では取り上げない。拡張区は、各グリッドで第I層群が一部残る状況で掘削を中断した。

第II層群の堆積範囲を記録し、調査区内を養生して8月の調査を終了した。

b) 9月調査(特別推進研究)

ロ8で検出した1号人骨の調査に集中し、岩陰部8・9列に限定して調査を進めた。

ハ8では8月の調査中に検出していた1号集石の記録・取り上げをおこなった。その後、ハ8・ハ9で、水分が多いフレッシュな炭化材を多量に含む黄褐色土の広がりを確認し、これを⑭層として第I層群の褐色土と区別した。⑭層からは陶磁器片が出土したため、近世以降の攪乱層と判断して掘り抜いた。また、ハ9の⑭層直上

には集石が存在し、当初は1号集石に伴う可能性を想定したが、⑮層が攪乱層であるため1号集石とは関連しない近世以降の遺構と判断した。

イ8では第Ⅱ層群中に灰の純度が高い4号・5号灰ブロックを検出した。それぞれ範囲を記録したのちに土壌サンプルを採取した。第Ⅱ層群の掘削を進める過程で、年代測定用に第Ⅱ層群中(EL-140~150cm)の炭化材を3点取り上げ、そのうち2点について年代測定をおこなった(第7章第1節第2項を参照)。第Ⅱ層群をさらに掘り下げると腰から下肢にかけての人骨が出土し、これを4号人骨とした。また、第2SB付近で足根骨が出土し、連続する下肢が第2SB中にかかっている状況が確認された。これを5号人骨と呼称し、4・5号人骨は出土位置の記録後、土中から浮いてしまった部位のみ取り上げ、本格的な調査は次年度以降に持ち越すこととした。

ロ9では第Ⅱ層群中に6号灰ブロックを確認し、範囲を記録したのちにサンプリングをおこなった。掘削を進めた結果、ロ8の1号人骨がロ9に一部かかることを確認した。

周囲のグリッドのレベルが下がった段階で、1号人骨の調査のためロ8の掘削を開始した。その過程で、ロ7寄りの位置から1号人骨とは別個体の人骨を新たに検出し、これを3号人骨とした。3号人骨については下肢骨の一部を確認したのみであったため、取り上げはせずに出土位置の記録のみをおこなった。1号人骨の覆土(b層)の掘削を進め、埋葬状況がわかる状態になった段階で写真測量をおこなった。写真測量は5面に分けておこない、出土位置を記録しながら全身の骨を取り上げた。

1号人骨の取り上げ終了後、調査区内の養生をおこなって第3次調査を終了した。(松本・茅原)

2. 前庭部緩斜面

(1) 第2次調査(2015年度)

第2次調査の前庭部緩斜面では、①早期の遺物を検出したA5深掘区6層以下の堆積状況の確認、②第1次調査において問題が残ったグリッド間での層序関係の検討、③A1上側で確認した早期の灰層(10層)の堆積状況の確認と形成年代の確認を調査課題とした。また、第1次調査時に処理しきれなかった土壌のふり掛けをおこなった。

A5深掘区の6層以下の堆積状況と形成要因を調査するため、A5深掘区でのボーリング調査を実施した。安全面の考慮とボーリング調査の作業スペース確保のため、斜面下方に新たにA6を設定し、A4サブトレンチ、A5深掘区上側、A5メイントレンチについても掘削を進めた。A6の掘削を進めると、2層直上において現在も使用されている水道管が露出した。水道管の破損につながるおそれがあったため、A6はボーリング調査に必要な最低限のレベルのみ掘り下げることとし、3層~4層にいたった時点で掘削を止めた。ボーリング調査に必要なスペースが確保できた段階で、株式会社パレオ・ラボに委託してA5深掘区内の3か所でボーリングコアを採取した。その結果については第7章第4節に掲載する。調査期間の都合上、第2次調査では6層以下を掘削して堆積状況を確認するには至らなかった。

A3~A5を掘り下げると、第1次調査段階で4層とした層が、いくつかに分けられることがわかった。しかし、ただちに分層することは困難であったため、当面の処理として4層を上から30cmごとに上中下の3つに区分して扱った。また、4層はA1・A2にも連続する層と認識していたが、それぞれの該当層はA1・A2では縄文早期の土器を、A3~A5では縄文中期・後期の土器を多く包含しており、形成時期に大きな差があることを確認した。A1・A2で多量に含まれる動物遺存体がA3~A5では含まれないことと合わせて、別々の層と判断し、A1・A2の4層についてはより下層の7~8層と認識を改めた。なお、A3~A5の4層の細別は第2次調査では認識がまとまらず、第3次調査において再検討と正式な分層をおこなった。

A1・A2では、7~8層を慎重に掘り下げるメイントレンチに先行して、サブトレンチを人工層位で掘り下げ、灰質土層(以下、灰層)である10層の堆積状況を確認した。結果、A1とA2のグリッド境部分で新たに灰層を検出した。この時点では、新たに検出した灰層とA1上で確認していた灰層との関連は不明であったが、後の調

査で連続する10層であることを確認している。掘り上げた10層の土壌は、水洗選別によって微細遺物の回収をおこなった。

灰層の範囲、サブトレンチのエレベーションを記録したのち、トレンチ内を養生して調査を終了した。なお、第1次調査から持ち越していた土壌と合わせ、第2次調査で掘り上げた土壌についても処理し切ることができず、次年度にふるい掛けできるよう整理して現場に保存した。

(2) 第3次調査 (2016年度)

第3次調査の前庭部緩斜面では、①A1で検出した10層(灰層)の堆積範囲・形成年代の確認、②4層の細分を中心に疑問が残る土層堆積状況の再検討を課題として調査を進めた。また、第1次調査および第2次調査時に処理し切れなかった土壌のふるい掛けを並行しておこなった。なお、第2次調査時に課題としていたA5深掘区6層以下の調査については、ボーリング調査により6層以下には有機物を包含する泥炭層が堆積していないことが明らかとなったため調査をおこなわないこととした。

A1～A3メイントレンチでは、土層の分層がなされていなかったため、人工層位で掘り下げていった。掘削を進めると、A2のEL-175～185cmレベルから磁器が出土し、大規模な攪乱の存在を想定した。しかし、攪乱の決め手となる立ち上がりは認められず、セクションで表土の落ち込みが確認されたため、磁器は攪乱に伴うものではなく表土の落ち込みから出土したものと判断した。

A3・A4サブトレンチで土層堆積状況を検討した結果、4層を4層・4c層・4b層の3つに区分し、分層を確定した。分層後、メイントレンチでの掘削を分層発掘に切り替えた。掘削途中、A1の8層から9層にかけての漸移的な位置で遺存状態のよい鹿角(第50表368・372、図版10)が出土した。A1は一部9層の掘削に入り、A2では8層の上面を全面的に検出した。A3では7層の上層である4b層が残る状態で掘削を終了した。

A1サブトレンチの上側では10層(灰層)の土壌サンプルを採取した。サンプリングを進める過程で10層中から複数の押型文土器の出土を確認し、位置情報を記録して取り上げた。

その後、土層堆積状況の観察・記録作業をおこなった。また、上述の理由により斜面下方のA5・A6については今後調査を実施しないことを決定し、埋め戻した。並行してA1～A4の養生をおこない、調査を終了した。なお掘り上げた土壌は、残っていた第1次調査と第2次調査の土壌を含め、すべての土壌のふるい掛けを終えた。

(松本・茅原)

第3節 整理作業の方法

1. 基本方針

本報告の掲載資料あるいはその他の出土資料を将来、第三者が実見調査する場合に備えて、現場での発掘調査終了後におこなった整理作業の方法および、遺物や記録データ類の管理、保管状況について整理、記述する。

本報告では第2次・第3次調査をまとめて報告するが、遺物や記録データ類は調査次ごとに管理している。ただし、本報告に掲載した資料については両調査次をまとめ、掲載番号順で保管している。

調査後に土層の認識を変更した部分があるため、本報告では現場での記録を現在の層認識に対応させて表記を改めた。現場時の記録と調査後に認識を変更した層位との対応を第2表に示す。出土位置を記載した遺物ラベルや台帳など、手書きの記録の多くは現場段階の層位表記のままとなっている。(松本)

2. 層序と遺構の整理

層序と遺構は、トータルステーションおよびSfM法を用いた三次元測量により記録した。

トータルステーションでの記録情報は、現場段階で年度ごとに「光波ノート」と呼称する紙台帳に記録した。この台帳には、①記録対象、②年度ごとに付した「光波番号」と呼称する測定点の通し番号、③PC上へ出力した際に座標の表示形態を指定するための冠詞、④測定点に設置したミラーの高さを記入している。測定点の座標

第2表 現場記録と整理後の土層の対応

岩陰部		前庭部	
現場記録	整理後	現場記録	整理後
2y層	⑮層	礫直下	1層
2層,3層	第I層群	河床礫層	5～6層
4層,5層	第II層群	4層(A1・A2)	7～8層
6層,褐色土(ロ8)	第II層群⑦層	4上,4中,4層下	4層群
奥壁褐色土	⑳～㉑層	11層,現状最下層	9層
黒褐色土	1号炉	灰層,12層	10層
d層(ロ8)	第II層群b層		
b層,c層(イ8)	第II層群d層		

データはCADソフトT3Diを用いて、生データである「NA」から、データ編集用の「SD5」、作図用の「RS5」のファイル形式に変換した。RS5形式から出力した図をAdobe社Illustratorでデジタルトレースし、図化した。

写真測量で記録した土層断面・遺構については、画像データから三次元モデルを作成するPCソフトAgisoft社PhotoScanでオルソ画像を作成し、これをデジタルトレースして実測図を作成した。(松本)

3. 遺物の整理

トータルステーションで出土位置を記録したものを「点上げ遺物」、グリッド・層位一括で取り上げたもの、ふるい掛けにより回収したものを「一括遺物」として扱った。点上げ遺物は、現場段階で調査次ごとに岩陰部・前庭部緩斜面で各々1から通し番号を付し、紙台帳に記録した。

なお、資料の汚染を防ぐため、土器の一部を除き資料に直接注記をしていない。微細な遺物が多く、注記が困難であることも理由である。今後の調査においても同様の方針で整理を進め、方針を決めたうえで注記作業を実施する。

遺物は、調査次・グリッド・層位・取り上げ方法を記したラベルとともにチャック付ポリ袋に入れて収納している。以下では、遺物種別ごとに整理の方法を述べる。

(1) 土器

a) 第2次調査

すべての資料を水洗いし、土器内面に「調査次・グリッド・層位」を記入したシールを貼って注記とした。調査年度は居家以岩陰遺跡第2次調査を示す「IY2」を、グリッドは「ロ8」「A1」などグリッド名を、層位は各層と対応させたアラビア数字をそれぞれ記入した(第3表)。各層と注記における数字の対応は第3表のとおりである。この注記とは別に、点上げ遺物については土器内面に点上げ番号を記入したシールを貼った。第1次調査時にも同様の注記をしており、番号の重複を防ぐため、岩陰部の資料は500を、前庭部緩斜面の資料は200を、それぞれ点上げ番号に足した数を記入した。

接合後、掲載資料を抽出しながら分類を進めた。そのうち、同一のグリッド・層位・分類のものを一つの単位として、資料の点数と重量を集計し、資料の情報をExcelファイルに入力した。そのデータを集計元となる基礎データとした。

b) 第3次調査

すべての資料を水洗いした。時間の都合上、「調査次・グリッド・層位」の注記はおこなわず、点上げ資料のみ点上げ番号を記入したシールを貼って注記とした。ただし、第2次調査時のような前年度までの資料との重複を避けるための数字を足す処理はせずに、点上げ番号をそのまま記入している。全資料の注記をしていないため、掲載資料以外は接合作業をおこなっていない。以降に続く資料の管理方法および、集計・データ化の過程は、第2次調査と共通するため省略する。(松本)

第3表 第2次調査 注記番号と土層の対応

岩陰部			前庭部			前庭部		
注記 No.	ラベル表記	対応土層	注記 No.	ラベル表記	対応土層	注記 No.	ラベル表記	対応土層
1	100-105	第Ⅰ層群	1	表土	1層	23	灰層③下	10層
2	105-110		2	2層	2層	24	灰層左③	
3	110-115		3	2下～3層	2下～3層	25	灰層端左	
4	110-115 灰直上		4	3層	3層	26	灰層左①	
5	110-115 清掃土		5	4層 (A3～5)	4層	27	灰層左②	
6	115-120		6	4上層 (A3～5)	4層群	28	灰層右①	
7	3・4層	第Ⅰ～第Ⅱ層群	7	4中層 (A3～5)	5層群	29	灰層右②	
8	150-160	第Ⅱ層群	8	4b層 (A3～5)	4b層	30	灰層右③	
9	150-160 灰		9	4b～5a層 (A3～5)	4b～5a層	31	灰層廃土	
10	160-170		10	5a層	5a層	32	150～200	
11	160-170 灰・8②		11	5層	5層群	33	160～170	—
12	褐色土サブトレ		⑦層	12	6層, 最下層	6層	34	170～180
13	清掃土	—	13	河床礫層	5～6層	35	170より下	—
14	攪乱	—	14	現状最下層 (A3)	9層	36	180～190	—
d	d層	b層	15	4層, 獣骨層 (A1～2)	7～8層	37	180～200	—
			16	礫直下	1層	38	190～200	—
			17	灰層	10層	39	200～210	—
			18	灰層①上		40	200～215	—
			19	灰層②上		41	210～220	—
			20	灰層②中		42	220～230	—
			21	灰層②下		43	300～310	—
			22	灰層③上	44	清掃土, 廃土, 表採	—	

※ A1 などカッコ内の英数字はグリッドを示す。

(2) 石器

a) 第2次調査

すべての資料を水洗いした。石器を収納する袋に「調査年度・グリッド・層位」を記入したシールを貼って注記とした(第3表)。また、点上げ遺物は点上げ番号を記入したシールを貼った。注記の記入事項に関しては土器と同じである。

すべての出土資料について、掲載資料を抽出しながら器種・石材の分類を進めた。そののち、同一のグリッド・層位・分類のものを一つの単位として、資料の点数と重量を集計した。そのすべての情報を Excel ファイルに入力し、基礎データを作成した。

掲載資料の実測は、NPO 法人井草文化財研究所に委託した。

b) 第3次調査

すべての資料を水洗いした。時間の都合上、「調査年度・グリッド・層位」の注記はおこなわず、点上げ資料のみ点上げ番号を記入したシールを貼って注記した。土器と同様に数字を足す処理はせず、点上げ番号をそのまま記入している。

全出土資料の器種・石材を分類し、並行して掲載資料の抽出をおこなった。以降に続く資料の集計、管理などの整理過程は第2次調査と共通する。

(茅原・松本)

(3) 骨角器・貝製品

ハケ、筆、竹串などを用いて資料に付着した土や灰を除去した。

骨角器と貝製品それぞれに掲載番号を振った。器種分類ののち、部位同定、種同定をおこなった。並行して、径・厚み・重量を計測した。これらの基本情報と、観察によって得られた加工に関する所見を Excel に入力し、基礎データを作成した。

本報告では、すべての資料を実測図および写真によって掲載した。なお、実測は NPO 法人井草文化財研究所に委託した。

(石澤)

(4) 動物遺存体

ハケ、筆、竹串などを用いて資料に付着した土や灰を除去した。

そののち、部位および動物種の同定が可能な資料と、同定が不可能な資料に分類した。同定にあたっては、現生標本との比較をおこなった。なお、同定の基準・方法に関しては第6章第4節に詳述する。

出土年月日・出土位置・採取方法・動物種・部位・重量を基本情報として紙ラベルに記入し、資料とともに収納している。資料の基本情報は調査次ごとに Excel ファイルに入力してデータ化し、これを基礎データとして集計などの操作をおこなった。

同定対象資料は観察表にまとめて記載し、重要資料については写真掲載した。観察表掲載資料については岩陰部出土資料から通し番号を付した。資料は、掲載資料（同定対象資料）、同定不可ないし対象外の資料、未同定の資料に分けて収納している。

時間の制約から同定資料以外については破片数を計数していない。 (石澤)

(5) 人骨

取り上げ時に人骨と確認できたものは、トータルステーションによって出土位置の記録をおこなった。一部の細片や微小骨については、原位置を確認できず、グリッド・層位一括で取り上げたものがある。埋葬姿勢を保って出土した1号人骨は、SfM法による図化をおこなうため出土状況を写真撮影した後、各骨・部位ごとに出土位置を記録しながら取り上げをおこなった。

人骨資料には、各骨・部位に「人骨番号」と呼称する通し番号を調査次ごとに付している。この人骨番号は、出土位置の記録をおこなった資料については取り上げ時に、グリッド・層位一括で取り上げた資料については整理作業時に番号をあてた。

上記の人骨番号、点上げ番号と光波番号（トータルステーションで出土位置を記録したものに限る）、個体番号、調査段階の同定部位を入力した Excel ファイルを作成し、人骨資料と共に東京大学へ搬入した。東京大学では、同定作業と並行して整理作業段階での同定した部位を上記の Excel ファイルに追加記録した。該当データの返還をもって基礎整理を終了した。

出土状況の実測図は、SfM法によって作成したオルソ画像をデジタルトレースして作成した。

本報告刊行時点では、出土人骨に関わるデータ記録はすべて國學院大学で保管し、出土人骨は東京大学で保管している。 (茅原)

第4章 層序

第1節 岩陰部の層序

岩陰内の発掘調査は出土遺物の出土位置計測と土壌の篩がけを徹底しておこないながら慎重に進めているため、第3次調査の時点では発掘深度がまだ浅く、土層断面の観察・分層をおこなえる状況に達していなかった。以下の土層説明は、2017年度に実施した第4次調査において、第2セクションベルト（以下、第2SB）として残したロ・ハ・ニ8グリッド北西壁において分層・観察したものである（第14図）。第4次調査までの調査深度は、ロ8で約90cm、ハ8で約105cm、ニ6では岩盤の傾斜に沿って約30～60cmである。

1. 土層の大別区分

岩陰内における土層の堆積状態は複雑で単純な成層堆積を示していない。同層準でも開口部側と奥壁側とで色調や硬度、乾燥の度合いが異なる。また、岩陰が繰り返し利用される過程で人為的に堆積層が攪乱され再堆積した部分も多く見られる。早期後葉から前期にかけては岩陰内が埋葬地として利用されており、土壌の掘削に伴って下部の古い土層が掘り上げられ再堆積している部分も見られる。そのため開地遺跡のような基本土層を区分することは困難だが、遺跡形成過程を整理するための時間区分として、次のように層群を大別することとした。

第4次調査時点の所見として、岩陰部の土層は以下の層群に大別される。

【表層】 岩陰の現地表を覆うしまりのない土。現代遺物、未炭化の木片などを含む。

近世から現代の攪乱、不規則な掘り込みも含まれる。

【第Ⅰ層群】 黒褐色土

【第Ⅱ層群】 暗褐色灰質土

【落盤礫層】 巨岩を含む大小の落盤礫およびその風化礫が密集する層

これより下層は未調査だが、落盤礫層の下に堆積する灰白色の灰質土層を部分的に確認している。これ以下が第Ⅲ層群（仮称）として区分される見通しである。

2. 土層各説

ロ・ハ・ニ8グリッド北西壁の土層断面で観察された各層について、大別区分に沿って説明する。土の色調は第一合成株式会社製の土色計「SCR-1」を使用し、5回以上の計測値の平均を取った。「旧2層」など「旧」を付した層名は、第1次（2014年度）発掘調査報告書に記載したものを指す。

【表層】

①層 黒褐色土（7.5YR 2/2）

岩陰の現地表を覆う表層。しまりなく、現代遺物、未炭化の木片などを含む。

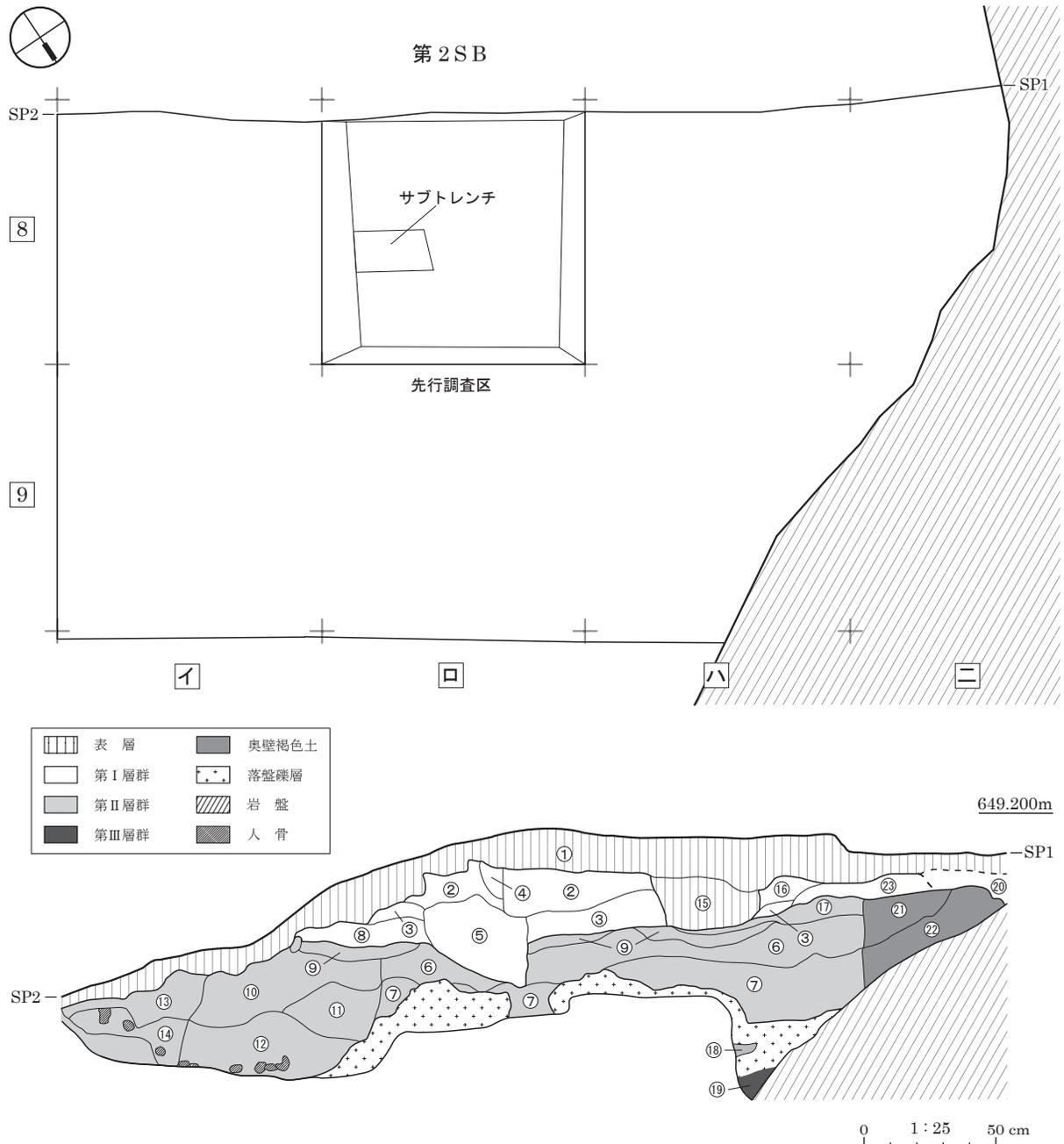
⑮層 黒褐色土層（7.5YR 2/2）

近世～現代の攪乱。大型の礫、炭化材、角礫を不規則に含むしまりのない土。②層、③層を掘り込む。

【第Ⅰ層群】

②層 黒褐色土（7.5YR 2/2）

表層①の直下に堆積する。旧2層。径2mm以下の黄色粒を多量に含み、色調は黄褐色を帯びる。乾燥すると硬くしまる。炭化物と焼土と思われるにぶい褐色土（10YR 4/6）を含む。粘性なし。黒褐色土、褐色土、焼土が不均一に混合している。7号焼土は②層中に混じる焼土を遺構と認識したもの。



第14図 岩陰部の調査範囲と層序

③層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

旧3層。角礫混じりの褐色土。②層と比較して黄色粒（径3mm以下）の含有量が少なく、色調は暗褐色。径3mm以下の砂礫を多量に含む。乾燥すると硬くしまる。粘性なし。炭化物が混じる。第I層群の最下部。

④層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

②層とはほぼ同質であるが、色調が比較的暗く、しまりは弱い。

⑤層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

大型の角礫を不規則かつ多量に含む、しまりのない土。③層土のブロックや⑥層土のブロックが不規則に混じる。③層、⑥層、⑨層を崩して掘り込まれた遺構の覆土か。

⑧層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

③層と層準は対応するが、細粒の灰を含み暗褐色を帯びる。第I層群最下部。

⑩層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

②層、③層に対応。層上部は黄色味が強く下部は暗い色調だが境界は不明瞭。しまりなし。

⑭層 黒色土 (7.5YR 1.7/1)

②層と層位レベルは同じ。まったくしまりがない。⑬層、⑭層、⑮層の境界は漸移的。

⑮層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

②層、③層に対応。黒褐色。⑬層より黒味が強い。しまりなし。大小の礫を不規則に含む。

【第Ⅱ層群】

⑥層 黒褐色灰質土 (10YR 3/2)

旧5層。全体に灰質で、灰白色の灰ブロックと5～10mm程度の炭化材を特徴的に含む。第2SBの土層の中で最も灰質が強い部分である。色調が斑状に変わり暗褐色もしくは白みの強い部分がある。ハ8グリッドの壁面では薄い層の堆積が見えるが、短時間の廃棄単位の重なりは見られず、全体に攪拌・再堆積した様相。黒曜石のチップ、骨片などが含まれる。

⑦層 黒褐色灰質土 (10YR 3/2)

落盤層(⑭層)直上に堆積する、灰質土と風化礫の混ざった層。落盤礫が風化したもの(風化礫)を多く含む。赤褐色が強い。

⑨層 黒褐色灰質土 (7.5YR 2/2)

旧4層。暗褐色を呈する灰質土。第Ⅱ層群の最上部。砂礫混じりであるが比較的均質。炭化物が混じる。

⑩層 黒褐色灰質土 (10YR 3/2)

旧5層の一部。大小の灰ブロック、円礫、角礫、炭化物が斑状に混じる灰質土。⑥層に近似。⑥層の掘り込みによる再堆積と考えられる。暗褐色の部分と白みの強い部分がある。全体に攪拌されたような層であり、重畳する薄層の廃棄単位は見えない。3号人骨埋葬土壌の覆土(c層)の一部である可能性がある。

⑰層 黒褐色灰質土 (10YR 3/2)

灰白色を帯びた灰質土。炭化物を含む。灰質の濃い部分の色調は2.5YR 3/1。

⑱層 黒褐色灰質土 (10YR 3/2)

灰白色の灰質土で純粋な灰層に近い。炭化物を含む。ハ8グリッドに設定したサブトレンチでは3～4cm程度の厚さが確認され、落盤層に挟在しているように見える。現時点ではほとんど未調査のため今後の調査で詳しく調べたい。

⑳層 黒色土 (7.5YR 1.7/1)

奥壁褐色土と仮称した灰質の褐色土。第Ⅱ層群に含まれ、旧4層、旧5層に対応する。奥壁を伝ってしみ出る雨水の影響で酸化作用が起こり、灰質の土壌が褐色に変化していると考えられる。

㉑層 黒色土 (7.5YR 1.7/1)

灰を含む褐色土。落石を多く含む。灰質であるが褐色が強い。奥壁側にいくほどしまりがなくなる。骨片を含む。

㉒層 黒褐色土 (7.5YR 3/2)

落盤起源の風化礫層。

【第Ⅱ層群に含まれる土壌覆土】

第Ⅱ層群中には埋葬人骨の遺存する土壌が密集して掘り込まれている。第2次・第3次調査では、発見順にそれらの覆土にアルファベットの層名を付した。以下の記述では、第2SBの土層断面にかかるものについては層番号を付したが、直接かからないものについては現場での層名のまま説明する。

b層 黒褐色土 (7.5YR 3/2)

1号人骨埋葬土壌の覆土。灰質土が斑状に堆積している。0.5～10mm程度の砂礫を含む。5mm程度の炭化物を含む。1～3mm程度の黄色ブロックを微量に含む。しまり強い(f層より弱い)。粘性ほとんどなし。

b下層 黒褐色土 (7.5YR 3/2)

1号人骨埋葬土壌の覆土。b層と比較して灰の含有量が高い。30～50mmの礫を多く含む。土壌最下部の覆

土は 7.5YR 3/2 から 10YR 3/2 の色調となる。

⑩層 黒褐色土 (7.5YR 3/2)

3号人骨埋葬土壌の覆土 c 層の上部。灰質の暗褐色土。灰白色 (7.5YR 3/2、5YR 4/2) の灰ブロックを斑状に含む。20～70mm 程の風化礫を含む。炭化物が混じる。色調は比較的均質。

⑪層 黒褐色土層 (7.5YR 2/2)

3号人骨埋葬土壌の覆土 c 層。3号人骨を直接覆う土である。灰質で色調は暗い。角礫が混ざり、灰白色の純灰の灰ブロックが斑状に混ざる。大粒の炭化材が目立つ。旧 5 層と落盤層の一部を掘り込んでいる。底面の色調は 10YR 3/2。

d 層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

4号人骨埋葬土壌の覆土。砂礫質でしまりはない。炭化物をほとんど含まない。旧 5 層を掘り込む。下部の色調は白味がかり、粒子細かく灰質が強くなる。砂礫・炭化物の混入は少ない。底面の色調は 10YR 2/3。

e 層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

8号・9号人骨埋葬土壌の覆土。2基の土壌の平面的範囲や切り合い関係が明瞭でないため、便宜的に一括して扱った。落盤層を掘り込んでいるため風化礫を多量に含む。灰、炭化物を含む。粘性なし。8号人骨の土壌底面は灰質で砂礫が混じる。色調は 7.5YR 2/2。9号人骨付近の土は赤みを帯びており、9号人骨を中心に赤褐色を帯びた土が堆積している。色調は 5YR 2/2 で、9号人骨覆土最下部は 5YR 2/1、土壌底面の色調は 7.5YR2/2 である。

f 層

2号人骨埋葬土壌の覆土人骨の覆土。赤褐色の風化礫 (3～30mm) を含む。5mm 程度の炭化物、0.5～10mm の灰ブロックを少量含む。b 層に比べ全体的に色調が赤みを帯びる。しまりは強く、粘性はない。f 層下部は落盤層上に薄く堆積し、細粒で灰質が強く、小礫・炭化物は含まない。d 層下部と類似する。

⑬層 黒褐色土 (7.5YR 2/2)

5号人骨埋葬土壌の覆土 g 層の上部。暗褐色の灰質土。角礫、炭化物を含む。粘性あり。他の土壌覆土に比べて、しまりが強い。3号人骨の土壌覆土を切り込んでいると考えられる。

⑭層 黒褐色土層 (7.5YR 2/2)

5号人骨埋葬土壌の覆土 g 層の下部。比較的均質な灰質土。暗褐色を帯び、⑬層に比べて色調が明るい。細かい灰ブロックや炭化物を含む。

h 層

10号人骨の覆土。⑯層、⑰層、⑱層を掘り込み、⑰層中に底面がある。層下部ほど風化礫を多く含む。骨片、炭化物を含む。見かけ上では奥壁側の褐色土 (7.5YR 2/2) と開口部側の灰質土 (10YR 3/2) に明瞭に二分されるが、これは岩壁を伝ってしみ出る雨水の影響で奥壁側の堆積土に酸化作用が起こり、本来灰質の土壌が褐色に変化したためと考えられる。

【第Ⅱ層群に含まれるその他の遺構覆土】

1号炉覆土 黒色土 (7.5YR 1.7/1)

第Ⅱ層群中に掘り込まれた炉と考えられる遺構の覆土。炭化物を多量に含む黒褐色土。黒曜石の小破片や骨片・焼骨片を含む。しまりが強く粘性はなし。硬化した黒褐色土を掘り抜くと色調が若干明るくなり、しまりが弱くなる。遺構端には風化礫や灰の塊、明るい褐色の粒子を含む部分がある。20mm 程の小礫を含む。

【第Ⅲ層群】(仮称)

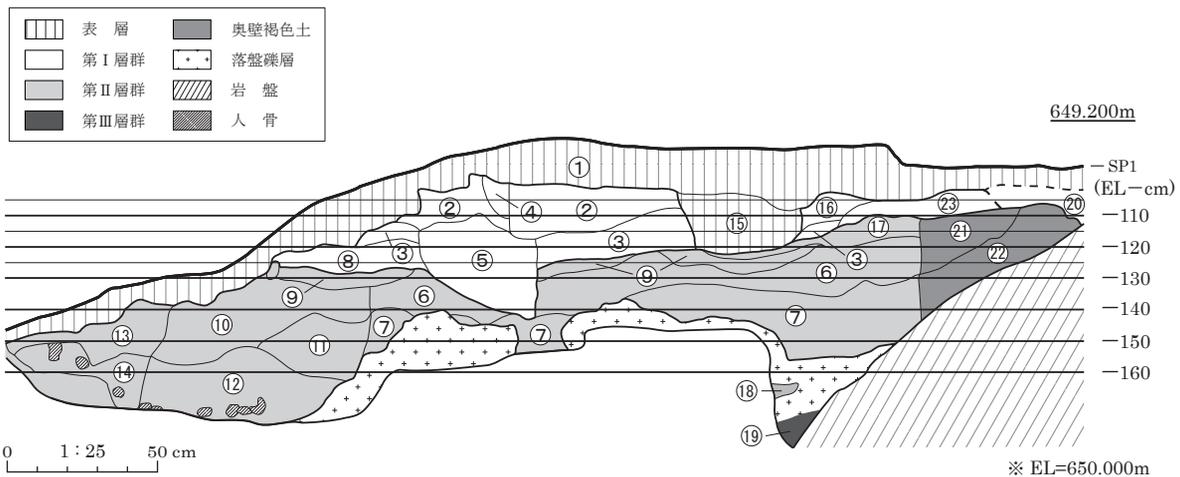
⑲層 黄褐色灰質土 (10YR 4/2)

落盤層 (⑳層) より下に堆積する、細粒かつ均質な灰白色の灰層。炭化物が混じる。 (谷口)

第4表 岩陰部における層序と人工層位の対応関係

年度	グリッド	人工層位	対応土層
IY2	ロ列	105～110	第I層群
		110～115	
		150～160	第II層群
		160～170	
	ハ列	105～110	第I層群
		110～115	
ニ列	105～110	第I層群～奥壁褐色土	
	110～115	奥壁褐色土	

年度	グリッド	人工層位	対応土層
IY3	ロ列	105～125	第II層群
		115～120	
		120～125	
	ハ列	105～120	第II層群
		105～125	
		110～115	
		115～120	
		120～125	



第15図 岩陰部における層序と人工層位の対応

3. 層序と人工層位の対応関係

第3次調査拡張区（イ8・9列）を除く部分で、5.0cm単位で設定した人工層位を用いて掘削した。層序と人工層位の対応関係は第4表、第15図のとおりである。人工層位は層序を平行に区切る単位であるため、複雑な堆積状況にある岩陰部の土層と完全に一致させることはできず、対応はすべて層群レベルとなる。第2次調査の人工層位の大半は第I層群に、第3次調査の人工層位は第II層群に帰属する。これは、第2次調査時は第II層群の検出を目指して第I層群を掘削し、第3次調査時に第II層群の掘り下げを開始したことによる。同じ層位値でも調査年度によって相当する区分が異なる場合があるが、第II層群の上面に場所による高低差があったためである。また、第2次調査におけるロ列の第II層群にあたる深い値は先行調査区のロ8グリッドのものである。

層序との対応は層群レベルにとどまるため、本報告での掲載資料の出土層位は人工層位をそのまま表記している。ただし、層位別の遺物集計では煩雑になるのを防ぐため、人工層位を層群にまとめて集計した。（松本）

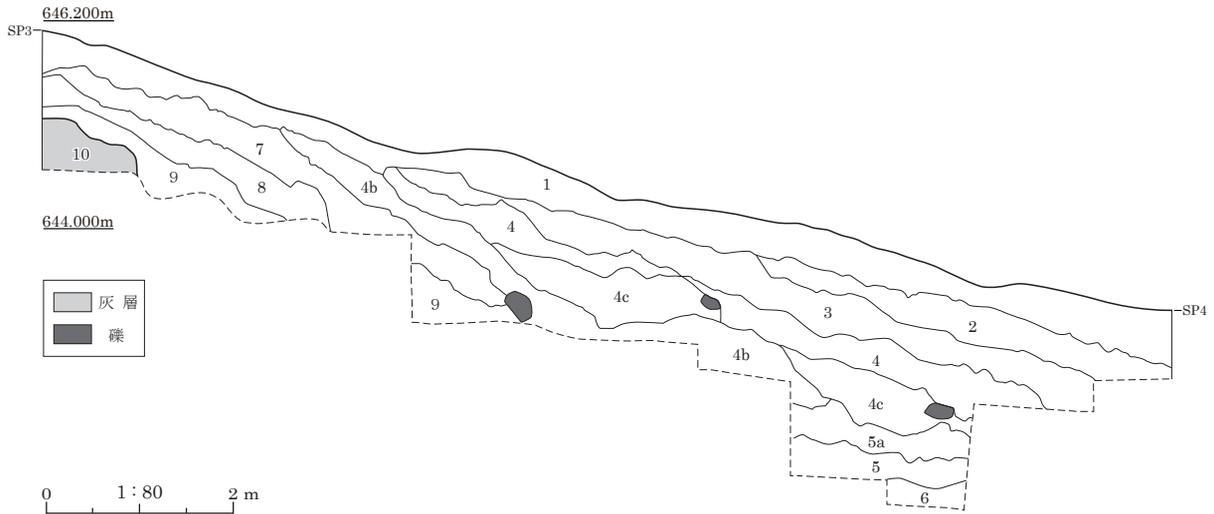
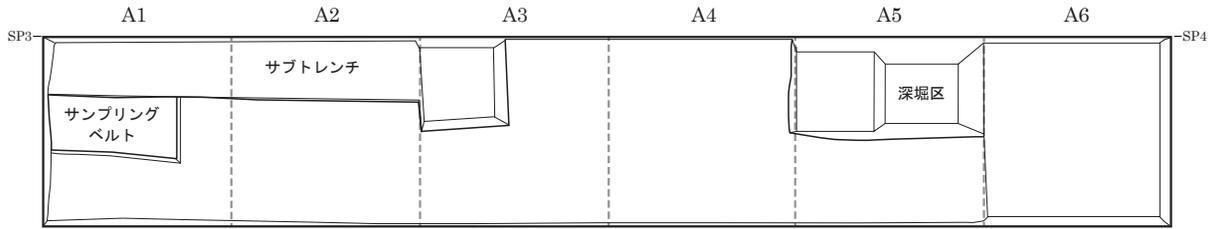
第2節 前庭部緩斜面の層序

前庭部緩斜面のAトレンチは2014年度に調査を開始し、その時点の分層記録と土層説明を当該年度の報告書に記載したが、発掘調査の進捗に伴い、あらためて分層と土層観察をおこない、層名を付け直した（第16図）。

1. 堆積土層の概要

前庭部緩斜面に堆積する土層は、岩陰部とは様相が大きく異なる。個々の土層の説明の前に、全体的な特徴を説明する。

約15°の地形の傾斜に沿った層序が見られる。表土（現代の耕作土）の下には粘土質で砂礫を多量に含む黒



第 16 図 前庭部緩斜面の調査範囲と層序

褐色土が堆積する。色調・含有粒子などから複数の層に分層されるが、各層の層厚は厚くおおむね数十 cm に及ぶ。大形の転石が所々に含まれ、全体に角礫を多量に含んでいる。さまざまな石質の礫が含まれており、上方露頭からの転石だけでなく深沢の谷筋の広範囲から水流によって運搬された砂礫が含まれるようである。なお、斜面上方の A1・A2 グリッド付近は、現代の耕作により地形が改変されており、上部の層が削平されて失われている。

黒褐色土の層群の下に人為的な廃棄堆積物である灰黄褐色の灰質土が堆積する。動物骨・炭化材などの有機物が多量に含まれる。

2. 土層各説

1層 表土 暗褐色土 (10YR 3/3)

現代の耕作土。しまり・粘性ともに弱い。

2層 黒褐色土 (10YR 3/2)

2～4mm の明赤褐色 (5YR 5/8) の粒子を 3% 程度含むようになり、2～5mm の炭化物も少量であるが全体に認められるようになる。10～30cm 大の角礫転石が包含されている。しまりがやや強く、粘性は弱い。色調は緩斜面上方ほど黒味が弱まり、粘性も弱くなる。

3層 黒褐色粘質土 (10YR 2/2)

3mm 程度の小礫を多く含み、2～10mm の明赤褐色 (5YR 5/8) の粒子を 7% 程度、3～7mm の亜角礫を 5% 程度含む。しまりは 2 層と同程度であるが、粘性が強くなる。2 層と整合。南側へ緩やかに傾斜している。

4層 暗褐色粘質土 (10YR 2/3)

1～5mm の明赤褐色・白色の粒子を 7% 程度、均一に含む。また 3mm 程度の小礫を含む。粘性・しまりは弱い。3 層と整合。

4b層 暗褐色粘質土 (10YR 3/3)

A3グリッドでは4層と同様の明赤褐色・白色粒子を含むが、混じり方は均一でない。一方、A5グリッドでは粒子はほとんど含まれない。5～20cmの亜円礫を多量に含む。わずかに30mm大の礫も含む。粘性・しまりは4層と同程度。黒褐色土(10YR 3/2)が部分的に混じる。

4c層 黒褐色砂礫質粘土 (10YR 3/2)

2～5mmの明赤褐色・白色の粒子を5%程度均一に含む。A5グリッドでは4層に比べ同粒子の量が増加するが、A3グリッドでは減少する。粘性は4層よりやや強く、しまりは同程度。4層とは不整合。

5層 黒褐色砂礫質土 (10YR 2/2)

2～10mmの明黄褐色・明赤褐色の粒子を含む。1mm未満の砂礫、10～20mmの亜円礫・角礫、30mm大の礫を含む。6層より粒子が多い。

5a層 黒褐色砂礫質粘土 (10YR 3/1)

10cm前後の角礫を含み、30mm程の礫も含まれる。5層に比べ色調暗く、また礫は全体的に少なくなる。また下層より砂粒が多くなり、粘土の含有量が増す。4b、4c層とは不整合で、5層と整合。

6層 黒褐色砂礫質粘土 (10YR 2/3)

2～5mmの灰黄色(10YR 4/2)・明褐色(7.5YR 5/8)・明黄褐色(10YR 6/8)粒子を含む。同粒子の含有量は5層に比べ少ない。また1～3mmの砂礫が混じる。

7層 にぶい黄褐色土 (10YR 4/3)

1～5mmの黄褐色・白色粒子、1～2mmの小礫をそれぞれ含む。10～20cmの角礫が散在し、炭化物を1%ほど含む。しまりは非常に強く、粘性はやや弱い。

8層 暗褐色粘質土 (10YR 3/3)

7層と同様の粒子を含むが、含有量は減少する(5%程度)。10cm程度の角礫が散在する。また炭化物を3%含み、動物骨の出土が目立つようになる。7層に比べしまりはやや弱くなり、粘性はやや強くなる。7層と整合。

9層 黒褐色粘質土 (10YR 2/2)

礫混じりの粘質土で、黄褐色粒子を1%ほど含む。8層同様に動物骨を多量に包含する。8層と比べ粘性は強い。8層と整合。

10層 灰黄褐色灰層 (10YR 6/2)

灰黄褐色を帯びた灰質土。5mm程の炭化物を2%含む。動物骨を顕著に含む。少量の明褐色の粒子が含まれる。粘性・しまりは9層に比べてやや弱い。9層とは不整合。(谷口)

3. 層序と人工層位の対応関係

主にサブトレンチにおいて、第1次調査より表土以下の土層を10cm単位で設定した人工層位を用いて掘削した。サブトレンチは、斜面上方と下方に分け(各1m)、調査をおこなった。そのため、第5表ではグリッドを上下に分けた単位で層序と人工層位を対応させている。なお、第2次・第3次調査での最下層である10層は人工層位で掘削していないため、表中には表記していない。

人工層位は、斜面地を平行に区切って設定した単位であり、大半は単一の層と一致しない。また、グリッド上・下の情報が失われている場合や、便宜的に10cm以上の単位で設定された人工層位もある。したがって、掲載資料の出土層位は人工層位をそのまま記載し、層位別の遺物集計においても人工層位と土層ごとの集計を分けておこなった。(松本)

第5表 前庭部緩斜面における層序と人工層位の対応関係

EL646.2m - (cm)	A 1		A 2		A 3		A 4		A 5		A 6	
	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下
10 ~ 20												
20 ~ 30												
30 ~ 40												
40 ~ 50												
50 ~ 60	7											
60 ~ 70												
70 ~ 80	7,8											
80 ~ 90		7										
90 ~ 100	7,8,9											
100 ~ 110		7,8										
110 ~ 120			7,4b									
120 ~ 130		7,8,9										
130 ~ 140			4b,7	4b								
140 ~ 150			4b,7,8									
150 ~ 160		8,9		3,4,4b								
160 ~ 170			7,8		3							
170 ~ 180												
180 ~ 190		9	7,8,9	4,4b,7	3,4							
190 ~ 200						3						
200 ~ 210			8,9									
210 ~ 220				4b,7	4,4b	3,4						
220 ~ 230							4					
230 ~ 240					3,4b,7							
240 ~ 250					4b,4c,7		3,4	3				
250 ~ 260						4,4c		2,3				
260 ~ 270							3,4,4c		2			
270 ~ 280					4b,7,11		4,4c	4,4c				
280 ~ 290												
290 ~ 300							4c	3,4,4c	2,3		2	
300 ~ 310					7,11	4b,4c						
310 ~ 320							4b,4c	4,4b,4c			2	
320 ~ 330								4,4b	3,4			
330 ~ 340							4b		2,3			
340 ~ 350								4,4b,4c	4			
350 ~ 360								4,4b	4,4c	3,4	2,3	2
360 ~ 370												
370 ~ 380								4b	4,4b,4c	4		
380 ~ 390												
390 ~ 400									4b,4c	4,4c	3,4	
400 ~ 410									4b,4c,5a			
410 ~ 420									4c,5a			
420 ~ 430										4c,5a		
430 ~ 440												
440 ~ 450									5a,5			
450 ~ 460										5a,5		
460 ~ 470											5	
470 ~ 480										5		
480 ~ 490											5,6	
490 ~ 500												
500 ~ 510											6	
510 ~ 520												

第5章 遺構

第1節 検出遺構の概要

第1次調査から第3次調査で検出した遺構は、集石1基、列石1基、焼土ブロック6基、灰ブロック6基、人骨6体である。これらはすべて岩陰部から検出したもので、第3次調査時点で前庭部緩斜面における遺構は未確認である。

岩陰部の第I層群では、焼土ブロック6基、灰ブロック3基を検出した(第17図)。これらはすべて第1次調査報告(谷口・朝倉編2017)で報告済であるが、4号～6号焼土ブロックおよび2号灰ブロックについては、第2次調査において自然科学分析を含む追加調査を実施したため、内容を更新して再掲載する。なお、第1次調査報告において7号焼土と報告した部分は検討を重ねた結果、遺構ではなく土層の一部と認識を改めた。

第II層群では、第2次・第3次調査において、集石1基、列石1基、灰ブロック4基、人骨6体を確認した(第18図)。現状では、先行して掘削を進めた8・9列に分布が集まっている。なお、人骨に関する調査成果は第8章で詳述する。

焼土ブロック・灰ブロックは土壌をサンプリングし、株式会社パレオ・ラボにAMS法による放射性炭素年代測定、炭化材・炭化種実の同定、土壌の形成起源の分析を委託した。分析結果の報告書は第7章に掲載する。出土した炭化種実の放射性炭素年代測定の結果である未校正の測定値を以下の遺構各説に記載するが、詳細については第7章第1節を参照されたい。

なお、遺構の出土遺物は第6章の各遺物の節において提示する。

(松本・南館)

第2節 遺構各説

1. 1号集石(第19図)

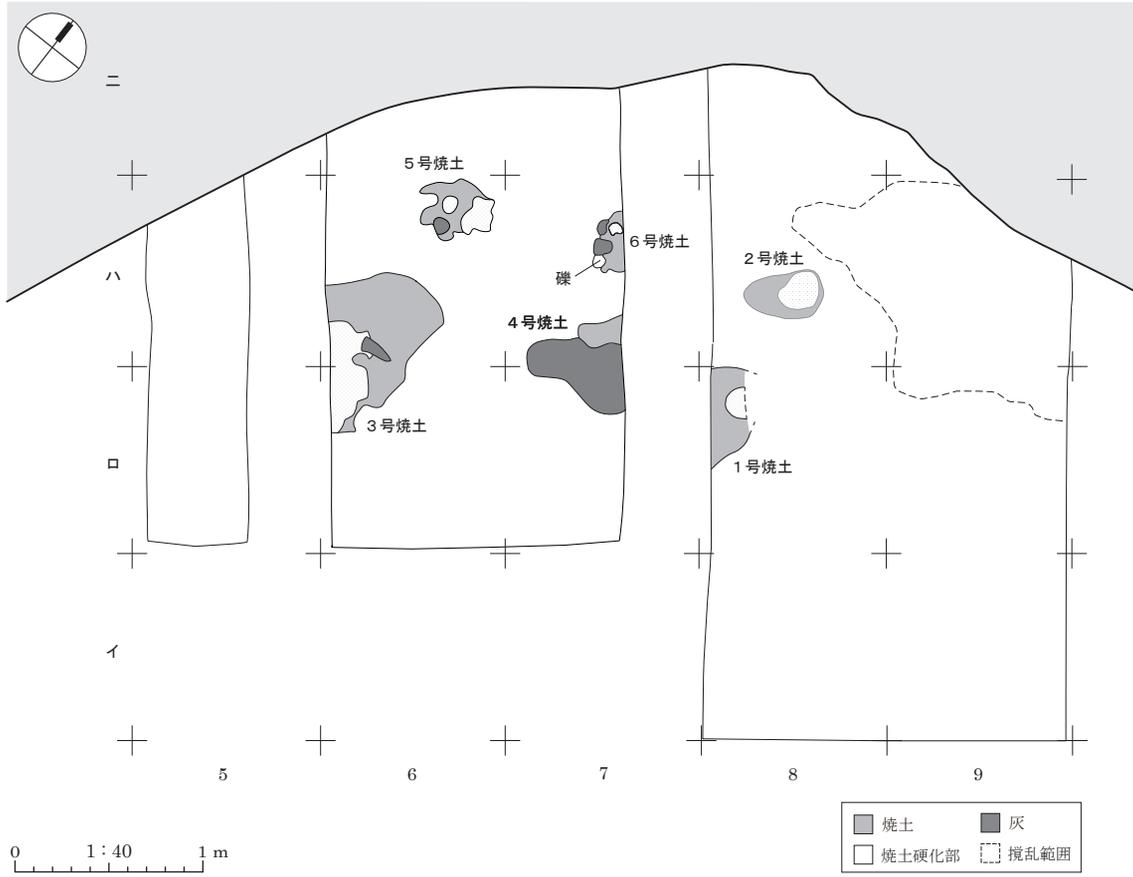
ハ8南側の第II層群中において長径約100cm、短径約80cm、深さ約20cmの範囲内に91点の礫が集積している。後世の攪乱(⑩層)と第1次調査でのロ8の先行深掘調査に伴い遺構の一部が破壊されているため、正確な範囲や形状は不明である。出土状況を復元できるよう礫に固有の番号を付し、写真測量による記録を3面に分けておこない、トータルステーションで出土位置を記録しながら礫を取り上げた。また、すべての礫を取り上げた後の面を土坑底面として、エレベーションの記録をおこなった。

礫は亜角礫が主体で、大小の剥落礫や風化礫、河原石、被熱礫が含まれる。礫の大きさや石材に斉一性はみられない。被熱礫が少数確認されているものの、本遺構に伴う焼土や炭化物は認められなかった。また、土坑底面から前期前半の繊維土器が3点出土している(第27図80～82)。

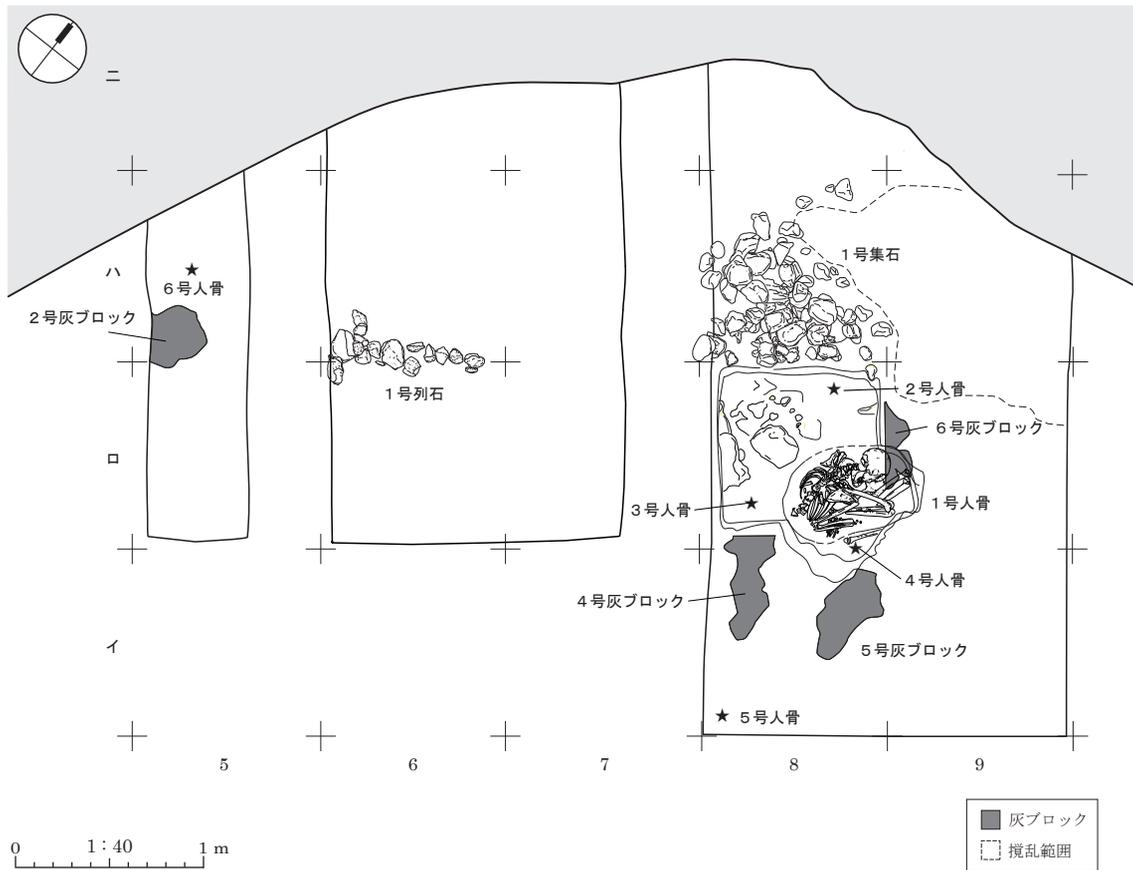
2. 1号列石(第20図)

ハ6の第II層群最上面において東西方向に礫が配置された列石である。出土状況が復元できるよう礫に固有の番号を付して、写真測量をおこなった。その後、トータルステーションで出土位置を記録しながら取り上げを進めた。

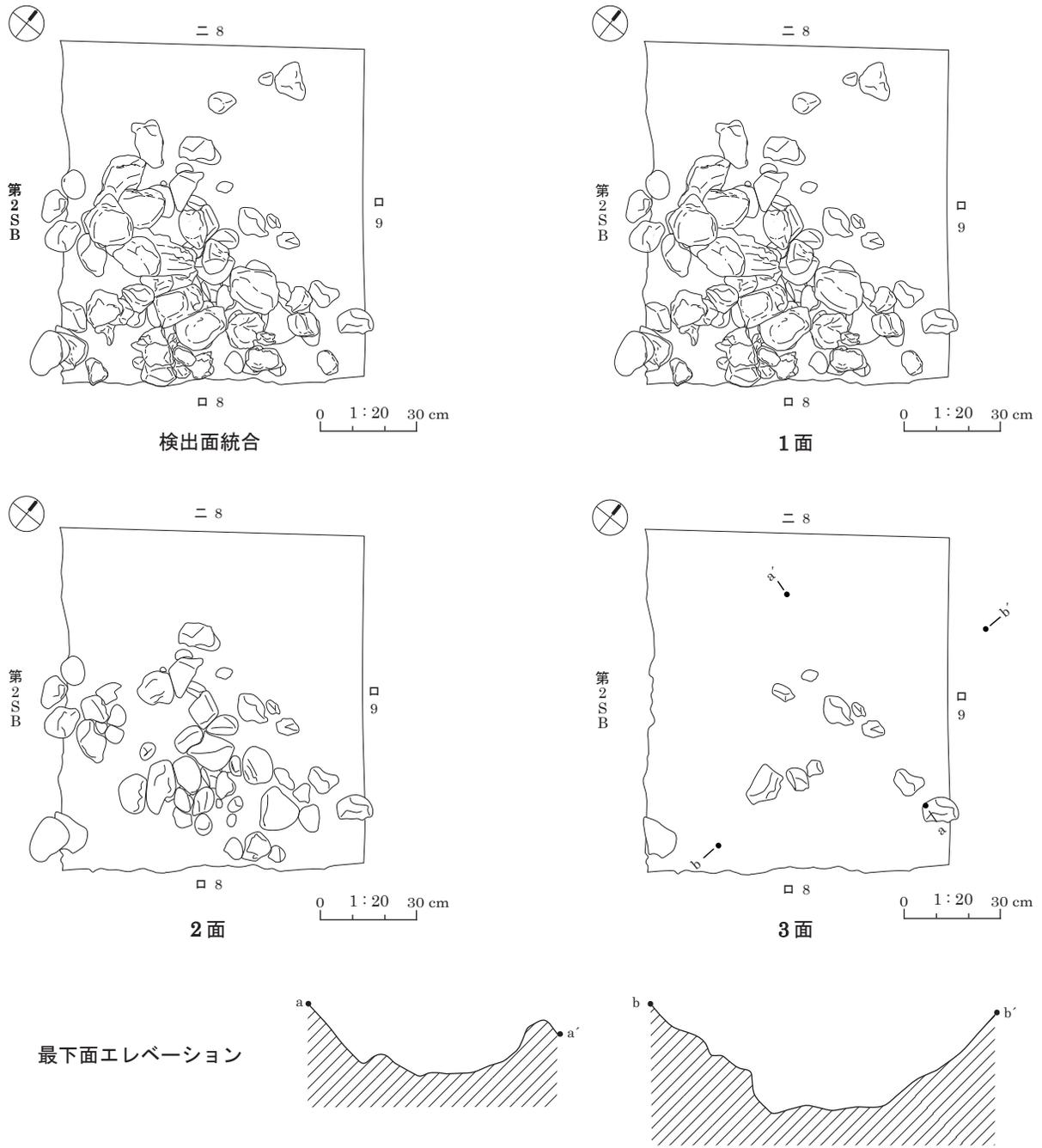
長軸約100cm、幅約40cm、高さ約8cmで、礫17点が東西方向に延びる。礫の主体は亜角礫であるが、剥落礫や河原石も含まれている。1号集石で認められた被熱礫はもたない。本遺構から遺物は出土しなかった。



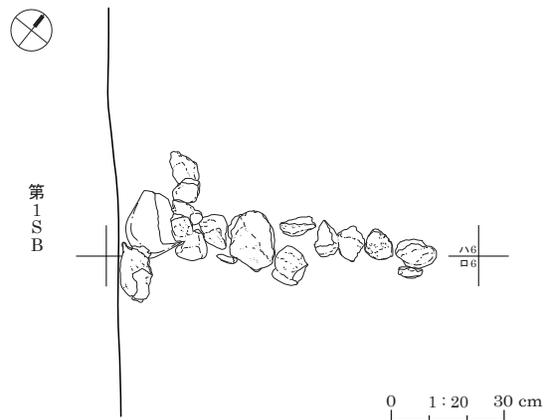
第17図 岩陰部遺構分布図（第I層群）



第18図 岩陰部遺構分布図（第II層群）



第19図 1号集石実測図



第20図 1号列石実測図

3. 焼土ブロック

被熱により赤色化した土が広がる範囲を焼土ブロックと認識した。焼土ブロックには一部に硬化が認められ、その部分を焼土硬化部として区別した。4号～6号焼土ブロックは、第1次調査では確認面で調査を終了していたため、第2次調査で土壌のサンプリングとその分析を実施した。

(1) 4号焼土ブロック

ロ7・ハ7の第I層群中に位置する。平面形状は不整形。一部第1SBにかかるため、規模は不明である。南東側に近接して灰が広がる。出土遺物はない。サンプリングから採取したオニグルミ炭化核の放射性炭素年代測定の測定値(測定コード:PLD-31485)は $5032 \pm 21BP$ で、縄文時代前期後葉に相当する年代である。

(2) 5号焼土ブロック

ハ6の第I層群中に位置する。平面形状は不整形で、規模は長軸約35cm×短軸約30cmである。部分的に硬化が認められ、一部に灰がブロック状に堆積している。岩陰内にあった樹木によって攪乱を受けている。第1次調査において、時期不明の土器1点、黒曜石の剥片1点、スパイラル状に割れた獣骨の四肢骨骨幹1点が出土している。サンプリングから採取したオニグルミ炭化核の放射性炭素年代測定の測定値(測定コード:PLD-31486)は $4606 \pm 21BP$ で、縄文時代中期初頭から前半に相当する年代である。

(3) 6号焼土ブロック

ハ7の第I層群中に位置する。約半分が第1SBにかかるため、平面形状・規模は不明である。第1次調査時に検出面で礫1点、第2次調査では焼土中にスパイラル状に割れた獣骨の四肢骨骨幹が出土した。サンプリングから採取したオニグルミ炭化核の放射性炭素年代の測定値は $5280 \pm 24BP$ で、縄文時代前期中葉から後葉に相当する年代である(測定コード:PLD-31487)。

4. 灰ブロック

純度の高い灰が塊状に堆積する部分を灰ブロックと捉えた。いずれも層厚が不均一で、平面形状も不整形である。また、炭化物を含むが焼土は伴わない。

(1) 2号灰ブロック

ロ5・ハ5の第I層群最下面から第II層群の上面に位置する。未調査区にかかるため、規模は不明。他の灰ブロックに比べて灰の純度が低いため、第II層群上面の盛り上がりの可能性がある。出土遺物は同定不可の獣骨数点のみである。サンプリングから採取したオニグルミ炭化核の放射性炭素年代測定から得られた測定値は、縄文時代前期中葉に相当する $5585 \pm 24BP$ である(測定コード:PLD-34255)。

(2) 4号灰ブロック

イ8の第II層群中、5号灰ブロックに近接する位置にある。規模は長軸約50cm×短軸約20cm。出土遺物は同定不可の獣骨数点のみである。年代測定は実施していない。

(3) 5号灰ブロック

イ8の第II層群中、4号灰ブロックに近接する位置にある。規模は長軸約50cm×短軸約40cmである。剥片および同定不可の獣骨数点が出土した。サンプリングから採取した広葉樹炭化材の放射性炭素年代の結果は、縄文時代前期前葉から中葉にあたる $5655 \pm 26BP$ である(測定コード:PLD-34256)。

(4) 6号灰ブロック

ロ9の第II層群中に位置する。長軸約45cm×短軸約15cmである。イノシシの下顎骨が出土した。早期中葉の沈線文土器1点が出土しているが、オニグルミ炭化核の放射性炭素年代測定では、 $5505 \pm 24BP$ と前期中葉に相当する測定値が得られている(測定コード:PLD-34257)。年代測定の結果と合わせ、第II層群からは前期前半の繊維土器が多く出土していることから、沈線文土器は混入したものと判断できる。(茅原・松本)

第6章 遺物

第1節 土器

1. 縄文土器の分類と時期区分

(1) 分類の方針

第1次から第3次調査で出土した土器には、縄文時代草創期・早期・前期・中期・後期・晩期および弥生時代にわたるさまざまな型式が含まれている。居家以岩陰がさまざまな時期に繰り返し利用されてきたことを示すものであり、多時期にわたる複合遺跡であることが出土土器から明らかとなっている。出土土器の型式分類と集計は、遺跡形成の考古代を把握するために不可欠の基礎的分析となるため、正確な型式同定と出土量の客観的把握をおこなう必要がある。

居家以岩陰遺跡における土器型式編年をいつおこなうべきかを検討中である。第3次調査までに3回の発掘調査を実施し、縄文時代早期・前期の土器群の出土量が多く多様な型式を含む傾向が把握されたが、最も出土量の多い縄文時代早期の遺物包含層は発掘に着手したばかりであり、本格的な発掘調査にはまだ何年かかる見込みである。その点を考慮し、縄文土器の型式分類、とくに早期の土器群の詳細な型式分類は、遺物包含層の発掘調査が進展し、土器群の全体的様相が把握された段階であらためておこなう方針としたい。本報告では大別的な分類に留め、詳細な型式同定は今後の検討課題として保留することとする。

詳細な型式分類を当面保留するもう一つの理由は、土器群の様相に強い地域性が認められ、既存の型式編年では分類・同定できない類を含んでいることである。早期・前期の土器群の全体的傾向として、関東地方南部の平野部に共通する型式は比較的少なく、長野県の佐久・上田・長野盆地に共通する土器群や、上信越山地周辺に分布するとみられる地域性の強い土器群が目立っている。前期後半の諸磯式土器や後期前葉の堀之内式土器などは関東地方の平野部に共通するが、前期初頭の塚田式、前期中葉の有尾式、中期後半の郷土式、晩期前半の佐野式、晩期後半の氷式などのように、中部高地を分布圏とする土器群が多数を占めている。

早期の土器群にも現時点で型式同定の難しいタイプが多い。早期前葉の編年指標は関東地方では撚糸文系土器であるが、当遺跡には撚糸文系の第Ⅰ様式～第Ⅴ様式の諸型式はなく、表裏縄文土器・回転縄文土器・無文土器が該期の主体的土器群となるようである。早期中葉の沈線文土器も出土量が比較的多いが、典型的な三戸式・田戸下層式・田戸上層式はきわめて少なく、中部高地系とされる土器群(橋本 2010)に類似するものが主体的である。当面は遺物包含層の分層発掘を進め、共時性をもつ土器群を把握し、層位的関係によって土器群の相対年代を確認する作業を進めることとしたい。

このような土器型式の地域性は、本遺跡に活動痕跡を残した人間集団の地域性や行動領域を考える上で重要な情報となるものである。今後さらに詳しく土器群の型式学的検討と現場での層位的検討を進めるとともに、胎土の特徴による土器群の分類と胎土分析などを通じた産地推定も計画的におこなっていききたい。

(2) 縄文土器の分類と時期区分

本報告書では、出土した縄文土器の分類、および縄文時代の時期区分を第6表のようにおこなった。分類・集計結果を説明する前に、時期区分と分類についての基本的な考えを示しておく。

縄文時代の時期区分は、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期区分を用いる。「草創期」については、時代区分と実年代をめぐる複雑な議論があるが、1960年代以降の土器・石器研究で「草創期」の用語と時期区分が広く定着している事情を考慮して、その時期呼称を採用する(谷口・朝倉編 2017 参照)。隆起線文系以前を1期、隆起線文系土器を2期、隆起線文系に後続する土器群を3a期、室谷下層式などの多縄文系土器を3b

第6表 縄文土器の分類と時期区分

時期		分類
草創期	2期	隆起線文
	3期	多縄文
早期	前葉	表裏縄文 / 回転縄文 / 撚糸文
	中葉	押型文 / 沈線文 / 無文
	後葉	条痕文 (子母口式, 野島式, 鶴ガ島台式, 茅山下層式)
	末葉	絡条体圧痕文
早期末～前期初頭		塚田式・中道式
前期	前半	羽状縄文 (関山式, 黒浜式, 有尾式), 繊維土器
	後半	諸磯 a 式, 諸磯 b 式, 諸磯 c 式 / 十三菩提式
中期	前半	五領ヶ台式 / 新崎式 / 勝坂式 / 阿玉台式 / 焼町土器
	後半	郷土式 / 加曾利 E 式
後期	前葉	堀之内 1 式, 堀之内 2 式
晩期	前半	佐野式
	後半	浮線網状文 (女鳥羽川式, 氷式) / 千網式 / 大洞 A' 式

期とする。なお、2000年代以降、草創期の土器群の年代学的研究が進んだ結果、日本列島における土器の起源が16000年前以前にさかのぼること、「草創期」が実年代で4000年以上の長さを持ち地質年代で更新世終末期に位置づけられる事実が判明した。このような年代的事実を受けて筆者は、旧石器時代と縄文時代との時代区分論および縄文文化起源論の見直しをおこない、「草創期」を縄文時代から切り離して「旧石器－縄文移行期」という新たな捉え方を提起した(谷口 2011)。土器出現という一つの画期的事象で前後の時代を区分する従来の考え方に代えて、4000年以上をかけた長い文化変化の過程を考察しようとする立場をとるものである。居家以岩

陰遺跡の調査研究もその考え方に基づくものであるが、縄文土器の分類上は「草創期」の語を用いる。

早期は実年代で約4000年間にわたる継続期間をもつため、土器型式編年に基づく時期細別を用いる。本報告書では、撚糸文土器第I様式(井草I式)の成立以降を早期とする時期区分(小林 1967)を採り、早期前葉・中葉・後葉・末葉の4時期細分を用いる。前葉は関東地方の撚糸文土器の時期、中葉は押型文土器・貝殻沈線文土器の時期、後葉は関東地方の条痕文土器(茅山式土器)の時期、末葉は上ノ山式・入海式以後の東海系条痕文土器に併行する時期とする。

前期は前半・後半に大きく時期区分し、回転縄文施文の繊維土器が卓越する時期を前期前半、諸磯式土器の時期を前期後半とする。前期前半では黒浜式・有尾式が比較的多く、関山式も少量出土している。関山式以前の土器群として、長野県北信・東信地域に分布する中道式・塚田式に類似する一群が出土しており、早期末～前期初頭として時期区分した。

中期以降の土器群は多時期の多様な型式が出土しているが、出土量は早期・前期に比べて少ない。中期は五領ヶ台式・勝坂式・阿玉台式に併行する前半と、加曾利E式・曾利式・郷土式を含む後半に時期区分する。中期前半の土器群には五領ヶ台式・新崎式類似・阿玉台式・焼町土器などが出土している。十三菩提式と五領ヶ台式の間に位置づけられる土器群が少量出土しているが、破片による分類が難しいため、便宜的に前期末～中期初頭とする。

後期は前葉・中葉・後葉の3期に時期区分するが、同定できる土器群は今のところ堀之内式並行の前葉のみである。晩期は大洞C2式以前の佐野式などを晩期前半、女鳥羽川式・氷式などの浮線網状文土器を晩期後半に時期区分する。無文または縄文のみの破片で型式不明のものは、便宜的に後期・晩期(後晩期)とする。

(3) 出土土器群の概況

第1次～第3次調査の出土土器の型式分類と集計結果によると、縄文時代では早期・前期の出土量が比較的多く、当遺跡の利用頻度が高かったことを示している。

早期は遺物包含層の本格的調査をまだおこなっていない段階だが、早期前葉の表裏縄文土器・回転縄文土器、早期中葉の押型文土器・沈線文土器、早期後葉の条痕文土器、絡条体圧痕文土器など、すでに多様な型式が出土している。早期中葉の沈線文土器、早期後葉の条痕文土器の出土量が第3次調査時点では最も多い。前期の土器群では、前期初頭の塚田式、前期前半の有尾式・黒浜式を含む羽状縄文系の繊維土器、前期後半の諸磯式土器の出土量が多い。

中期以降の土器群は全体的に出土量が少ないが、多時期にわたる多様な型式が含まれている。晩期後半の浮線網状文土器が比較的多くまとまっている。(谷口)

2. 土器の分類・集計

第2次・第3次調査では2,858点の土器が出土した。内訳は、縄文土器2,352点、弥生土器83点、土師器36点、土師質土器35点、陶磁器43点、分類不能の細片309点である。分類不能のものを除いて集計すると、縄文土器が90%以上を占める（第21図左）。

縄文土器の時期別の内訳は、草創期3点、早期564点、前期515点、中期83点、後期109点、晩期95点、後晩期の無文部166点、時期不明の細片817点である。時期不明を除いた各時期の割合は第21図右のとおりとなる。早期、前期がそれぞれ約35%と出土土器の多くを占め、中期以降は各時期10%未満である。

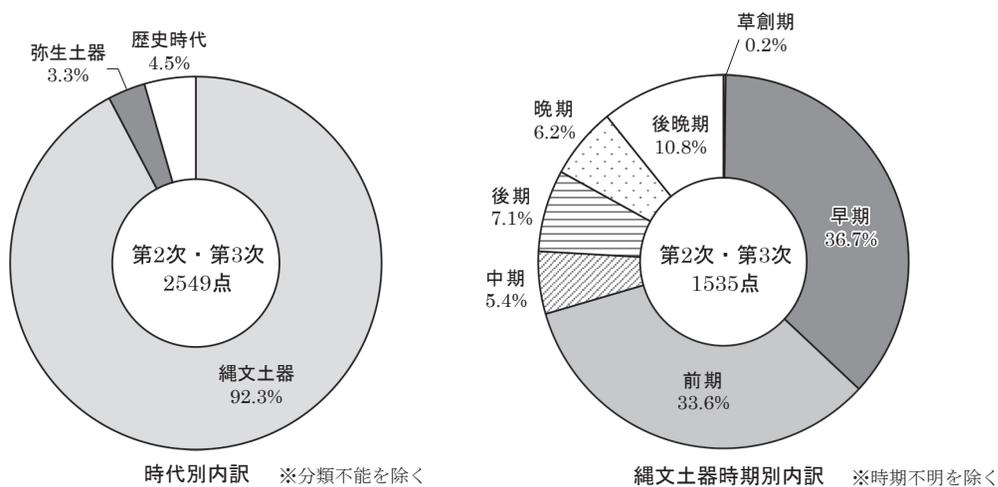
弥生時代以降はいずれも出土量が少ない。弥生土器は前期3点、中期6点、後期19点、時期不明55点である。古墳時代以降では土師器36点、土師質土器35点、陶磁器43点となっている。土師器・土師質土器・陶磁器はいずれも細片で、まとまった出土傾向をもたない。そのため、本報告では具体的な分類を実施していない。

(1) 岩陰部

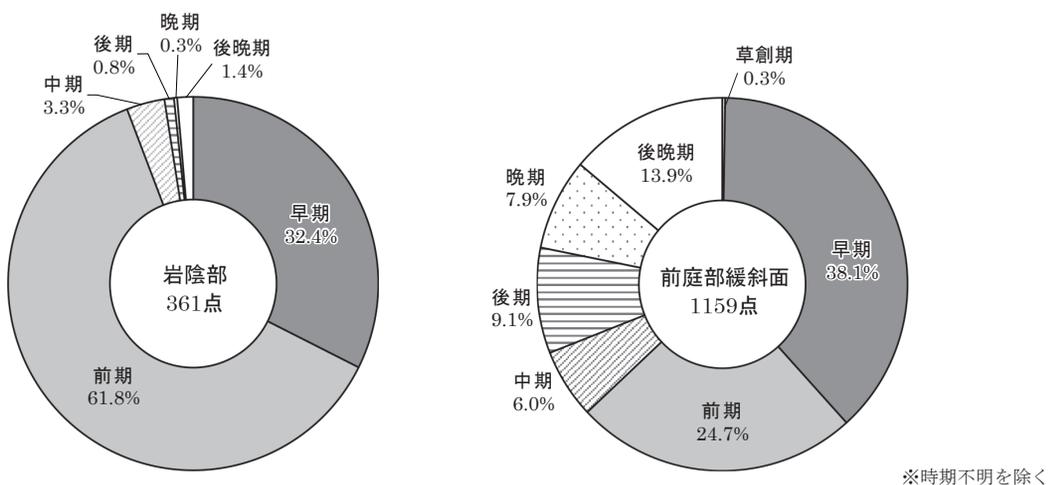
466点の土器が出土した。縄文土器442点、弥生土器2点、土師器3点、陶磁器9点、分類不能の細片10点である。これらのうち、縄文土器118点を図示した（第23図～第29図）。それらの観察結果を第11表～第15表に示す。

岩陰部における縄文土器の時期別の内訳をみると、早期約30%、前期約60%と両時期が大半で、中期以降はそれぞれ5%未満と出土量が少ない（第22図左）。

層位ごとに出土土器の傾向を整理する。表層から第I層群は、早期後葉条痕文土器が23点、前期前半羽状縄文土器が78点、前期後半諸磯式土器が37点と早期後葉から前期後半にかけての土器がややまとまり、縄文土



第21図 第2次・第3次調査 出土土器の分類集計



第22図 調査区別 縄文土器の時期別内訳

器が卓越するものの、弥生土器や陶磁器もみられるなど多時期が混在する（第7表）。ただし、弥生時代以降の土器は人工層位で掘削した部分からの出土が大半で、これらは表層の落込みに含まれる可能性が高い。下層の第II層群からは、条痕文土器4点、羽状縄文系を含む繊維土器49点と早期後葉から前期前半の土器が多く出土している（第8表）。第I層群から多く出土した諸磯式は6点と少なく、前期後半以後はみられない。先行調査した口8のEL-150～170cmやb層など第II層群の深い部分では前期土器は含まれず、早期前葉の表裏縄文土器や早期中葉の沈線文土器、早期後葉の条痕文系子母口式土器が目立っている。第II層群中においても、早期後葉から前期前半の土器が混在する上層と、前期前半がみられなくなる下層で傾向差が認められる。

（2）前庭部緩斜面

2,358点の土器が出土した。縄文土器1,883点、弥生土器80点、土師器33点、土師質土器34点、陶磁器33点である。これらのうち、縄文土器266点、弥生土器14点を図示した（第30図～第43図）。それらの観察結果を第16表～第26表に示す。

前庭部緩斜面における縄文土器の時期別内訳は第22図右のとおりである。早期が約40%と最多で、前期が次いで約25%である。中期以降はそれぞれ5～10%程度あるが、後晩期と分類した無文の破片が15%近くあるため、後期および晩期は実際には10%以上の割合を占めるものと考えられる。岩陰部に比べ、早期・前期以外の時期の土器が多く確認されている。

層位ごとに出土傾向を整理する。表層から3層は縄文後期から晩期にかけての土器が169点とまとまっており、4層・4c層・4b層（以下、4層群）では中期土器が55点と出土数が多い（第9表）。4層群のなかでもより下層であるA2の4b層においては、中期前半以前の土器に限られている。表層から4層にかけては、縄文早期から中世以降にいたる多時期の土器が含まれる一方、上層から下層への時間的変化も確認できる。

5層および6層はサブトレンチのみの調査のためサンプル数は限定されるが、早期後葉条痕文土器、前期前半繊維土器が比較的多い（第10表）。A5の5a層では草創期の多縄文土器が1点出土している。7層から8層にかけては早期土器が166点と出土数の大半を占め、その中心はA1出土の早期中葉沈線文土器110点である。8層から9層は第3次調査で掘削を始めたばかりで数量は少ないが、早期中葉の押型文土器・沈線文土器、早期後葉の条痕文土器の出土が目立っている。サブトレンチでのサンプリング調査に伴って確認された10層（灰層）の出土土器は、押型文土器を中心とした早期中葉の土器群にほぼ限られている。5層以下の層からは縄文前期以前の土器がまとまって出土し、とくに8層以下では他時期の混在も少なく、早期の土器が純粹に包含される状況である。

人工層位についても、それぞれを層序に対応させてみると以上の内容と矛盾のない出土傾向を追認できる。なお、人工層位と層序の対応関係については第4章第1節に記した。

（3）表面採集

ここでは、調査区周辺で表面採集した資料のほか、発掘段階ないし整理段階に出土位置の記録が失われてしまった資料についても扱う。それらは、縄文土器27点、弥生土器1点、土師質土器1点、陶磁器1点、分類不能の細片4点の計34点である。このうち、縄文土器4点について図示した（第44図）。それらの観察結果を第27表に示す。（松本）

第7表 岩陰部 土器分類集計表(表層～第I層群)

時期 / 分類	表層 (①層)				表層 (⑫層)				第I層群								EL - 105 ~ 115													
	イ8	イ9	ロ9	ハ5	ハ9	ニ9	ハ8	ハ9	イ8	イ9	ロ8	ロ9	ハ8	ハ9	ニ8	ニ9	ロ5	ロ6	ロ7	ハ5	ハ6	ハ7	ハ8	ニ5	ニ6	ニ7	ニ8			
草創期																														
前期	前葉	燃糸文		1																										
		表裏縄文																												
		回転縄文																								1				
	中葉	押型文																												
		沈線文 未細別	1						1	1									1						1		2	3		
		無文 (口縁部)																												
		無文 (胴部)	1																									1		
	後葉	糸痕文	子母口式																											
			野島式																										2	1
			鵜ガ島台式												2															
未細別					1		1		1	4			3														1	2		
回転縄文																														
型式不明																														
早期末～前期初頭										1		1															1			
前期後半	羽状縄文	関山II式							2																					
		黒浜式																												
		有尾式	2		2	1		1	1																		1	1		
	繊維土器 未細別	1	1	3		3	1	1	7	2	2		10	2	2		1	1	2		1	2				1	2	1		
	諸磯式	諸磯 a 式			2		1		1	1																		1		
		諸磯 b 式																												
		諸磯 c 式																												
		細別不可								2		1		3													1	1		
	十三菩提式								1	2																	1			
	型式不明			1																										
型式不明																														
前期末～中期初頭	1		3		1		1																			1				
中期前半	五領ヶ台式		1	2			1		1		1						1													
	勝坂式																													
	阿玉台式													1																
	型式不明																													
中期後半	焼町土器													1																
	壺之内式														1															
後期前半	型式不明																										1			
	佐野式																										1			
後期後半	浮線網状文																													
	精製																													
後晩期	細別不可			2																										
	時期不明	1																												
弥生後期	樽式			1																										
古墳以降	時期不明																													
	土師器																													
中世以降	陶磁器			1																										
	分類不能																													

※ 層位の EL - 105 ~ 115 は EL(650.000m) より設定した人工層位である。人工層位の詳細は第3章第1節および第4章第1節を参照。

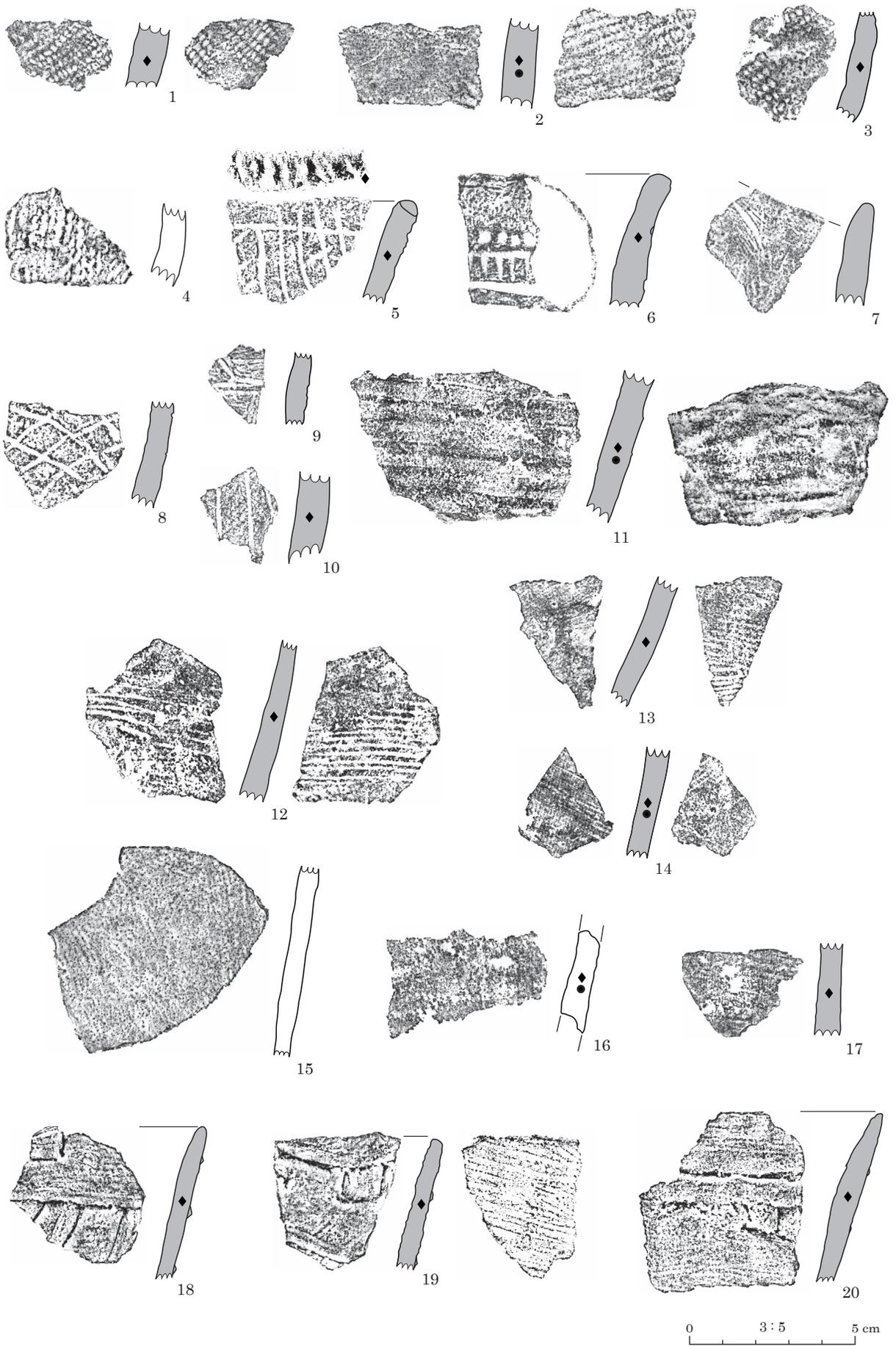
第9表 前庭部緩斜面 土器分類集計表 (1層~4層)

時期 / 分類			1層						2層				2~3層		3層				4層,4c層,4b層				4b層			
			A1	A2	A3	A4	A5	A6	A3	A4	A5	A6	A4	A6	A3	A4	A5	A6	A3	A4	A5	A6	A2			
草創期	2期	隆起線文																								
	3期	多繩文																								
早期	前葉	撚糸文																								
		表裏繩文																								
		回轉繩文	1																							
	中葉	押型文																								
		沈線文 未細別	10			1			2	1	1						2						4		1	
		型式不明		1		1											1		1				5			
	後葉	条痕文 未細別		2	1	1									1						2	1		1		
		早期末 絡条体圧痕文																			2				1	
		型式不明																								
	早期末~前期初頭																						5		2	
前期	前半	関山II式															1				1					
		有尾式																						1		
		纖維土器 未細別	4	1		3		2	6	1		1				3		5	2	9	19	38	1		7	
	後半	諸磯式	諸磯a式				2		1		1									5	4	4				
			諸磯b式												1				2	1	5	10	16			4
			諸磯c式																1	2	5	9	1			
		細別不可					1	5		1			1		1						2	7	1			
		十三善提式						1														1	3	1		
		型式不明		2																		1				
	前期末~中期初頭															1						4	8	1	1	
中期	前半	五領ヶ台式					1														2	5			1	
		阿玉台式																		1	1					
		勝坂式																				1			1	
		新崎式																				1	1	1		
		型式不明													1			1				1	1	1		
	後半	郷土式							1	1								1	3	3	5	6				
		加曾利E式																					1			
		新巻類型																					1			
		型式不明						1														2	1	1		
			型式不明		1				1														5	10	1	
後期	前半	堀之内1式																		1	3					
		堀之内2式							2		1			1			6		11	39	3	1				
		細別不可					6										1		5	7	1					
		型式不明		1							1							3			3	1				
晚期	後半	浮線網状文																								
		女鳥羽川式									1		1		2		2								1	
		氷式				1					2		5		4				3		1			2		
		細別不可				4						1	4						3	5				1		
		千網式											1						3	2						
		大洞A'式										1														
	型式不明				2					1	6	13	3				6	1				1				
後晚期		精製									1	2	1									1	3	1		
		粗製																				1	3	1		
		細別不可						1	1	18	4	6	6						21	7		51	1	17		
		時期不明	8	9	8	36	1	37	16	8	7	20		2	8	3	9	25	21	162	123	13	13			
弥生	前期	沖II式併行										1								2						
		竜見町式						1				2														
	中期	型式不明						1												2						
		樽式									5	9		2				1	1							
	型式不明		1		1	2	6			3	8		9			1	25			1						
古墳以降	中世以降	土師器				2	39		1	2	19		2				1	20				2	1			
		土師質土器											2										1			
		陶磁器	1			1	2	5																		
	分類不能	8			1	11		1	7	14	9					2	20			6	3	35	8			

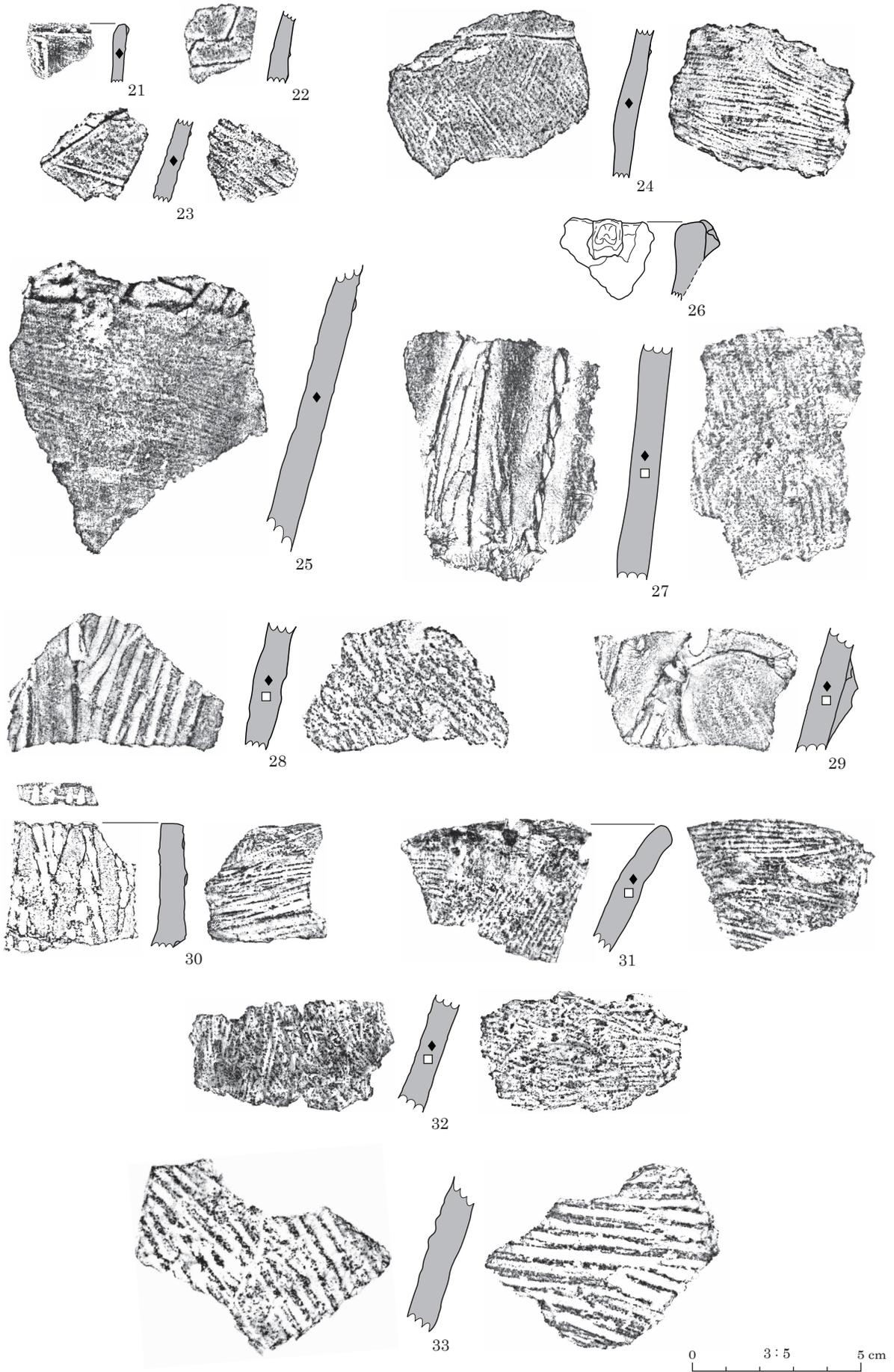
第10表 前庭部緩斜面 土器分類集計表 (5層~10層・人工層位)

時期 / 分類		5a層	5層	6層	7層	7~8層		8層	8~9層	9層		10層	120 ~ 130	150 ~ 180	130 ~ 160	160 ~ 190	190 ~ 220	220 ~ 230	180 ~ 190	220 ~ 250	290 ~ 320																
		A5	A5	A5	A2	A1	A2	A1	A1	A1	A3	A1	A1	A2				A3																			
縄文	草創期	2期	隆起線文																				1														
		3期	多縄文																				1														
	前葉	擦糸文					1					1			1																						
		表裏縄文					2																														
		回転縄文									1		1		1																						
	中葉	押型文	楕円文				10		1	1	3		14	4	6			1																			
			山形文				1						5	4																							
			格子目文										2	3																							
		楕円文+籐状文					2								1																						
	早葉	沈線文 未細別			2	1	109		1	3	3		2	3	5	1	8	6																			
		無文 (口縁部)					2						1																								
		無文 (胴部)					11						1								1																
		型式不明					1	3		5			5			6	1	4																			
	後葉	条痕文	子母口式				4			1							1	1																			
			鵜方島台式			1				1								1	1																		
			茅山下層式															1	1																		
			未細別		12	1		15	4	1	4		1		3		17	12	3				5														
		早期末 絡条体圧痕文			1																																
	回転縄文					1	4					1																									
	型式不明			1		9						2						1	1				1														
	早期末~前期初頭			1	4			1								3	2			1	1																
	前期	前半	羽状縄文	関山II式																																	
				有尾式				1																													
			繊維土器 未細別		1	8		1	1	10			2			1		5	3	4	1																
		後半	諸磯式	諸磯 a 式																																	
				諸磯 b 式		1			1										1	1																	
諸磯 c 式																																					
細別不可			4		1											1																					
十三菩提式																																					
前期末~中期初頭															1	1				1																	
中期	前半	五領ヶ台式																																			
		阿玉台式																																			
		勝坂式																																			
	後半	新崎式																																			
		郷土式																																			
		加曾利 E 式																																			
新巻類型																																					
後期	前半	堀之内式	堀之内 1 式																																		
			堀之内 2 式																			1															
			細別不可																																		
晩期	後半	浮線網状文	女鳥羽川式																																		
			氷 式																																		
			細別不可															1																			
	千網式																																				
大洞 A' 式																																					
型式不明						2																															
後晩期	精製																				1																
	粗製																					1															
	細別不可																					2															
型式不明																																					
時期不明			20	2	2	49	5		5			3		9	17	22	5		7	13		2															
弥生																																					
古墳以降																																					
中世以降	陶磁器															1																					
分類不能			17	3	1	99						17				16	9	1				1															

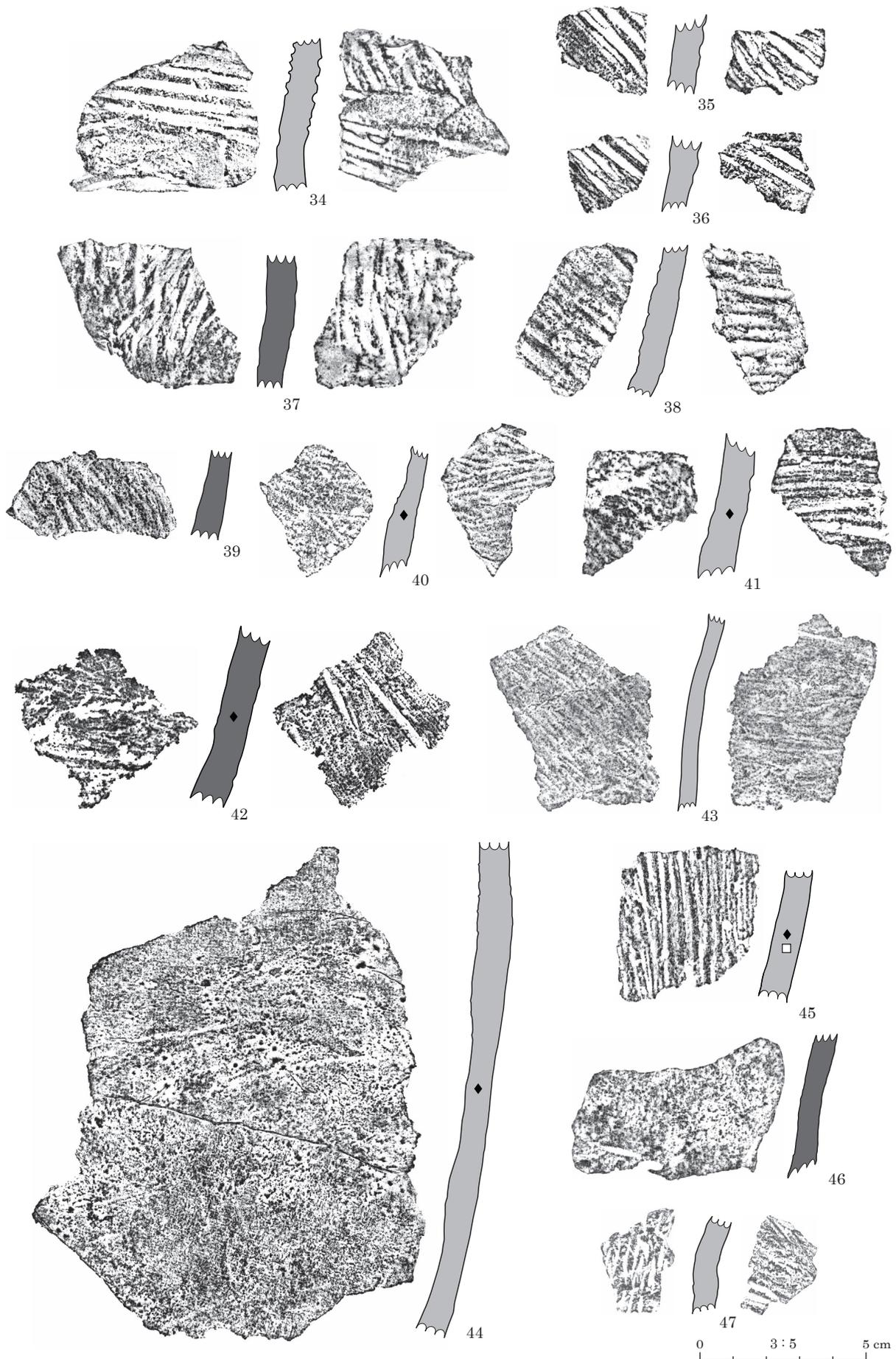
※ 層位の 120 ~ 130 などの数値は EL(646.200m) より設定した人工層位である。人工層位の詳細は第 3 章第 1 節、第 4 章第 1 節を参照。



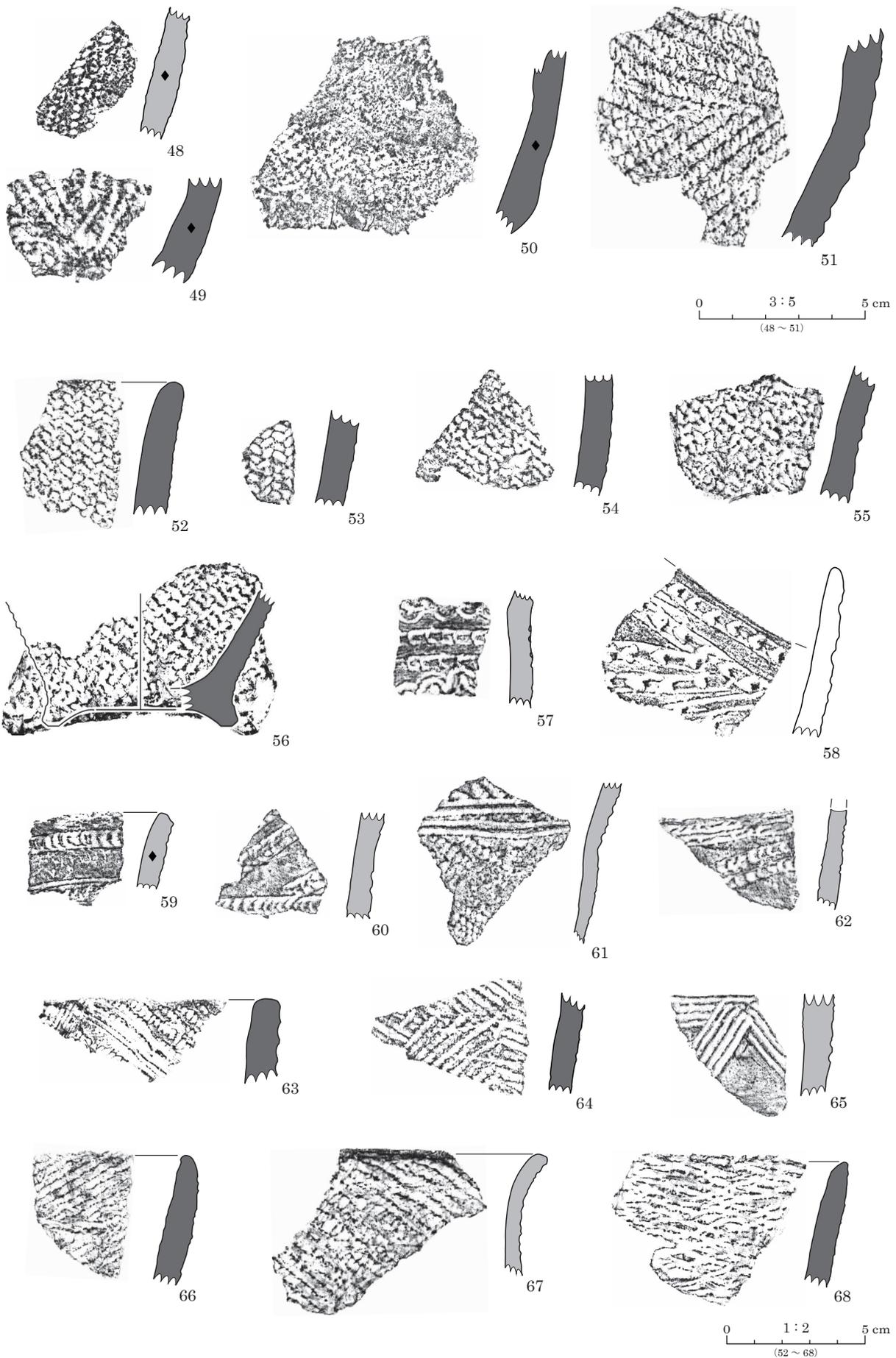
第23図 岩陰部出土 縄文土器実測図(1)



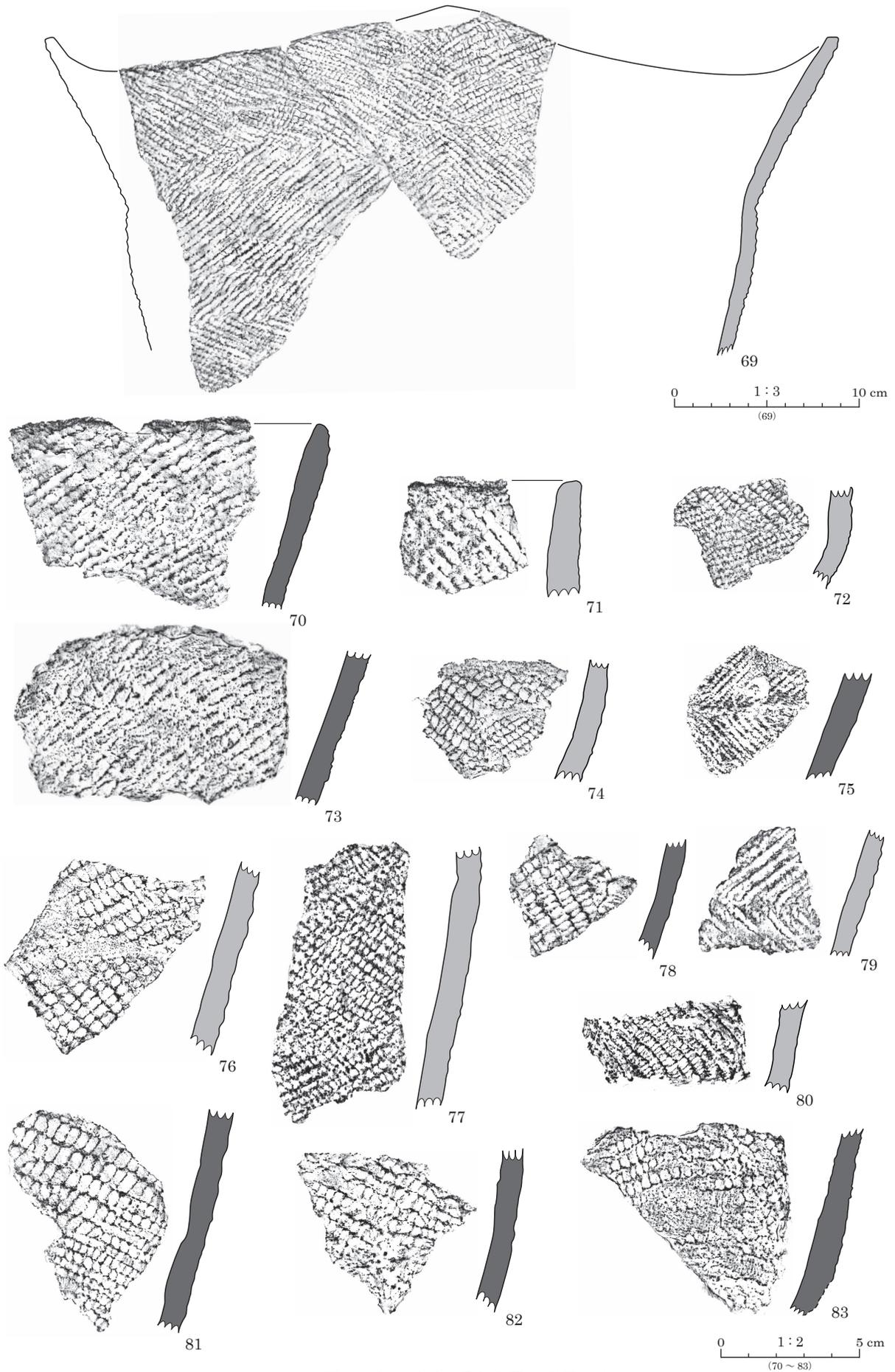
第24図 岩陰部出土 縄文土器実測図(2)



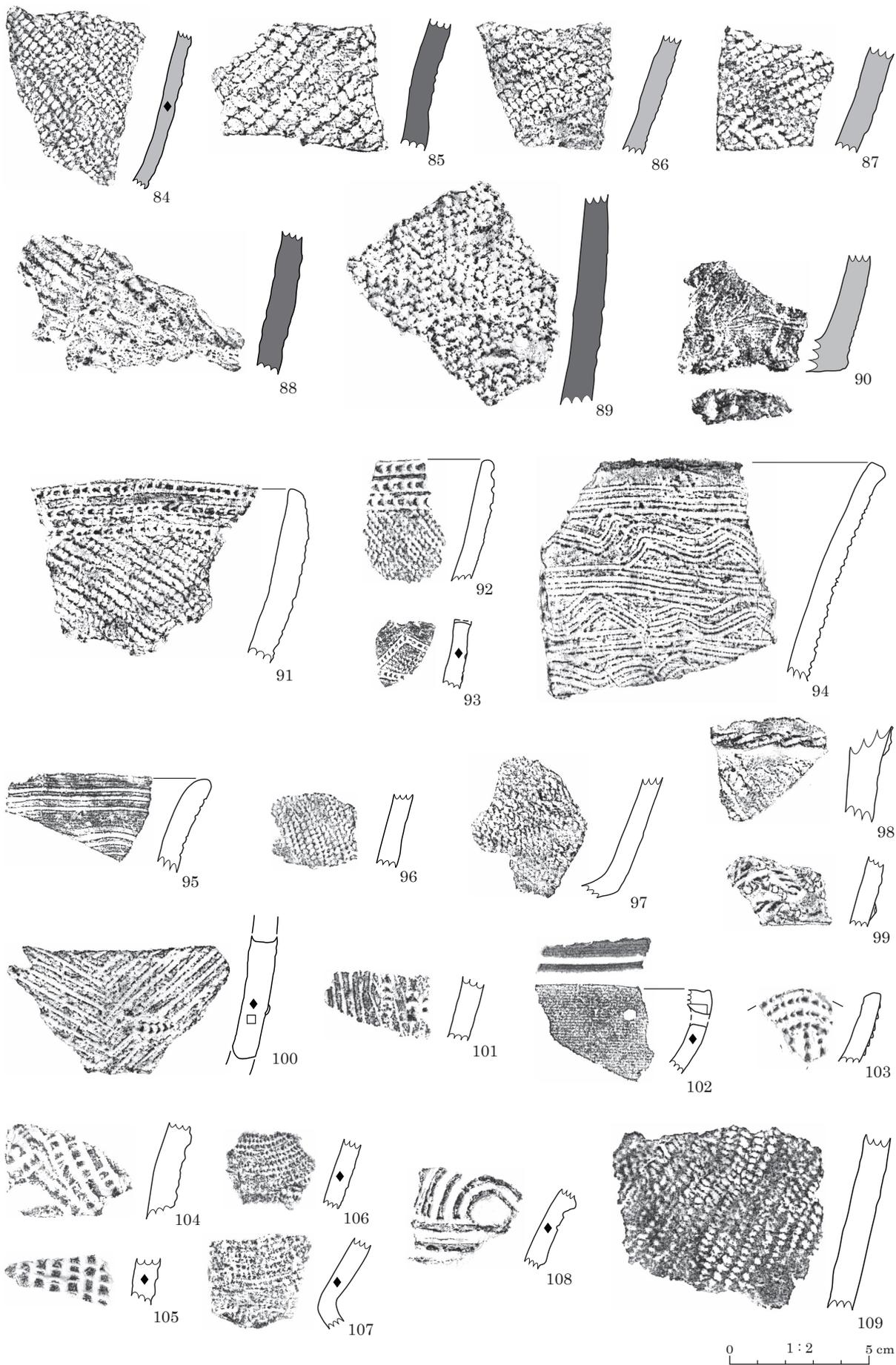
第25図 岩陰部出土 縄文土器実測図(3)



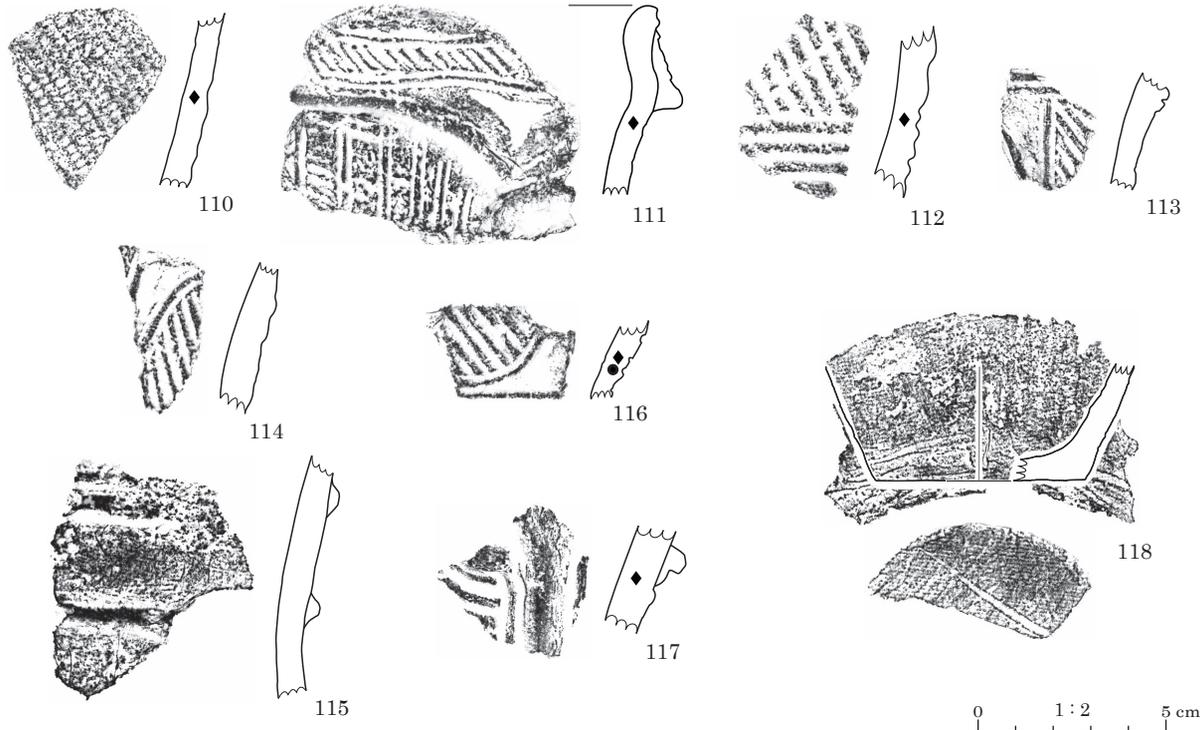
第26図 岩陰部出土 縄文土器実測図(4)



第27図 岩陰部出土 縄文土器実測図(5)



第28図 岩陰部出土 縄文土器実測図(6)



第29図 岩陰部出土 縄文土器実測図(7)

第11表 岩陰部出土 縄文土器観察表(1)

土器観察表凡例

- 層位…数字表記のものはEL(岩陰部 650.000m、前庭部 646.200m)を基準として設定された人工層位である。
- 胎土…混和材を記載した。同定できたものは、黒雲母、石英、黒曜石、繊維、光沢黒色粒(角閃石・輝石)、結晶片岩である。同定が難しいものは2mm以上を礫、それ以下を砂粒とし、色調で区別した。粒径(mm)は鉱物のみ表記し、砂粒・礫・繊維については省略した。
- 含有量は『新版標準土色帖 2005年度版』の面積割合を用いて、1%未満を僅、1～2%を少、3～5%をやや多、7%以上を多と表記した。
- 色調…左から外面・断面・内面の順で示した。
- 成形・整形・器厚…それぞれに関する事項を上段・中斷・下段の順に記した。
- 器形・文様…施文順序に沿って①、②、③…と示す。順序が読み取れない場合は番号を振らずに表した。
- 特記事項…器面の変色などの使用痕や種子圧痕の有無などを記載した。

掲載No.	グリッド層位	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
1	ロ8 b層	早期 前葉	表裏縄文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子少 5YR5/4 10YR2/1 10YR5/2	内面凹凸 内外面ナデ 9～10mm	外面に単節斜縄文RLを縦位施文。内面に単節斜縄文RLを横位施文。条幅2mm。	1号人骨土壌内出土 外面二次的な被熱により褐色化
2	ロ8 150～160	早期 前葉	表裏縄文	深鉢 胴部	1mm以下の石英多、1mm以下の光沢黒色粒子、黒曜石、繊維やや多、1mmの黒雲母少 7.5YR6/6 7.5YR7/6 7.5YR5/3	内外面斜ナデ 9.5mm	内面に単節斜縄文LRを縦位施文。条幅2mm。	内面～断面黒色化
3	ニ5 110～115	早期 前葉	回転縄文	深鉢 胴部	1mm以下の石英やや多、1mm以下の黒雲母、繊維少 7.5YR6/3 2.5Y7/2 2.5Y2/1	外面斜ミガキ、内面ナデ 6mm	単節斜縄文を施文。縄文は一部磨り消され原体不明。	内面黒色化、断面に種子圧痕
4	ロ9 ①層	早期 前葉	撚糸文	深鉢 底部付近	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 2.5YR6/3 7.5YR7/4 7.5YR7/4	内外面斜ナデ 10mm	撚糸文Lを縦位施文。条幅1mm。	
5	ハ8 ⑤層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒、繊維少 10YR4/3 10YR6/3 10YR6/3	口唇：円頭状 外面ナデ、内面横ナデ 7mm	①貝殻腹縁文を斜位施文。②幅1mmで断面弧状の沈線を横位、縦位の順に施文。口唇上にへら状工具で口唇に斜行する深い刻みを連続施文。	
6	ロ7 105～110	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母多、白色砂粒、繊維少 5YR5/4 2.5YR5/6 5YR5/1	口唇：隅丸角頭状 内外面横ナデ 7mm	①幅1.5～3mmの沈線を横位に施文。沈線断面は時計回りの動作に伴い半円形から弧状に変化。②断面弧状の短沈線を上から下の動作で縦位施文。幅3mmの半截竹管状工具を斜角に当て、D字状の刺突文を施文。	
7	ニ5 110～115	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、繊維少 5YR5/4 5YR3/1 7.5YR5/4	口唇：円頭状 外面横ナデ、内面斜ナデ 5～8mm	波状口縁を有する深鉢。外面に太さが不均一な斜方向の擦痕顕著。	
8	ハ5 第II層群	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mmの石英、白色砂粒、黒色砂粒、繊維やや多 5Y7/1 2.5Y6/1 2.5Y2/1	内外面ナデ 6.5mm	幅1mmで断面弧状の沈線を①右下がり、②左下がり引き、斜格子状の沈線を施文。	外面灰の付着により 白色化、内面～断面 黒色化
9	ニ7 105～110	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、繊維少 10YR7/2 10YR7/2 10YR7/2	内面ナデ 5mm	①浅い条痕を横位施文。②幅1mmで断面弧状の沈線を横位、斜位に施文。	
10	イ8 d層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、黒雲母、繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 10YR7/3 2.5Y7/2 7.5YR6/3	外面斜ナデ 10mm	①浅い条痕を斜位施文。②幅1.5mmで断面弧状の沈線を縦位施文。	4号人骨土壌内出土
11	ニ8 110～115	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mmの黒雲母、1～2mmの黒曜石多、繊維少 7.5YR3/4 2.5Y3/1 10YR3/2	内面横ナデ 9mm	内外面に幅4～5mmの平行する浅い凹線を横位施文。文様か調整痕か不明確。	内面黒色化
12	イ8 第II層群	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子少 7.5YR5/2 7.5YR5/1 7.5YR3/1	内面凹凸 内外面ナデ 5～7mm	内外面に櫛歯状工具による条痕を横位施文。凹線は幅1mmで断面コの字状。外面の条痕は一部ナデ消される。	内面～断面黒色化、 13と同一個体

第12表 岩陰部出土 縄文土器観察表(2)

掲載No.	グリッド層位	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
13	イ8 第II層群	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子少 5YR5/2 5YR3/1 5YR3/1	外面横ナデ、内面ナデ 6mm	内外面に櫛歯状工具による条痕を横位施文。凹線は幅1mmで断面口の字状。外面の条痕は一部ナデ消される。	内面～断面黒色化、12と同一個体
14	イ8 第II層群	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、黒曜石少 10YR4/2 10YR3/1 10YR5/2	内外面ナデ 6mm	内外面に櫛歯状工具による条痕を斜位施文。凹線は幅1mmで断面弧状。	
15	ニ7 105～110	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 10YR5/3 10YR5/1 10YR1.7/1	外面横ナデ～斜ナデ 6mm	細密な条痕を斜位施文。	外面に黒斑、内面～断面黒色化
16	ニ8 105～110	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、黒曜石、黒色砂粒少 10YR7/2 10YR6/2 10YR3/1	上面凸状下面凹状の擬口縁、内面凹凸、外面縦ナデ 6～7mm	無文部。	内面～断面黒色化
17	イ8 第II層群	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR4/2 7.5YR4/1 7.5YR4/1	外面横ナデ、内面斜ナデ 6mm	外面に細密な条痕を横位施文。	内面黒色化
18	ハ5 120～125	早期 後葉	子母口式	深鉢 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、褐色砂粒、繊維少 10YR3/1 10YR3/2 10YR3/2	口唇：円頭状 外面ナデ、内面斜ナデ 6mm	①貝殻条痕を斜位施文。②条痕をナデ消し。幅2mmで断面三角形の微隆起線を貼付。③斜位の微隆起線に沿ってナデを施す。	
19	ニ8 第I層群	早期 後葉	子母口式	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、黒色砂粒、繊維少 7.5YR5/2 7.5YR6/1 10YR5/2	口唇：円頭状 外面横ナデ 5mm	①幅2mmの微隆起線を貼付。断面形は弧状～三角形で不均一。②横位の微隆起線に沿ってナデを施す。内面に凹線幅2～3mmのごく浅い条痕を斜位施文。	内面に種子圧痕
20	ハ7 115～120	早期 後葉	子母口式	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子少 7.5YR5/2 7.5YR5/1 7.5YR5/2	口唇：尖頭状 外面横ナデ 7mm	①凹線幅1mmの細密条痕を横位施文。②幅1～2mmで断面半円形の微隆起線を貼付。	
21	ロ8 b層	早期 後葉	子母口式	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、白色砂粒、黒色砂粒、繊維少 5YR4/1 5YR6/1 7.5YR5/2	口唇：円頭状 外面横ナデ 5mm	幅2mmで断面三角形の微隆起線を貼付。	1号人骨土壌内出土
22	ロ8 ⑦層	早期 後葉	子母口式	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子やや多、黄褐色砂粒、繊維少 10YR4/2 10YR6/2 10Y5/3	内外面横ナデ 6mm	幅1mmで断面弧状の微隆起線を貼付。微隆起線は一部剥落。	
23	ロ8 b層	早期 後葉	子母口式	深鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の黒雲母、繊維少、褐色礫僅か 10YR3/1 7.5YR3/2 7.5YR3/2	外面ナデ 4mm	①凹線幅2mmの浅い条痕を斜位施文。②幅2mmの微隆起線を斜位に貼付。断面形は弧状～三角形で不均一。内面に外面同様の条痕を斜位施文。	1号人骨土壌内出土
24	ハ8 第I層群	早期 後葉	子母口式	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒、繊維少 7.5YR5/4 10YR3/1 10YR4/1	内面凹凸、外面斜ナデ 4～7mm	①細密貝殻条痕を斜位施文。②条痕を一部ナデ消し、幅1.5mmで断面弧状の微隆起線を貼付。③微隆起線に沿ってナデを施す。内面に細密貝殻条痕を横位施文。	外面薄く黒色化、内面～断面黒色化
25	ハ8 第I層群	早期 後葉	子母口式	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR5/3 7.5YR4/1 10YR6/2	外面横ナデ、内面ナデ 7mm	①細密貝殻条痕を横位施文。②断面弧状で幅1.5～2mmの微隆起線を貼付。	
26	ロ7 105～110	早期 後葉	野島式	深鉢 口縁部	白色砂粒、繊維少 10YR6/1 10YR6/1 N4/0	口唇：隅丸角頭状 外面ミガキ、内面横ミガキ 8mm	①口唇下に隆帯を貼付。②隆帯上に幅6mmの半截竹管状工具による逆U字状の刺突文を施文。	
27	ニ6 105～110	早期 後葉	野島式	深鉢 胴部	1mmの黒雲母、1mm以下の石英、黒色砂粒、繊維少、結晶片岩僅か 7.5YR5/3 7.5YR6/1 7.5YR6/2	内面凹凸、外面縦ナデ、内面ナデ 8～9mm	①貝殻条痕を縦位施文。②条痕を一部ナデ消し、断面三角形の隆帯を縦位に貼付。隆帯幅は左2条2～3mm、右1条6～10mm。③隆帯上に幅3mmで断面円形の工具を斜位に押圧。内面にごく浅い貝殻条痕を斜位施文。	外面に黒斑、28と同一個体
28	ニ7 105～110	早期 後葉	野島式	深鉢 胴部	1mmの黒雲母、1mm以下の石英、黒色砂粒、繊維少、結晶片岩僅か 5YR5/3 7.5YR6/1 5YR6/3	内面凹凸、隆帯区画内縦ナデ、内面ナデ 7～8mm	①幅3mmで断面三角形の隆帯を縦位に貼付。②貝殻条痕を縦位施文。内面に凹線幅2mmのごく浅い条痕を斜位施文。	外面に黒斑、27と同一個体
29	ニ6 105～110	早期 後葉	野島式	深鉢 胴部	結晶片岩やや多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、繊維少、白色礫僅か 7.5YR5/4 5YR5/4 5YR4/3	内外面斜ナデ 6mm	①外面に貝殻条痕を斜位施文。②条痕を一部ナデ消し、貼付幅を集合点に断面三角形の隆帯を貼付。③貼付幅上に幅4mmで断面円形の工具を斜位に押圧。隆帯区画内に幅4mmで断面弧状の沈線を施文。	
30	ハ6 第II層群	早期 後葉	鶺鴒ガ島台式	深鉢 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英、繊維少 7.5YR6/3 10YR4/1 7.5YR6/3	口唇：角頭状 外面ナデ 7mm	くの字状の屈曲部を有する深鉢。①幅5mmで断面弧状の浅い沈線により区画。②区画内に幅3mmで断面円形の工具を斜位に当て、楔状の刺突文を施文。口唇上に同一工具で外面から内面の動作により楔状の沈線を施文。内面に櫛歯状工具による条痕を横位施文。凹線は幅1～2mmで断面弧状～半円形。	内外面に黒斑
31	イ8 第II層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 口縁部	繊維多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒、結晶片岩少 10YR5/3 10YR5/2 7.5YR6/4	口唇：円頭～尖頭状 内外面凹凸、外面ナデ 6～8mm	外面に方向を違えた斜位、内面に横位の細密貝殻条痕を施文。	
32	ニ8 110～115	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	結晶片岩、繊維やや多、1mm以下の黒雲母少 5YR6/4 5YR6/4 5YR6/4	内外面斜ナデ 7.5mm	外面は斜格子状に、内面は横位に細密貝殻条痕を施文。	
33	ハ9 ⑨層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	白色砂粒、黒色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少、褐色礫僅か 5YR6/4 5YR7/1 5YR6/2	外面斜ナデ 9mm	内外面に粗い貝殻条痕を横位、斜位に施文。	外面二次的な被熱により褐色化
34	ロ9 第II層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の石英、白色砂粒少、黒色礫僅か 10YR5/2 10YR3/1 10YR5/2	内外面斜ナデ 8mm	内外面に貝殻条痕を斜位施文。	内面一部黒色化
35	ハ8 第I層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	白色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、黒色砂粒少 5YR5/3 5YR2/1 5YR2/1	外面横ナデ 9mm	内外面に粗い貝殻条痕を斜位施文。	内面～断面黒色化
36	イ8 第II層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 5YR6/3 5YR6/1 5YR6/1	内外面ナデ 8mm	外面に縦位、内面に横位、斜位の貝殻条痕を施文。	内面～断面黒色化
37	イ8 第II層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維多、白色砂粒少 5YR5/3 5YR5/1 5YR4/1	外面斜ナデ 8mm	内外面に粗い貝殻条痕を斜位施文。外面の条痕は一部ナデ消される。	
38	ロ5 第II層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒、褐色砂粒少 10YR6/2 7.5YR7/3 7.5YR5/4	外面ナデ 8mm	外面に斜位、内面に横位の粗い貝殻条痕を施文。外面の条痕はナデ消される。	
39	イ8 第II層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維多、褐色砂粒少 5YR5/3 5YR5/4 7.5YR4/1	外面ナデ、内面斜ナデ 6mm	内外面に浅い貝殻条痕を斜位施文。内面の条痕はナデ消される。	
40	ニ7 105～110	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	1mmの黒雲母、1mm以下の光沢黒色粒子、繊維やや多 7.5YR6/3 10YR6/1 7.5Y6/3	内面凹凸、外面ナデ、内面下ナデ 5～9mm	内外面に横位、斜位の貝殻条痕を施文。外面の条痕は磨り消される。	
41	ハ9 ⑨層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	白色砂粒多、繊維やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子少 5YR5/3 5YR3/1 5YR5/3	外面斜ナデ、内面横ナデ 9～10mm	外面に斜位、内面に横位の貝殻条痕を施文。外面の条痕はナデ消される。	

第13表 岩陰部出土 縄文土器観察表(3)

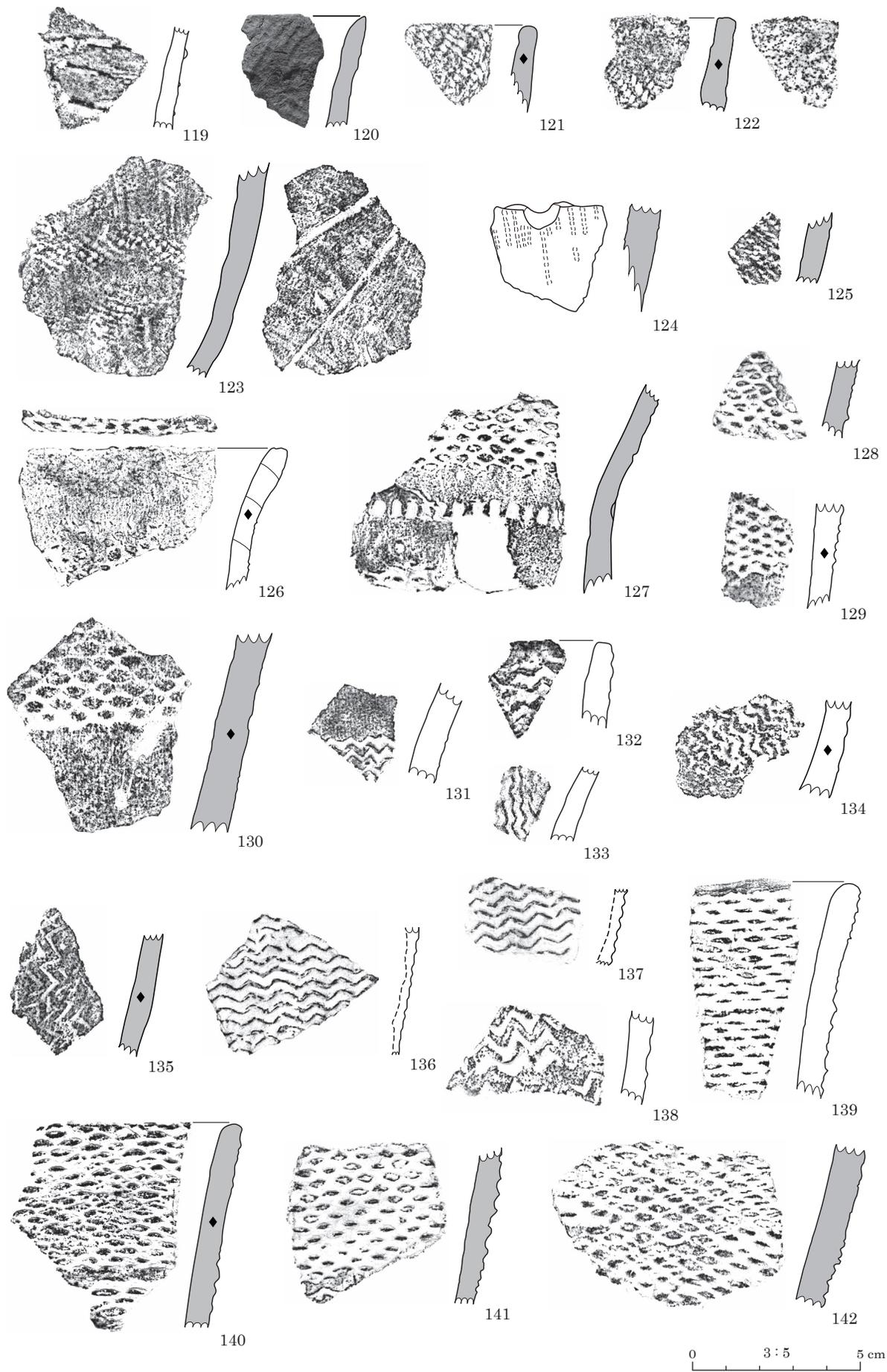
掲載No.	グリッド層位	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
42	ハ9 第1層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維多、1mm以下の黒雲母、黒色砂粒少 7.5YR5/3 7.5YR3/1 7.5YR3/1	内面凹凸 外面斜ナデ 9~10mm	内外面に貝殻条痕を斜位施文。外面の条痕はナデ消される。	内面~断面黒色化
43	ニ7 105~110	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、繊維少 7.5YR4/1 10YR7/2 10YR4/1	外面ナデ、内面斜ナデ 5mm	外面に斜位、内面に横位の擦痕に近い条痕を施文。条痕は内外面ともナデ消される。	内面黒色化
44	ニ8 ②~③層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子多、繊維やや多、 1mm以下の黒雲母少 7.5YR6/3 7.5YR3/1 10YR3/1	内面凹凸 外面斜ナデ 5~9mm	内面に条痕を横位施文。条痕はナデ消される。	内面一部黒色化
45	ニ6 110~115	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、繊維やや多、1mm以下の 石英少、結晶片岩僅か 7.5YR5/4 7.5YR6/1 10YR5/1	内面ナデ 8mm	外面に貝殻条痕を縦位施文。	
46	ニ8 第1層群	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、 黒色砂粒少 10YR6/2 10YR5/1 10YR6/1	内面凹凸 外面縦ナデ、内面ナデ 7~9mm	外面に縦方向の擦痕顕著。	
47	ロ9 b層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 7.5YR5/2 7.5YR3/1 5YR5/4	8mm	0段rの擦糸文を斜格子状に施文。条幅2mm。内面に貝殻条痕を斜位施文。	1号人骨土壌内、大腿骨右出土
48	イ8 第II層群	早期	型式不明	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母多、1mm以下の石英、繊維 やや多 5YR5/1 5YR5/4 5YR3/1	8mm	単節斜縄文RLを斜位施文。条幅3mm。	外面に調整によるものではない光沢あり、 内面黒色化
49	イ9 第I層群	早期	型式不明	深鉢 底部付近	繊維多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色 粒子少 7.5YR7/1 7.5YR2/1 7.5YR3/2	内面凹凸 外面ナデ 10~11mm	単節斜縄文LR、RLを縦位施文し、不規則な羽状を構成。条幅2mm。	内面~断面黒色化
50	ニ8 ②~③層	早期	型式不明	深鉢 底部付近	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子やや 多、1mm以下の黒雲母少 7.5YR6/4 10YR6/2 10YR6/2	外面突出させた接合、内面凹 凸 外面ナデ、内面横ナデ 7~10mm	単節斜縄文RLを横位施文。条幅2mm。	
51	ニ6 105~110	早末~ 前初	型式不明	深鉢 胴部	白色砂粒、黒色砂粒、繊維多 7.5YR5/2 7.5YR6/1 5Y2/1	内面横ナデ 12mm	①下段に条幅4mmの前々段反摺LRR、 ②上段に前々段反摺RLLを横位施文 し、羽状縄文を施す。条幅は5mmと 4.5mmが交互に表出。内面に横方向の 粗い擦痕顕著。	内面~断面黒色化、 外面に縦方向の亀裂
52	ロ9 第I層群	前期 前半	関山II式	深鉢 口縁部	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白 色粒子少 10YR4/2 10YR2/1 10YR4/2	口唇：円頭状 内面横ナデ、口唇ミガキ 11mm	0段縄による4本組紐の回転文を施文。 内面に横方向の擦痕顕著。	
53	ハ9 ⑤層	前期 前半	関山II式	深鉢 胴部	繊維多、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、 光沢黒色粒子、灰色砂粒、半透明な白色砂粒少 10YR3/1 10YR7/2 10YR7/2	内面斜ナデ 11mm	0段縄による4本組紐の回転文を施文。	外面に黒斑
54	ハ9 根掘乱	前期 前半	関山II式	深鉢 胴部	繊維多、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、 光沢黒色粒子、黒色砂粒、灰色砂粒少 5YR5/2 5YR4/1 5YR5/2	内面斜ナデ、内面斜ミガキ 11mm	0段縄による4本組紐の回転文を施文。 内面に斜方向の擦痕顕著。	
55	イ8 第II層群	前期 前半	関山II式	深鉢 胴部	繊維多、1mm以下の石英少 5Y7/2 5Y2/1 5Y2/1	内面ナデ 8.5mm	0段縄による4本組紐の回転文を施文。	外面灰の付着により 白色化、内面~断面 黒色化、56と同一個 体
56	イ8 第II層群	前期 前半	関山II式	深鉢 胴~底部	繊維多、1mm以下の石英、白色砂粒少 2.5Y8/2 5YR4/3 5YR2/1	台面外面の成形→内面に胴部 接着 内面横ナデ 9~11mm	推定底径：6.6cm 上げ底の底部。0段縄による4本組紐の 回転文を施文。	外面灰の付着により 白色化、内面~断面 黒色化、55と同一個 体
57	ハ8 110~115	前期 前半	黒浜式	深鉢 胴部	黒色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、光 沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR6/3 10YR7/2 7.5Y2/1	外面横ナデ、内面ミガキ 8mm	①幅5mmの半載竹管状工具で平行沈線 を施文。②その上に同一工具でC字状 の連続爪形文を施文。爪形文の上下にコ ンパス文を施文。コンパス文の凹線は幅 2mmで断面コの字状。	内面黒色化
58	ニ7 105~110	前期 前半	有尾式	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、褐色砂粒、黄褐色 砂粒やや多 10YR3/3 10YR4/3 7.5YR4/3	口唇：円頭状 内面斜ナデ 8mm	波状口縁を有する深鉢。幅6mmの多載 竹管状工具による引きずり文を①横位、 ②斜位に施文。③その上に幅6mmの半 載竹管状工具を斜角に当て、V字状の爪 形文を施文。内面に口縁に沿う横方向の 擦痕顕著。	内外面黒色化
59	ハ7 105~110	前期 前半	有尾式	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、石英少 5YR4/6 7.5YR4/1 5YR3/6	内外面横ナデ 8mm	①幅6mmの半載竹管状工具で平行沈線 を横位施文。②その上に同一工具で C字状の連続爪形文を施文。下部に幅 1.5mmの断面コの字状の沈線を横位施 文。	外面にヒトの爪痕
60	イ8 ①層	前期 前半	有尾式	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、繊 維少 2.5Y3/2 5Y3/1 2.5Y3/2	内外面横ナデ 8mm	幅6mmの半載竹管状工具で平行沈線を ①横位、②斜位に施文。③その上に同一 工具で浅いC字状の爪形文を施文。	内外面~断面黒色化
61	ロ9 第I層群	前期 前半	有尾式	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、繊 維少、褐色礫僅か 10YR4/1 10YR5/2 2.5Y4/1	外面斜ナデ、内面斜ミガキ、 下斜ナデ 7mm	①条幅4mmの単節斜縄文RLを横位施 文。②幅5.5mmの多載竹管状工具の引 きずり文を横位施文。下部に条幅3mm の単節斜縄文RLを横位施文。	
62	ハ5 ①層	前期 前半	有尾式	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色 砂粒少 10YR4/1 10YR4/1 10YR4/1	上面凹状の擬口縁 内面斜ナデ 6~8mm	①幅4mmの半載竹管状工具で平行沈線 を施文。②その上に同一工具を斜角に当 て、C字状の連続爪形文を施文。	内外面~断面黒色化
63	イ8 第II層群	前期 前半	有尾式	深鉢 口縁部	繊維多、白色砂粒、褐色砂粒少 7.5YR5/3 10Y2/1 7.5YR5/4	口唇：隅丸角頭状 口唇~内面横ミガキ 10mm	①条幅3mmの単節斜縄文RLを横位施 文。②条に重ね、多載竹管状工具を2本 束ねて引きずり文を施文。	
64	イ8 ①層	前期 前半	有尾式	深鉢 胴部	繊維多、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR3/1 10YR4/1 10YR3/1	内面横ミガキ 9mm	条幅2.5mmの無節斜縄文R、条幅2mm の単節斜縄文LRを横位施文し、菱形構 成をとる。	内外面~断面黒色化、 外面に種子圧痕
65	ロ9 第I層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色 砂粒少 7.5YR3/1 7.5YR4/1 10YR5/2	内面凹凸 外面横ナデ、内面斜ナデ 8~9mm	5本歯の櫛歯状工具で①横位、②右下が り、③右上がりの順に幅2mmで断面弧 状の集合沈線を施文。	内面に黒斑
66	ニ9 第I層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維多、1mm以下の石英やや多、1mm以下 の光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR3/1 10YR4/1 5YR5/4	口唇：尖頭状 内面横ナデ 10mm	末端に結束を施した原形で無節斜縄文L を横位施文。条幅3mm。	内外面に黒斑
67	ハ8 第I層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色 砂粒少、褐色礫僅か 10YR3/2 2.5Y2/1 7.5YR5/3	口唇：内傾角頭状 口唇~内面横ミガキ 8mm	口縁が強く外反する深鉢。単節斜縄文 RLを横位施文。条幅は3mmと4mm が交互に表出。	内外面上部~口唇黒 色
68	ハ6 第II層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維多、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR7/1 10YR3/2 10YR5/1	口唇：円頭~尖頭状 内面凹凸 内面上横ナデ、内面下斜ナデ 7~8mm	網目状の擦糸文を施文。圧痕が粗く原体 不明。口唇上に間隔を開けた不規則な刺 突を施文。内面に横方向の擦痕顕著。	型式同定に疑問残る 内外面~断面黒色化
69	ハ7 115~120	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の石英、黒色粒子、白 色砂粒、黒色砂粒少 2.5Y3/1 10YR7/2 10YR6/2	推定口径：42.5cm 口唇：角頭状 内面横ナデ、一部斜状の光沢 8mm	外側に屈曲する波状口縁をもち、胴部が やや膨らむ深鉢。単節斜縄文RL、単節 斜縄文LRを交互に横位施文し、菱形構 成をとる。条幅3.5mm、原体長5cm。	内外面に棒状の黒斑 年代測定コードPLD- 34251,PLD-34252
70	ハ6 105~110	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	白色砂粒、繊維多、褐色礫僅か 10YR4/1 2.5Y3/1 10YR6/1	口唇：隅丸角頭~円頭状 内面横ナデ 6mm	無節斜縄文Lを横位施文。条幅は4mm と3.5mm。条には筋に近い粗い繊維痕 が残る。内面に横方向の擦痕顕著。	内外面に黒斑、73と 同一個体

第14表 岩陰部出土 縄文土器観察表(4)

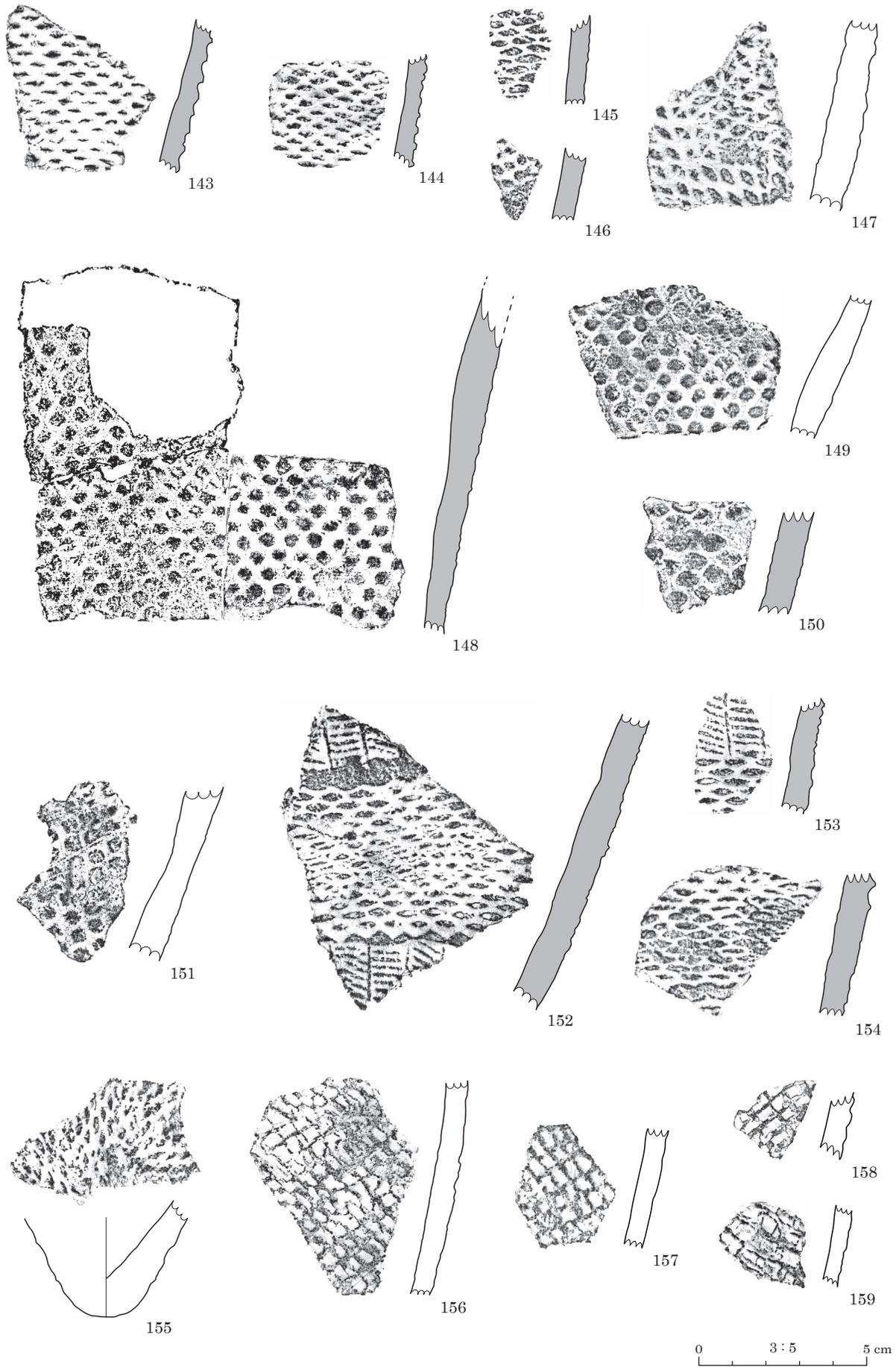
掲載No.	グリッド層位	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
71	ロ9 第II層群	前期前半	繊維土器	深鉢口縁部	白色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子、繊維やや多 10YR5/2 2.5Y3/1 5YR7/2	口唇：円頭～隅丸角頭状 外面～口唇ナデ 7mm	無節斜縄文Rを横位施文。条幅は4.5mm。	
72	ニ8 105～110	前期前半	繊維土器	深鉢底部付近	繊維やや多、白色砂粒少 2.5YR4/4 2.5Y6/1 7.5YR3/1	内面横ナデ 7～9mm	上段に条幅3mmの単節斜縄文RL、下段に条幅2mmの単節斜縄文LRを横位施文し、羽状縄文を施す。	
73	ハ8 第I層群	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR4/1 2.5Y3/1 10YR6/1	内面横ナデ 8mm	無節斜縄文Lを横位施文。条幅は4mmと3.5mm。内面に横方向の擦痕顕著。	70と同一個体
74	ニ7 110～115	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維やや多1mm以下の石英、白色砂粒少 7.5YR5/4 7.5YR6/1 10YR2/1	内外面横ナデ 8.5mm	条幅3.5mmの単節斜縄文RL、条幅3mmの単節斜縄文LRを横位施文し、羽状縄文を施す。	内面黒色化
75	ロ9 第II層群	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維多、1mm以下の石英、白色砂粒、黒色砂粒少 10YR4/1 10YR2/1 7.5YR4/2	内外面横ナデ 9mm	上段に単節斜縄文LR、下段に単節斜縄文RLを横位施文し、羽状縄文を施す。条幅は4.5mm。上段と下段の境にZ字状の結節縄文を施文。	外面黒色化
76	ハ9 ⑨層	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	白色砂粒多、繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR3/1 7.5YR6/1 2.5Y6/3	内外面斜ナデ 9mm	上段に単節斜縄文LR、下段に単節斜縄文RLを横位施文し、羽状縄文を施す。幅4mmと5mmの条が交互に表出。	外面黒色化
77	ハ6 105～110	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	白色砂粒、黒色砂粒、繊維やや多 7.5YR5/2 7.5Y2/1 10YR3/1	内面横ナデ、斑状に光沢 9.5mm	上段に単節斜縄文LR、下段に単節斜縄文RLを横位施文し、羽状縄文を施す。条幅は3mm。	内面～断面黒色化
78	ハ6 第II層群	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維多、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、褐色砂粒少 7.5YR6/4 7.5YR5/1 7.5YR5/2	内面斜ナデ 8mm	上段に条幅4mmの単節斜縄文LR、下段に条幅5mmの単節斜縄文RLを横位施文し、羽状縄文を施す。LRは付加条とみられるが不明確。内面に斜方向の擦痕顕著。	
79	ハ9 第I層群	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 7.5YR7/3 10YR7/2 2.5Y2/1	外面横ナデ、内面斜ナデ 8mm	上段に幅4mmの無節斜縄文L、下段に幅3mmの無節斜縄文Rを横位施文し、羽状縄文を施す。	内面黒色化
80	ハ8 一号集石	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	白色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.6YR3/1 10Y2/1 7.5YR5/2	外面ナデ、内面斜ナデ 8.5mm	0段3条の単節斜縄文RLを横位施文。条幅は3mm。斜縄文の上下端に、原体端部を0段縄で環状に巻つけた部分の回転圧痕が残る。	外面黒色化
81	ハ8 一号集石	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維多、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、1mm以下の光沢黒色粒子少 5YR6/3 5YR5/4 7.5YR7/3	内面凹凸 内面ナデ 7～10mm	①下段に条幅3mmの単節斜縄文RLを横位施文。②上段に、下段に重ねて条幅7mmの単節斜縄文RLを横位施文。	
82	ハ8 一号集石	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、褐色砂粒少 7.5YR3/3 7.5YR3/1 7.5YR3/1	内面凹凸 外面斜ナデ、内面横ナデ 7～9mm	単節斜縄文RLを横位施文。条幅4.5mm。	内外面～断面黒色化
83	ハ8 第I層群	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR3/2 10YR1.7/1 2.5Y6/3	内外面斜ナデ 10mm	LRの横走する単節縄文を施文。幅5mmと3mmの条が交互に表出。外面に横方向の擦痕顕著。	内面～断面黒色化
84	ニ7 105～110	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、石英少 7.5YR4/3 10YR4/1 7.5YR2/1	外面ナデ、内面斜ナデ、線状に光沢 5mm	条幅3.5mmの単節斜縄文RLを①下段、②中段、③上段の順に横位施文。	外面に黒斑、内面黒色化
85	ハ7 115～120	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維多、白色砂粒、黒色砂粒少 7.5YR5/3 7.5YR7/3 7.5YR5/2	外面横ナデ、縦ナデ 9mm	単節斜縄文LRを横位施文。条幅5mm。内面に縦方向の擦痕顕著。	
86	ロ7 第II層群	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	黒色砂粒、繊維少 2.5Y4/2 2.5Y7/2 2.5Y3/1	内外面横ナデ 7mm	単節斜縄文LRを横位施文。条幅4mm。	内面黒色化、87と同一個体
87	ロ7 第II層群	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	黒色砂粒、繊維少 7.5YR4/1 10YR7/2 10YR6/2	内外面横ナデ 7mm	上段に単節斜縄文LR、下段に単節斜縄文RLを横位施文し、羽状縄文を施す。条幅4mm。	外面黒色化、内面に黒斑、86と同一個体
88	ハ6/ニ6 105～110	前期前半	繊維土器	深鉢底部付近	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 2.5Y7/1 2.5Y7/2 2.5Y4/1	内外面ナデ 8.5mm	無節斜縄文Rを横位施文。条幅4mm。	内面～断面黒色化、外面に粘土まみり顕著
89	イ8 第II層群	前期前半	繊維土器	深鉢胴部	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 10YR6/3 7.5YR5/3 7.5YR5/3	内面斜ナデ 9mm	複節斜縄文LRLを横位施文。条幅3mm。	
90	ニ8 調査区内	前期前半	繊維土器	深鉢底部	繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 2.5Y4/1 10YR6/2 10YR3/1	外面横、斜ナデ、内面ナデ 6mm	横、斜方向の擦痕顕著。	外面灰の付着により白色化、内面薄く黒色化
91	ロ9 ①層/第I層群	前期後半	諸磯a式	深鉢口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子少 7.5YR3/1 10YR6/2 7.5YR3/1	口唇：内面角外面丸形 内面横ミガキ 6～8mm	①条幅2.5mmの単節斜縄文RLを横位施文。②幅4mmの半截竹管状工具で押し引き、口縁に沿ったC字状の連続爪形文を3条施文。破片下端に爪形文を施文。	内外面黒色化
92	ロ9 第I層群	前期後半	諸磯a式	深鉢口縁部	1mmの石英、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR5/2 10YR6/2 7.5YR5/4	口唇：円頭状 内面横ミガキ 6mm	①直前段3条の単節斜縄文RLを横位施文。②幅5mmの半截竹管状工具を押し引き、口縁に沿ったC字状の連続爪形文を3条施文。	内面に黒斑
93	ハ8 第I層群	前期後半	諸磯a式	深鉢胴部	1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒少 5YR3/1 5YR4/3 5YR2/1	外面斜ナデ、内面ミガキ 6mm	焼成前に幅3mmの穿孔を施す。①条幅1mmの単節斜縄文RLを横位施文。②幅3mmの半截竹管状工具を押し引いて①を菱形に区画し、磨消縄文を施文。	
94	ハ8 第I層群	前期後半	諸磯a式	深鉢口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 5YR5/3 2.5Y6/2 5YR5/3	口唇：角頭状、一部外面肥厚 外面横ナデ、内面斜ナデ、口唇～内面口唇下横ミガキ 8mm	口縁が外反する深鉢。4本歯の櫛歯状工具で①横位に沈線文を施文。②その間に同一工具で波状文を施文。凹線幅は不均一で断面形は弧状～半円形。	内外面に棒状の黒斑
95	ロ9 第I層群	前期後半	諸磯a式	深鉢口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒やや多、1mmの石英少 5YR5/4 5YR6/4 7.5YR6/4	口唇：円頭状 外面横ナデ、口唇～内面横ミガキ 7mm	口縁が外反する深鉢。櫛歯状工具により波状文を施文。3条の深い凹線に平行して浅い条線が残る。	
96	ニ6 105～110	前期後半	諸磯a式	深鉢胴部	1mm以下の石英、1mm以下の光沢黒色粒子少 2.5YR3/4 2.5YR3/4 2.5YR3/4	内面ミガキ 7mm	①直前段3条の単節斜縄文RLを横位施文。②幅4mmの円形竹管文を施文。	
97	ハ9 ⑨層	前期後半	諸磯a式	浅鉢底部付近	光沢黒色粒子少 5YR4/3 7.5YR5/1 5YR4/3	内面横ミガキ 6mm	単節斜縄文RLを横位、斜位に施文。条幅2mm。	内外面に黒斑
98	ロ6 115～120	前期後半	諸磯b式	深鉢胴部	1mm以下の光沢黒色粒子やや多、白色砂粒少 10YR4/4 7.5YR5/6 7.5YR7/2	内外面横ナデ 11mm	①条幅5mmの単節斜縄文RLを横位施文。②幅7mmの幅広い浮線文を貼付。③その上に幅3mmで断面弧状の短沈線を斜位施文。	
99	ロ7 105～110	前期後半	諸磯b式	深鉢胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 2.5Y6/2 2.5Y7/1 2.5Y5/1	内外面斜ナデ 7mm	①条幅2mmの単節斜縄文RLを施文。②幅3～5mmの浮線文を貼付。③その上に幅2mmで断面円形の工具を斜位に押圧。	
100	ハ6 105～110	前期後半	諸磯c式	深鉢胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、灰色砂粒、黄褐色砂粒やや多、1mmの黒雲母少、結晶片岩僅か 10YR5/4 2.5Y4/1 2.5Y5/2	接着面に連続する凹凸を作出 内面横ナデ 9mm	①幅5mmの半截竹管状工具で矢羽状の集合沈線を施文。②幅3.5mmの隆起線を貼付。③その上を半截竹管状工具で押し引き、結節浮線文を施文。	

第15表 岩陰部出土 縄文土器観察表(5)

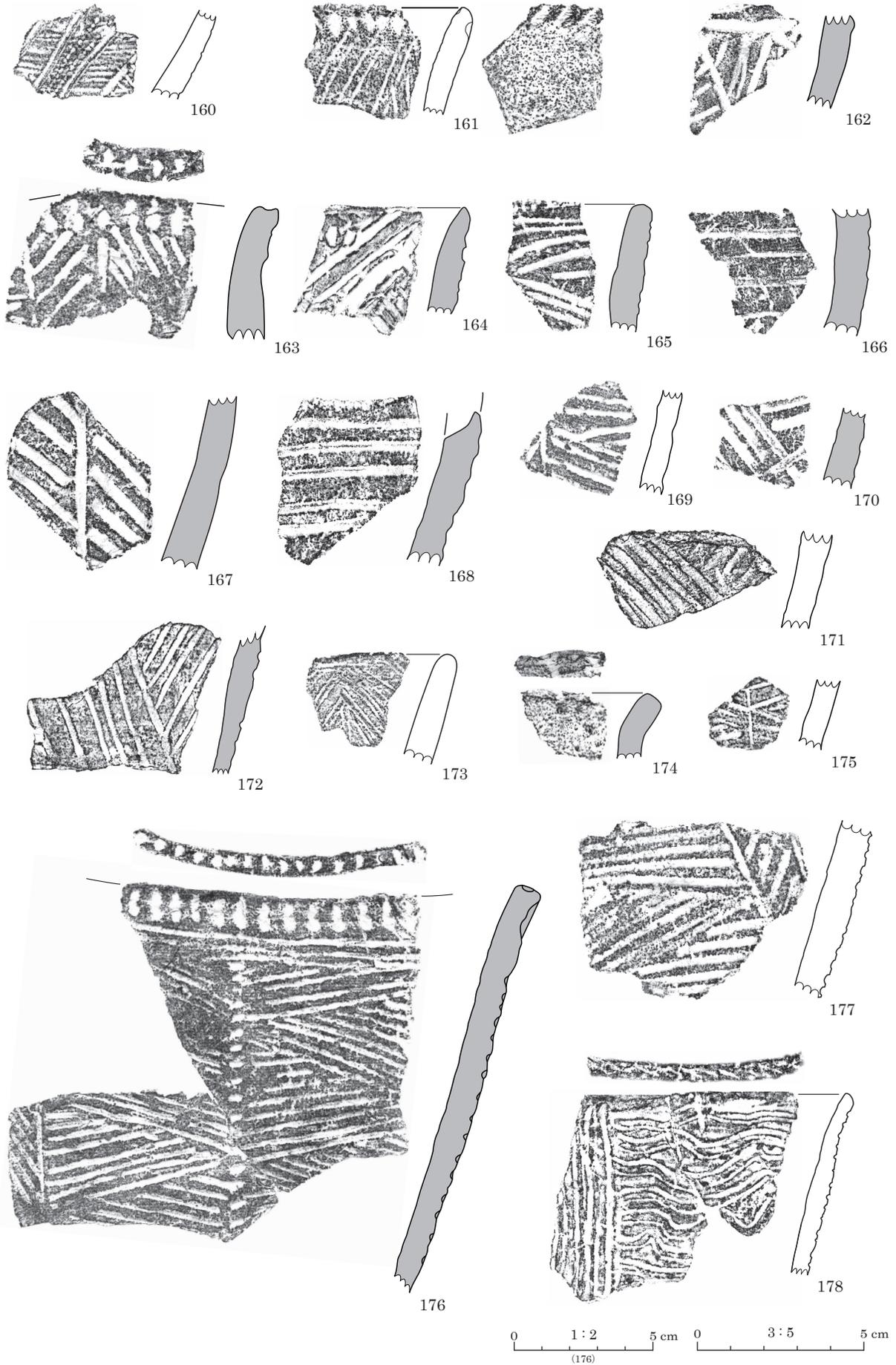
掲載No.	グリッド層位	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
101	ロ9 第1層群	前期 後半	諸磯c式	深鉢 胴部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒少 7.5YR6/8 7.5YR7/1 7.5YR7/2	内面横ミガキ 7mm	①幅3.5mmの半載竹管状工具で縦位の集合沈線を施文。②幅3.5mmの隆起線を貼付。③その上を幅3.5mmの半載竹管状工具で押し引き、結節浮線文を施文。	
102	ロ9 第1層群	前期 後半	諸磯c式	浅鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母やや多, 1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒少 7.5YR5/6 7.5YR5/1 7.5YR5/8	直角に内折して口唇部作出 口唇～外面横ミガキ, 内面横ナデ 7mm	焼成前に直径3cmの外から内へ穿孔を施す。口唇上に幅1mmで断面弧状の沈線を施文。	
103	ロ9 第II層群	前期 後半	十三菩提式	深鉢 口縁部	白色砂粒少 5YR5/4 7.5YR6/2 7.5YR5/3	口唇: 内傾角頭状 内面横ミガキ, 口唇ナデ 6mm	①幅2.5mmの隆起線を縦位、曲線状に貼付。②その上を幅3mmの半載竹管状工具で押し引き、結節浮線文を施文。	
104	ハ6 105～110	前期 後半	十三菩提式	深鉢 胴部	黒色砂粒やや多, 白色砂粒, 褐色砂粒少 10YR4/2 7.5YR4/3 5Y4/1	内面横ナデ 10mm	①幅6mmの半載竹管状工具を押し引き、C字状の連続爪形文をそれぞれ平行させて施文。②余白部分を彫去。	外面に昆虫圧痕、105と同一個体
105	ハ6 115～120	前期 後半	十三菩提式	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母, 白色砂粒少 7.5YR5/3 10YR6/1 7.5YR3/1	内面横ミガキ 9mm	幅6mmの半載竹管状工具を押し引き、連続爪形文をそれぞれ平行させて施文。	内面黒色化、104と同一個体
106	ハ8 110～115	前期 後半	十三菩提式	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母多, 1mm以下の石英, 白色砂粒少 7.5YR4/6 7.5YR6/2 7.5YR4/1	内面ナデ 7mm	幅2mmの半載竹管状工具で結節浮線文に似せた連続爪形文を同心円状に施文。	内面黒色化、107と同一個体
107	ロ9 第1層群	前期 後半	十三菩提式	深鉢 底部付近	1mm以下の黒雲母多, 1mm以下の石英, 白色砂粒やや多, 1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR5/6 10YR5/2 7.5YR3/1	内面ナデ 7mm	底部付近で胴部が強く外に屈曲する深鉢。幅2mmの半載竹管状工具で結節浮線文に似せた連続爪形文を同心円状に施文。	内面黒色化、106と同一個体
108	ロ8 ①層	前期 後半	十三菩提式	深鉢 胴部	1mm以下の石英やや多, 1mm以下の黒雲母, 光沢黒色粒子少 7.5YR5/4 10YR6/2 10YR6/3	内面斜ナデ 7mm	幅6.5mmの半載竹管状工具で①横位、②半円状に半肉彫りの平行沈線を施文。③円の中心部を彫去。	
109	ニ5 110～115	前期	型式不明	深鉢 胴部	黒色砂粒, 褐色砂粒やや多, 1mm以下の光沢黒色粒子少 5YR5/3 5YR6/4 7.5YR5/2	外面斜ミガキ, 内面横ナデ 8mm	単節斜縄文LRを横位施文。縄文は一部磨り消される。	
110	ハ8 105～110	前末～ 中初	型式不明	深鉢 胴部	1mm以下の石英多, 1mm以下の黒雲母やや多, 1mm以下の光沢黒色粒子少 5YR5/4 10YR7/3 10YR7/3	内外面ナデ 8mm	単節斜縄文RLを横位施文。条幅3mm, 条同士の間隔が広く施文方法に疑問が残る。	
111	ニ8 第1層群	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 口縁部	1mmの黒雲母, 1mm以下の石英, 光沢黒色粒子やや多, 黒色砂粒少 7.5YR4/6 7.5YR6/1 10YR6/2	内面, 外面隆帯横ナデ 8mm	①隆帯を貼付、彫去してY字状の懸垂文を施文。懸垂文上部に②幅4mmの半載竹管状工具で半肉彫りの集合沈線を斜位施文。③同一工具で②の上下端を切つて半肉彫りの平行沈線を横位施文。懸垂文下部に②同一工具で平行沈線を縦位施文。③幅2mmで断面弧状の短沈線を斜位施文。	
112	イ9 ①層	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 胴部	1mm以下の石英多, 1mm以下の黒雲母, 光沢黒色粒子やや多 10YR3/3 10YR6/6 10YR6/4	内面斜ナデ 9mm	幅6mmの半載竹管状工具で①斜位、②横位に半肉彫りの集合沈線を施文。	
113	ニ9 ①層	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 胴部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色粒子少 10YR6/3 10YR6/1 5Y5/1	内面斜ナデ 6mm	①幅4mmの半載竹管状工具による半肉彫りの平行沈線で区画。②同一工具で区画内に集合沈線を充填。③区画外を彫去。	114と同一個体
114	イ9 第1層群	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒少 10YR6/1 10YR6/2 10YR5/1	内面斜ナデ 8mm	①幅4mmの半載竹管状工具による半肉彫りの平行沈線で区画。②区画内に同一工具で集合沈線を充填。③区画外を彫去。	113と同一個体
115	ロ9 ①層	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 胴部	1mm以下の石英多, 1mm以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒やや多 7.5YR6/3 7.5YR6/2 10YR5/3	内面横ナデ 8mm	①幅4mmの半載竹管状工具による半肉彫りの平行沈線で区画。②同一工具で区画内に集合沈線を充填。③区画外を彫去。	
116	ハ9 根椀乱	中期 前半	阿玉台式	深鉢 胴部	1mm以下の石英多, 1mm以下の黒雲母, 光沢黒色粒子やや多, 1mm以下の黒曜石少 2.5YR6/4 2.5YR6/4 7.5YR6/3	外面横ナデ, 内面斜ナデ 10mm	①幅8mm, 10mmで断面弧状～三角形の隆帯を横位に2条貼付。②隆帯に沿ってナデを施す。	
117	ハ8 ⑤層	中期 後半	焼町式	深鉢 胴部	黒色砂粒やや多, 1mm以下の黒雲母, 石英, 光沢黒色粒子少 7.5YR3/3 2.5YR5/4 2.5YR4/4	内面斜ナデ 9mm	①幅9mmで断面半円形の隆帯を横位、縦位に貼付。②幅7mmの半載竹管状工具で半肉彫りの平行沈線を隆帯に沿って施文。	
118	ロ9 第1層群	後期 前半	堀之内式	深鉢 底部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒, 黒色砂粒少, 白色礫塵少 10YR6/3 10YR5/1 10YR8/3	外面上縦ミガキ, 外面下, 内面 底面先丸の工具でミガキ 8mm	推定底径: 7.8cm。 底面に幅2mmで断面弧状の沈線を施文。	外面に黒斑



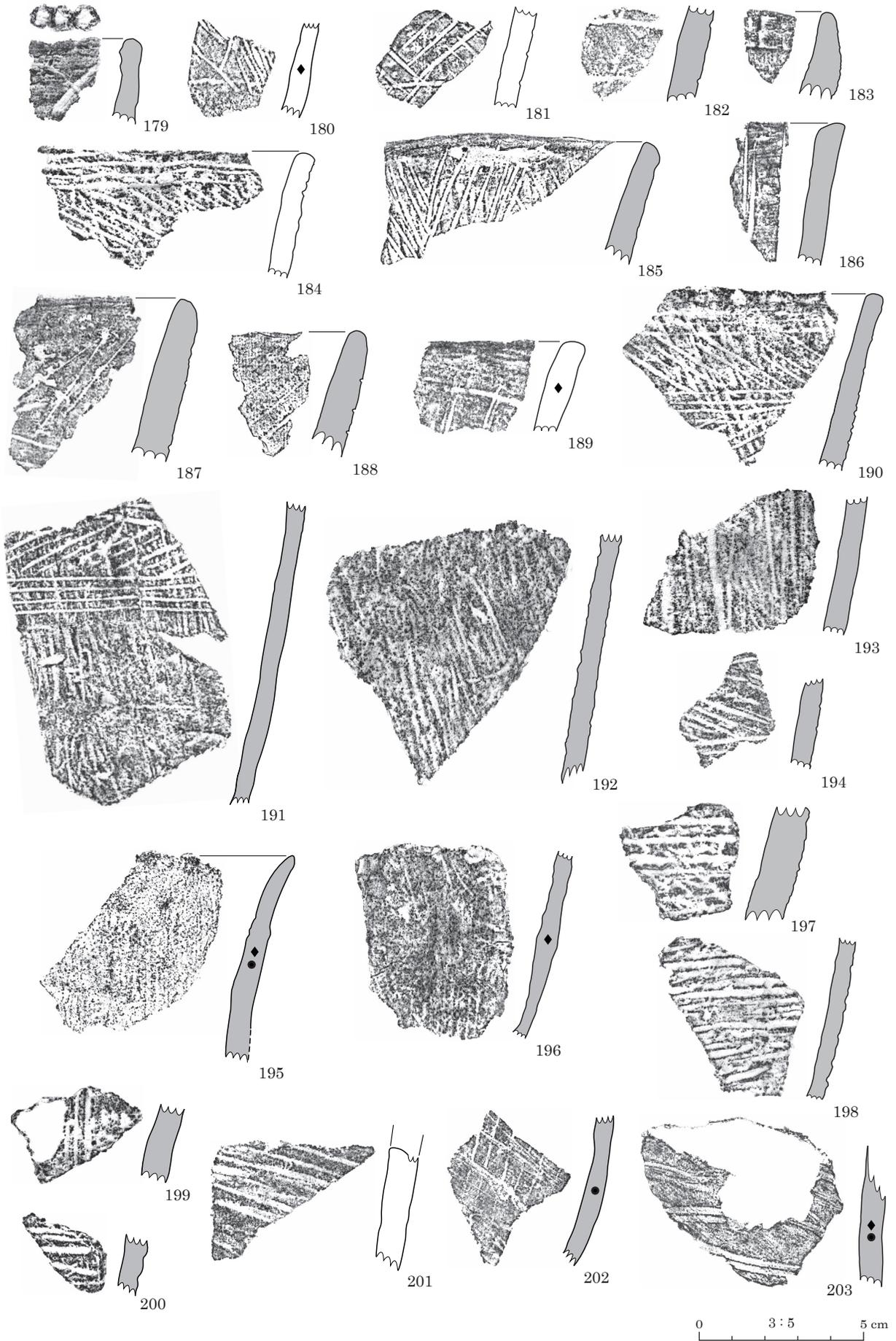
第30图 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(1)



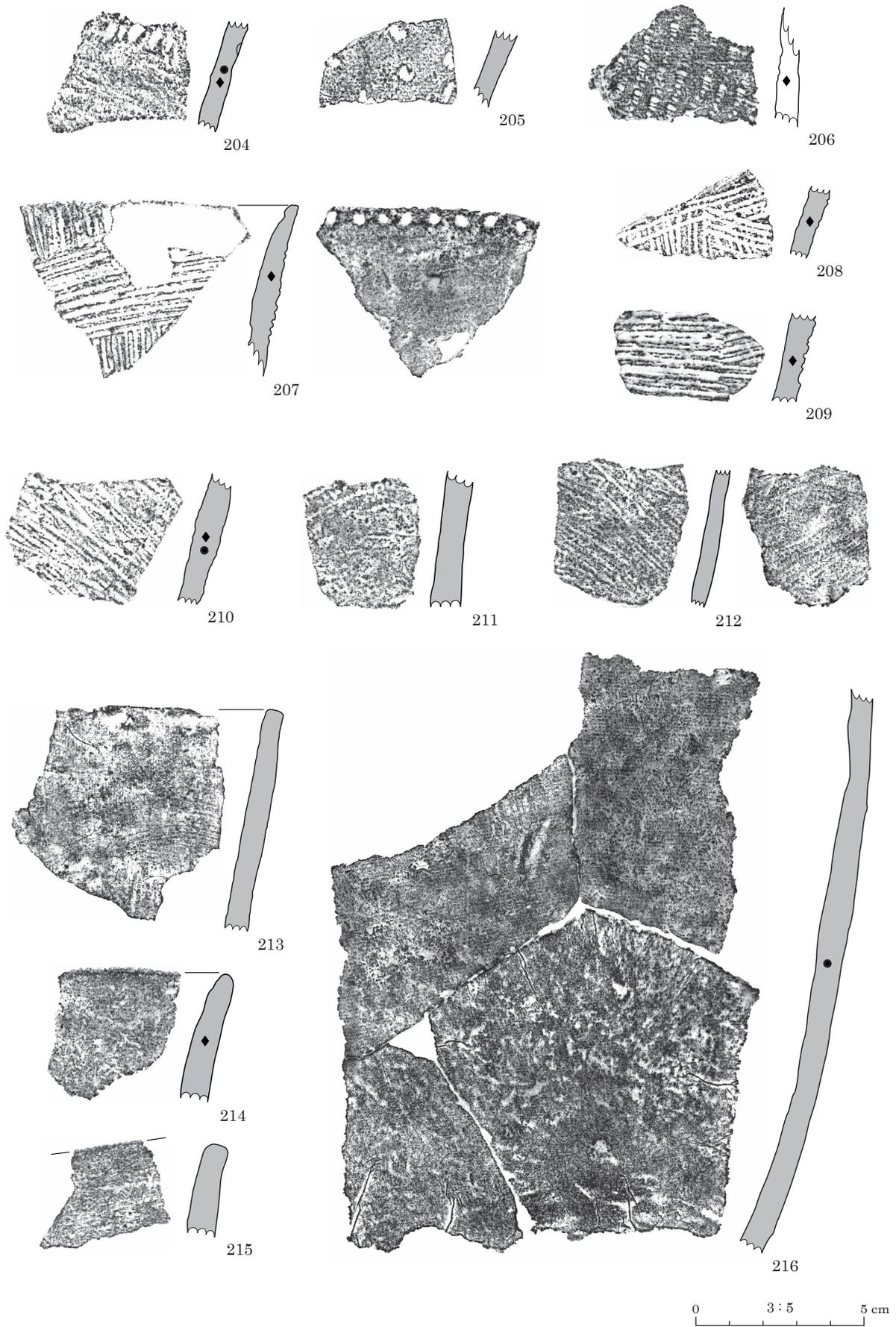
第31図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(2)



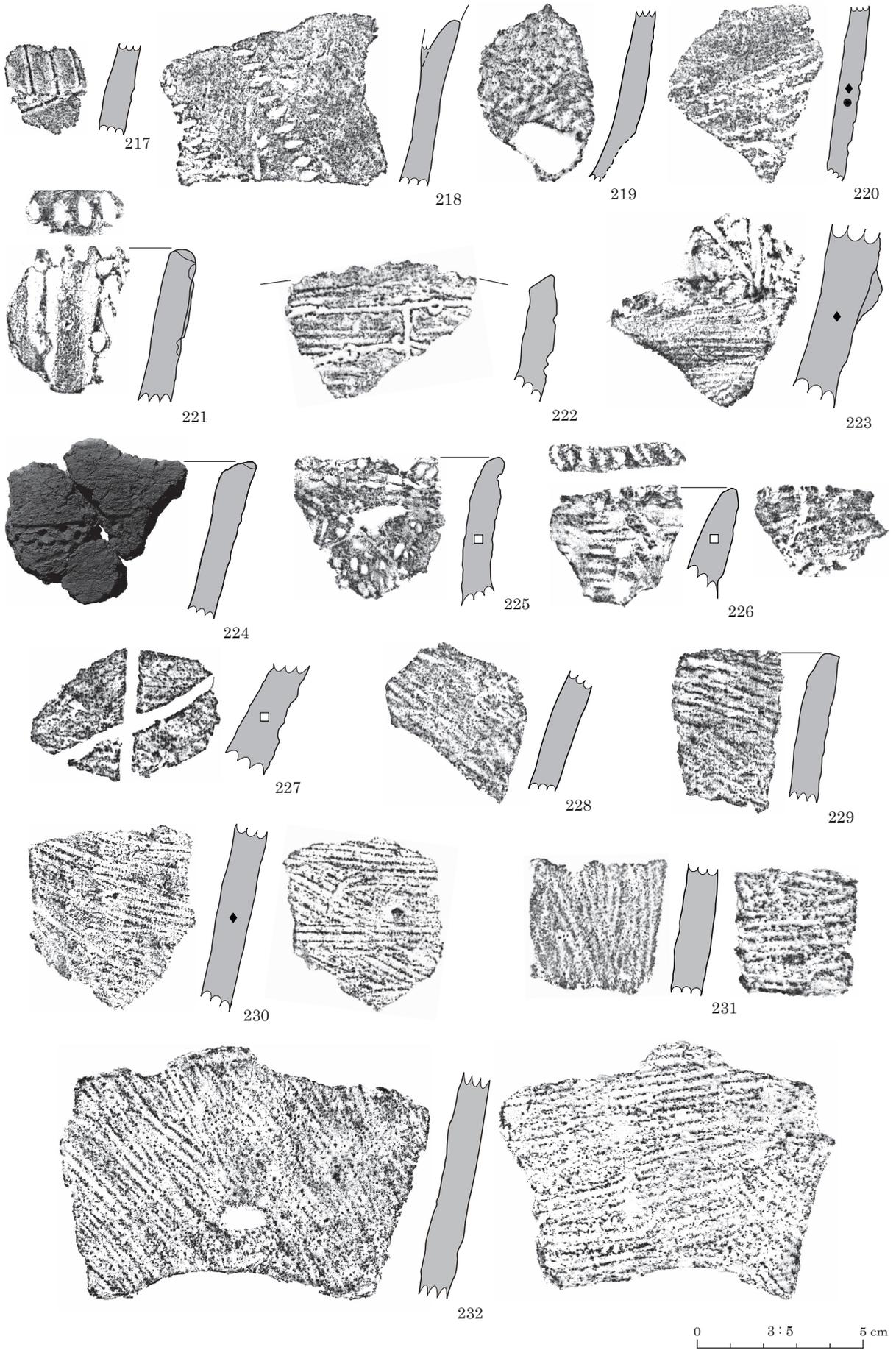
第32図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(3)



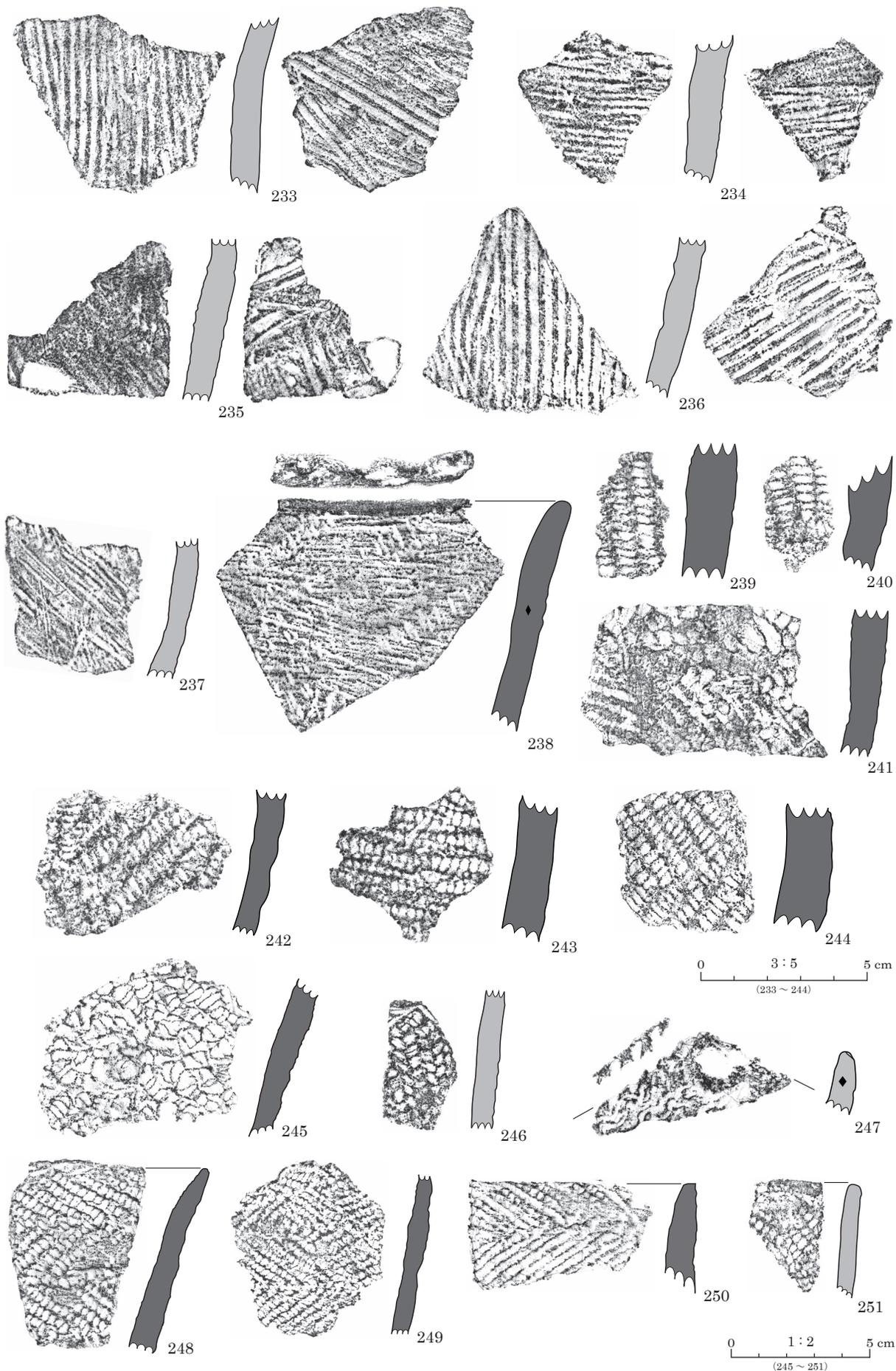
第33図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(4)



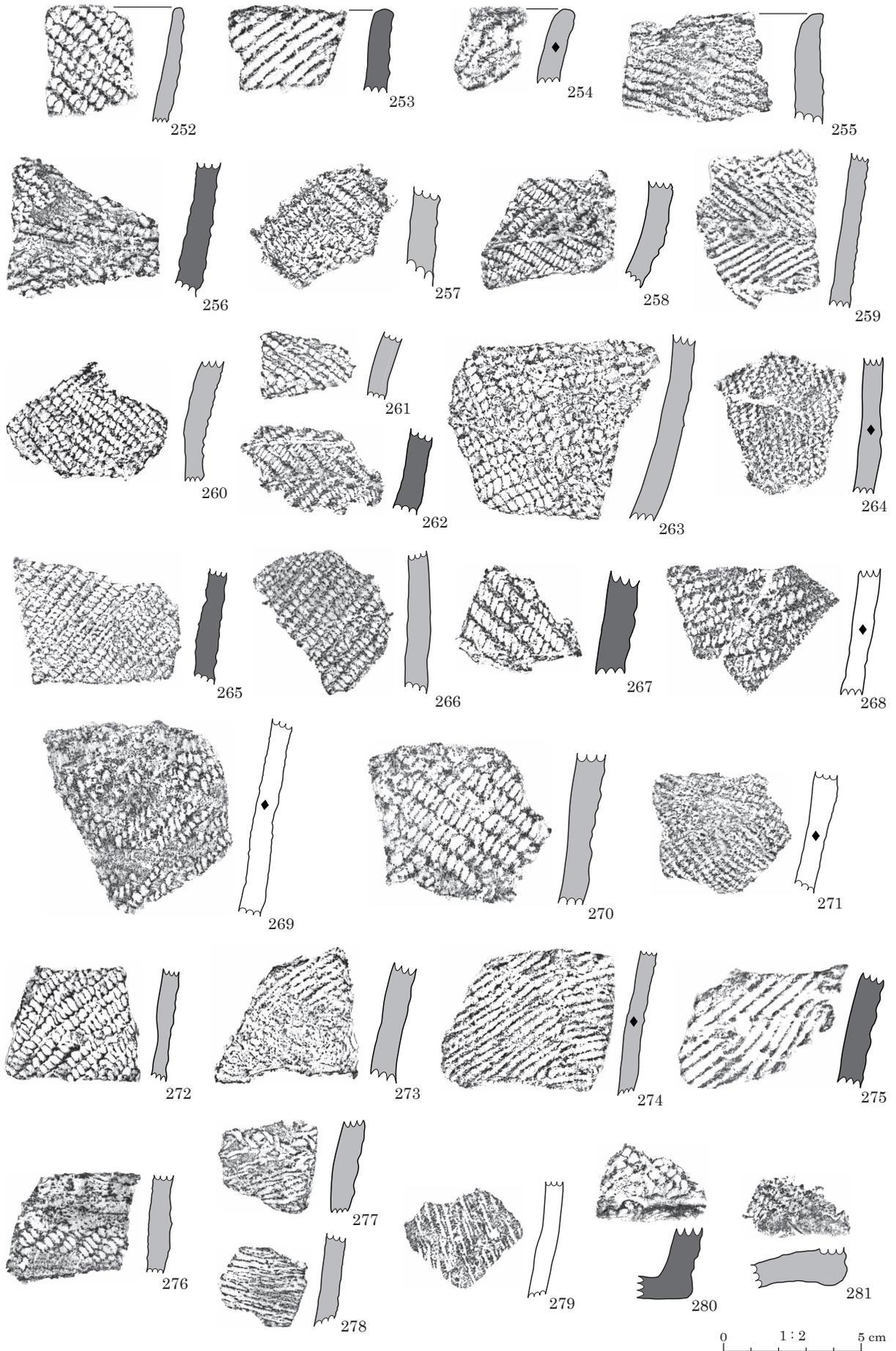
第34図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(5)



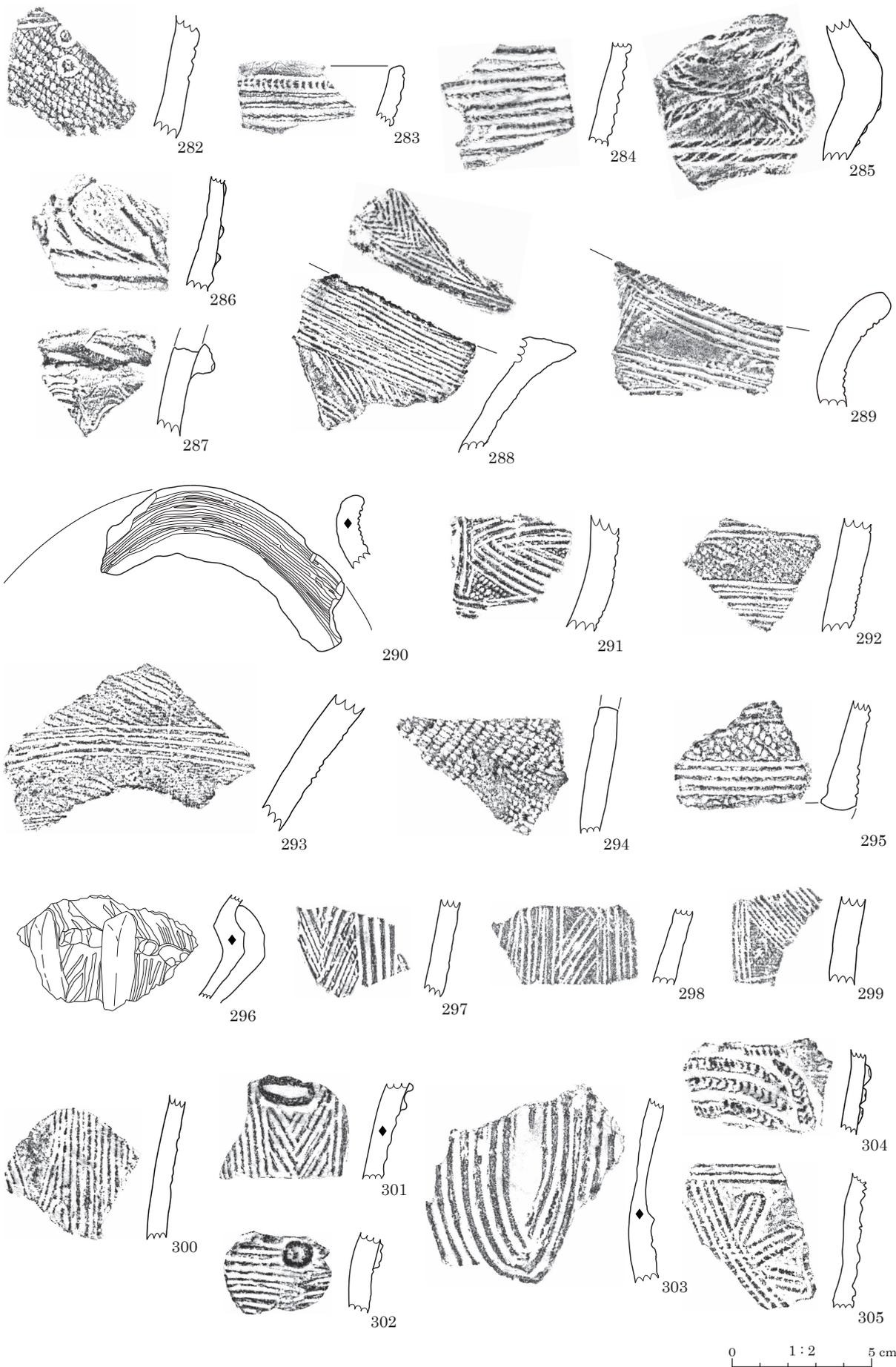
第35図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(6)



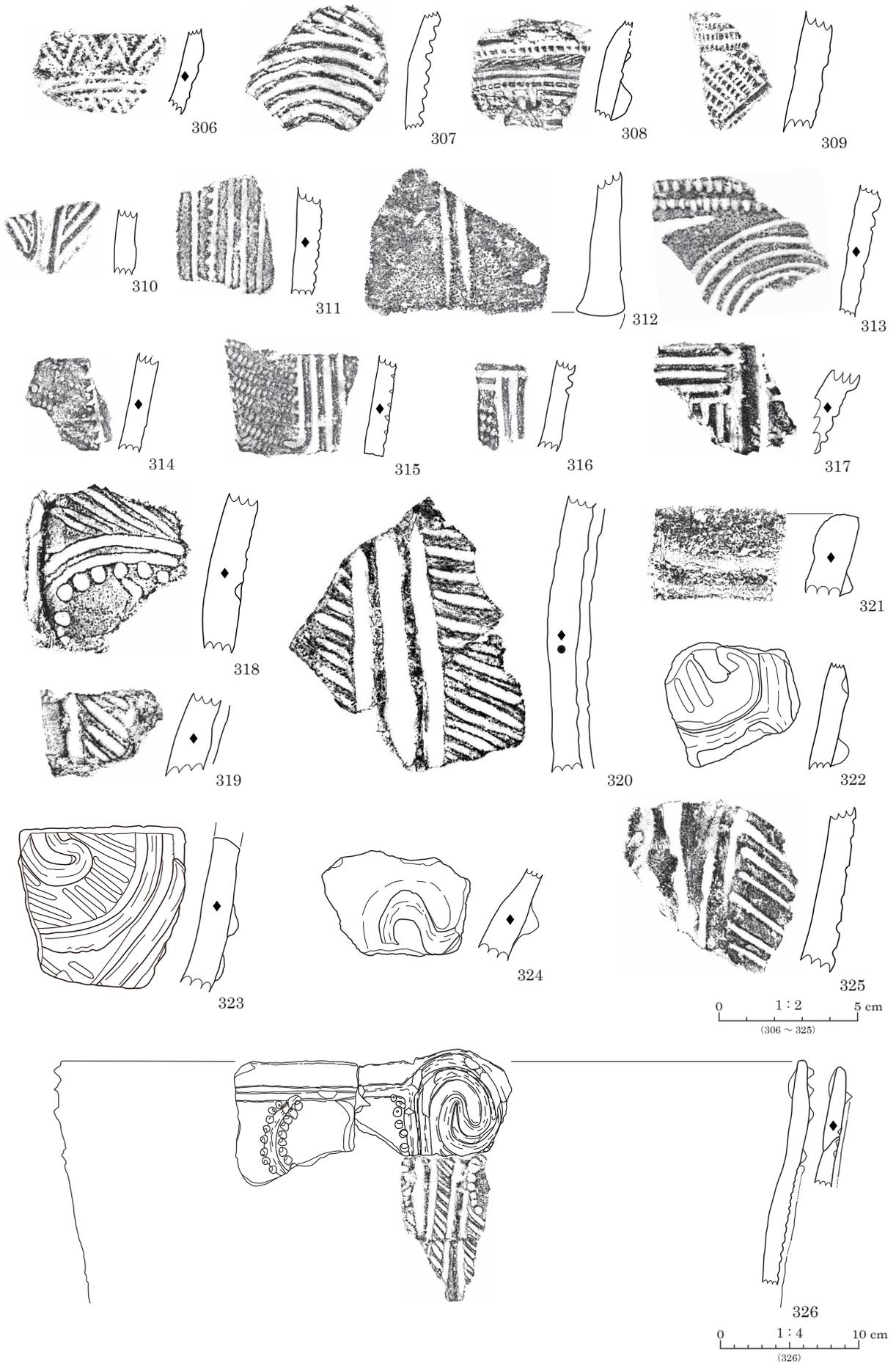
第36図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(7)



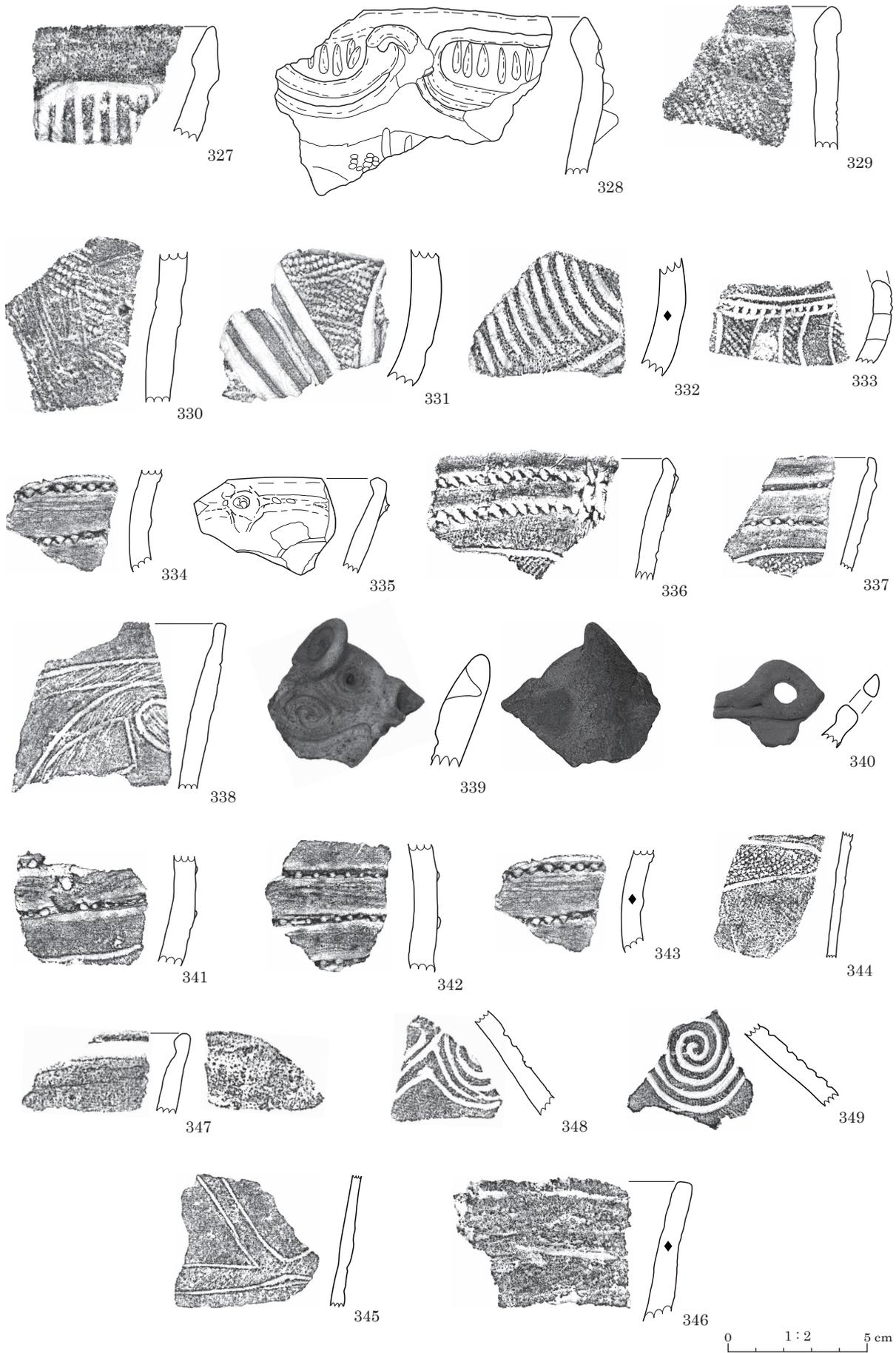
第37図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(8)



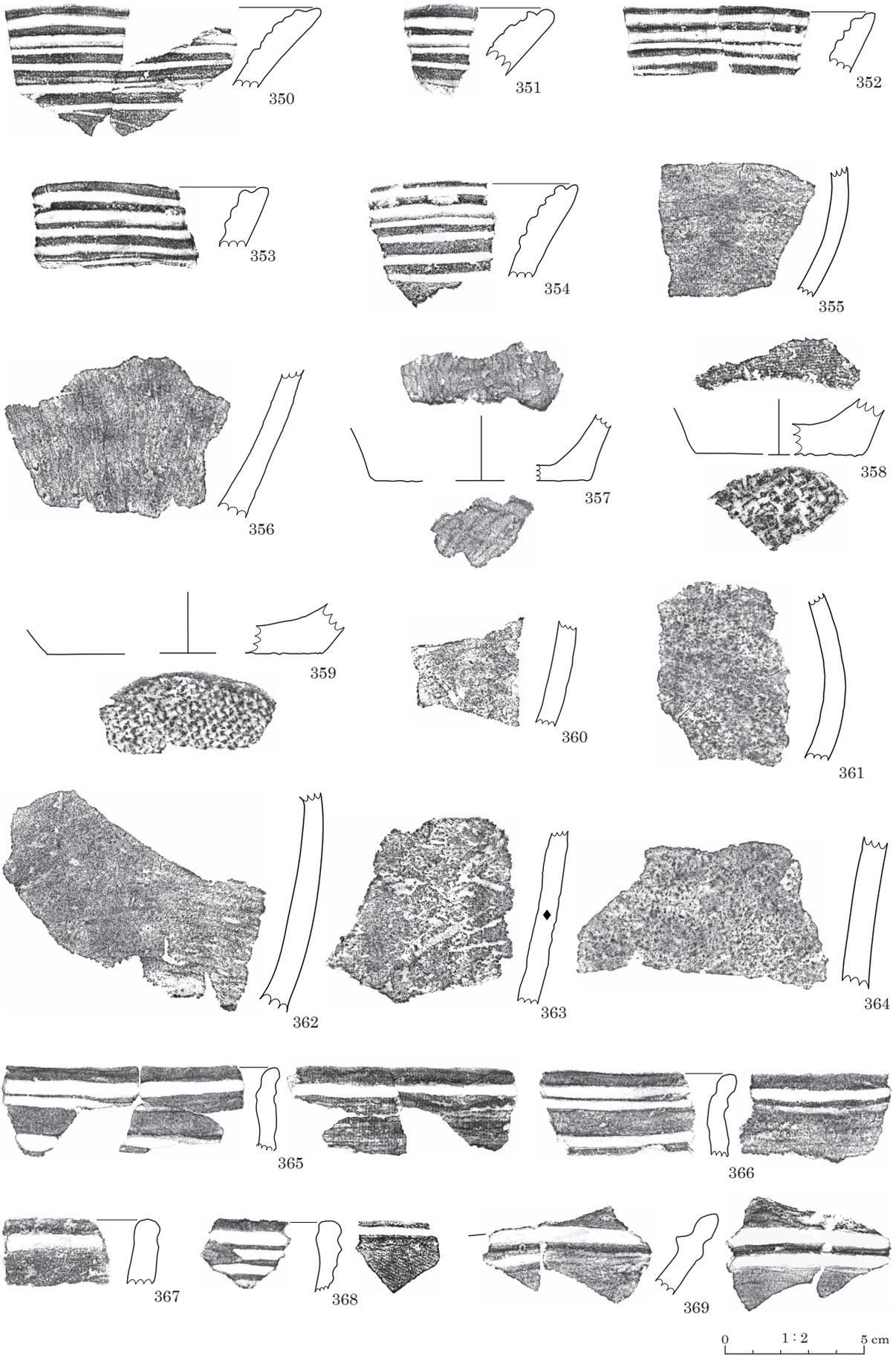
第38图 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測图(9)



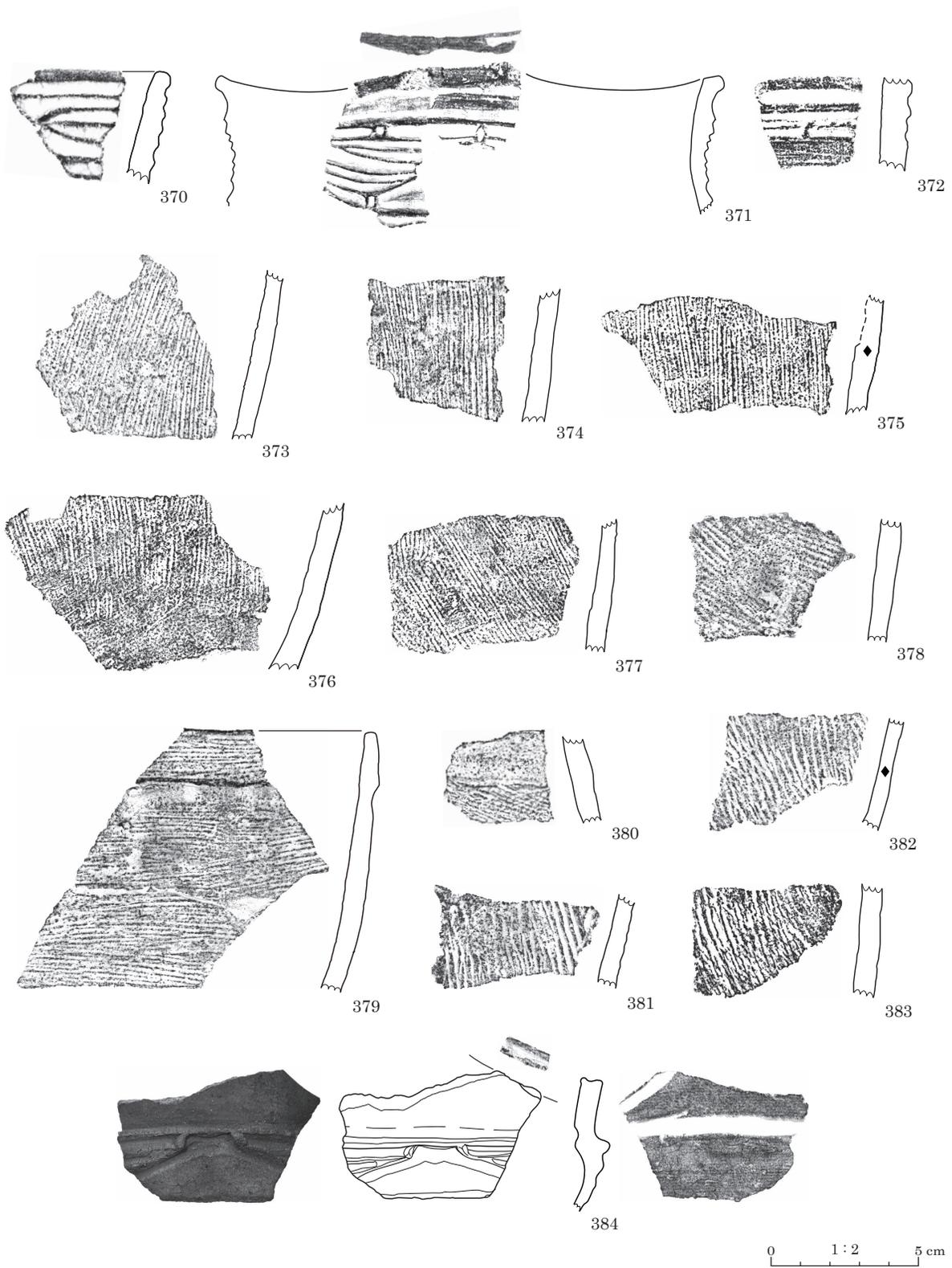
第39図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(10)



第40図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(11)



第41図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(12)



第42図 前庭部緩斜面出土 縄文土器実測図(13)

第16表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(1)

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
119	A2上 200～210	草創期	隆起線文	深鉢 胴部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子 褐色砂粒少 7.5YR5/4 7.5YR5/4 7.5YR5/4	外面横ナデ、内面斜ナデ 6mm	幅1～3mmで断面三角形の微隆起線を 横位に貼付。	子母口式に近似も胎 土、陰線の太さから 隆起線文系に分類
120	A5 5a層	草創期	多縄文	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の石英、白色砂粒少 2.5Y3/1 2.5Y6/2 2.5YR4/1	口唇：尖頭～円頭状 内外面斜ナデ 7mm	単節斜縄文LRを横位施文。条幅 2.5mm。	写真掲載 内外面黒色化
121	A1 7～8層	早期 前葉	表裏縄文	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、半透明な白色砂粒やや多、 1mm以下の石英、繊維少 10YR3/1 10YR4/3 10YR5/3	口唇：円頭状 内外面ナデ 4～6mm	単節斜縄文LRを横位施文。条幅 3.5mm。	
122	A1 7～8層	早期 前葉	表裏縄文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子やや多、1mm以 下の黒雲母、繊維少 10YR3/3 10YR4/4 7.5YR4/6	口唇：隅丸角頭状 外面横ナデ 6mm	単節斜縄文RLを横位施文。条幅 2.5mm。	
123	A1 10層	早期 前葉	回転縄文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、繊維少 7.5YR5/4 2.5Y7/1 10YR3/1	内外面斜ナデ 7mm	①ごく浅い条痕を縦位施文。②条幅 1.5mmの単節斜縄文RLを横位施文。内 面に幅1mm、3mmで断面弧状の沈線を 斜位施文。	内面黒色化
124	A1 7～8層	早期 前葉	捺糸文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒、 褐色砂粒、繊維少 5YR5/3 5YR5/4 5YR5/4	外面ミガキ	条幅1mmの捺糸文を縦位施文。施文が 浅く原体不明。	外面から内面に向か って施された補修孔
125	A1 10層	早期 前葉	捺糸文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、白色砂粒、繊維少 10YR6/3 2.5Y5/6 10YR4/1	内外面ナデ 6mm	1段Rの捺糸文を斜位施文。条幅1mm。	
126	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR5/3 10YR6/2 10YR6/4	外傾接合 口唇：角頭状 内外面横ナデ 7mm	口縁が外反する深鉢。端部波状の楕円文 を横位に帯状施文。口唇上に楕円文を施 文。	内面に黒斑、割れ口 に接合痕残る
127	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、繊維少 10YR4/2 10YR6/1 7.5YR5/3	外面ナデ、内面横ナデ 8mm	口縁が外反する深鉢。端部波状の楕円文 を横位に帯状施文。楕円の下半が端部 に連続する箇所あり。無文部に幅2～ 3mmの長円形の刺突文を施文。	外面黒色化、128と 同一個体
128	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	白色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、繊維 少 7.5YR3/1 7.5YR5/1 7.5YR5/3	内面ナデ 7mm	楕円文を横位施文。	外面黒色化、127と 同一個体
129	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂 粒少 10YR3/1 2.5Y6/1 2.5Y4/1	外面ナデ、内面斜ナデ 6.5mm	端部波状の楕円文を横位に帯状施文。	外面黒色化
130	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英多、1mm以下の光沢黒色粒子、 繊維やや多、1mm以下の黒雲母、白色砂粒少 7.5YR5/2 10YR7/1 10YR7/1	外面縦ナデ、内面斜ナデ 9mm	端部波状の楕円文を横位に帯状施文。	外面黒色化
131	A1下 170～180	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子やや多、白色砂粒、黄褐 色砂粒少 2.5Y3/1 10YR7/3 10YR5/2	外面縦ミガキ、内面横ミガ キ 8.5mm	端部波状の山形文を横位に帯状施文。	外面黒色化
132	A1 調査区内	早期 中葉	押型文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 5Y2/1 2.5Y6/1 10YR5/1	口唇：角頭状 内外面横ナデ 8.5mm	山形文を横位施文。	
133	A1 7～8層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	黒色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子 白色砂粒少 7.5YR5/6 7.5YR5/8 7.5YR4/6	内外面ナデ 5～7mm	山形文を縦位施文。	
134	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英やや多、1mm以下の黒雲母、光 沢黒色粒子少 5YR4/4 10YR6/2 10YR2/1	外面斜ミガキ、内面斜ナデ 8mm	山形文を斜位施文。	外面二次的な被熱に より褐色化、内面黒 色化
135	A1下 170～180	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	褐色砂粒やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒 子、繊維少 7.5YR3/4 7.5YR4/4 5YR5/8	内外面ナデ 6mm	山形文を縦位施文。	
136	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	白色砂粒、黒色砂粒少 7.5YR3/2 2.5Y7/2 2.5Y7/2	4mm	山形文を横位密接施文。原体長3cm。	内面剥落、137と同 一個体
137	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	灰付着により観察不能 10YR4/3 10YR7/1 10YR7/1	2.5mm	山形文を横位密接施文。	内面剥落、136と同 一個体
138	A1下 170～180	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	黒色砂粒やや多、白色砂粒少 10YR6/2 10YR4/3 10YR4/1	外面斜ナデ、内面縦ナデ 7mm	端部鋸歯状の山形文を横位施文。	
139	A1 8～9層	早期 中葉	押型文	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 10YR4/1 10YR6/1 10YR6/1	口唇：円頭状 口唇～内面横ミガキ 8mm	端部波状の楕円文を横位密接施文。原体 長3.5cm。	内面黒色化
140	A1 7～8層	早期 中葉	押型文	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂 粒、褐色砂粒、繊維少 10YR5/4 10YR6/2 10YR4/1	口唇：円頭状 内面ナデ、口唇ミガキ 6mm	端部波状の楕円文を横位密接施文。	
141	A1 7～8層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	黒色砂粒、繊維やや多、白色砂粒少 7.5YR6/8 10YR6/6 10YR6/6	内面横ミガキ 7mm	端部波状の楕円文を横位密接施文。端部 に楕円の頂部が連続する箇所あり。	内面に黒斑
142	A1 9層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、繊維 少 7.5YR6/4 10YR6/2 10YR6/2	内面縦ナデ 7mm	端部波状の楕円文を横位密接施文。	内面薄く黒色化
143	A1 120～130	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子やや多、白色砂粒 、繊維少 10YR5/3 10YR6/2 10YR7/2	内面斜ナデ 6.5mm	楕円文を横位施文。	内面薄く黒色化
144	A1 7～8層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、繊維少 2.5Y5/2 2.5Y5/3 5Y2/1	内面縦ナデ 6mm	楕円文を横位施文。	内面に黒斑
145	A1 7～8層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、繊維少 10YR5/4 10YR5/2 10YR3/1	内面斜ナデ 6mm	楕円文を横位施文。	内面薄く黒色化
146	A1 9層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英やや多、1mm以下の黒雲母、光 沢黒色粒子、白色砂粒、繊維少 7.5YR4/1 10YR6/2 10YR5/1	内外面ナデ 6.5mm	楕円文を横位施文。	
147	A1下 170～180	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mmの石英多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒 子、黒曜石少 7.5YR7/4 10YR6/2 10YR2/1	内面ナデ 11mm	①下段に斜位、②上段に横位の順で楕円 文を密接施文。	内面黒色化
148	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子多、1mm以下の黒雲母、 白色砂粒やや多、繊維少 2.5Y7/2 2.5Y4/1 2.5Y3/1	内面凹凸 外面ミガキ、内面ナデ 7～10mm	端部は波状の楕円文を横位密接施文。原 体径13mm。端部に楕円の頂部が長方形 状に連続する箇所あり。	内面黒色化、外面 器表面の一部剥落、 151と同一個体
149	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、黒色砂 粒少 2.5Y7/3 2.5Y7/2 2.5Y2/1	内面凹凸 内面斜ナデ 6～9mm	楕円文を横位施文。	外面楕円部に光沢、 内面黒色化
150	A1 8層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR5/3 7.5YR6/1 7.5YR4/1	内面斜ナデ 8mm	粗大な楕円文を回転施文。	内面黒色化
151	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色 粒子少 10YR3/1 2.5Y2/1 2.5Y2/1	内面凹凸 内外面斜ナデ 7～9mm	楕円文を横位密接施文。端部に楕円の頂 部が長方形に連続する箇所あり。	内外面黒色化、148 と同一個体
152	A1 7～8層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	白色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒 色粒子少 7.5YR6/4 10YR6/2 10YR5/1	内面凹凸 内面縦ナデ 8～11mm	端部波状の楕円文、端部直線状の匱状文 を横位密接施文。楕円文の原体長4cm。	内面薄く黒色化、 153と同一個体

第17表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(2)

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
153	A1 7～8層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒, 繊維少 7.5YR6/6 7.5Y5/1 10YR3/2	内面横ナデ 7mm	①楕円文②簾状文の順に横位密接施文。 簾状文の端部は直線状。	内面薄く黒色化、 152と同一個体
154	A1 120～130	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 繊維少 10YR6/3 10YR6/2 10YR4/1	内面斜ナデ 6mm	端部波状の楕円文を横位密接施文。	内面薄く黒色化
155	A2上 200～210	早期 中葉	押型文	深鉢 底部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子少 2.5Y5/1 2.5Y6/2 2.5Y3/1	内面ナデ 7.5mm	尖底部。楕円文を縦位密接施文。	外面楕円部に光沢
156	A1下 170～180	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒少 7.5YR4/1 10YR7/2 2.5YR6/2	外面斜ナデ, 内面斜ミガキ 7mm	格子目文を斜位施文。	内面黒色化
157	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の石英少 7.5YR6/3 10YR7/2 7.5YR2/1	内面ナデ 6mm	格子目文を斜位施文。	内面黒色化
158	A1 10層	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	白色砂粒やや多 10YR3/1 10YR4/1 10YR4/1	内面横ナデ 7mm	格子目文を斜位施文。	内外面～断面黒色化
159	A1下 170～180	早期 中葉	押型文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子やや多、白色砂粒少 10YR6/3 10Y3/1 2.5Y2/1	外面縦ナデ, 内面横ナデ 5mm	格子目文を横位施文。	内面黒色化
160	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英, 黒色粒子少 7.5YR4/6 10YR6/1 10YR5/4	内面横ナデ 7.5mm	①細密貝殻条痕を横位施文。②幅3mmの引きずり文を斜位施文。③その間に貝殻縁線文を施文。	外面に黒斑
161	A1 調査区内	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子多、白色砂粒, 褐色砂粒少 7.5YR5/1 7.5YR3/1 10YR6/4	口唇: 円頭状 内外面横ナデ 8mm	幅2mmで断面弧状の沈線を斜位施文。口唇下に幅2mmの先丸の工具を直角に当て、手前に向かって動作を加えることで縦位の刺突文列を施文。口唇上に幅5mmのヘラ状工具で口唇に斜行する刻みを連続施文。	外面に黒斑
162	A2上 180～200	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子, 褐色砂粒やや多、繊維少 7.5YR6/4 7.5YR6/4 7.5YR5/3	内外面斜ナデ 9mm	上部に幅4mmの沈線を横位施文。その下に幅2mmの沈線を方向を違えて斜位に施文。沈線断面はいずれも弧状。	
163	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英, 白色砂粒, 繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR5/3 2.5Y5/3 10YR5/4	口唇: 角頭状 内外面横ナデ 10mm	小さく外反するゆるい波状口縁。①幅3mmの多岐竹管状工具を2条一組にして斜角に当て、D字状の刺突文列を施文。②幅3mmで断面コの字状の沈線を縦位施文。③それを軸に同一工具で羽状に沈線を施文。沈線はナデにより一部埋没。口唇上に①と同様の刺突文列を施文。	外面一部薄く黒色化
164	A1下 160～170	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒少 10YR7/3 10YR7/3 10YR6/3	口唇: 尖頭状 内外面横ナデ 8mm	①幅2mm, 3mm, 4.5mmで断面コの字状の沈線を下から上の動作で斜位施文。②口唇直下に幅2mm, 3mmで断面コの字状の短沈線を縦位施文。短沈線は刺突文に近く、中央部を深くくぼませて施文。	内外面に黒斑、施文のタイミング早い
165	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒, 繊維少 10YR5/4 10YR5/2 7.5YR5/6	口唇: 円頭状 外面ナデ, 内面横ナデ 8mm	口唇直下に幅1mmで断面コの字状の沈線を横位施文。その下に幅3mmで断面弧状の沈線を施文。口唇上にごく浅いC字状の刺突文を連続施文。	
166	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒少 10YR4/1 2.5Y3/1 5Y2/1	外面ナデ, 内面横ナデ 10.5mm	幅3mmで断面コの字状の単沈線を横位に平行させて施文。	内外面～断面黒色化、167, 168と同一個体
167	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒, 横褐色砂粒, 繊維やや多 5Y2/1 10YR4/1 10YR3/1	外面斜ナデ, 内面横ナデ 10mm	①幅3mmで断面コの字状の単沈線を区画的に縦位施文。②その両側に同一工具で単沈線を斜位に平行させて施文。	内外面～断面黒色化、166, 168と同一個体
168	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	白色砂粒, 繊維やや多、1mm以下の石英, 光沢黒色粒子少 2.5Y6/4 2.5Y3/1 2.5Y3/1	上面割れ口、外面の器表面が薄く突出し内傾する擬口縁 外面ナデ, 内面横ナデ 8.5mm	幅3mmで断面コの字状の単沈線を横位に平行させて施文。	内外面～断面黒色化、166, 167と同一個体
169	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	光沢黒色粒子多、1mm以下の石英, 黄褐色砂粒やや多、黒色礫僅か 7.5YR5/3 10YR6/4 10YR3/2	外面横ナデ 6.5mm	①幅2mmで断面コの字状の単沈線を区画的に縦位施文。②同一工具で単沈線を数条平行させ、斜位に方向を違えて施文。	
170	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	白色砂粒, 繊維やや多、1mm以下の石英, 光沢黒色粒子少 5Y2/1 10YR4/1 2.5Y2/1	内外面ナデ 9mm	幅3mmで断面コの字状の単沈線を数条平行させ、斜位に方向を違えて施文。	内外面～断面黒色化
171	A1 120～130	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒, 黒色砂粒少 10YR6/4 2.5Y6/2 2.5Y6/2	内外面ナデ 8mm	幅3mmの単沈線を数条平行させ、斜位に方向を違えて施文。沈線はナデによりならされる。	
172	A1 10層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒, 繊維少 7.5YR5/3 7.5YR5/1 7.5YR4/1	外面縦ナデ, 内面横ナデ 5～6mm	幅2mmで断面弧状の単沈線を数条平行させ、斜位に方向を違えて施文。	
173	Aトレ 調査区内	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英多、白色砂粒, 灰色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子, 黒曜石少 7.5YR5/6 7.5YR7/6 5YR4/2	口唇: 円頭状 内外面斜ナデ 8.5mm	①幅1mmで断面弧状の沈線を矢羽状に施文。②口唇下に同一工具で沈線を横位施文。	内面薄く黒色化
174	A2上 200～210	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母, 石英, 繊維少 10YR3/1 2.5Y3/2 7.5YR3/1	口唇: 角頭状 内外面斜ナデ 6mm	口縁が小さく外反する深鉢。口唇上にヘラ状工具で口唇に斜行する刻みを施す。	
175	A1 8～9層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英やや多、1mm以下の黒雲母, 光沢黒色粒子少 10YR3/1 10YR4/2 10YR4/2	外面ナデ 7mm	①浅い条痕を横位施文。②幅1mmで断面弧状の沈線を区画的に縦位施文。③それを軸に幅1.5mmで断面半円形の沈線を斜位施文。	
176	A1 調査区内	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	石英多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多、白色砂粒, 褐色砂粒, 繊維少、褐色礫僅か 10YR5/2 10YR5/2 10YR5/2	口唇: 角頭状 内外面ナデ 9mm	①幅2mmで断面コの字状の単沈線を数条平行させ斜位に引き、縦位展開の歯状文を施文。胴部から底部の順で施文。②口唇直下に同一工具で横位沈線を3条引く。①に重ねて幅3mmの多岐竹管状工具を斜角に当て、楕円形刺突文列を施文。口唇直下に同一工具を2条一組にして斜角に当て、D字状刺突文列を施文。口唇上に同様の刺突文列を施文。	外面に種子圧痕、第1次調査報告第32図・59との接合資料
177	A1 調査区内	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1～2mmの石英, 1mmの黒曜石, 白色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR5/3 10YR4/1 10YR4/4	外面ナデ 10mm	幅2mmで断面コの字状の沈線を方向を違えて斜位施文。	
178	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	白色砂粒, 褐色砂粒多、黒色砂粒やや多 2.5Y3/1 2.5Y3/1 2.5Y3/1	口唇: 円頭状 外面ナデ, 内面斜ミガキ 6.5mm	①下から上の動作で、幅1.5mmで断面コの字状の単沈線を数条平行させて縦位施文。②2条一組の工具で幅1.5mmと1mmの平行沈線を波状に施文。沈線断面はコの字状と半円形。口唇上にヘラ状工具で口唇に斜行する刻みを連続施文。	内外面黒色化
179	A5 5層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	白色砂粒やや多、褐色砂粒, 繊維少 10YR3/1 7.5YR3/1 7.5YR4/2	口唇: 円頭状 内外面横ナデ 5mm	口唇直下に沈線を横位施文。その下に沈線を斜位施文。内面口唇直下に沈線を横位施文。沈線はいずれも引きずり文状で浅く、幅4～4.5mmで断面コの字状。口唇上に幅4mmで断面円形の工具を口唇に直行させて押圧。	外面黒色化

第18表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(3)

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
180	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子やや多、1mm以下の黒雲母、石英少 5YR4/4 10YR6/2 10YR4/2	内外面横ナデ 5.5mm	幅1mmで断面半円形の沈線を①横位、②斜位の順に施文。	内面黒色化
181	A1 9層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR6/3 10YR6/2 10YR3/1	内外面斜ナデ 8mm	幅1.5mmで断面弧状の沈線を方向を違えて斜位に施文。	内面薄く黒色化
182	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子多、1mmの石英やや多、繊維少 5YR6/4 5YR7/6 5YR3/1	外面斜ナデ 9mm	幅1mmで断面半円形の沈線を横位施文。	
183	A5 4上層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、白色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、繊維少 2.5YR3/2 7.5YR4/1 7.5YR4/4	口唇：円頭状 内外面横ナデ 4.5~8.5mm	幅9mmで結節沈線状の連続する刺突を横位施文。	
184	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 10YR2/2 10YR5/2 10YR4/1	口唇：隅丸角頭状 内面横ナデ 6mm	2条一組の工具で断面弧状の平行沈線を①斜位、②横位の順に施文。	外面に種子圧痕
185	A1 120~130	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、繊維少 10YR4/1 10YR6/2 10YR6/2	口唇：円頭~隅丸角頭状 外面横ナデ、口唇~内面ミ 8mm	幅1mmで断面半円形の単沈線を数条平行させ、方向を違えて斜位に施文。	
186	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、白色粒子、繊維少 5Y2/1 10YR6/4 5Y2/1	口唇：内傾角頭状 内外面横ミガキ 7mm	下から上の動作で幅1mmで断面弧状の沈線を縦位施文。	内外面黒斑
187	A1 10層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	繊維やや多、白色砂粒、褐色砂粒少 10YR2/1 5Y7/1 10YR2/1	口唇：円頭状 内外面ナデ、口唇~内外面 口唇直下横ミガキ 7~10mm	幅1mmで断面三角形の沈線を斜位施文。	内外面黒色化、188と同一個体
188	A1 9層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	繊維やや多、白色砂粒、褐色砂粒少 2.5Y3/1 2.5Y6/1 2.5Y4/1	口唇：円頭状 内外面にナデ、口唇~内外面 口唇直下横ミガキ 7~10mm	幅1mmで断面三角形の沈線を斜位施文。	内外面黒色化、187と同一個体
189	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mmの石英やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子少 5YR5/6 10YR5/1 7.5YR5/4	口唇：円頭状 内外面横ナデ 7.5mm	①浅い条痕を斜位施文。②幅1mmで断面弧状の浅い沈線を横位施文。	外面に黒斑
190	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子多、白色砂粒やや多、半透明な白色砂粒、繊維少 10YR3/2 10YR6/2 10YR6/2	口唇：円頭状 外面ナデ 6mm	①櫛歯状工具による浅い条痕を縦位施文。凹線は幅1.0~2.0mmで断面弧状。②口縁部から底部への順で、2条一組の工具で幅1.0mmで断面弧状の平行沈線を横位、斜位に施文。	191,192,193と同一個体
191	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒やや多、繊維少、黒色礫僅か 10YR3/1 10YR3/1 10YR6/1	外面ナデ 6mm	①櫛歯状工具による浅い条痕を縦位施文。凹線は幅1~2mmで断面弧状。②口縁部から底部への順で、2条一組の工具で幅1mmで断面弧状の平行沈線を横位、斜位に施文。	190,192,193と同一個体
192	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒多、繊維少、白色礫、褐色礫僅か 10YR4/3 2.5Y6/3 2.5Y6/3	外面ナデ 5mm	櫛歯状工具による浅い条痕を縦位施文。凹線は幅1~2mmで断面弧状。	外面二次的な被熱により褐色化、190,191,193と同一個体
193	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、黒色砂粒、白色砂粒、繊維少 10YR3/1 2.5Y7/2 2.5Y7/2	外面斜ナデ 6mm	櫛歯状工具による浅い条痕を縦位施文。凹線は幅1~2mmで断面弧状。	外面に黒斑、190,191,192と同一個体
194	A1 1層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、繊維少 7.5YR 4/3 7.5YR5/1 7.5YR4/1	内外面ナデ 5.5mm	幅1mmで断面弧状の単沈線を数条平行させて横位、斜位に施文。	内面に種子圧痕
195	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1~2mmの黒雲母、1mmの黒曜石多、繊維少 7.5YR7/4 7.5YR3/1 5YR5/6	口唇：円頭~尖頭状 内外面縦ナデ 8.5mm	外面に縦方向の擦痕顕著。	内面下部薄く黒色化、196と同一個体
196	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、繊維少 5YR4/8 5YR4/8 2.5YR4/3	外面横ナデ、内面斜ナデ 5mm	外面に縦方向の擦痕顕著。	195と同一個体
197	A1 8~9層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 5YR6/4 7.5YR6/2 7.5YR6/2	内外面ナデ 10mm	幅1.5mmで断面弧状の単沈線を数条平行させて横位施文。	
198	A5 4層群	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、白色砂粒、繊維少 7.5YR4/6 7.5YR3/1 10YR3/4	内外面ナデ 6mm	幅2mmで断面弧状の単沈線を数条平行させて横位施文。	施文のタイミング早い
199	A1下 170~180	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子少、繊維少 10YR3/2 10YR4/2 2.5Y3/2	外面ナデ、内面横ナデ 8mm	幅2.5mm,3mmで断面コの字状の単沈線を数条平行させて縦位施文。	
200	A1 8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	白色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、繊維少 10YR4/2 10YR6/1 10YR4/2	内外面ナデ 6mm	幅2mmで断面弧状の単沈線を数条平行させて横位施文。	
201	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mmの石英、白色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR4/1 2.5Y5/1 10YR5/1	上面割れ口外傾する擬口縁、外面器表面は擬口縁を呈さず割れる 外面斜ナデ、内面横ナデ 9mm	幅1.5mmで断面コの字状の単沈線を数条平行させて斜位施文。	
202	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、黒曜石、繊維少 10YR5/2 10YR5/3 10YR3/1	外面斜ミガキ、内面縦ナデ 7mm	胴部がゆるく湾曲する深鉢。幅1mmで断面弧状の沈線を斜格子状に施文。内外面に斜方向の擦痕顕著。	型式同定に疑問、外面二次的な被熱により褐色化、内面黒色化
203	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、黒曜石やや多、繊維少 10YR3/3 10YR4/2 5Y5/1	外面横ナデ、内面斜ナデ 7mm	断面弧状で引きずり文状の平行沈線を横位施文。沈線内には1条の凸線が残る。	外面の約半分剥落
204	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、黒曜石、灰色砂粒、繊維少 10YR3/3 10YR3/2 7.5YR4/4	外面斜ナデ 6mm	幅4mmのD字状の刺突文を連続して施文。	外面黒色化
205	A1 9~10層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、繊維少 7.5YR5/3 7.5YR3/1 7.5YR5/2	内外面ナデ 7mm	幅4mmのC字状の刺突文を施文。	
206	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mmの黒雲母多、1mm以下の石英やや多、黒色砂粒少 10YR3/1 7.5Y7/3 5YR4/1	内外面横ナデ 7mm	6本歯の櫛歯状工具による刺突文を間隔をおいて斜位施文。	外面黒色化
207	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、石英、白色砂粒、繊維少 10YR3/3 10YR5/1 7.5YR4/4	口唇：外面角内面丸形 内面横ナデ 7.5mm	櫛歯状工具で集合沈線を①縦位、②斜位の順に施文。凹線は幅1mmで断面コの字状。内面口唇直下に幅3mmで断面円形の先端が平坦な工具による円形刺突文を連続施文。	外面一部薄く黒色化、外面の一部剥落
208	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	黄褐色砂粒多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、繊維少、褐色礫僅か 10YR3/3 2.5Y2/1 7.5YR4/3	内面横ナデ 7mm	櫛歯状工具で集合沈線を①縦位、②斜位の順に施文。凹線は幅1mmで断面コの字状。	
209	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の黒雲母、石英、繊維少 7.5YR 4/3 10YR6/2 5YR4/4	内面横ナデ 7mm	櫛歯状工具で集合沈線を①横位②斜位の順に施文。凹線は幅1mmで断面コの字状。	内面に黒斑
210	A1 7~8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母多、1mmの黒曜石やや多、白色砂粒、繊維少、褐色礫僅か 7.5YR6/4 2.5Y5/1 2.5Y5/1	外面凹凸 外面ナデ 6~8mm	粗い条痕を斜位施文。凹線は幅1~1.5mmで断面コの字状。	外面二次的な被熱により褐色化

第19表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(4)

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
211	A2上 170～180	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	光沢黒色粒子やや多、1mm以下の石英、白色砂粒、黒色砂粒、繊維少 7.5YR5/4 7.5YR5/4 7.5YR4/2	外面斜ナデ、内面横ナデ 8mm	単節斜縄文LRを斜位施文。条幅1mm。	内面薄く黒色化
212	A1 7～8層	早期 中葉	沈線文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、繊維少 10YR5/4 10YR3/3 10YR4/2	内外面ナデ 6mm	内外面に浅く粗い条痕を斜位施文。	内面薄く黒色化
213	A1 10層	早期 中葉	無文土器	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、繊維少 2.5YR4/3 2.5YR4/3 2.5YR5/2	口唇：隅丸角頭状 外面横ナデ、内面縦ナデ 7mm	外面に横方向の擦痕顕著。	
214	A1 7～8層	早期 中葉	無文土器	深鉢 口縁部	1mm以下の石英多、繊維やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR6/4 10YR5/3 10YR4/2	口唇：円頭～尖頭状 内面凹凸 内外面横ナデ 5～8mm	無文。	内面黒色化
215	A1 7～8層	早期 中葉	無文土器	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒、繊維少 5YR5/4 10YR6/3 10YR7/2	口唇：隅丸角頭状 外面横ナデ 8mm	ゆるい波状口縁を有する深鉢。無文。	
216	A1 7～8層	早期 中葉	無文土器	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、黒曜石、繊維少 7.5YR6/4 10YR6/2 10YR6/2	外面縦ナデ、内面斜ナデ 8.5mm	尖底の深鉢。無文。	外面二次的な被熱により褐色化、内面一部薄く黒色化
217	A2上 180～190	早期 後葉	子母口式	深鉢 胴部	黒色砂粒、褐色砂粒、繊維少 10YR5/4 10YR2/1 2.5Y3/1	外面縦ナデ、内面横ナデ 6～8mm	幅1mmで断面半円形の微隆起線を縦位、斜位に貼付。内面に浅い貝殻条痕を斜位施文。	内面薄く黒色化
218	A1 7～8層	早期 後葉	子母口式 絡条体圧痕文	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、褐色砂粒、繊維少 7.5YR5/4 2.5Y6/3 10YR3/2	上面割れ口内傾擬口縁、内面器表面は擬口縁呈さず割れる 内外面横ナデ 8～9mm	幅1mmの1段Rを4～5mmの間隔で巻いた幅6mmの絡条体を斜位に押し、絡条体圧痕文を施文。	内面黒色化
219	A1 7～8層	早期 後葉	子母口式 絡条体圧痕文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、褐色砂粒少 5YR6/6 2.5Y7/2 10YR3/2	内外面斜ナデ 7mm	①絡条体条痕を斜位施文。②幅1.5mmの0段rを3～4mmの間隔で巻いた絡条体を斜位に押し、絡条体圧痕文を施文。	内面～断面黒色化
220	A1 7～8層	早期 後葉	子母口式 絡条体圧痕文	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、黒曜石、繊維少 7.5YR5/4 7.5YR5/1 10YR5/1	内外面斜ナデ 5mm	絡条体条痕を斜位施文。条痕は一部ナデ消される。	内面薄く黒色化
221	A2上 190～200	早期 後葉	鶺鴒島台式	深鉢 口縁部	白色砂粒多、1mm以下の石英やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、繊維少 10YR4/1 2.5Y2/1 7.5YR6/4	口唇：円頭状 内面凹凸 内外面斜ナデ 9～10mm	①幅3mmで断面弧状の隆起線を縦位に貼付。②幅3mmで断面弧状の沈線を斜位施文。③隆起線上に幅4mmの竹管状工具を直角に当て、円形竹管文を施文。口唇上に幅4mmの断面円形の工具を口唇に直行させて押し。	
222	Aトレ 調査区内	早期 後葉	鶺鴒島台式	深鉢 口縁部	白色砂粒多、1mmの石英、1mm以下の光沢黒色粒子、繊維少 2.5Y4/1 10YR4/1 5Y4/1	口唇：内傾角頭状 内外面ナデ 9.5mm	ゆるい波状口縁を有する深鉢。①内外面に貝殻条痕を横位施文。②幅4mmの竹管状工具で円形竹管文を施文。幅1.5mmで断面半円形の沈線を横位、縦位施文。円形竹管文が先行する箇所と沈線が先行する箇所を両方あり、内外面の口唇端部に幅2mmで断面半円形の刺突文を連続施文。	
223	A2 7層	早期 後葉	鶺鴒島台式	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、褐色砂粒少 5YR5/4 5YR5/1 5YR6/4	外面横ナデ 14mm	①幅11mmで断面三角形の隆帯を横位に貼付。②幅3mmで断面半円形の沈線により幾何学的な文様を施文。沈線間に先端が平坦な工具を斜角に当て、三角形の刺突文を施文。隆帯下に浅い貝殻条痕を横位施文。	
224	A1 8～9層	早期 後葉	鶺鴒島台式	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 10YR4/2 10YR4/1 10YR4/2	口唇：内傾角頭状 外面斜ナデ 9mm	①幅3mmで断面弧状の沈線で区画。②区画内に先丸の工具を直角に当て、円形刺突文を施文。内面に浅い貝殻条痕を斜位施文。口唇上に幅4mmで断面三角形の口唇に直行する刻みを連続施文。	写真掲載 外面に黒斑
225	A2 180～190	早期 後葉	茅山下層式	深鉢 口縁部	白色砂粒、繊維やや多、1mmの石英、1mm以下の光沢黒色粒子、結晶片岩少 7.5YR4/6 10YR4/1 5YR4/4	口唇：内傾角頭状 内面凹凸 10mm	2本一組の楕円形の刺突文列により幾何学的な文様を施す。	
226	A2上 190～200	早期 後葉	茅山下層式	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒やや多、繊維少、黒色砂粒、結晶片岩僅か 5YR5/4 5YR5/4 5YR5/4	口唇：円頭～隅丸角頭状 12mm	①貝殻条痕を横位施文。②幅4mmで断面の字状の沈線を斜位施文。内面に浅い貝殻条痕を斜位施文。口唇上に幅1mmで断面半円形の口唇に直行する刻みを連続施文。	
227	A2上 150～160	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	白色砂粒多、繊維やや多、1mm以下の石英、結晶片岩少、白色礫僅か 7.5YR4/1 7.5YR5/2 5YR5/4	内面凹凸 外面ナデ、内面斜ナデ 10～11.5mm	①浅い条痕を横位施文。②幅4mmで断面の字状の沈線を縦位、③斜位に交差させて施文。	外面一部薄く黒色化
228	A1 7～8層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、繊維やや多 7.5YR 4/3 10YR5/3 10YR3/1	内面凹凸 内面ナデ 8～9mm	浅い貝殻条痕を斜位施文。	外面に黒斑、内面黒色化
229	A1 8～9層	早期 後葉	条痕文	深鉢 口縁部	1mm以下の石英多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、灰色粒子、繊維やや多 7.5YR4/4 7.5YR4/1 10YR4/3	口唇：内傾角頭～角頭状 内面横ナデ 9.5mm	浅い貝殻条痕を斜位施文。	
230	A3 300～310	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	白色砂粒多、繊維やや多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、灰色砂粒少 7.5YR6/4 7.5YR5/1 7.5YR5/3	10.5mm	外面に斜位、内面に方向を違えた斜位の貝殻条痕を施文。	内面薄く黒色化、 231.232と同一個体
231	A2下 220～230	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	白色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR6/6 7.5YR7/3 7.5YR6/3	内面凹凸 9～10mm	外面に縦位、内面に横位の貝殻条痕を施文。	230.232と同一個体
232	A2上 180～190	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	褐色砂粒多、白色砂粒、灰色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英少 7.5YR6/8 10YR6/1 7.5YR6/4	10mm	外面に斜位、内面に横位の貝殻条痕を施文。	内面一部薄く黒色化、 230.231と同一個体
233	A5 5層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	黄褐色砂粒多、黒色砂粒やや多、白色砂粒、繊維少 2.5YR2/6 7.5YR1.7/1 10YR2/1	内外面凹凸 7～8mm	外面に縦位、内面に斜位の貝殻条痕を施文。	内面～断面黒色化
234	A3 9層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	黒色砂粒多、1mm以下の石英、繊維やや多、白色砂粒少 10YR5/3 10YR4/2 10YR7/6	内面ナデ 9mm	内外面に細密貝殻条痕を横位施文。	
235	A5 5層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 5YR5/8 10YR5/2 10YR5/2	内面凹凸 外面斜ナデ 8～9mm	内外面に方向を違えた斜位の貝殻条痕を施文。外面の条痕はナデ消される。	内面～断面黒色化
236	A5 5層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	白色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英少 10YR5/3 10YR3/1 10YR7/3	内外面凹凸 8～10mm	外面に縦位、内面に斜位の貝殻条痕を施文。	断面黒色化
237	A1 7～8層	早期 後葉	条痕文	深鉢 胴部	黒色砂粒、白色砂粒、褐色砂粒、繊維やや多 5YR6/8 5YR6/8 5YR5/8	内面凹凸 内面ナデ 6～7.5mm	貝殻条痕を斜位施文。条痕の他に櫛歯状工具による斜方向の擦痕が顕著。	

第20表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(5)

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
238	A 2 4b層	早期 末葉	絡条体圧痕文	深鉢 口縁部	繊維多、白色砂粒多、黒色砂粒やや多、1mm以下の黒雲母少 10YR7/3 7.5Y7/2 10YR5/1	口唇：円頭～内傾角頭状 内面凹凸 内面斜ナデ 11mm	①絡条体条痕を横位施文。凹線は幅1mmで断面弧状。②幅1mmの1段L縄を巻いた絡条体で絡条体圧痕文を斜位施文。口唇上に同一原体を口唇に斜行させて押圧。	外面に黒斑、内面薄く黒色化
239	A 4 4中層	早期 末葉	絡条体圧痕文	深鉢 胴部	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR6/4 10YR4/1 10YR4/2	内面ナデ 9mm	LRの縦走する単節縄文斜位の回転縄文を施文。条幅5mm。	240と同一個体
240	A 4 4中層	早期 末葉	絡条体圧痕文	深鉢 胴部	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR7/4 7.5YR4/1 7.5YR4/1	内面ナデ 13mm	LRの縦走する単節縄文斜位の回転縄文を施文。条幅5mm。	239と同一個体
241	A 2下 175～185	早末～ 前初	型式不明	深鉢 胴部	繊維多、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 5YR6/6 10YR6/2 10YR2/1	内外面ナデ 11mm	2段と1段の粗い回転縄文を施文。原体不明。	外面二次的な被熱により明黄褐色化、内面～断面黒色化
242	A 5 5層	早末～ 前初	型式不明	深鉢 胴部	繊維多、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR5/6 7.5YR2/1 7.5YR2/1	内面横～斜ナデ、斑状に光沢 9mm	単節斜縄文RL、LRを横位施文し、羽状縄文を施す。条幅6mm。	内面黒色化
243	A 5 4上層	早末～ 前初	型式不明	深鉢 胴部	繊維多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多、1mm以下の石英、白色砂粒少 7.5YR7/4 7.5YR5/1 10YR6/2	内面斜ナデ 11mm	単節斜縄文LRを縦位施文。条幅3mm。	内面～断面薄く黒色化、244と同一個体
244	A 5 4上層	早末～ 前初	型式不明	深鉢 胴部	白色砂粒、繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR7/4 7.5YR5/1 7.5YR4/1	内面横ナデ 13mm	上段に単節斜縄文RL、下段に単節斜縄文LRを横位施文し、羽状縄文を施す。条幅5mm。	内面～断面薄く黒色化、243と同一個体
245	A 5 3層	前期 前半	関山Ⅰ式	深鉢 胴部	繊維多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR4/4 2.5Y3/1 7.5YR4/6	内面凹凸 内面横ナデ 10～12mm	0段多条2段RLの閉じた末端を用いたルーブ文を4段施す。	
246	A 4 4中層	前期 前半	関山Ⅱ式	深鉢 胴部	白色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR5/6 7.5YR6/4 10YR4/2	内面斜ナデ 7mm	①1段縄による4本組紐の回転文を施す。②幅2mmで断面弧状の沈線を鋸歯状に施文。	内面薄く黒色化
247	A 2下 175～185	前期 前半	黒浜式併行	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 5YR5/4 10YR6/3 7.5YR5/4	口唇：尖頭状 外面口縁に沿ったナデ 6～10mm	波頂部に貼付文をもつ波状口縁。①環状の貼付文を施す。②動作方向、施文順序ともに反時計回りでコンパス文を施文。コンパス文の凹線は幅1.5mmで断面コの字状。口唇上に幅4mmで断面円形の工具を口唇に直行させて押圧。	貼付文の表面剥落。
248	A 5 5a層	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維多、1mm以下の石英、白色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 7.5YR6/4 10YR3/2 10YR3/2	口唇：円頭状 内外面横ナデ 8mm	RLとLRを結束第一種で結んだ原体を横位施文し、羽状縄文を施す。条幅4.5mm。	
249	A 2 7～8層	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	白色砂粒、繊維多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多 7.5YR6/6 10YR4/1 10YR3/1	内面凹凸 外面ナデ、内面斜ナデ 6～9mm	波状口縁。上部左側に単節斜縄文RL、右側に単節斜縄文LRを横位施文。下部に2段RLとLRを結束第一種で結んだ原体を横位施文し、羽状縄文を施す。2mmと3mmの条が交互に表出。	内面～断面黒色化
250	A 2 220～230	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維多、白色砂粒やや多、1mm以下の石英少 10YR2/3 10YR2/2 10YR6/4	口唇：内傾角頭状 内面横ナデ 6～10mm	上段に単節斜縄文RL、下段に無節斜縄文Lを横位施文し、羽状縄文を施す。条幅3mm。	外面～口唇薄く黒色化、内面に黒斑
251	A 1 160～170	前期 後半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR6/4 7.5YR6/4 5YR6/6	口唇：隅丸角頭状 外面ナデ、内面横ミガキ 6mm	単節斜縄文RLを横位施文。条幅4mm。	
252	A 4 4層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、繊維少 7.5YR4/3 7.5YR4/1 7.5YR2/1	口唇：円頭状 内面横ミガキ 10mm	単節斜縄文RLを横位施文。条幅4mm。	内面黒色化
253	A 5 4下層	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒、褐色砂粒少 10YR6/4 10YR3/1 10YR7/4	口唇：円頭状 内面横ナデ 7mm	無節斜縄文Lを横位施文。条幅4mm。	内面に黒斑
254	A 2 7～8層	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒、繊維少 7.5YR5/8 7.5YR5/6 7.5YR5/6	口唇：円頭～隅丸角頭状 内外面ナデ 8mm	①単節斜縄文LRを横位施文。②口唇直下に幅4mmの半截竹管状工具で連続刺突文を施文。	型式同定に疑問残る
255	A 4 4上層	前期 前半	繊維土器	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、褐色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、白色砂粒少、褐色礫僅か 5YR5/8 2.5YR6/2 5YR4/6	口唇：隅丸角頭状 内面凹凸 内外面横ナデ 8～11mm	口唇小さく外反。 無節斜縄文Rを横位施文。条幅3.5mm。	
256	A 4 2層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	黒色砂粒、繊維多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR5/4 7.5YR4/1 7.5YR5/4	外面横ナデ、内面斜ナデ 9～12mm	上段に単節斜縄文RL、下段に無節斜縄文Lを横位施文し、羽状縄文を施す。段の境にRLのS字状の結節回転文を施文。	内面に黒斑
257	A 3 4層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	灰色砂粒、黄褐色砂粒、繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR7/6 10YR4/4 10YR4/4	内面斜ナデ 9mm	①上段左側に条幅3mmの単節斜縄文LR、②右側に条幅3.5mmの単節斜縄文RLを横位施文し、菱形構成をとる。いずれも閉じた末端を下において施文。	
258	A 5 4中層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	白色砂粒、繊維やや多、1～2mmの石英、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR4/3 2.5Y2/1 10YR5/3	内面横ナデ 8.5mm	胴部が湾曲する深鉢。0段多条単節斜縄文RL、単節斜縄文LRを交互に横位施文し、羽状縄文を施す。条幅4mmで、原体長約1.5cm。RLに比べ、LRは圧痕が浅い。各段の境に原体末端を0段縄で環状に巻付けた部分の回転圧痕残る。	
259	A 2 7～8層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	光沢黒色粒子多、褐色砂粒、黄褐色砂粒、半透明な白色砂粒やや多、1mmの石英、繊維少 7.5YR4/2 10YR3/2 7.5YR4/4	内面ナデ 7mm	上部に0段多条RLを横位施文。下部に2段RLとLRを結束第一種で結んだ原体を横位回転施文し、羽状縄文を施す。幅2mmと2.5mmの条が交互に表出。	
260	A 2 4b層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	繊維やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 5YR4/3 5YR1.7/1 5YR3/1	内外面斜ナデ 8mm	口唇が外反する深鉢。①下段に単節斜縄文RL、②上段に単節斜縄文LRを横位施文し、羽状縄文を施す。条幅はRLが3mmと4mmが交互に表れ、LRが2mm。	
261	A 4 4中層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	白色砂粒、半透明な白色砂粒、繊維やや多 10YR4/3 10YR3/4 10YR2/1	内外面横ナデ 6mm	2段RLとLRを結束第一種で結んだ原体を横位回転施文し、羽状縄文を施す。条幅はRLが3mmと4mmが交互に表れ、LRが2mm。内面に横方向の擦痕顕著。	外面に黒斑、内面黒色化、内外面に調整によらない光沢あり
262	A 5 4b～5a層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	繊維多、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR5/6 10YR2/1 10YR6/4	外面横ナデ、内面斜ナデ 8.5mm	0段多条の単節斜縄文LR、0段多条の単節斜縄文RLを交互に横位施文し、羽状縄文を施す。条幅4mm。各段の境に原体末端を0段縄で環状に巻付けた部分の回転圧痕残る。	
263	A 3 4層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、黄褐色砂粒やや多、半透明な白色砂粒、繊維少 7.5YR4/6 10YR4/2 10YR5/4	内面斜ナデ 9mm	単節斜縄文LR、単節斜縄文RLを交互に横位施文し、羽状縄文を施す。条幅3mm。	
264	A 4 4b層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mmの黒雲母多、1～2mmの石英、黒色砂粒、黄褐色砂粒やや多、繊維少 5YR6/6 5YR6/6 5YR6/6	内外面斜ナデ 7mm	単節斜縄文RLを斜位施文。条幅2.5mm。	
265	A 5 5層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	白色砂粒、繊維多、1mmの石英やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR3/1 2.5Y2/1 10YR5/3	内面凹凸 内面斜ナデ 6～8mm	単節斜縄文LRを横位施文。条幅は3.5mmと4mmが交互に表出。	

第21表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(6)

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
266	A 5 5層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	白色砂粒, 黒色砂粒, 繊維やや多 10YR5/3 10YR3/2 7.5YR3/4	内面ナデ 7mm	単節斜縄文 LR を横位施文。条幅 3mm。	
267	A 2 7層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	繊維多, 1mm 以下の石英やや多, 1mm 以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒少 10YR6/4 10YR3/1 10YR3/2	内面横ナデ 11mm	単節斜縄文 RL を横位施文。条幅 5mm。	内面～断面黒色化
268	A 5 4中層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm の黒雲母, 1mm 以下の光沢黒色粒子, 灰色砂粒, 褐色砂粒やや多, 1mm 以下の石英, 白色砂粒少 7.5YR5/6 10YR4/3 10YR6/3	内外面ナデ 7mm	単節斜縄文 LR を横位施文。条幅 3mm。	内面に黒斑, 269 と同一個体
269	A 5 4中層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm の黒雲母, 1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子, 灰色砂粒, 褐色砂粒やや多, 白色砂粒少 7.5YR5/6 10YR4/3 10YR6/3	内外面横ナデ 8mm	単節斜縄文 LR を横位施文。条幅 3mm。	内面に黒斑, 268 と同一個体
270	A 5 4b層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	白色砂粒, 黒色砂粒, 繊維やや多, 1mm 以下の光沢黒色粒子少 7.5YR5/6 7.5YR6/4 7.5YR6/5	内面横ナデ 8mm	単節斜縄文 RL を横位施文。原体長は約 4cm で、条幅は 5mm と 6mm が交互に表出。	
271	A 5 4中層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	白色砂粒, 黒色砂粒, 褐色砂粒やや多, 1mm 以下の黒雲母, 石英, 光沢黒色粒子少 2.5Y3/2 10YR7/4 10YR7/4	外面凹凸 内面横ナデ 7～9mm	上部に LR の横走する単節縄文を施文。その下に単節斜縄文 RL を横位施文。条幅 2mm。	外面薄く黒色化
272	A 5 4層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm 以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒, 黒色砂粒, 繊維少 7.5YR4/2 7.5YR4/2 5YR5/4	内面凹凸 内外面横ナデ, 内面線状の光沢 5～6mm	単節斜縄文 LR を横位施文。条幅 4mm。	
273	A 2 7～8層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm 以下の石英, 白色砂粒, 繊維少, 褐色礫僅か 7.5YR5/4 10YR5/2 10YR3/1	内外面斜ナデ 9mm	無節斜縄文 L を横位施文。条幅 3mm。	内面に黒斑
274	A 4 4中層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm 以下の石英やや多, 1mm 以下の黒雲母, 光沢黒色粒子, 白色砂粒, 褐色砂粒, 繊維少 10YR5/3 7.5YR5/4 7.5YR5/4	内面横ナデ 6mm	無節斜縄文 L を横位施文。条幅 2.5mm。	
275	A 4 4層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	繊維多, 白色砂粒やや多, 1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子少 10YR7/3 10YR1.7/1 10YR5/3	内面横ナデ 9mm	無節斜縄文 L を横位施文。条幅 4mm。	外面一部薄く黒色化
276	A 6 3層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	褐色砂粒, 繊維やや多, 1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒少 10YR6/4 2.5Y4/1 7.5YR6/6	内外面横ナデ 8mm	①幅 7mm の扁平な隆帯を横位に貼付。 ②隆帯上に条幅 4mm の単節斜縄文 LR を横位施文。	
277	A 5 4中層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒, 繊維少 10YR3/3 7.5YR3/1 10YR4/3	外面斜ナデ, 内面横ミガキ 8.5mm	末端に S 字状の結節を施した前段反撥 LL を横位施文。	
278	A 5 5層	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色粒子, 黒色粒子, 繊維少 7.5YR4/4 7.5YR4/1 7.5YR4/2	内面斜ナデ 8mm	前段反撥 LL を横位施文。原体は完全擦り戻しに近い。	
279	A トレ 調査区内	前期 前半	繊維土器	深鉢 胴部	1mm 以下の石英少 10YR5/1 7.5YR6/3 7.5YR3/1	内外面斜ナデ 6mm	前段反撥 LL を斜位施文。	型式固定に疑問残る内面黒色化
280	A 4 4層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 底部	繊維多, 白色砂粒やや多, 1mm 以下の光沢黒色粒子少 5YR6/4 5YR4/1 5YR4/1	内外面横ナデ, 底面ナデ 9mm	平底の底部。単節斜縄文 RL、単節斜縄文 LR を横位施文し、羽状縄文を施す。条幅は RL が 3mm で、LR が 2mm。	底面に種子圧痕、内面～断面黒色化
281	A 4 4層群	前期 前半	繊維土器	深鉢 底部	繊維やや多, 1mm の石英, 1mm 以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒, 黒色砂粒少 7.5YR4/6 10YR2/1 10YR6/4	内面ナデ, 底面ミガキ 8mm	上げ底の底部。単節斜縄文 RL を横位施文。条幅 4mm。	
282	A 4 4層群	前期 後半	諸磯 a 式	深鉢 胴部	1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒, 黒色砂粒, 褐色砂粒少 7.5YR6/3 7.5YR6/3 7.5YR6/3	内面ミガキ 8mm	①条幅 2.5mm の単節斜縄文 RL を横位施文。②幅 4mm の半截竹管状工具で平行沈線を横位施文。幅 7mm の竹管状工具で円形竹管文を施文。	
283	A 3 4層群	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 口縁部	白色砂粒やや多, 1mm 以下の光沢黒色粒子少 10YR6/4 10YR5/3 10YR5/3	口唇: 内傾隅丸角頭状 内面横ミガキ, 口唇ナデ 7mm	口縁が内湾する深鉢。①幅 6mm の半截竹管状工具で平行沈線を横位施文。②その上に幅 5.5mm の Σ 状の刺突文列 (小杉 2008) を施文。③平行沈線の間に長く細い斜位の刻みを連続施文。口唇下に幅 5.5mm の半截竹管状工具で C 字状の連続爪形文を施文。	284 と同一個体
284	A 2 7～8層	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 胴部	1mm 以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒やや多, 1mm の石英, 褐色砂粒少 7.5YR7/6 7.5YR4/1 7.5Y3/2	内面横ナデ 6mm	①幅 6mm の半截竹管状工具で平行沈線を横位施文。②その上に幅 5.5mm の Σ 状の刺突文列を施文。③平行沈線の間に長く繊細な斜位の刻みを連続施文。	外面二次的な被熱により褐色化、内面薄く黒色化、283 と同一個体
285	A 2 上 190～200	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 口縁部	1mm 以下の光沢黒色粒子やや多, 1mm 以下の石英, 白色砂粒, 褐色砂粒少, 白色礫僅か 10YR7/4 10YR5/2 10YR5/2	内外面横ナデ 14mm	キャリバー形の深鉢。①条幅 2mm の原体不明の無節斜縄文を施文。②幅 2～4mm の隆起線を貼付。③その上に幅 1mm で断面三角形の刻みを施し、浮線文を施文。④下部に幅 5mm で断面弧状の沈線を横位施文。	内面薄く黒色化
286	A 2 4b層	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 胴部	白色砂粒, 褐色砂粒やや多, 1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子少, 白色礫僅か 10YR6/4 10YR7/3 10YR5/8	内外面ナデ 7mm	①原体不明の単節斜縄文を施文。②幅 3mm の隆起線を貼付。③その上に幅 1mm で断面三角形の刻みを施し、浮線文を施文。④下部に幅 5mm で断面弧状の沈線を横位施文。	
287	A 2 4b層	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 胴部	1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子, 白色砂粒少 7.5YR5/6 7.5YR5/6 7.5YR5/6	外面斜ナデ, 内面斜ミガキ 8mm	①幅 10mm の隆帯を貼付。②その上に幅 4mm で断面円形の工具を斜位に押圧。隆帯下部に櫛歯状工具で波状文を施文。凹線は幅 1mm で断面コの字状。	
288	A 5 4中層	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 口縁部	1mm 以下の光沢黒色粒子, 白色砂粒, 半透明な白色砂粒やや多, 半透明な白色礫僅か 2.5Y2/1 10YR6/3 10YR6/3	内外面斜ナデ 8mm	波状口縁を有する深鉢のくの字状の屈曲部分。幅 3mm の半截竹管状工具で①斜位②横位の順に集合沈線を施文。口唇部に同一工具で①矢羽状の集合沈線を施文。②矢羽の空白部分にさらに矢羽状の集合沈線を施文。	外面に黒斑
289	A 6 2下～3層	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 口縁部	褐色砂粒, 黄褐色砂粒やや多, 光沢黒色粒子, 白色砂粒少, 褐色礫僅か 7.5YR6/6 5YR3/1 5YR6/4	口唇: 円頭状 内外面横ナデ, 口唇横ミガキ 9mm	外反する波状口縁を有する深鉢。①原体不明の単節斜縄文を施文。②幅 3.5mm の半截竹管状工具で 3 条一組の平行沈線を施文。	
290	A 5 4中層	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 口縁部	1mm 以下の光沢黒色粒子, 半透明な白色砂粒やや多, 1mm の黒雲母少 10YR6/4 10YR7/4 10YR6/2	口唇: 円頭状 内面斜ナデ, 口唇横ナデ 8mm	波状口縁の波長部。幅 2mm の半截竹管状工具で半円彫りの集合沈線を施文。	
291	A 4 4層群	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 胴部	白色砂粒多, 1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子, 褐色砂粒少 7.5YR7/4 10YR5/1 10YR6/3	内面縦ミガキ 9mm	①条幅 2mm の単節斜縄文 RL を横位施文。②幅 3mm の半截竹管状工具による平行沈線で区画。③区画内に同一工具で曲線状に平行沈線を施文。	
292	A 4 4層群	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 胴部	白色砂粒, 褐色砂粒やや多, 1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子少 10YR7/6 10YR3/2 10YR7/3	外面ナデ, 内面横ナデ 10mm	①幅 3mm の半截竹管状工具で平行沈線を横位施文。②条幅 2mm の単節斜縄文 RL を横位施文。	内面一部薄く黒色化
293	A 4 4層群	前期 後半	諸磯 b 式	深鉢 胴部	白色砂粒やや多, 1mm 以下の石英, 光沢黒色粒子少 10YR6/4 10YR5/1 10YR5/6	内面横ミガキ 11mm	口縁が開く深鉢。①条幅 2mm の無節斜縄文 R を横位施文。②幅 4mm の半截竹管状工具で 3 条一組の平行沈線を施文。	

第22表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(7)

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
294	A5 4中層	前期 後半	諸磯b式	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒多、黄褐色砂粒やや多 7.5YR3/2 5YR4/6 7.5YR	上面割れ口平行擬口縁 外面横ナデ、内面横ミガキ 7mm	①上段、下段に条幅3.5mmの単節縄文LRを閉じた末端を下にして横位施文。 ②中段に条幅2mmの単節縄文RLを横位施文。中段は施文が浅い。	
295	A5 5層	前期 後半	諸磯b式	深鉢 底部付近	灰色砂粒、黄褐色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多、1mm以下の石英少 7.5YR6/6 10YR4/1 2.5Y2/1	下面割れ口平行擬口縁 内外面横ナデ 7～13mm	①条幅3mmの単節縄文RLを横位施文。 ②幅5mmの半載竹管状工具で時計回りの動作により短沈線を施文。 ③長円形の貼付文を縦位に貼る。	内面黒色化
296	A6 3層	前期 後半	諸磯c式	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR5/3 2.5Y6/3 2.5Y6/3	内面横ナデ 4mm	①幅4mmの半載竹管状工具で縦位、斜位に平行沈線を施文。 ②屈曲部に幅5mmの多載竹管状工具で時計回りの動作により短沈線を施文。 ③長円形の貼付文を縦位に貼る。	
297	A4 4層群	前期 後半	諸磯c式	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR4/6 7.5YR4/6 7.5YR5/3	内面斜ナデ 7mm	①原体不明の単節縄文を施文。幅3mmの半載竹管状工具で②右下がり、③左下がり、④縦位の順に集合沈線を施文。	
298	A5 4中層	前期 後半	諸磯c式	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒、灰色砂粒やや多、1mm以下の石英少 5YR5/6 5YR5/6 5YR5/6	内面斜ナデ 7mm	幅3mmの半載竹管状工具で①縦位②斜位の順に集合沈線を施文。	
299	A5 4上層	前期 後半	諸磯c式	深鉢 胴部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 7.5YR5/6 7.5YR5/1 7.5YR5/4	内外面横ナデ 9mm	幅2.5mmの半載竹管状工具で平行沈線を①斜位、②縦位の順に施文。	
300	A5 4中層	前期 後半	諸磯c式	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、褐色砂粒やや多、灰色砂粒、黄褐色砂粒少 7.5YR 2.5Y3/1 10YR7/4	外面斜ナデ、内面横ナデ 9mm	幅3.5mmの半載竹管状工具で①矢羽状、②縦位の順に集合沈線を施文。	内面一部に黒斑
301	A5 4中層	前期 後半	諸磯c式	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 5YR5/6 5YR5/6 7.5YR3/1	内面横ナデ 7mm	幅4mmの半載竹管状工具で①縦位②矢羽状に集合沈線を施文。 ③長楕円形の貼付文を施し、④その上に幅4mmで断面半円形の沈線を横位に引いて、ボタン状貼付文を施文。	内面薄く黒色化
302	A5 4中層	前期 後半	諸磯c式	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒やや多、1mm以下の石英、黒色砂粒、灰色砂粒少 10YR7/4 10YR4/1 10YR6/4	内面横ナデ 7mm	①幅3.5mmの半載竹管状工具で集合沈線を横位施文。 ②円形の貼付文を施し、③その上に幅4mmの竹管状工具で刺突してボタン状の貼付文を施文。	
303	A5 4中層	前期 後半	十三菩提式	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子多、1mm以下の石英、白色砂粒やや多、1mm以下の黒雲母少 10YR4/3 10YR5/2 10YR4/2	内面横ミガキ 5～9mm	①幅6.5mmの半載竹管状工具で半円影りの平行沈線をU字状に施文。 ②U字の中央部分を彫去。	
304	A5 4中層	前期 後半	十三菩提式	深鉢 胴部	白色砂粒多、褐色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR5/3 10YR5/2 10YR3/1	外面横ナデ、内面斜ナデ 5.5mm	①幅5mmの隆起線を貼付、②その間をならすように幅2mmで断面半円形の浅い沈線を施文。隆起線上に幅1mmの鉤状の刺突を連続施文。	内面薄く黒色化
305	A5 4中層	前期 後半	十三菩提式	深鉢 胴部	光沢黒色粒子多、白色砂粒、黄褐色砂粒少 7.5YR6/6 7.5YR6/6 7.5YR7/4	内面右上がりナデ 7mm	①幅3.5mmの半載竹管状工具で半円影りの平行沈線を横位施文。 ②同一工具で花卉状の文様を施文。 ③その左側に同一工具で曲線状に半円影りの平行沈線を施文。その上に刻みを連続施文。無文部を幅3mmの先丸の工具で彫去。	
306	A5 4中層	前末～ 中初	型式不明	深鉢 胴部	半透明な白色砂粒多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子やや多 7.5YR4/3 7.5YR6/4 7.5YR5/3	内面横ナデ 7mm	幅3.5mmの半載竹管状工具で鋸歯状に平行沈線を施文。左下がりの沈線に比べ、右下がりの沈線は深く鮮明。同一工具で平行沈線を横位施文。	
307	A4 4上層	前末～ 中初	型式不明	深鉢 胴部	黒色砂粒多、白色砂粒やや多、1～2mmの石英、黄褐色砂粒少 5YR5/6 5YR5/6 7.5YR4/3	内面斜ナデ 7mm	幅7mmの半載竹管状工具で①斜位、②同心円状に半円影りの平行沈線を施文。同心円中心に近い沈線は一度休止点を挟む。	内面薄く黒色化
308	A4 4上層	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR4/4 5YR4/8 5YR4/6	内面横ミガキ 7mm	①幅6mmの隆起線を横位に貼り、その下に長方形の突起を貼付。 ②隆起線に幅1mmで断面弧状の刻みを斜位に連続施文。 ③隆起線上下に幅3.5mmの多載竹管状工具による引きずり文とC字状の連続爪形文を施文。突起から引きずり文の下部にかけて幅3mmで断面半円形の工具で交互刺突文を施文。	
309	A5 4上層	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 胴部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子少 10YR5/3 10YR6/4 10YR3/3	内面斜ナデ 9mm	①幅0.5mmで断面半円形の沈線を施すことにより隆起線を作り、②隆起線に同一工具で刻みを斜位に連続施す。③器面を三角形に彫去。	内面薄く黒色化
310	A4 4層群	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 胴部	1mm以下の石英、白色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多 10YR6/4 10YR4/1 10YR6/3	内面ナデ 8mm	幅4.5mmの半載竹管状工具で半円影りの平行沈線を①斜位、②縦位の順に施文。 ③余白部分を彫去。	
311	A5 4b層	中期 前半	五領ヶ台式	深鉢 胴部	1mm以下の石英多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子少 7.5YR4/4 7.5YR4/3 10YR5/3	内外面ナデ 9mm	①幅2mmで断面半円形の単沈線を縦位施文。 ②幅1.5mmの先丸の工具を斜角に当て、沈線に沿った連続刺突を施す。	内面薄く黒色化
312	A5 4中層	中期 前半	五領ヶ台併行	深鉢 底部	1mm以下の光沢黒色粒子、灰色砂粒多、半透明な白色砂粒やや多 7.5YR5/8 7.5YR3/1 10YR3/1	下面割れ口平行擬口縁 内外面横ナデ 8mm	幅2mm,3mmで断面弧状の単沈線を二本垂下。沈線は合から下の動作により施文。	内面薄く黒色化
313	A5 4中層	中期 前半	五領ヶ台併行	深鉢 胴部	1mmの黒雲母、1mm以下の石英多、黄褐色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 7.5YR 4/3 5YR4/6 7.5YR5/6	外面ナデ 8mm	①幅3mmで断面半円形の単沈線を横位施文。 ②幅1.5mmの先丸の工具を斜角に当て、沈線に沿った連続刺突文を施文。 下部に幅3mmで断面半円形の沈線を同心円状に施文。器面を三角形に彫去。	
314	A4 4上層	中期 前半	新崎式	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 7.5YR4/4 7.5YR4/6 7.5YR4/2	外面ナデ、内面斜ナデ 7mm	①条幅3mmの単節縄文LRを縦位施文。 ②幅6mmの半載竹管状工具で半円影りの平行沈線を縦位施文。 ③幅2mmのヘラ状工具で沈線に沿った矩形の刻みを連続施文。	内面薄く黒色化、 315,316と同一個体
315	A5 4中層	中期 前半	新崎式	深鉢 胴部	黒色砂粒やや多、1mm以下の黒雲母、石英少 10YR7/4 10YR6/4 10YR4/2	下面割れ口平行擬口縁 内面横ナデ 7mm	①条幅3mmの単節縄文LRを縦位施文。 ②幅6mmの半載竹管状工具で半円影りの平行沈線を縦位施文。 ③幅2mmのヘラ状工具で沈線に沿った矩形の刻みを連続施文。	内面薄く黒色化、 314,316と同一個体
316	A6 4上層	中期 前半	新崎式	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、褐色砂粒少 7.5YR5/4 7.5YR5/6 7.5YR5/8	内面横ナデ 8mm	①条幅3mmの単節縄文LRを縦位施文。 幅6mmの半載竹管状工具で②縦位、③縦位の順に半円影りの平行沈線を施文。	314,315と同一個体
317	Aトレ 調査区内	中期 後半	焼町式	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒、褐色砂粒少 7.5YR6/4 7.5YR5/8 5YR4/8	内面斜ナデ 5mm	①幅11mmで断面半円形の隆起線を縦位に貼付。 ②幅6.5mmの半載竹管状工具で縦位、横位の順に半円影りの平行沈線を施文。	

第23表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(8)

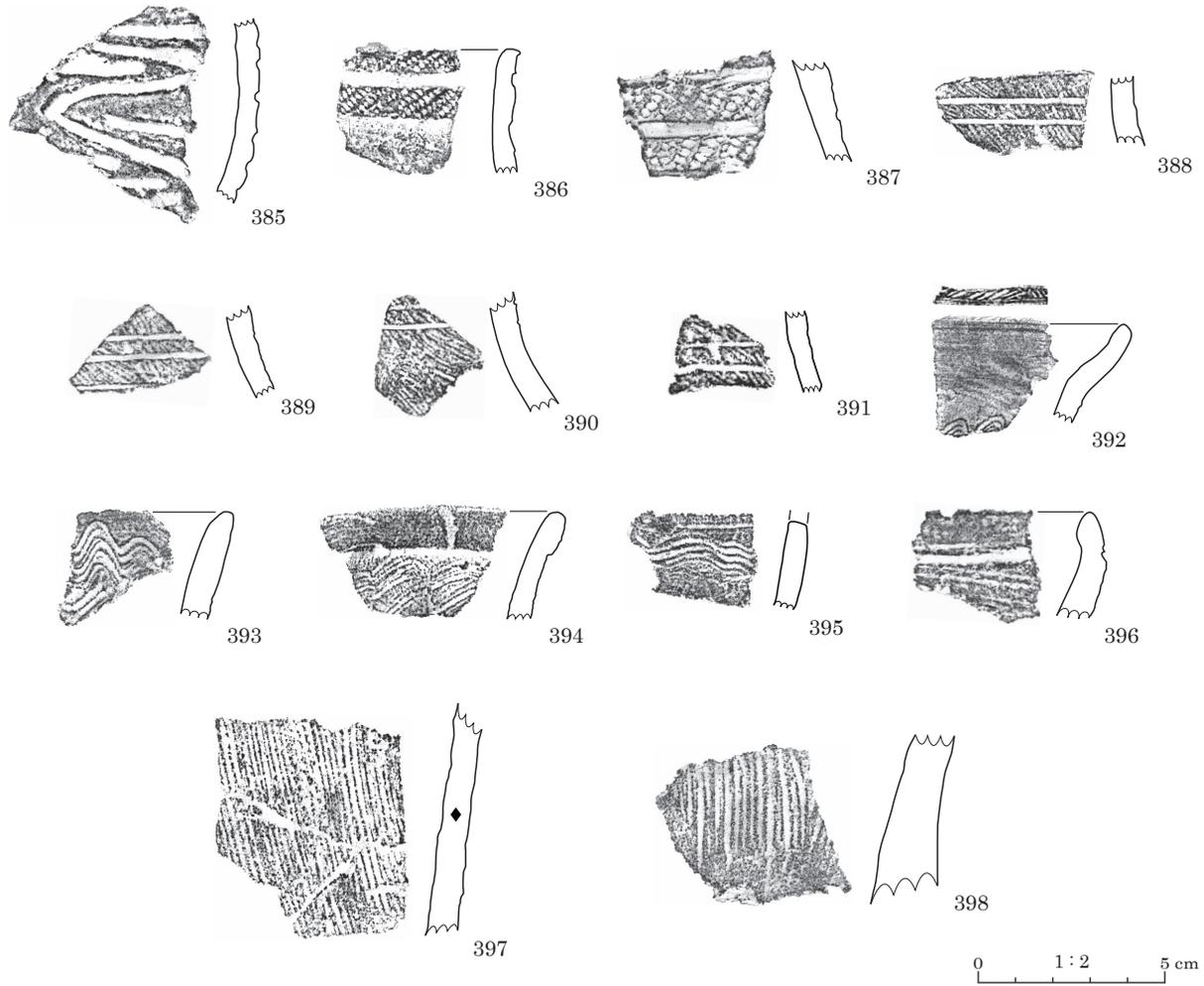
掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
318	A 6 4 上層	中期 後半	郷土式	深鉢 胴部	1mm以下の石英やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子少 7.5YR5/6 7.5YR2/1 10YR3/3	内外面横ナデ 10mm	①幅7mmで断面三角形の隆帯を縦位に貼付。②隆帯の両側に幅2.5mmのごく浅い沈線を施文。幅3~4.5mmで断面弧状の沈線を③曲線状、④斜位の順に施文。曲線状の沈線に沿って幅4mmの先丸の工具で円形の刺突文列を施す。	319と同一個体
319	A 5 4 上層	中期 後半	郷土式	深鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子少 7.5YR4/4 7.5YR5/8 7.5YR6/4	内面上斜ナデ、下横ナデ 11mm	①幅7mmで断面三角形の隆帯を縦位に貼付。②幅4.5mmの断面弧状の沈線を斜位施文。	内面一部薄く黒色化、318と同一個体
320	A 4/A 5 4 上層	中期 後半	郷土式	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子やや多、1mm以下の黒雲母、黒曜石、白色砂粒少 7.5YR4/3 5YR5/4 5YR5/4	内外面ナデ 12mm	①幅7mmで断面三角形の隆帯を縦位に2条貼付。②隆帯両側に沿って幅4.5mmで断面弧状の沈線を施文。③幅4mmで断面弧状の沈線を斜位施文。	
321	A 6 3 層	中期 後半	郷土式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒少 5YR6/6 5YR6/6 7.5YR6/3	口唇：円頭状 内面口縁部折り返し 内外面横ナデ 11mm	幅8mmで断面三角形の隆帯を横位に貼付。	
322	A 3 4 層群	中期 後半	郷土式	深鉢 胴部	1mm以下の石英多、1mm以下の光沢黒色粒子少 7.5YR6/4 7.5YR6/4 10YR4/2	内外面ナデ 7mm	①幅8mmで断面半円形の隆帯を貼付。②隆帯下側に沿って幅3mmで断面弧状の沈線を施文。隆帯区画内に幅3mmで断面弧状の沈線を縦位施文。	内面薄く黒色化
323	A 5 4 上層	中期 後半	郷土式	深鉢 胴部	1mm以下の石英多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子やや多、黄褐色砂粒少 5YR4/6 5YR4/8 5YR5/6	上面割れ口外傾擬口縁 内面横ナデ 12mm	①幅6mmで断面半円形の隆帯を貼付。②隆帯に沿って幅3mmのごく浅い沈線を施文。③隆帯区画内に幅2mmで断面弧状の沈線を充填。	
324	A 6 4 上層	中期 後半	郷土式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英やや多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒、褐色砂粒少 5YR6/6 5YR5/6 5YR6/6	内面横ナデ 9mm	①幅10mmで断面三角形の隆帯を貼付。②隆帯外側に沿って幅7mmのごく浅い沈線を施文。	内面に黒斑
325	A 3 4 層群	中期 後半	郷土式	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、黄褐色砂粒やや多、白色砂粒、灰色砂粒少 5YR5/6 10YR6/4 10YR6/4	外面ナデ、内面横ナデ 10mm	①幅4.5mmの隆帯を縦位に貼付。②隆帯の両側に沿って幅5mmの沈線を施文。沈線断面は半円~弧状。③幅3.5mmの沈線を斜位施文。沈線断面は反時計回りの動作に伴い半円から弧状に変化。隆帯一部がつぶれている。	施文のタイミング早い
326	A 5/A 6 4 上層	中期 後半	郷土式	深鉢 口縁~胴部	1mm以下の石英多、1mm以下の黒雲母、光沢黒色粒子、白色砂粒少 5YR5/6 5YR4/6 5YR5/4	推定口径：30.5cm 口唇：円頭状 内面口縁部折り返し、内面一部粘土帯残る 内外面横ナデ 11mm	①幅9mmで断面三角形の隆帯を貼付。②縦位隆帯の区画内に幅3mmで断面弧状の沈線を充填。③隆帯に沿って幅3mmのごく浅い沈線を施文。④幅6mmの先丸の工具で円形の刺突文列を施す。	
327	A 5 4 上層	中期 後半	郷土式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、白色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子、灰色砂粒少 10YR6/3 10YR6/3 7.5YR6/4	口唇：円頭状 外面ナデ 7mm	①幅3mmで断面弧状の沈線を縦位施文。②口縁部の段に沿って幅3mmのごく浅い沈線を施文。	
328	A 6 4 上層	中期 後半	折衷(曾利/加曾利E)	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 2.5YR4/6 2.5YR5/6 5YR6/4	推定口径：15cm 口唇：内傾円頭状 内面一部に粘土帯残る 内外面横ナデ 11mm	口縁が内湾する深鉢。①幅10mmで断面直角三角形の隆帯を曲線状に貼付。②口縁部に幅6mmで断面弧状の隆帯により弧状の曲線文と楕円形の区画を施す。③区画内に幅3mmの沈線を充填。胴部に条幅2.5mmの単節斜縄文RLを縦位施文。幅2~3mmの沈線を2条垂下。	内面薄く黒色化
329	A 4 4b 層	中期	型式不明	深鉢 口縁部	黄褐色砂粒多、白色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 2.5YR6/6 2.5YR6/6 10Y3/2	口唇：内傾円頭状 外面横ナデ、内面斜ナデ 9mm	条幅1.5mmの単節斜縄文LRを縦位施文。	内面薄く黒色化
330	A 4 4 中層	中期	型式不明	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒やや多、1mm以下の石英少 10YR2/1 5YR4/4 5YR4/4	外面斜ナデ、内面横ナデ 10mm	①条幅3mmの単節斜縄文Lを縦位に回転施文。②幅1mmで断面弧状の沈線を縦位施文。沈線はごく浅く条痕に近い。	外面黒色化
331	A 4 4 中層	後期 前半	堀之内1式	深鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、褐色砂粒少 7.5YR5/3 10YR5/2 7.5YR7/4	外面沈線に沿ったミガキ、 内面横ミガキ 9mm	胴部が膨らむ深鉢。①条幅2mmの単節斜縄文LRを斜位施文し、②幅4mmで断面弧状の沈線で縄文を区画して磨消縄文を施文。	外面薄く黒色化
332	A 4 4 層群	後期 前半	堀之内1式	深鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、黒色砂粒、褐色砂粒少 10YR8/4 2.5Y4/1 2.5Y3/3	内外面斜ナデ 8.5mm	幅3mmで断面弧状の沈線を斜位、重弧状に施文。	
333	A 4 4 層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 口縁部	白色砂粒多、1mm以下の石英やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少 10YR6/4 10YR5/1 10YR5/1	口唇：円頭状 内面一部に粘土帯残る 外面ナデ、内面横ナデ 5mm	口縁が内湾する深鉢。①条幅1mmの単節斜縄文LRを縦位施文。②幅1mmで断面弧状の沈線を横位、縦位に引いて列点状の凸部を作出。③幅1mmで断面弧状の沈線を縦位に引き、縄文を区画して磨消縄文を施文。	
334	A 5 3 層	後期 前半	堀之内2式	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒、黒色砂粒少 2.5YR7/3 2.5YR7/2 2.5YR7/3	口唇：内面角外面丸形 外面横ナデ、内面横ミガキ 5mm	口唇が内側に小さく屈曲する深鉢。①幅2mmで断面半円形の隆起線を横位に貼付。②その上に幅2mmで断面円形の工具の側面圧痕を列点状に施す。	
335	A 3 4 層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR6/3 10YR6/3 10YR5/3	口唇：円頭状 外面横ナデ、内面横ミガキ 6mm	口唇が内側に小さく屈曲する深鉢。①幅4mmで断面三角形の隆起線を横位に貼付。②その上に幅2mmで断面円形の工具の側面圧痕を列点状に施す。円形の粘土を貼ってその中心を先丸の工具で刺突し、円環状の貼付文を施文。	
336	A 4 4 層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 5YR2/1 5YR4/1 5YR3/2	口唇：円頭状 内外面横ナデ 6mm	口唇が内側に小さく屈曲する深鉢。①幅3mmで断面三角形の隆起線を横位に貼付。③その上に断面円形の工具を斜位に連続して押圧。横位の隆起線を連結するSの字状の貼付文を施文。下部に①原体不明の単節斜縄文を施し、②幅2mmで断面半円形の沈線で区画して磨消縄文を施文。	内外面黒色化
337	A 5 3 層	後期 前半	堀之内2式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR3/1 10YR5/3 10YR3/1	口唇：内面角外面丸形 外面横ナデ、内面横ミガキ 5mm	①幅2mmで断面半円形の隆起線を横位に貼付。②下の隆起線上に幅2mmの断面円形の工具の側面圧痕を列点状に施文。下部に①幅1.5~2mmで断面半円形の沈線を曲線状に施す。②沈線区画内に幅1mmの単節斜縄文LRを横位施文。内面口唇下に幅2mmで断面弧状の沈線を施文。	内外面黒色化
338	A 4 4 層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子1% 10YR3/1 10YR3/2 10YR3/1	口唇：円頭状 内外面横ミガキ 8.5mm	①直前段反巻LLを横位施文。②幅1.5mmで断面半円形の沈線で縄文を区画し、磨消縄文を施文。一部磨り消し切れていない箇所あり。内面口唇下に幅4mmで断面弧状の沈線を横位施文。	内外面黒色化

第24表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(9)

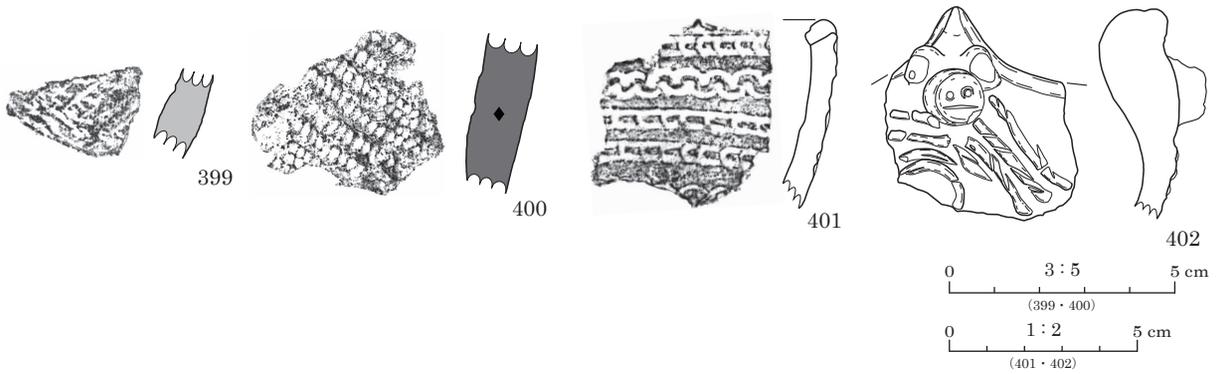
掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
339	A5 4層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 把手部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子少 2.5Y7/3 2.5Y4/1 2.5Y6/3	外面斜ナデ,内面ナデ 10mm	波状口縁頂部の把手。①幅2.5mmの隆起線を貼付。②その上に幅3mmの先丸の工具で刺突を施す。把手上に幅3.5mmで断面弧状の沈線で渦巻文を施し、先丸の工具ですり鉢状の穴を施す。把手部と胴部の境に沿って幅2.5mmで断面弧状の沈線を施文。	写真掲載
340	A5 3層	後期 前半	堀之内2式	把手部	1mm以下の光沢黒色粒子やや多、白色砂粒,褐色砂粒少 5YR6/4 10YR6/2 7.5YR5/3	内外面ミガキ 7mm	①内面に幅1.5mmで断面半円形の沈線を横位施文。②渦巻状の把手を貼付、③中心を穿孔。口唇に断面円形の先丸の工具ですり鉢状の穴を施す。外面下端に①隆起線を横位に貼付。②その上に幅1.5mmで断面円形の工具の側面圧痕を列点状に施す。	写真掲載
341	A3 4層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子少 10YR7/4 7.5YR7/4 10YR7/2	外面幅2mmの先丸の工具で横方向の調整,隆起線より下はその後に横ナデ 内面横ミガキ 8mm	①幅3.5mmで断面半円形の隆起線を横位に貼付。②その上に先丸の工具で幅2mmの刺突を列点状に施す。横位の隆起線を連結する縦位の隆起線を貼付、その上を先丸の工具で刺突し、8の字状の貼付文を施文。下部に幅3mmで断面弧状の沈線を横位施文。	外面薄く黒色化
342	A4 4層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 胴部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子,褐色砂粒少 10YR6/1 10YR7/4 10YR6/2	外面横ナデ,内面横ミガキ 8mm	①幅4mmで断面半円形の隆起線を横位に貼付。②その上に幅3mmの先丸の工具で列点状の刺突を施す。	外面黒色化
343	A4 4層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 胴部	白色砂粒やや多、1mm以下の黒雲母,石英少 10YR6/1 10YR7/4 10YR6/2	内外面横ミガキ 8mm	①幅4mmで断面半円形の隆起線を横位に貼付。②上の隆起線の上に幅3mmの先丸の工具で列点状の刺突を施す。下の隆起線の上に幅2mmで断面半円形の工具の側面圧痕を列点状に施す。	
344	A4 4層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 胴部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒少 10YR3/1 10YR3/2 10YR3/1	内外面横ナデ 4mm	①条幅1.5mmの単節斜縄文LRを横位施文。②幅2mmで断面弧状の沈線で縄文を区画し、磨消縄文を施文。	内外面黒色化
345	A4 4層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 胴部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒,黒色砂粒少 5Y3/1 10YR5/2 2.5Y6/2	外面ミガキ,内面横ミガキ 4mm	①条幅1mmの単節斜縄文LRを横位施文。縄文の施文はごく浅く、節の形状が捻糸文に近く細長い。②幅1mmで断面弧状の沈線で縄文を区画し、磨消縄文を施文。	外面黒色化
346	A4 4層群	後期 前半	堀之内2式	深鉢 口縁部	1mm以下の黒雲母,石英,光沢黒色粒子,白色砂粒少 10YR5/4 10YR6/6 10YR7/6	内外面横ナデ 8mm	内面口唇直下に幅2mmで断面半円形の沈線を施文。	内面薄く黒色化
347	A3 4上層	後期 前半	堀之内2式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒少 2.5Y5/2 2.5Y4/1 10YR6/3	口唇:外面角内面丸形 内外面横ナデ 5~7mm	内面口唇直下に幅5mmで断面弧状の沈線を施文。	
348	A4 4b層	後期 前半	堀之内2式	注口土器 胴部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒少 10YR4/1 10YR5/2 2.5Y4/2	外面ナデ,内面横ケズリ 6mm	幅2mmで断面弧状の沈線を曲線状に施文。	
349	A3 4層群	後期 前半	堀之内2式	注口土器 胴部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子少 10YR4/1 10YR5/2 10YR5/2	外面ミガキ,内面横ケズリ 7mm	幅3mmで断面弧状の沈線により渦巻文を施文。	外面黒色化
350	A4 4層群	後期 前半	堀之内式	浅鉢 口縁部	白色砂粒,1mm以下の光沢黒色粒子やや多、1mm以下の石英,褐色砂粒少 10YR5/2 10YR6/3 10YR6/4	口唇:内傾円頭状 内外面横ミガキ 9.5mm	内面に①断面半円形の隆起線を横位に貼付。②隆起線の間幅2.5~3.5mmで断面弧状の沈線を施文。	型式同定に疑問残る 351と同一個体
351	A4 4層群	後期 前半	堀之内式	浅鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子,白色砂粒やや多、1mm以下の石英,褐色砂粒少 10YR6/3 10YR4/1 10YR6/3	口唇:内傾円頭状 内外面横ミガキ 9.5mm	内面に①断面半円形の隆起線を横位に貼付。②隆起線の間幅2.5~3.5mmで断面弧状の沈線を施文。	型式同定に疑問残る 350と同一個体
352	A4/A5 4層群	後期 前半	堀之内式	浅鉢 口縁部	白色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多、1mm以下の石英少 10YR4/1 10YR7/4 10YR4/1	口唇:円頭状 内外面横ミガキ 9mm	内面に①断面半円形の隆起線を横位に貼付。②隆起線の間幅2.5~3.5mmで断面弧状の沈線を施文。	型式同定に疑問残る
353	A5 3層	後期 前半	堀之内式	浅鉢 口縁部	白色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多、1mm以下の石英,灰色砂粒少 10YR5/2 10YR7/3 10YR6/1	口唇:内傾円頭状 外面横ナデ 10mm	①内面口唇下に幅3.5mmで断面半円形の隆起線を1条貼付。②隆起線の上下に幅3mmで断面弧状の沈線を横位施文。	型式同定に疑問残る
354	A4 4層群	後期 前半	堀之内式	浅鉢 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子少 2.5Y6/3 2.5Y6/4 2.5Y7/3	口唇:円頭状 内外面横ナデ 10mm	内面に幅7mm,9mmの半截竹管状工具で半肉彫りの平行沈線を横位施文。	型式同定に疑問残る 内面に種子圧痕
355	A5 2層	後期	型式不明	注口土器 or 浅鉢胴部	白色砂粒,黄褐色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多、1mmの石英少 2.5YR3/1 5Y2/1 5Y4/2	外面横ミガキ,内面横ケズリ 斜ミガキ 6.5mm	無文。	内外面黒色化
356	A5 2層	後晩期	型式不明 精製土器	深鉢 胴部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒,灰色砂粒少 10YR5/3 7.5YR5/4 7.5YR5/4	外面縦ミガキ,内面縦ケズリ ミガキ 8~10mm	無文。	外面に黒斑
357	A4 2層	後晩期	型式不明 精製土器	深鉢 底部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒少 7.5YR4/6 10YR7/3 10YR7/3	内外面底面ミガキ 7mm	推定低径:7.6cm 平底の底部破片。無文。	
358	A3上 190~200	後晩期	型式不明 精製土器	深鉢 底部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子少 2.5Y6/2 2.5Y4/1 2.5Y4/1	外面横ミガキ,内面ミガキ 11mm	推定低径:6cm 平底の底部破片。底面に網代痕が残る。	
359	A6 4上層	後晩期	型式不明 精製土器	深鉢 底部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子,褐色砂粒少 5YR5/3 5YR6/6 7.5YR5/1	内外面ミガキ 10mm	推定低径:9.9cm 平底の底部破片。底面に網代痕が残る。	
360	A5 2層	後晩期	型式不明 精製土器	浅鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多 7.5YR4/4 10YR3/2 10YR3/3	内外面ミガキ 8mm	無文。	
361	A6 2層	後晩期	型式不明 精製土器	注口土器 胴部	灰色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子,白色砂粒,黒色砂粒,褐色砂粒少 10YR3/1 10YR2/1 10YR7/3	外面斜ミガキ,内面横ミガキ 6.5mm	無文。	外面黒色化
362	A4 4層群	後晩期	型式不明 精製土器	注口土器 底部付近	白色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子少 10YR3/1 10YR4/2 10YR3/1	内面横ミガキ,内面に調整時に生じた粘土瘤残る 7~10mm	無文。	内外面黒色化
363	A4 4上層	後晩期	型式不明 粗製土器	深鉢 胴部	黄褐色砂粒多、1mmの黒雲母,灰色砂粒やや多、1~2mmの石英少、灰色礫僅か 10YR3/1 10YR7/6 10YR6/3	内面凹凸 外面ケズリ,内面斜ナデ 7mm	無文。	外面一部薄く黒色化
364	A4 4上層	後晩期	型式不明 粗製土器	深鉢 胴部	1mmの光沢黒色粒子,灰色砂粒,褐色砂粒やや多、1~2mmの石英少 2.5Y5/3 2.5YR5/2 10YR5/4	内外面斜位ケズリ ナデ 9.5mm	無文。	
365	A6 2下~3層 /4上層	晩期 後半	女島羽川式	鉢 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子少 7.5YR6/4 7.5YR7/6 2.5YR4/4	口唇:円頭状 内外面横ナデ 5mm	口縁が小さく外反する鉢。 内外面に幅4~5mmで断面弧状の沈線を横位施文。	内面赤彩
366	A6 2下~3層	晩期 後半	女島羽川式	鉢 口縁部	白色砂粒,黒色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢黒色粒子少 10YR5/4 10YR6/4 10YR5/3	口唇:円頭状 内外面横ナデ 6mm	口縁が小さく外反する鉢。 外面に幅5mmで断面弧状の沈線を横位施文。口唇下2条の沈線は、下の沈線の施文後、上側に重ねて施文。内面に外面口唇下と同様の沈線を施文。下の沈線は器面調整により一部埋没。	内面赤彩

第25表 前庭部緩斜面出土 縄文土器観察表(10)

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
367	A 6 2層	晩期 後半	女鳥羽川式	深鉢 口縁部	褐色砂粒多、白色砂粒やや多、2mmの石英少 5YR6/8 5YR6/8 5YR6/8	口唇：円頭状 内外面横ナデ 9.5mm	口唇下に幅5mmで断面弧状の沈線を横位 施文。	
368	A 5 3層	晩期 後半	女鳥羽川式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 2.5Y7/3 10YR7/3 10YR4/1	口唇：外面肥厚角頭状 内外面横ミガキ 7mm	口縁が内湾する深鉢。①隆起線、瘤を貼 付。②隆起線間に幅4mmで断面弧状の 沈線を横位施文。内面口唇下に幅3.5mm で断面弧状の沈線を横位施文。	外面一部～内面薄く 黒色化
369	A 4/A 5 2層/3層	晩期 後半	女鳥羽川式	浅鉢 口縁部	1mm以下の石英少、褐色礫僅か 7.5YR6/4 10YR7/3 10YR7/3	口唇：内傾円頭状 内外面横ミガキ、内面突帯 に沿う幅1.5mmの工具痕 7mm	①幅5mmで断面半円形の突帯を横位に 貼付。②幅5mmで断面弧状の沈線を突 帯に沿って施文。内面に幅6mmで断面 三角形の突帯を横位に貼付。	
370	A 6 2下～3層	晩期 後半	氷I式	浅鉢 口縁部	黒色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子 、白色砂粒、褐色砂粒少 2.5Y8/3 2.5Y7/2 2.5Y7/3	口唇：円頭状 内外面横ナデ 8mm	①幅3.5mm、2.5mmで断面弧状の沈線を 横位施文。②曲線状に隆起線を貼付、三 分岐する浮線網状文を施文。	
371	A 4/A 6 2層/3層	晩期 後半	氷I式	壺 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の光沢黒色粒子少、褐 色礫僅か 10YR2/1 10YR4/1 10YR2/1	推定口径：16cm 口唇：外面肥厚角頭状 内外面横ミガキ、文様間ミ ガキ 5mm	ゆるい波状口縁の壺。①隆起線を貼付。 ②横位の隆起線間に幅3～4mmで断面 弧状の沈線を施文。縦位の隆起線上に幅 3mmで断面円形の工具を斜角に当て、 楕円形の刺突を施す。口唇上に幅3mm で断面弧状の沈線を施文。	内外面黒色化
372	A 6 2下～3層	晩期 後半	氷I式	深鉢 胴部	1mm以下の石英、1mm以下の光沢黒色粒子、白色 砂粒やや多、黒色砂粒少 7.5YR4/2 7.5YR4/3 7.5YR4/4	内外面横ナデ 10mm	幅5mm、4mmで断面弧状の沈線を横位 施文。幅4mmの沈線は幅2mmの沈線 を重ねて施文して形成。4mmの沈線に 未整形の粘土紐が残る。	
373	A 4 2層	晩期 後半	氷I式	甕 or 鉢 胴部	1mm以下の石英、白色砂粒、灰色砂粒少 10YR5/4 10YR4/1 10YR6/3	内面斜位ケズリ 6mm	細密条痕を縦位施文。	外面に黒斑、 373,375と同一個体
374	A 6 2層	晩期 後半	氷I式	深鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の光沢黒色粒子やや多、 1mmの石英少 2.5Y3/2 2.5Y6/4 2.5Y5/3	内面下から上へケズリ 7mm	細密条痕を縦位施文。	373,375と同一個体
375	A 6 4上層	晩期 後半	氷I式	甕 or 鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂 粒、黒色砂粒、灰色砂粒少 10YR6/3 10YR4/1 10YR7/3	内面横ケズリ 7mm	細密条痕を縦位施文。	内面に黒斑、 373,374と同一個体
376	A 6 2下～3層	晩期 後半	氷I式	甕 or 鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、灰 色砂粒、褐色砂粒少 7.5YR4/2 7.5YR4/1 7.5YR7/2	内面斜位ケズリ 8.5mm	細密条痕を縦位施文。	
377	A 4 4層群	晩期 後半	氷I式	甕 or 鉢 胴部	白色砂粒多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子、灰 色砂粒少 7.5YR5/2 7.5YR4/1 7.5YR2/2	内面斜位ケズリ 7mm	幅1.4cmの割板で細密条痕を斜位施文。	内面黒色化
378	Aトレ 調査区内	晩期 後半	氷I式	深鉢 胴部	灰色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子 、白色砂粒少 5YR6/6 5YR6/6 7.5YR7/4	内面横ナデ 7.5mm	細密条痕を斜位施文。	内面に黒斑
379	A 5 3層	晩期 後半	千網式	甕 or 鉢 口縁部	白色砂粒やや多、1mm以下の石英、光沢黒色粒子 少 2.5Y3/1 10YR3/1 2.5Y3/1	口唇：角頭状 内面ナデ 8mm	幅2cmの材で細密条痕を横位施文。口 縁部に粘土板を貼ることで凸帯を作出。	内外面～断面黒色化
380	A 6 2層	晩期 後半	千網式	深鉢 胴部	白色砂粒、1mm以下の光沢黒色粒子やや多 10YR5/2 10YR4/1 10YR6/4	内外面横ナデ 7mm	1段Lの撚糸文を斜位施文。条幅1mm。	外面一部薄く黒色化
381	A 5 3層	晩期 後半	千網式	甕 or 鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR5/3 10YR3/1 10YR2/1	内面縦ミガキ 6mm	0段rの撚糸文を縦位施文。条幅1mm。	内面黒色化
382	A 6 3層	晩期 後半	千網式	甕 or 鉢 胴部	1mm以下の黒雲母、石英、光沢黒色粒子、白色砂 粒少 10YR5/4 10YR3/1 5YR2/1	外面ナデ、内面斜ミガキ 6mm	0段rの撚糸文を縦位施文。条幅 1.5mm。	内面黒色化
383	A 6 3層	晩期 後半	千網式	甕 or 鉢 胴部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒、灰色 砂粒少 10YR3/2 10YR3/2 10YR5/3	内面斜ナデ 7mm	1段Rの撚糸文を斜位施文。条幅2mm。	
384	A 4 2層	晩期 後半	大洞A'式	台付鉢 口縁部	1mm以下の石英、光沢黒色粒子、白色砂粒少 10YR6/3 10YR8/6 10YR7/4	内外面横ミガキ 4～8mm	波状口縁の台付鉢。①幅5mmで断面半 円形の隆起線を貼付。②幅2mmで断面 弧状の沈線を施文し、変形工字文を施す。 沈線施文時に粘土を押し出すことで瘤を 作出。口唇上、口唇下、内面の屈曲部に 幅3.5mmで断面弧状の沈線を施文。	内外面一部黒色化、 内外面一部赤彩



第 43 図 前庭部緩斜面出土 弥生土器実測図



第 44 図 表面採集 縄文土器実測図

第26表 前庭部緩斜面出土 弥生土器観察表

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
385	A 5 3層	弥生前期末	沖Ⅱ式併行	甕 胴部	1mmの石英,白色砂粒,褐色砂粒少 7.5YR2/1 7.5YR2/1 7.5YR3/1	内面横ナデ 6mm	幅3mmの沈線を曲線状に施文。沈線の断面は半円に近い不整形。	内外面黒色化
386	A 6 2層	弥生前期末	沖Ⅱ式併行	甕 口縁部	黄褐色砂粒,1mm以下の光沢黒色粒子やや 多、灰色砂粒少 2.5YR7/2 2.5YR7/1 10YR6/2	口唇:角頭状 内外面横ナデ 6.5mm	①条幅2mmの単節斜縄文LRを横位施文。②口唇下に幅3mmで断面弧状の沈線を施文し、③縄文の下端から下をナデ消すことで突帯を作出。	
387	A 5 3層	弥生前期末	沖Ⅱ式併行	甕 胴部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒 ,灰色砂粒少 10YR5/4 5YR4/4 7.5YR4/3	外面ナデ,内面横ナデ 8mm	①条幅4mmの単節縄文LRを横位施文。②幅4.5mmで断面弧状の沈線を横位施文。	
388	A 6 1層	弥生中期	竜見町式	壺 頸部	黒色砂粒,褐色砂粒やや多、白色砂粒少 10YR6/4 7.5YR6/1 7.5YR4/1	内面横ナデ 6.5mm	①ハケメを斜位に施す。②幅1mmで断面弧状の沈線を横位施文。	389,390と同一個体
389	A 6 1層	弥生中期	竜見町式	壺 頸部	黒色砂粒,褐色砂粒やや多、白色砂粒少 10YR6/4 10YR5/3 5Y6/1	内面斜ナデ 6mm	①ハケメを斜位に施す。②幅1mmで断面弧状の沈線を横位施文。	388,390と同一個体
390	A 6 2層	弥生中期	竜見町式	壺 頸部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,褐色砂粒 ,半透明な白色粒子少 7.7YR7/3 7.5YR6/1 7.5YR7/3	内外面上部横ナデ,内面下 部斜ナデ 7mm	①ハケメを斜位に施す。②幅1mmで断面弧状の沈線を横位施文。	388,389と同一個体
391	A 6 2層	弥生中期	竜見町式	壺 頸部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒 ,黒色砂粒,灰色砂粒少 7.5YR6/4 7.5YR6/2 7.5YR5/1	内面斜ナデ 6mm	①ハケメを斜位に施す。②幅2mmで断面弧状の沈線を横位施文。	内面黒色化
392	A 5 2層	弥生後期	樽式	壺 口縁部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒少 5YR1.9/1 7.5YR6/4 7.5YR5/4	内外面横ミガキ,内外面 横位の細い条線顕著 7mm	櫛歯状工具で波状文を施文。口唇上に幅7mmのヘラ状工具で口唇に斜行する刻みを連続施文。	外面黒色化
393	A 5 2層	弥生後期	樽式	壺 口縁部	黒色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢 黒色粒子,灰色砂粒少 7.5YR7/4 7.5YR8/4 7.5YR8/4	外面横ナデ,内面横ミガ キ 7mm	7本歯の櫛歯状工具で波状文を施文。	
394	A 6 3層	弥生後期	樽式	壺 口縁部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒 ,黒色砂粒,褐色砂粒,灰色砂粒少 10YR7/3 10YR7/3 10YR7/3	口唇:内面角外面丸形 口縁部折り返し 外面横ナデ,内面斜ナデ 6mm	幅6mmで6本歯の櫛歯状工具で左下から右上の動作により波状文を施文。	内面に黒斑
395	A 6 2層	弥生後期	樽式	不明 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子,灰色砂粒やや 多、1mm以下の石英,黒色砂粒,褐色砂粒少 10YR5/3 10YR6/4 10YR6/4	上面割れ口平行擬口縁 内外面ナデ 6mm	幅6mmで4本歯の櫛歯状工具で波状文を施文。	
396	A 5 3層	弥生	型式不明	深鉢 口縁部	灰色砂粒やや多、1mm以下の石英,光沢 黒色粒子,白色砂粒少 2.5YR3/6 7.5YR6/4 7.5YR6/4	口唇:外面角内面丸形 内外面横ナデ 8mm	口縁が内湾する深鉢。①凹線が幅2mmで断面弧状の条痕を斜位施文。②口唇下に幅3mmで断面弧状の沈線を横位施文。	内面赤彩
397	A 5/A 6 2層/3層	弥生	型式不明	甕形 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子,白色砂粒,黄褐 色砂粒やや多、1mmの黒雲母少 10YR6/3 10YR5/1 10YR4/1	内面横ナデ 9mm	ハケメを縦位に施す。	内面黒色化
398	A 6 3層	弥生	型式不明	甕 底部付近	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒 ,褐色砂粒少 10YR6/6 10YR7/4 10YR7/6	外面横ナデ 11mm	ハケメを縦位に施す。	

第27表 表面採集 縄文土器観察表

掲載No.	出土位置	時期	分類	器種	胎土・色調	成形・整形・器厚	器形・文様	特記事項
399	表採	早期前葉	燃糸文系	深鉢 胴部	1mm以下の光沢黒色粒子,白色砂粒,黒色砂 粒,褐色砂粒,繊維少 5YR5/4 5YR5/4 5YR5/3	内外面斜ナデ 9mm	条幅1.5mmの燃糸文を斜位施文。原体不明。	
400	表採	早末～前初	型式不明	深鉢 胴部	繊維多,白色砂粒やや多,1mm以下の石英 ,1mmの黒雲母,1mm以下の光沢黒色粒子, 灰色砂粒少 10YR7/4 10YR7/4 10YR3/1	内外面ナデ 14mm	単節斜縄文RLを横位施文。条幅3mm。	内面～断面黒色化
401	表採	前期前半	黒浜式	深鉢 口縁部	1mm以下の石英,光沢黒色粒子,白色砂粒少 10YR6/2 10YR6/2 10YR5/1	口唇:内傾角頭状 外面斜ナデ,内面横ミガキ 8.5mm	つまみ状の突起をもち口縁が内湾する深鉢。①幅5mmの半截竹管状工具で平行沈線を施文。②その上に同一工具でO字状の連続爪形文を施文。爪形文間にコンパス文を施文。コンパス文の凹線は幅1.5mmで断面コの字状。口唇上につまみ状の突起を貼付。	内外面黒色化 風化による変色顕著
402	表採	前期後半	諸磯b式	深鉢 口縁部	1mm以下の光沢黒色粒子,白色砂粒やや多 ,1mm以下の石英,黒色砂粒少 10YR6/4 10YR7/2 10YR7/4	口唇:外傾角頭状 内外面横ナデ 9mm	獣面把手をもつキャリバー形の深鉢。①幅10mmの瘤を左右に、幅14mmの瘤を中央に貼付。②左右の瘤上に幅2mmの先丸工具で刺突し、中央の瘤上に幅2mmの円形竹管文と幅2mmで断面弧状の沈線を引いて、獣面を形成。③幅3mmの隆起線を貼付。④幅1mmで断面三角形の刻みを施し、浮線文を施文。	

3. 縄文土器の分布状況

(1) 岩陰部

岩陰部で出土した縄文土器のうち、トータルステーションで出土位置の点情報を記録した資料は第2次調査33点、第3次調査179点である。時期不明に分類される細片を除いた200点について、平面・垂直分布を時期別に示した(第45図～第47図)。出土量が多い早期と前期は、細別時期ごとの分布図を作成した。なお、5～7列および9列は、土層堆積状況を観察した第2SBと離れていることから、土層断面図ではなくELからの標高差による人工層位に土器の垂直分布を対応させた。

まず、縄文時代各期における平面的な分布状況を確認する。8・9列の分布が多く見えるが、これは1号人骨の調査に伴い先行して掘削を進めたためである。早期・前期の土器が調査区全体に広がるが、5列や奥壁に沿う二列では前期が少なく、6列やロ9・ハ8は早期が少ないなど時期によって偏りが認められる(第45図上)。また、イ9東側は分布が極端に少ない。細別時期でみると、早期後葉(条痕文)、前期前半(繊維土器)が主体的で、早期中葉(沈線文)、前期後半(諸磯式)が次ぐ(第46図上)。

第1SBに近接する8列の垂直分布をみてみると、同じ第II層群でもイ列とハ列で様相が異なる(第45図下・第46図下)。イ8では表層直下から第II層群上部にかけて、前期前半と早期中葉・後葉の土器が層位的に出土する。一方、ハ8では前期土器と早期土器が混在する状況が認められる。ハ8には、近世以降の攪乱である⑮層が第I層群から第II層群上面にかけて掘りこまれ、その下には前期前半と推定される1号集石があるため、早期土器の層位的位置が攪乱を受けたと考えられる。

6～8列の奥壁側の二列では、比較的高い位置で早期後葉の土器(条痕文)が出土する傾向がある。調査深度が浅い5～7列は、EL-110～125cm以上に早期と前期の土器の混在している様子が認められる(第47図)。一方、先行して掘削した9列では、EL-130cm以上は早期および前期土器の混在が著しいが、EL-130cm以下では早期土器が主体となる。8列の現状最下部である落盤礫層からは早期土器のみが出土しており、早期前葉の表裏縄文土器・回転縄文土器の出土が増える。

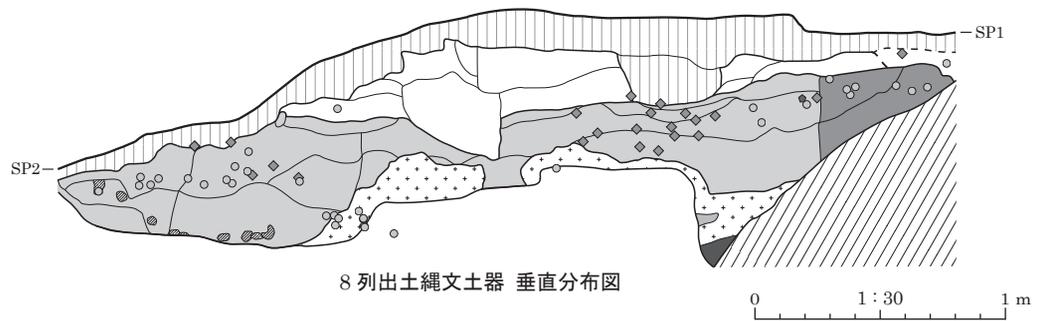
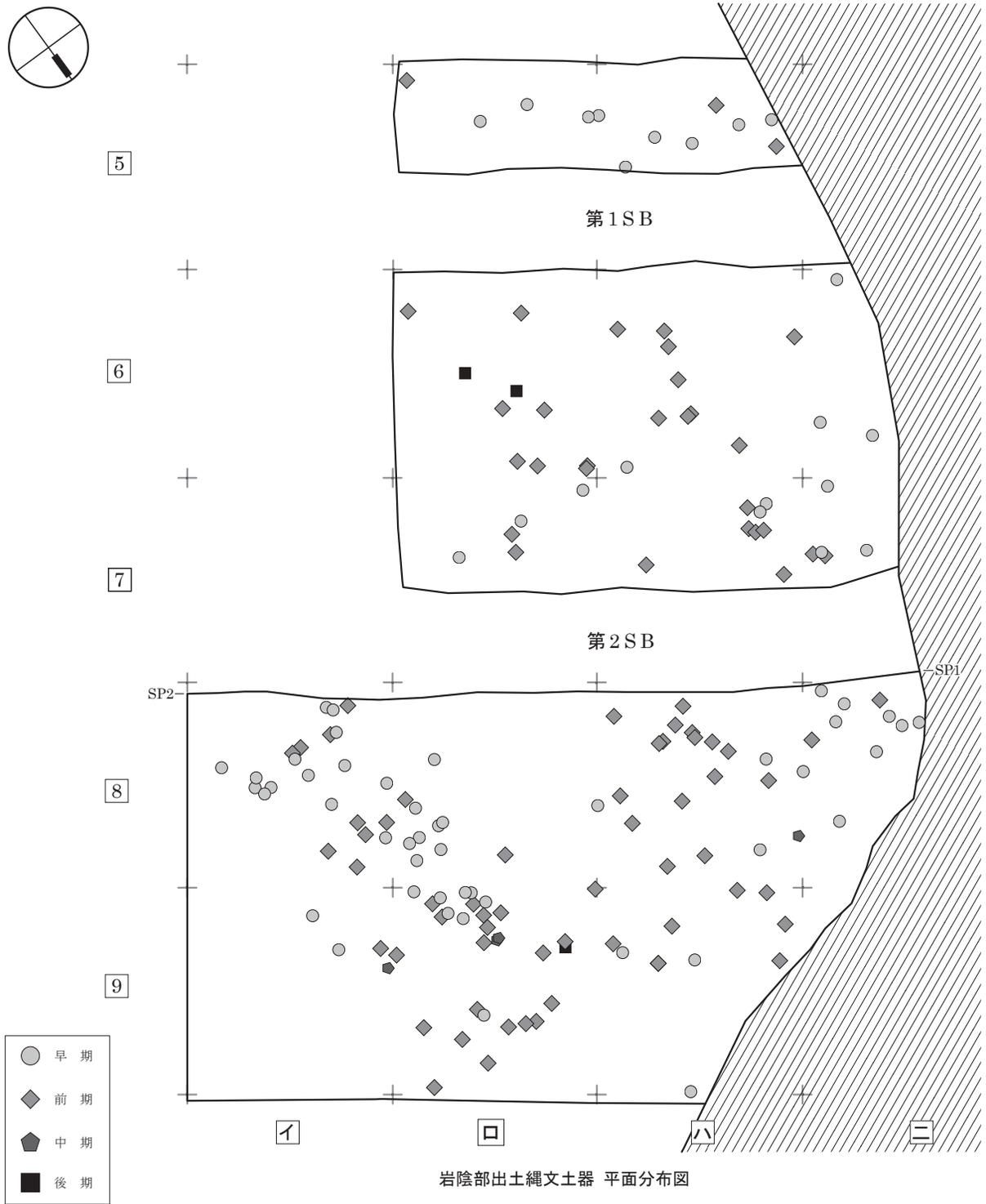
第I層群から第II層群上半では早期から前期にかけての土器が混在する様相を確認した。EL-130cm以下の第II層群下半および落盤礫層は第3次調査時点では未調査の部分が多いが、早期以前の土器が層位的に分布する状況が推測できる。

(2) 前庭部緩斜面

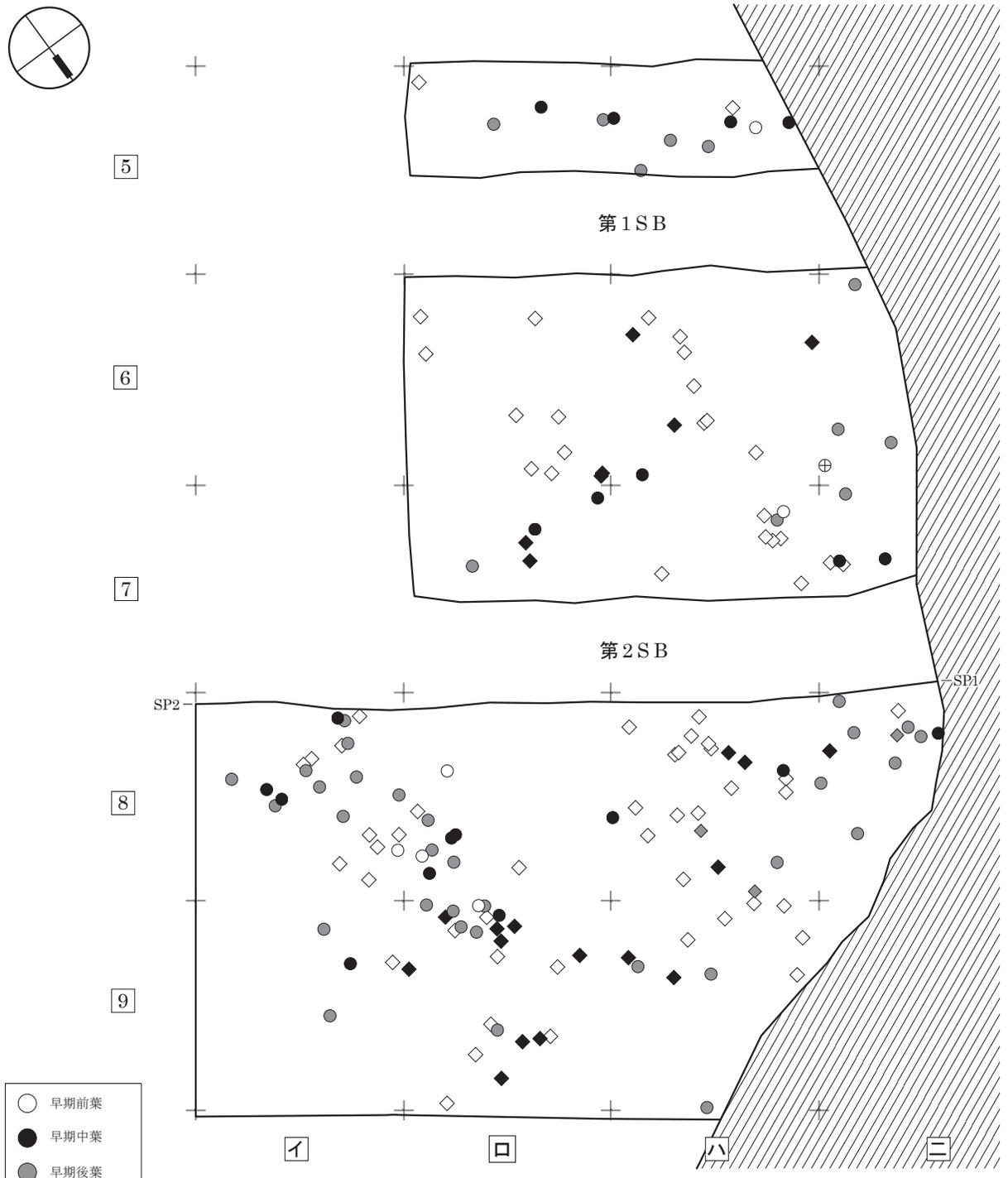
前庭部緩斜面では、慎重に掘削を進めたA1・A2において重点的に縄文土器の出土位置を記録した。A3以下のグリッドについては、層序把握のため掘削を急いだ関係上、点情報を記録した資料がごく少数にとどまるため、ここでは取り上げない。A1・A2出土資料から時期不明の細片を除いた点数は、第2次調査34点、第3次調査45点である。これらの時期別の分布状況を第48図に示す。なお、図中で「早期」と表記した土器は、前期前半の繊維土器とは区別される早期の回転縄文の土器である。

岩陰部同様、早期および前期の土器が主体である。前期以降の土器は7層より上層に多く分布し、4b層に前期前半(繊維土器)、前期後半(諸磯式)が多くみられる。早期の土器は7層以下に多い傾向が明確に確認できる。8層までは中葉(押型文・沈線文)と、後葉(条痕文)の土器が混在し、9層以下は中葉の土器がほぼ純粋に分布する。図上では区別しなかったが、9層以下の中葉の土器は楕円文の押型文土器が多く、沈線文土器は8層以上に比べて割合が減っている(出土量については第10表を参照)。また、A1の8層から草創期2期の隆起線文土器が1点出土している。

前庭部緩斜面の土器の垂直分布には4・4b層以上は前期土器、7層以下は早期土器が主体的に分布する傾向が明瞭に表れている。とくに9層以下は早期中葉の土器がほぼ純粋に分布しているため、10層(灰層)以下には早期中葉以前の土器が層位的に包含されている可能性が高い。(茅原・松本)



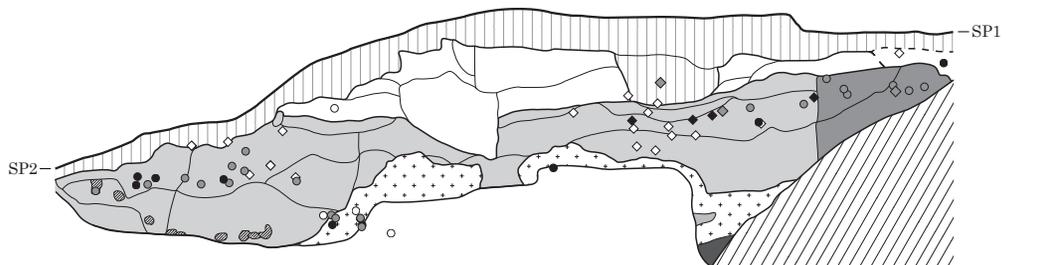
第45図 岩陰部 縄文土器の平面・垂直分布図(8列)



岩陰部出土早期・前期土器 平面分布図

- 早期前葉
- 早期中葉
- 早期後葉
- ⊕ 早期末葉
～前期初頭
- ◇ 前期前半
- ◆ 前期後半
- ◆ 前期末葉
～中期初頭

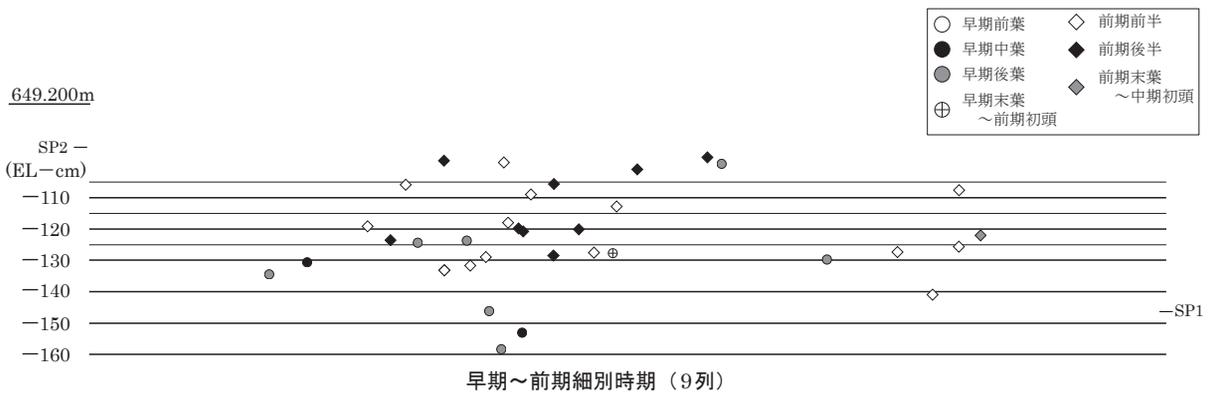
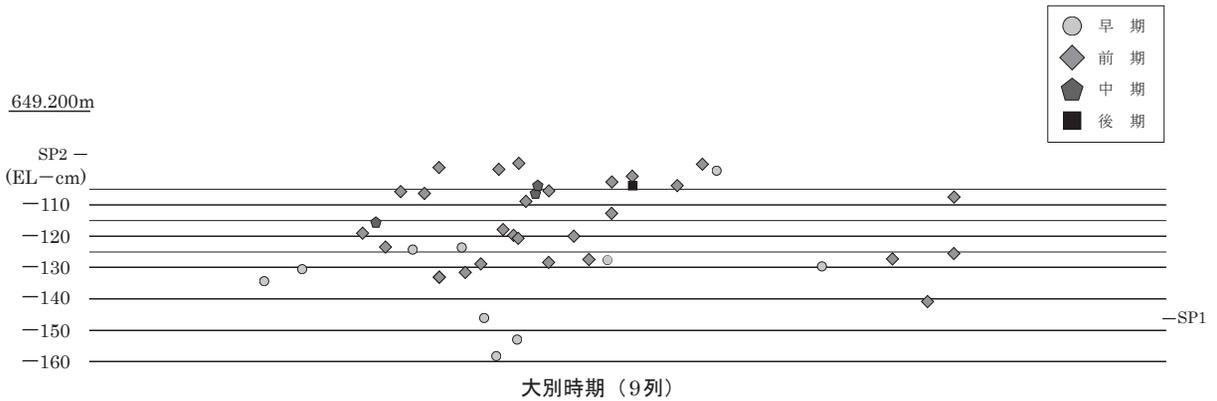
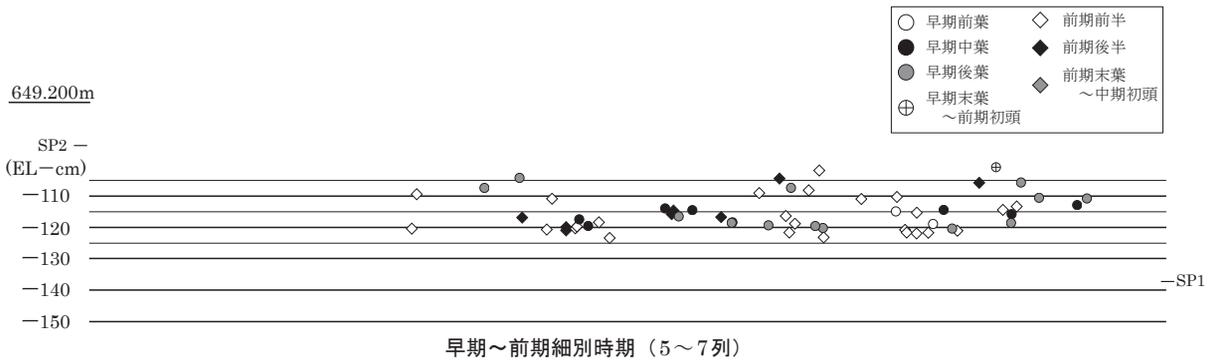
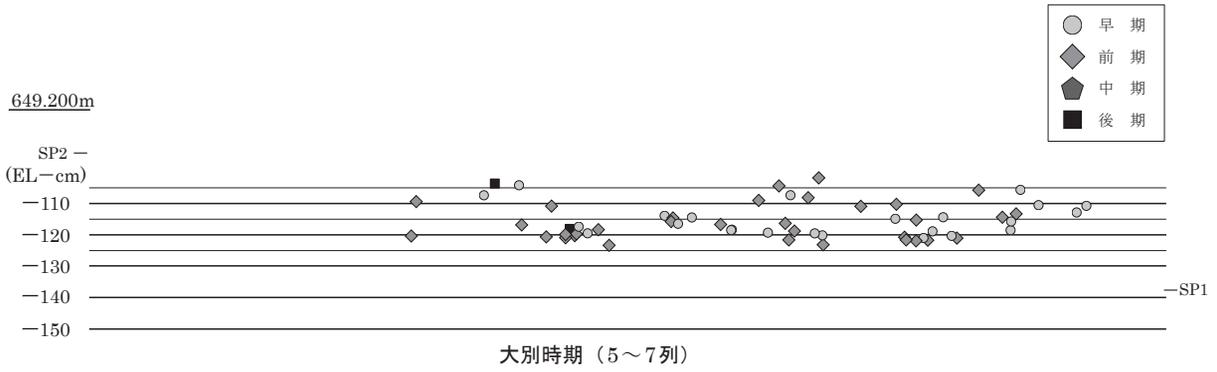
649.200m



8列出土早期・前期土器 垂直分布図

0 1:30 1 m

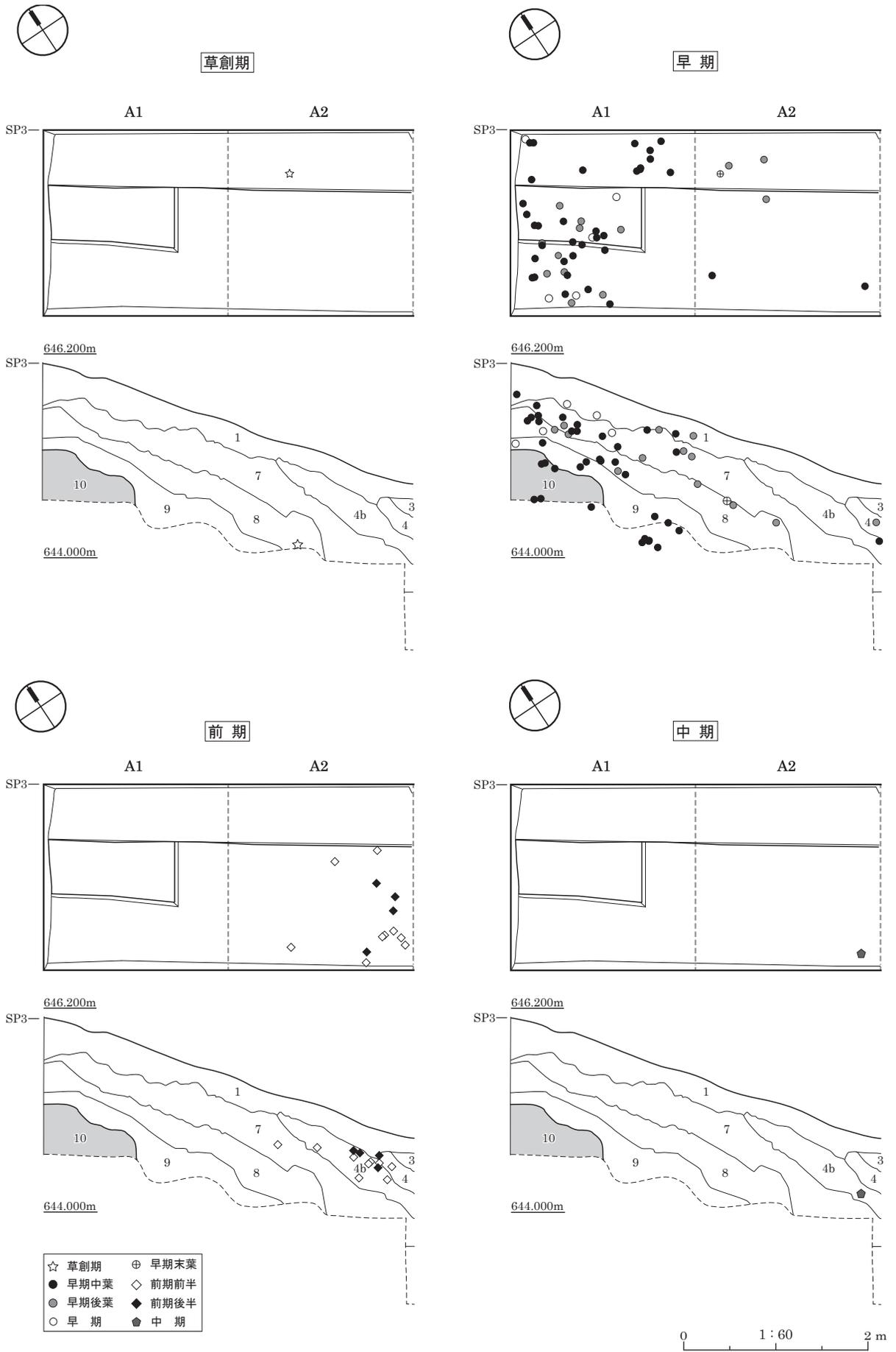
第46図 岩陰部 縄文早期～前期土器の平面・垂直分布図（8列）



※ EL=650.000m

0 1 : 25 50 cm

第 47 図 岩陰部 縄文土器の平面・垂直分布図 (5~7列・9列)



第48図 前庭部緩斜面 縄文土器の平面・垂直分布図 (A1・A2)